



Title	中国初期探偵小説論
Author(s)	藤井, 得弘
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13407号
Issue Date	2019-03-25
DOI	10.14943/doctoral.k13407
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91521
Type	theses (doctoral)
File Information	Tokuhiro_Fujii.pdf



[Instructions for use](#)

平成 30 年度
博士学位論文

中国初期探偵小説論

藤井 得弘

中国初期探偵小説論

目次

凡例

序章——本論の目的と概要……………	1
近代中国における西洋探偵小説の伝来	
中国探偵小説研究史とその問題点	
本論の問題意識と構成	
第 I 部 公案小説から探偵小説へ……………	11
第 1 章 公案小説と探偵小説の間で——劉鸚『老残遊記』……………	12
はじめに	
1. 西洋探偵小説受容の土台としての公案小説	
2. 謎解きは裁きのあとで——分業する裁判官と探偵	
3. 死者を蘇生させる「ホームズ」	
4. 医者と探偵	
おわりに	
第 2 章 「探偵」の発見——吳趼人『中国偵探案』……………	26
はじめに	
1. 『中国偵探案』の評価——公案小説は探偵小説か	
2. 『中国偵探案』の枠組み	
3. 小説が問題か、読者が問題か	
4. 『鹿州公案』との違いから見た吳趼人の工夫	
5. 「探偵」の発見——包公のいない中国能吏伝	
おわりに	
第 3 章 「探偵」のいない「探偵小説」——周桂笙「上海偵探案」……………	45
はじめに	
1. 周桂笙と探偵小説	
2. 西洋への憧憬と中国への批判	
3. 新式教育制度と探偵小説論	
4. 「探偵」のいない「探偵小説」	
5. 「ワトソン」のごとく——現実を小説に	
6. 「現状」を描くことの意味	
おわりに	
第 4 章 能吏から探偵へ——呂俠『中国女偵探』……………	67
はじめに	
1. 新小説を読む女性——人物の造形と語り手のスタンスについて	
2. 能吏伝と女探偵——第一篇「血帕」について	
3. 能吏伝を肴に呑む女たち——あるいは語り手と物語の距離について	
4. ふたりの女探偵——第二篇「白玉環」について	
5. 『西廂記』を読む男——女探偵との対比から	
6. 語り手から探偵へ——第三篇「枯井石」について	
7. 西洋医学と探偵——鋤芟の探偵像について	
8. 能吏から探偵へ——『中国女偵探』の構成について	
おわりに	

第Ⅱ部 「ホームズ」を生み出したかった中国人……………	91
第5章 「茶花女」と恋に落ちた「ホームズ」——天民「失珠」……………	92
はじめに	
1. 「失珠」の体裁について	
2. 観察、推理、尾行——小説を探偵小説たらしめるもの	
3. 西洋式の人物・記号・文物——「偵探小説」を装飾するもの	
4. 『茶花女』の影響	
5. 『巴黎茶花女遺事』が想起される意味	
6. 新式教育、自由恋愛、自由結婚——新女性としての陳君亜	
7. 「茶花女」と恋に落ちた「ホームズ」	
おわりに	
第6章 科学技術と初期探偵小説創作のジレンマ——傲骨『砒石案』……………	117
はじめに	
1. 教科書としての翻訳探偵小説、学習者としての中国人探偵	
2. 化学室・顕微鏡・指紋——科学技術が物語ること	
3. まずホームズより始めよ——『砒石案』の構造から見えること	
おわりに	
第7章 処方箋としての探偵小説——傲骨『鴉片案』……………	132
はじめに	
1. アヘンの害悪を描く小説と傲骨『鴉片案』	
2. 探偵小説としての『鴉片案』——探偵の成長から窺えること	
3. 譴責小説としての『鴉片案』——探偵が明らかにするもの	
4. 隠喩としての治療	
5. 探偵は社会秩序を構築し得るか——事件の解決が物語ること	
おわりに	
第8章 探偵の機能と透視の道具——南風亭長「羅師福」……………	150
はじめに	
1. 『凶画日報』と「中国偵探 羅師福」	
2. 「羅師福」における探偵像	
3. 視覚に関する科学技術——顕微鏡とX線	
4. X線診断装置の来歴と語られ方	
5. 理想の世界と透視の道具——X線をめぐる想像力	
おわりに	
終章——本論の総括と今後の課題……………	166
本論の総括	
今後の課題	
初出一覧……………	172
使用テキストおよび参考文献……………	173

凡 例

1. 本論文では、原則として現在日本で用いられている漢字を用いる。中国語の書名、論文名も同様である。本文や注釈における中国語原文の引用にあたっては、古典からの引用については繁体字を用い、大陸で刊行された刊行物からの引用については簡体字を用いて表記する。
2. 年月日の表記については、原則として算用数字で行う。中華民国以前の年月日の表記については、場合により陰暦を用い、() 内に西暦年を補う。例：光緒二十八年九月初一（1902年10月2日）。
3. 文中の括弧については、書名には『 』、日本語による引用、および論文には「 」、中国語原文の引用には〈 〉、筆者注には〔 〕、一部の本文および注釈における出版社や出版年の提示には（ ）をそれぞれ使用する。
4. 句読点がない、あるいは句点と読点が区別されていない中国語文を引用する場合、必要に応じて現代中国語に用いられている标点符号を補い施す。
5. 注については各章末に付し、文末脚注とする。
6. 本文中に挙げる書名および作品名に関しては、必要な場合を除き、原則として日本語訳は施さない。

序章——研究の背景と目的

本論は、清朝末期において、西洋探偵小説の中国伝来の経緯を踏まえつつ、当時の中国人が、どのような背景のもとに、探偵ないしは探偵小説をめぐって何を思い巡らせ、それらをみずから手でいかにして生み出そうとしたのかを考察するものである。

そもそも探偵小説とは何か。一般には、江戸川乱歩が探偵小説評論集『幻影城』巻頭の「探偵小説の定義と類別」において示した「定義」がよく知られている。すなわち、「探偵小説とは、主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学である」¹というものである。この定義は、今日においてもよく言及されるものだが、それは探偵小説なるものの最大公約数的な説明として、よくまとまっているためだろう。裏を返せば、「探偵小説」という言葉は、時代や場所、あるいはそれを用いる人びとの思想によって揺らぎがあるということでもある。それが清末中国の話となれば、かりに現代日本における探偵小説のイメージに照らしたとしても、重ならない部分があることは想像に難くない。

清末期に西洋探偵小説が翻訳された当初、人びとはそれを〈偵探小説〉と呼んだ。「探偵」の二字が転倒して「偵探」となっただけのようでもあるが、その呼称のわずかな違いにこそ、両者が似て非なるものであることが示されているとも言えよう。そして本論もまた、その違いに接近するものである。

両者の違いを踏まえるならば、清末当時の作品や言説を取り上げるにあたっては、当時の人びとの呼称を借りて「偵探」あるいは「偵探小説」という言い方を用いるべきかもしれない。しかし、ここでは混乱を避けるため、日本における表記と同様に、「探偵」あるいは「探偵小説」といった呼称をそのまま用いることとする。

英文学者の高山宏氏は、シャーロック・ホームズ物語を論じた一文において、探偵小説のファンやそれを語る人びとが多いなか、彼らが、探偵とは何か、密室とは何か、といったことを疑いもしないことを問題として指摘する。そして、ホームズ物語を読むことは「文化史の総力戦」だと喝破している²。中国の〈偵探小説〉についても同じことが言えるだろうというのが、本論の基本的な態度である。

以下の序章では、まず清末期における探偵小説の翻訳および創作の状況を概観する。そして、それらに対する研究状況を整理し、それを踏まえたうえで、本論の問題意識と構成について述べたい。

近代中国における西洋探偵小説の伝来

欧米から広まった探偵小説は、アメリカの作家エドガー・アラン・ポー「モルグ街の殺人」(1841)が一般にその嚆矢とされる。その後、ポーの受容を背景として、フランスではエミール・ガボリオによる探偵ルコックものが生み出され、後にイギリスではポーやガボリオがもととなって、コナン・ドイルのホームズ物語が誕生した。

明治期の日本では、1880年代頃から、黒岩涙香などが西洋探偵小説の翻訳(翻案)を盛んに行ない、大いに好評を博した³。中国に西洋探偵小説が伝来するのは、もう少し後のことである。最初に漢訳された西洋探偵小説は、『時務報』第1冊に掲載された「英国包探訪喀迭医生奇案」(1896)だとされる。もっとも、その原作はいまなお明らかとはなっていない⁴。ポーから数えると、欧米における探偵小説の発生から50余年を経て伝来したということになる。最初の漢訳からほどなくして、おなじく『時務報』誌上に計4篇のホームズ物語の翻訳が続けて掲載されたのを皮切りとして、中国では翻訳探偵小説ブームが巻き起こった⁵。

やがて梁啓超が先導した「小説界革命」によって、小説による民衆啓蒙論が広まると、探偵小説は、海外の小説の中でも、政治小説や科学小説とともに「文明を輸入する」⁶手だてとして注目されるようになる。

なかでもとりわけシャーロック・ホームズ物語は人気が高く、清末翻訳小説の代名詞にまでなった⁷。『時務報』への掲載以後、ホームズ物語の翻訳は続々と刊行された。主要なものには、『新訳包探案』(素隱書屋、1899)、警察学生訳『続訳華生包探案』(文明書局、1902)、商務印書館訳『補訳華生包探案』(商務印書館、1903)、周桂笙・奚若訳『福爾摩斯再生案』(小説林社、1904-1906)、林紓訳『歇洛克奇案開場』(商務印書館、1908)などがあつた。そしてこれは民国期の話になるが、1916年には、文言版のホームズ作品集である『福爾摩斯探案全集』(全12冊)が中華書局から刊行されるに至る。同シリーズに関わった複数の翻訳者の中には、後に探偵小説作家として台頭してくる程小青⁸もいた。

このように、欧米ではポーから派生していった探偵小説だったが、中国の場合はホームズ物語が探偵小説ブームの火付け役となった⁹。注意すべきは、ガボリオやボアゴベについては、黒岩涙香の翻案を底本とする重訳がなされ¹⁰、早い段階から流入していたことである。重訳について、民国期に活躍した文人の包天笑は、当時を回想して「わたしは、日本が当時西洋の書籍を翻訳するのはほとんど漢文を主としており、

それをさらに中国語に翻訳するのは比較的容易であることを知っていた¹¹と述べ、漢字が多く仮名の少ない文献を求めて翻訳していたことを吐露している。漢語の多く含まれる日本語の翻訳書を利用した翻訳方法は、清末当時、梁啓超などによって提唱されていた¹²。なお、このような、西洋探偵小説の伝来の経路については、西洋文化受容という観点から見ても重要な論点を含むものだが、本論では取り上げない。

清末当時、こうした西洋探偵小説は、「千変万化し、人を驚かせ、みな人の想像の域を超える」¹³などと、非常に好評であった。小説家、ジャーナリストの徐念慈は、論説「余之小説観」（1908、筆名覚我）において、当時の「偵探小説」の売り上げについて、「ほかの書店については知らないが、『小説林』の書物はこれを計算すると、「探偵」を書いたものが最も良く、およそ七～八割であった」¹⁴と述べている。

そもその発行数も相当なものだったらしい。例えば、当時の翻訳探偵小説のタイトル数について、阿英は『晚清小説史』において、「当時の翻訳小説がかりに千種あったとすれば、翻訳探偵小説は五百部以上を占めたはずだ」¹⁵と指摘している。その後、目録が整備され、研究が進んだ結果、実際にはその割合は五分の一ほどだったとされており¹⁶、統計としては危ういもののようなのだが、阿英によるこの数字は、翻訳探偵小説がいかに流行していたか、実感を語るものとしては大変興味深い。

こうした記述のほか、翻訳探偵小説の出版広告などからは、流行した背景にその面白さがあったことがうかがえるのだが、とりわけ小説の前言や雑誌の小説批評においては、その政治的、啓蒙的な側面が語られてきた。この点について、孔慧怡氏は、清末民初期の翻訳探偵小説、とくにホームズ物語が、海外の制度や科学技術について読者を啓蒙する「教科書」としての役割を果たしていたことを指摘している¹⁷。

やがてブームに付随して、同時期の小説には、事件の解決役を「福爾摩斯」にたとえるような事例も現れるようになる。のみならず、ホームズ物語の模倣作もまた、数多く生み出された¹⁸。最初期のものに、陳冷血「歇洛克来遊上海第一案」がある。これは、1904年から1905年にかけて、陳冷血と包天笑が、中国初の日刊紙『時報』に交互に発表したもので、ごく短い作品である¹⁹。1900年から1910年までを中心に、このような作品は、あわせて20篇ほど書かれているという。

さらには、探偵小説であることを題名や角書きにおいて標榜した小説も徐々に書かれるようになる。先行研究ですでに指摘されているように、質的にも量的にも、探偵小説が本格的に創作されるのは民国期以降だが、清末の段階から、すでに創作が試み

られていた。しかしながら、最初期の作品については、言及すらされてこなかった小説も少なくない。本論で取り上げるのは、そういった、これまで光が当てられてこなかった作品である。

中国探偵小説研究史とその問題点

前節では、翻訳小説の中でも探偵小説が圧倒的に流行していたことを取り上げた。その流行については、印刷技術の向上による新聞や雑誌の充実が背景的な要因として挙げられる。また、小説による民衆の啓蒙を説いた「小説界革命」の影響は大きいものだった。探偵小説は、科学知識や論理的思考を涵養する手段であると目された。というのも、西洋探偵小説においては、往々にして、探偵が最新の科学や医学に関する知識や道具を駆使して事件を解決するからにほかならない。もっともそれと同時に、探偵小説は、翻訳か創作かを問わず、中国にとっては自国の文明の後進性を映し出す鏡でもあったと考えられる。

そのことからしても、中国における探偵小説の受容と展開は、同国の近代化と深く関わる論題である。しかし、清末民初期の探偵小説に関する研究が進むのは、近年になってからのことであった。そもそも探偵小説などの通俗的な文学は、中国文学者の研究対象から外されてきた。中国においては、大きくは二度の受難を経験しており、それが研究状況にも影を落としているとされる。以下、樽本照雄「漢訳ホームズ研究小史」をもとに、その概略を述べよう²⁰。

そのひとつは、五四時期以降の新文学作家によって、探偵小説を含む鴛鴦蝴蝶派²¹の文学が「文学乞食(文丐)」「文学娼婦(文娼)」などと批判されたことである²²。そしてもうひとつは、中華人民共和国、とくに1960年になってから、共産主義の文脈のもとに、批判の矛先が探偵小説へと向かったことである。たとえば、1960年に復旦大学中文系によって編まれた『中国近代文学史稿』では、探偵小説は「資本主義制度の産物」「資産階級の文学」だとみなされ、清末期の翻訳探偵小説は「全国に害毒を流した」などと痛罵されている²³。文学にも階級闘争が持ち込まれた時代にあって、探偵小説もまた打倒すべき対象として語られたのである。かくして、探偵小説は研究対象の外へと追いやられることとなった。この時期、魏紹昌『鴛鴦蝴蝶派研究資料』(上海文藝出版社、1962)といった資料的な成果はあるものの、中国大陸においては、

研究はあまり進展しなかった。

日本では、中村忠行氏が「清末探偵小説史稿」を1978年から1980年にかけて発表し、これによって清末期の翻訳探偵小説に関する研究は大きく進展する²⁴。その後、樽本照雄氏による『清末民初小説年表』（1999）や『清末民初小説目録』（1997初版、2018第10版）など、資料の収集整理が進み、研究状況も大きく変化した。

それと並行して、中国では1980年代における文学史の書き換え運動を経て、清末民初小説研究が本格化すると、探偵小説も含めた同時期の小説に関して、陳平原氏、郭延礼氏らによって、徐々に成果が挙げられていった²⁵。近年では、樽本照雄氏により漢訳ホームズ研究がまとめられているほか、渡辺浩司氏によって、清末翻訳探偵小説の原作を解明する作業が着実に進められている²⁶。

一方、創作に関する研究はというと、状況を大きく進展させたのは、湯哲声氏が「偵探推理篇」を担当した、范伯群主編『中国近現代通俗文学史 上巻』（江蘇教育出版社、1999）の存在だろう。これがきっかけとなり、2000年代になると探偵小説の創作に関しても、徐々に研究が進展する²⁷。とくに民国期の創作探偵小説については、研究が盛んに行なわれるようになってきた。主要な成果としては、任翔氏による探偵小説史や、姜維風氏による程小青の専著などが挙げられる²⁸。

また、近年では、池田智恵氏が民国期における探偵小説の土着化について詳細に論じているのが注目される。一連の論考においては、犯罪を暴露する記事（「黒幕」）との関わりの有無、1930年代における「怪盗もの」の武俠化といった興味深い論点が見られている。もっとも、氏は創作探偵小説の始まりの時期を1910年代半ばだとしており、清末期の作品については、とくに取り上げていない²⁹。

ここまで、中国近代探偵小説研究の流れを整理してきた。従来の清末期の探偵小説の取り上げ方は、公案小説史の終着点に置くというものであったが³⁰、王徳威氏の「清末がなければ、どうして五四が来たのだろうか（沒有晚清，何來五四）」³¹というフレーズに代表されるように、清末民初期の小説の再評価が行なわれたことによって、探偵小説は、その他の清末民初期の小説群がそうであるように、五四時期以降の流れに連なるものとして位置づけられるようになった³²。

しかし、清末民初期の小説に関する研究が大きな転機を迎えた一方で、同時期の探偵小説は、民国期の隆盛を頂点とする「発展史」的な枠組みのもとに未熟であると見なされ、深くは論じられてこなかったと言えよう³³。その傾向は、民国期における程

小青や孫了紅など、代表的な探偵小説作家の登場を視野に入れて記述される場合に、いっそう顕著になる。たしかに、巧拙という評価軸をもとに作品を並べて論じるならば、未熟であるとする指摘はあながち外れてはいない。しかし、このような態度は、西洋で生み出された探偵小説について、中国がいかにしてそれを受け入れ、創り上げていったのかを考えるにあたり、探偵や探偵小説の持つ社会的、文化的な意味といった、中国の探偵小説に固有の問題を見えにくくする可能性があるように思われる。

本論の問題意識と構成

以上のような問題意識のもと、本論では、民国期以前の最初期の作品を取り上げ、従来の研究とは異なる材料と観点から、中国における探偵小説創作の状況を論じたい。その作業には、小説史上の空白を埋めるという意味合いもあるのだが、無論、取り上げられてこなかったことのみを理由に議論の俎上に上げるわけではない。

清末民初期には、様々なジャンルの小説が登場したが、それらは、ジャンルに沿って縦割りにするだけでは論じきれない面がある。探偵小説は清末当時、「新小説」の代名詞のような存在であった。当然ながら、多分に漏れず、「新式教育制度の導入」（周桂笙「上海偵探案」、第3章）、「文明結婚」（天民「失珠」、第5章）など、同時代における近代化をめぐる思想や文化と多様な関係を切り結んでおり、様々な力の引き合う場の中でゆらいでいた。一見して未熟な、注目されてこなかった小説を敢えて取り上げるのは、同時代の中国が、西洋の衝撃のもとに抱えることとなった様々な問題がテキスト上に反映されているためであり、ジャンルの最初期の小説だからこそ窺うことのできる象徴的な表現を掬い取りたいがためである。

そこで、本稿は、清末期の探偵小説がどのようなものだったのかを明らかにすべく、以下の順序で論を進めてゆく。

まず、第I部「公案小説から探偵小説へ」では、公案小説の土台のうえに探偵小説が生み出されようとする際の、ふたつのジャンルの交差について取り上げる。まず、劉鶚『老残遊記』（1903-06?）を取り上げ、裁判官から探偵への解決役の交代の意味するところと、探偵役である老残の形象について論じる。『老残遊記』は探偵小説を標榜する小説ではないが、そのテキストからは、当時において、ふたつのジャンルが単純に線引きされ得るものではなかったことが確認されるだろう。次に、吳趸人『中

国偵探案』(1906)、周桂笙「上海偵探案」(1907)のふたつの小説について、「公案小説は探偵小説か」という問題にそれぞれが示した解答と、それによって顕在化することとなった探偵小説の境界の問題を取り上げる。最後に、呂侠『中国女偵探』(1907)を構成する3篇の小説を順番に取り上げ、個別に特徴を論じるとともに、それら3篇のもつ階層性と、そこから窺われる同時期の探偵小説創作の志向性を述べる。

続いて第Ⅱ部「ホームズを生み出したかった中国人」では、清末期、とりわけ1908年以降の探偵小説創作において、ホームズ物語を中国でも打ち立てようとする意識が強く見られることと、それに伴う様々な困難や問題がテキスト上にどのように現れるのかについて論じる。まず、天民「失珠」(1908)について、同小説が、清末期にもっとも流行した翻訳小説である「ホームズ物語」と『椿姫』を合わせたような形式であることを指摘する。続いて、『砒石案』(1908)、『鴉片案』(1908)という、同じ作者の同じ探偵が登場するシリーズを取り上げ、二作目における探偵の成長と、そこに反映されている同時期の探偵小説のイメージを論じる。最後に、南風亭長「羅師福」(1909-10)について、探偵が捜査において、肉眼では見えないものを読み取る顕微鏡やX線診断装置由来の透視の道具を用いることに注目し、その由来を論じるとともに、これらの道具を用いる探偵の形象について論じる。

本論で取り上げる小説は、章が進むごとにその発表時期も下ってゆく。時間の経過に従って「発展」するものだと捉えているわけではないが、時代順に眺めてゆくことで、〈偵探小説〉と呼ばれた一群の小説が、伝統的な公案小説や西洋由来の翻訳探偵小説と交差しながら、いかなる仕方で形成されつつあったのか、その動きを跡付けられればと考えている。

注

- ¹ 江戸川乱歩「探偵小説の定義と類別」(『幻影城』、岩谷書店、1951)。いま、江戸川乱歩『探偵小説評論集 幻影城』(新装復刻版、沖積社、2012)に拠る。
- ² 高山宏「殺す・集める・読む——シャーロック・ホームズの世紀末」(『殺す・集める・読む——推理小説特殊講義』、創元ライブラリ、2002)、28頁。
- ³ 日本の最初期の探偵小説に関しては、伊藤秀雄『明治の探偵小説』(晶文社、1986)を参照。
- ⁴ 樽本照雄「中国におけるホームズ物語」(『漢訳ホームズ論集』、汲古書院、2007)、61-64頁を参照。

- ⁵ いずれも張坤徳による翻訳。当該の4篇は以下のとおり。「英包探勘盜密約案」(原作“*The Naval Treaty*”、邦題「海軍条約文書事件」)、「記僞者復讐事」(原作“*The Crooked Man*”、邦題「曲がった男」)、「継父誑女破案」(原作“*A Case of Identity*”、邦題「花婿失踪事件」)、「呵爾唔斯緝案被戕」(原作“*The Final Problem*”、邦題「花婿失踪事件」)。「前掲」中国におけるホームズ物語、64-77頁を参照。
- ⁶ 吳趸人『中国偵探案』「弁言」(広智書局、1906)。
- ⁷ 陳平原『中国小説叙事模式的轉變』(北京大学出版社、1988、いま2003版に拠る)第二章「中国小説叙事時間的轉變」、47頁。陳氏は清末期にもっとも一世を風靡した外国小説の登場人物として、「ホームズ」と「茶花女」(デュマ・フィス『椿姫』のマルグリット)を挙げる。
- ⁸ 周瘦鵑らとともに『福爾摩斯偵探案全集』十二冊(1916)を翻訳、刊行。のちに、探偵の霍桑と助手の包朗が事件解決に挑む「霍桑探案」シリーズが好評を博し、当時『禮拜六』、『小説月報』など多くの雑誌に掲載された。1922年には「偵探小説」の専門誌『偵探世界』(月刊)を創刊し、編集長を務めている。
- ⁹ ポーの作品の漢訳は、ドイツに比べて遅かった。最も早いものは、周作人が黄金虫を訳した『玉虫縁』(1905)だとされる。もっとも、作品の受容が漢訳のみを通して行なわれたとは限らない。例えば、ポー「モルグ街の殺人」の最初の漢訳は1918年とされるが、黄翠凝「猴刺客」(1908)には、「猴」が殺人を犯すというプロットがあり、書き手が同作品を何らかの形で参照した可能性も考えられる。日本ではすでに先行する翻訳があった。また、「藍猿」(1916)では、猿が殺人犯に間違われるというくだりがあり、ポーの作品集(英文)への言及が見られ、原書そのまま読んでいる可能性も十分ある。「モルグ街の殺人」の日本語訳については、吉田司雄「エドガー・アラン・ポー「モルグ街の殺人」ノート——探偵小説翻訳史稿(1)」(『工学院大学共通課程研究論叢』第37巻第1号、1999.10)を参照。また、黄翠凝「猴刺客」については、拙稿「ポーの影を求めて——清末探偵小説「猴刺客」」(『火輪』第38号、2017.9)を参照。
- ¹⁰ 黒岩涙香は、西洋の小説、とりわけ探偵小説を数多く翻訳して日本に紹介したことで知られるが、その翻訳(翻案)をもとに漢訳された小説もまた少なくなかった。探偵小説の事例としては、佚名訳『奪嫡奇冤』(商務印書館1903。原作はÉmile Gaboriau “*L’Affaire Lerouge*”、黒岩涙香訳『人耶鬼耶』[1888]の重訳)や、佚名訳『指環党』(商務印書館1905。原作はFortuné du Boisgobey “*L’Oeil du Chat*”, 1889、黒岩涙香『指環』[1889]の重訳)などがある。中村忠行「清末探偵小説史稿(三)——翻訳を中心として——」(『清末小説』第4号、1980.12)を参照。
- ¹¹ 包天笑『鉞影樓回憶録』(香港大華出版社、1971)第四四「訳小説的開始」。原文「我知道日本當時翻譯西文書籍，差不多以漢文為主的，以之再譯中文，較為容易」。
- ¹² 梁啓超は「論学日本文之益」(『清議報』第10期、光緒二十五年〔1899〕年二月二十一日)において、「日本語では漢字が十のうち七、八を占める」ことを挙げながら、接続詞や助詞に注意することでスムーズに本を読めるようになるとし、みずからの書いた『和文漢読法』について「学習者が読めば、あまり頭を使うことなく多くを得られる」と述べる。『和文漢読法』については、劉建雲『中国語の日本語学習史——清末の東文学堂——』(学術叢書、学術出版会、2007)第七章「清末中国人の日本語学習の実態」第三節「時代の特徴をもつ教授法」を参照。
- ¹³ 定一「小説叢話」(『新小説』第13号、1905)。原文「千變萬化，駭人聽聞，皆出人意者。」
- ¹⁴ 『小説林』第九期(1908)。原文「他肆我不知，小説林之書計之，記偵探者最佳，約十之七八」。
- ¹⁵ 阿英『晚清小説史』(初版は商務印書館1937、改訂版は同1955)。いま改訂版第283頁を参照。原文「如果說當時的翻譯小説有千種，則翻譯偵探要佔五百部上」。
- ¹⁶ 郭延礼『中国近代翻譯文学概論』(湖北教育出版社、1998)第六章「中国近代翻譯偵探小説」。

140 頁。

- ¹⁷ 孔慧怡「以通俗小説為教化工具——福爾摩斯在中國（1896-1916）」（『清末小説』第 19 号、1996）。また、同「還以背景、還以公道——論清末民初英語探偵小説中訳」（王宏志編『翻譯與創作——中國近代翻譯小説論』、北京大學出版社、2003 所収）においても同様の指摘がなされている。
- ¹⁸ 樽本照雄氏は、「贗作ホームズ失敗物語」（樽本照雄『清末翻譯小説論集』、清末小説研究会、2007 所収）において、こうした作品群を「贗作ホームズ物語」と呼ぶが、平山雄一氏は、「ホームズパスティッシュ史における中国作品」（『清末小説から』第 61 号、2001 所収）において、樽本氏が「贗作ホームズ物語」と括る作品には、パロディとパスティッシュの二種類があることを指摘している。なお、パロディとパスティッシュの厳密な線引きを行うことは、本稿の目指すところではないため、ここでは掘り下げず、「模倣作」という言い方にとどめる。
- ¹⁹ ここで挙げた一篇は『時報』1904 年 12 月 18 日に掲載された。なお、この 4 篇も含めて、当時の模倣作の一部は日本語にも翻訳されており、樽本照雄『上海のシャーロック・ホームズ』（国書刊行会、2016）として刊行されている。
- ²⁰ [前掲]『漢訳ホームズ論集』所収。同文では、ホームズ物語を中心とする、清末民初探偵小説に関する研究史が整理されている。
- ²¹ 鴛鴦胡蝶派は、「礼拝六派」とも言う。その名のとおり、民国期の娯楽雑誌『礼拝六』に掲載されていたような、恋愛小説、黒幕小説、武俠小説、探偵小説といった娯楽性の高い小説の総称である。五四運動前後の約 20 年間に流行し、その間、鴛鴦胡蝶派の作家たちは新聞、出版、映画、戯曲など、幅広い分野で活躍した。鴛鴦胡蝶派については、劉揚体『流變中的流派——「鴛鴦胡蝶派」新論』（中國文聯出版公司、1997）、賈植芳「反思的歷史 歷史的反思——為『中國近現代通俗文學史』而序」（范伯群主編『中國近現代通俗文學史』、江蘇教育出版社、1999 所収）を参照。
- ²² 范伯群主編『中國近現代通俗文學史』（江蘇教育出版社、1999）所収の賈植芳「反思的歷史 歷史的反思——為『中國近現代通俗文學史』而序」、范伯群「緒論」に詳しい。賈氏は同論において、鴛鴦胡蝶派、礼拝六派が、新文學家から厳しい批判を受け、研究範囲の外へと追いやられてきたことを述べる。
- ²³ 復旦大學中文系 1956 級中國近代文學史編寫小組編著『中國近代文學史稿』（達文社出版、1978）版に拠った。
- ²⁴ 中村忠行「清末探偵小説史稿（一）——翻譯を中心として——」（『清末小説』第 2 号、1978.10）、中村忠行「清末探偵小説史稿（二）——翻譯を中心として——」（『清末小説』第 3 号、1979.12）、[前掲] 中村忠行「清末探偵小説史稿（三）——翻譯を中心として——」。
- ²⁵ 陳平原『中國小説敘事模式的轉變』（北京大學出版社、1988）、袁進『中國小説的近代變革』（中國社會科學出版社、1992）、王德威『被壓抑的現代性』（麥田出版、2003 年、原著 1997 年、邦訳 2017 年）、郭延礼『中國近代翻譯文學概論』（湖北教育出版社、1998）、[前掲] 范伯群『中國近現代通俗文學史』などが挙げられる。
- ²⁶ 一連の論考は、渡辺浩司『清末翻譯ミステリ論集』（清末小説研究会、2010）としてまとめられている。
- ²⁷ 清末期の創作探偵小説に関する研究も見られるようになってきた。主要なものに、苗懷明「從公案到偵探——論晚清公案小説的終結與近代偵探小説的生成」（『明清小説研究』2001 年第 2 期）、王燕「近代中國原創偵探小説」（『齊魯學刊』2003 年第 2 期）、許德「20 世紀中國原創偵探小説的美學特徵」（『江漢論壇』2008 年第 5 期）、楊緒容「周桂笙與清末偵探小説的本土化」（『文學評論』2009 年第 5 期）、同「吳趸人與清末偵探小説的民族化」（『華中師範大學學報』2010 年第

- 2 期)、任翔「中国偵探小説的發生及其意義」(『中国社会科学』2011 年第 4 期) などがある。
- ²⁸ 湯哲声「偵探推理篇」(范伯群主編『中国近現代通俗文学史 上巻』、江蘇教育出版社、1999)、同『中国現代通俗小説思弁録』(北京大学出版社、2008)、任翔『另一道的風景——偵探小説論』(中国青年出版社、2001)、姜維風『近現代探偵小説作家程小青研究』(中国社会科学出版社、2009)。
- ²⁹ 一連の研究は、池田智恵『近代中国における探偵小説の誕生と変遷』(早稲田大学モノグラフ 110、早稲田大学出版部、2014) にまとめられている。
- ³⁰ 黄岩柏『中国公案小説史』(中国小説史研究叢書、遼寧人民出版社、1991)、孟犁野『中国公案小説芸術發展史』(警官教育出版社、1996)、黄澤新、宋安娜『偵探小説学』(百家文藝出版社、1996) などがある。
- ³¹ 王徳威『被压抑的現代性：晚清小説新論』(国立編訳館、2003)「導言」。
- ³² 湯哲声「偵探推理篇」(范伯群主編『中国近現代通俗文学史 上巻』、江蘇教育出版社、1999)、任翔『文学的的另一道風景——偵探小説史論』(中国青年出版社、2001) などがある。
- ³³ たとえば范伯群・孔慶東主編『通俗文学十五講』(北京大学出版社、2003) の第九講「民族化進程中的偵探小説」では、中国で探偵小説が創作され始めるのはおおよそ 1920 年代からだと言われている。それ以前の作品については、おそらく探偵小説とは認められていない。

第 I 部
公案小説から探偵小説へ

第1章 公案小説と探偵小説の間で——劉鶚『老残遊記』

はじめに

まず第I部では、探偵小説と、それを生み出すうえでの土台となったとされる公案小説との交差の問題について取り上げる。この第1章では、その問題をとくに興味深い仕方で顕在化させている小説として、『老残遊記』を論じる。

『老残遊記』は清末期に劉鶚（1857-1909）が洪都百練生の筆名で著した、全20回の白話章回小説である¹。書名のとおり、「老残」という渾名を持つ旅医の見聞録であり、山東省の各地を舞台とする。この小説は、貪官ではなく清官の悪を暴露した小説として名高い。魯迅が『中国小説史略』において「譴責小説」として取り上げた²ことで、その名はいっそう世に広まることとなった。

劉鶚が『老残遊記』を『繡像小説』に連載し始めたのは1903年のことである。それは原稿料によって、友人の連夢青を資金援助するためであった。そのため、「最初はこれといった計画や主たる目的もなく、構成や構造もなく、〔連載していた〕当時はただ一日に数枚を書いて」³出版社に送っていたという。しかし後に内容の改竄や削除が行われたことが原因で、劉鶚は執筆を中断する⁴。その後、1906年の前半に、改めて初集20回が第1回から『天津日日新聞』に連載された⁵。このような経緯は小説創作にも影響を与えたらしく、第14回以前と第15回以降については、内容や表現が異なることが指摘されている⁶。

その第15回以降の展開は、ある事件と裁判、そして謎の解決を主軸とするものである。西洋探偵小説の影響のという点からも非常に興味深く、一連の展開について、陳遼氏は「わが国の近代探偵小説の始まりだと言えよう」⁷と述べる。また、苗懐明氏は、清末期の探偵小説創作について、1. 伝統的な公案小説を踏襲したもの、2. 探偵小説を参考にしたもの、探偵小説を模倣したもの、という類型を示し、『老残遊記』を2番の項目に分類している⁸。

これらの研究においては、「西洋探偵小説からの影響」と「公案小説の枠組みの突破」が指摘されているのだが、後者については、そうとも言い切れない面があるだろう。そこで本章では、その説について検討するとともに、『老残遊記』のテキスト上において、公案小説と探偵小説がいかなる仕方で交差しているのかを論じたい。

1. 西洋探偵小説受容の土台としての公案小説

『老残遊記』の話に入る前に、まずは公案小説について、大まかに述べておこう。公案小説の「公案」とは、もとは裁判官が案件を処理するときに用いた大机のことであり、法令によって事の是非を審議することをも指す⁹。公案小説とは、事件や犯罪が起こり、被害者が裁判官に訴え、裁判官が事件を解決して裁きを下す、という流れを骨子とした小説のことである。唐代の中期には、「謝小娥伝」¹⁰など、公案小説に類する話が現れるが、公案小説がジャンルとして形成されはじめたのは、宋代の頃とされる¹¹。

このジャンルの話として最も有名なのは、包拯の話であろう。包拯は北宋の時代、仁宗皇帝の側近として朝廷に仕えた実在の人物であり、開封府知事などの要職を務めた。民間では「包公」と敬意を込めて呼ばれ、清廉潔白、鉄面無私の名裁判官として知られている。包公の物語は、元代の雜劇の演目中にもよく見られるほか、明代から清代にかけて、小説や語りもの、芝居などを通じて広く普及した。『大岡政談』など日本の裁き物もまた、その多くが『包公案』をはじめとした、先行する公案小説の翻案などをもとにしており、そのことはつとに指摘がある¹²。

清代には、長編の公案小説が登場した。『施公案』『狄公案』『海公案』『彭公案』などである。また、『包公案』の流れを汲む『三俠五義』においては、包公の裁判だけでなく、その手下の侠客が活躍する話が見られる。こうした事例を踏まえて、「公案小説」は「俠義公案小説」と括られる場合もある¹³。

その点について、本章の内容と関連して注目されるのは、王徳威氏が、『老残遊記』の第15回以降の展開について、老残が義俠的精神を持った人物となっていることを指摘し、「俠義公案小説」として論じていることである¹⁴。『老残遊記』における「公案」と「俠義」の混在については、後ほどふたたび取り上げる。

以上を踏まえて、次節以降では、『老残遊記』中の展開や人物形象が、公案小説または探偵小説とどのように関わりのあるものなのかを論じる。その際、両者の境界を今日的な探偵小説の定義ないしはイメージに照らして線引きするのではなく、同時代の創作例や言説に照らして考察することに留意したい。公案小説的か探偵小説的かといった議論は、恣意的なものとなりがちなためである。

2. 謎解きは裁きのあとで——分業する裁判官と探偵

本題に入る前に事件のあらましを述べておこう。齊東村の賈家で、一家のうち 13 人が死亡する事件が発生する。検死をしたところ外傷や紫斑はなく、死因は判然としなかった。ほどなくして、賈家で発見された食べ残しの月餅に砒素が混入されていたという訴えがある。その月餅の送り主である魏家に嫌疑がかけられ、斉河県知事の王子謹は、両家の人間から事情を聴取し、魏家の父娘を収監する。被害者である賈家の側は裁判を要求し、裁判官の剛弼が裁きにあたる。剛弼は筋金入りの清官であり、魏家の番頭が村の名士に賄賂を渡して罪を減じるよう願っていたことから、魏家の者の犯行だと決めつける。魏家の娘が拷問にかけられようとしたまさにその時に、老残はそれを食い止める。

老残はここまで聞くと、怒りがこみ上げてきて、法廷という重要な場所であったにもかかわらず、堂に立っていた小役人を手で搔き分け、大声で叫んだ。「あける！ わたしを通せ！」。小役人は道をあけた。老残が中へ入ると、一人の下役が片手で賈魏氏の髪を引っ張りあげ、頭を引き起こし、二人の下役が手を締め具にかけようとしている様子であった。老残は歩いていくと、下役を引っばって、「手を止めろ！」と言うと、大手を振って知事の席へと上っていくと、机に二人座っているのが見えた。下手にいるのが王子謹、上手にいるのが剛弼に違いないとわかり、まず剛弼に向かってお辞儀をした。¹⁵ (第 16 回)

ここで老残が剛弼の裁きに割って入る点について、第 14 回以前の老残はあくまでも酷吏の話を仄聞するだけの「観察者」だったのが、15 回以降は事件の「当事者」へと形象が変化していることが指摘されており、そこに中国の伝統的な「侠」の気質が見て取れることについても言及が見られる¹⁶。老残の干渉によって、結果的に魏氏の娘は父親ともども釈放される。

最終的に、魏家の者が冤罪で罰せられるのを阻止するのは、後から呼ばれた裁判官の白子寿であった。白は、剛弼がみずからの清廉さゆえに見落としていた事実関係をひとつずつ明らかにし、推理をもとに魏家の者の無罪を立証する。その最後のくだりは、次のようなものである。

白子寿は堂上でその半分に欠けた月餅をよく見て、剛弼に言った。「聖慕どの、よくご覧ください。この月餅の餡は胡麻と胡桃の砂糖煮でできており、どれも油を含むものです。もし砒素を餡に練りこんだものならば、当然ほかの物質とひとつに粘着します。この砒素は明らかに後から加えたものであり、ほかの物質とはまったく粘着しておりません。さらに四美齋〔月餅を作った店〕の者の供述によれば、餡は一種類のみであり、いまこの両方の餡をよく見ますと、砒素が入っているほかは、たしかに外側も中身も同じです。同じ餡でありながら、他の人は食べても死んでいないのですから、魏家の死が月餅によるものでないことが分かります。スープがあるものならば、毒を後から混入することもできますが、月餅というものは皮が乾いており硬く、混入したとする道理はまずもってありません。お二方はどうお考えですか。」¹⁷（第18回）

陳遼氏は、先に引いた論考において、白子寿が神仙や冤魂の力を借りることなく事件を審議している点について、従来の公案小説の書き方を突破していると指摘する¹⁸。たしかに、上記の引用箇所からは、白が砒素に関して科学的な知識を持っていることが窺われ、さらに推論によって、月餅が犯行とは無関係であることが示されている。そして、その論証をもって、魏家の者の無罪が確定する。

しかし、白子寿の裁判は、冤罪を晴らすことが主たる目的であり、事件そのものを解決へと導くものではない。白はこの裁判が終わったあと、事件の謎の解明を、老残に託してしまうのである。白は解決役を受け渡すにあたり、老残をシャーロック・ホームズに擬えて、次のように述べる。

白公は言った。「そのとおりです。まだ死んでいないものは助けねばなりません。死んでしまった者は冤罪を晴らさなくてもよいというのですか。お考えください、かような不思議な事件、どうして並の使いの者に取り扱うことができましょうか。やむを得ないからこそ、あなたという福爾摩斯ホームズにご教示をお願いしているのです！」¹⁹（第18回）

白子寿は上記のやりとりを境に、残された謎の解決を老残に委ね、老残は「ホームズ」として調査に乗り出す。伝統的な公案小説においては、往々にして、裁きを担当

する裁判官が謎を解き、事件を解決するものだが、この小説は異なる。ここに見える裁判官と探偵の分業こそ、同時期において、公案小説と探偵小説が共通点を持ちつつも重ならないものだったことを示していないだろうか。

時期的にはもう少し後の小説だが、「事件と裁判」を骨子としながらも、同じく「裁き」と「謎解き」の担い手が分かれている作品に、「中国偵探小説 繡衣盗」がある。同小説は、上海の日刊紙『申報』に、1910年5月28日から7月10日まで連載された短編である。章回小説の形式で、全10回が43回に分けて掲載された²⁰。作者に関する記載は無い。日本の鼠小僧の伝説を彷彿とさせる義賊の姚喜祖が江蘇一帯で起こした窃盗事件とその顛末を描く。

『老残遊記』と同じように、裁きをする裁判官の李清華のほかに、犯人を捕まえて裁判官に引き渡し、事件の謎を解き明かす捕吏の陸雄が登場する。物語における裁きの重点は、謎の解明や判決そのものではなく、義賊の自供を引き出し、動機を語らせることに置かれている。そして義賊は英雄として認められる。他方、賊を特定するに至るまでの推理は、裁判官による裁きのあとに、賊を捕えた捕吏が後から述べる²¹。

このような、伝統的な公案小説あるいは俠義小説を基礎とした創作が行なわれている理由は、先行する探偵小説への、次のような批判を背景とするものようである。

いまの小説家はしばしば中国探偵小説などというものを書くが、そのなかの事件解決の流れや、その国家の法律や探偵の学問は、どれも西洋各国の探偵小説と大差ない。思うに、これらの事柄はかならずしもすべてが事実だとは限らず、どうせ著者の心のなかの想像²²に過ぎないのだ²³。(第1回)

書き手は、同時期の中国人が書いた探偵小説は中国社会の現状とは合わないと考え、伝統小説風に仕立てているのである。なお、この引用にも反映されている、探偵小説の物語世界と現実世界との折り合いの問題は、本論で取り上げる主要な項目のひとつだが、この小説では、西洋的な制度や道具を描かないことを選択している。また、作中の捕吏が「探偵〔偵探〕」と称されることは一度もない。さしあたり、ここでは裁判官と捕吏とが分業していることを指摘するに止めておく。

なお、このような事例とも合わせて改めて考えると、これらの小説における裁判官と探偵役の分業は、それ以前の『三俠五義』などの小説に見られるような、「公案」

と「俠義」の要素の「分化」²⁴を下敷きとして生じた可能性も考えられるだろう。例えば、先に言及した『三俠五義』では、包公だけでなく手下の侠客が登場し活躍を見せるようになり、「公案」と「俠義」の要素がはっきりとみられる。そして包公は最初の事件でこそ裁きを担当するものの、途中から[第13回以降]、話の比重は侠客へと移っていくのである。

3. 死者を蘇生させる「ホームズ」

話を白子寿の裁判へと戻そう。白子寿は裁判を終えた後、老残に「ホームズ」として謎解きを託すこととなったが、その後の動向について注目すべきは、最終的な事件の解決において、白の裁判とは逆に、むしろ伝統的な公案小説の要素が色濃く見られることである。

老残は医者であることを活かし、捜査を開始する。老残は当初、犯行に用いられたのが西洋の薬だと考え、中西医薬堂へと調査に赴き、西洋医学や化学に詳しい、天主堂の克址斯^{カーチス}なる神父のもとを訪れるが、有力な手がかりは得られない。最終的に、13人の「死因」が砒素ではなく「千日酔」であることを突き止める。老残は、ある男が魏家の鍋に何かを混入するのを見たという情報を耳にし、一計を案じて、薬や入手先の情報を吐かせることに成功する。そして、その男に薬を渡したという、泰山の玄珠洞に住まう道士の青竜子を訪ね、そこで「千日酔」から蘇生させるための薬が「返魂香」であることを教わり、それを13人に対して用いる。

老残は廟内のごく小さなふたつの部屋を選び、人に命じて一晩かけて密封させ、風が通らないようにした。次の日の早朝、13の棺をすべて廟内に運び、まず作男の棺をひとつ開けて見てみると、はたして体はまだ腐ってはおらず、安心した。そして13人の遺体をすべて取り出して、そのふたつの部屋に安置し、「返魂香」を焚くと、二時間もしないうちに、みなかすかに息をするようになった。老残は指示をだし、まず温かい吸い物を、次に薄い粥を用意させた。彼らが七日過ぎすのをゆっくりと待ってから、各自を家に送り帰した。²⁵ (第20回)

最初は観察眼により推理を展開する老残であったが、解決の最終段階において、老残は「死者蘇生」という、西洋探偵小説中の探偵には見られない役割を担う。この一連の場面は、公案小説に登場する名裁判官、包公を彷彿とさせる。

包公は、先に述べたように、北宋の時代に仁宗皇帝の側近として朝廷に仕えた実在の人物であり、その物語は明代から清代にかけて、小説や語りもの、芝居などを通じて広く普及し、広く民衆に親しまれた。

やがて包公は「昼に現世を裁き、夜に冥界を裁く（日判陽・夜判陰）」と称されるように、その裁判の対象は、現世における人間にとどまらず、冥界の亡霊などにも及ぶようになってゆく。さらに、後世になると話が複雑になり、包公は死者蘇生の能力を持つようになる。そしてその際には、やはり道具が用いられるのである。

阿部泰記氏は包公説話における死者蘇生のモチーフを考察し、「明代以降、包公が死者を復活させる宝物が固定し、包公の死者蘇生能力も固定したことから、現代地方劇の中でも包公が死者を復活させることは常識となった」²⁶と述べる。例えば、清代の白話章回小説『万花楼』第50回には、以下のような展開が見える。

狄青を陥れる陰謀を企てる沈国清を、その妻の尹貞娘が諫める。しかし、夫が聞き入れないために、自害して閻魔に訴えるも、閻魔は包公に訴えよと尹氏を諭す。そこで包公は妻の尹氏を復活させ、沈国清が私恨によって狄青を誣告したことを証言させる。包公が尹氏を生き返らせる場面は、次のようなものである。

さらに包公は董超と薛霸の二人の兵士に、細心の注意を払って遺体を起こすよう言いつけた。二人の衛兵は命を受けると、すぐさま亡骸をゆっくりと扶け起こし、人がいない静かなところへ安置した。〔包公は〕さらに張と趙の二人に対して、温涼帽子を夫人の頭上に被せ、還魂枕を頭の下に置き、返魂香を身体の上に放つよう命じると、四人の兵士を遠くへ離れさせ、小間使いと侍女を近くに寄せさせた。²⁷

この引用における包公と、先ほど引いた場面における老残とは、1. 返魂香を使用し、2. 死者を蘇生させ、3. 物語を団円へと導く、という三点において共通している。このように、当初は「ホームズ」として調査に乗り出す老残だったが、事件解決において果たす役割は、翻訳探偵小説に見られるような探偵ではなく、むしろ包公説話における包公のそれに類するものなのである。

陳遼氏が指摘するように、白子寿の裁判はたしかに神仙や冤魂の力を借りることなく事件を審議している。その点において、伝統的な、さらに言えば包公説話のような公案小説の書き方を打ち破っている面もあるにはあるが、物語の最終局面においては、むしろ包公説話のような話に立ち戻っているということになる。

この一連の流れについては、たんに探偵小説的だなどとは言えない面があり、老残の形象もまた西洋の探偵からは程遠いものではある。しかし、いずれにしても、裁判官が探偵に解決役を引き渡すというこの場面は、公案小説から探偵小説へ、という文学史の趨勢をなぞるかのようであり、たいへん興味深い。

『老残遊記』は探偵小説を標榜した小説ではない。しかし、事件とその解決を主軸に展開し、事件の解決役が「ホームズ」と呼ばれながらも包公のように振る舞うこの小説こそは、同時代における公案小説と探偵小説との交差の痕跡を、そのテキスト上に刻印しているのである。

4. 医者と探偵

ここまで、死者を蘇生させるという老残の形象について、包公と並べて論じてきた。この形象は、老残が医者であることも大きく関わるだろう。そこで、本節では、老残の「治療」の役割という観点から検討したい。

そもそも返魂香に関する記載は古くから見られ、疫病を予防治療する効果や死者の魂を召喚する効果があるとされる。この点について、孫英剛氏は、返魂香の「見鬼人」の道具としての側面を指摘する。「見鬼人」とは巫覡の類であり、鬼神と通じる職能を持つ。孫氏は、伝統的な中国医学では鬼神が病の主要な原因の一つだとみなされていたこと、鬼を視認してそれを取り除き、病を治療することが巫覡の主要な職能のひとつであったことを述べる²⁸。

この点を踏まえると、当該の場面における老残は、みずからの医者（巫医）としての力を発揮したと考えられるだろう。興味深いのは、裁判官の白子寿のほうが、西洋の探偵のように証拠と推論に基づいて裁判を展開しているのに対し、「ホームズ」と称された老残のほうが、むしろ伝統的〔あるいは前近代的〕な、巫医のような役割を担う点である。

清朝末期の中国では、自国の現状を病として喩える、「東方病夫」「東亜病夫」とい

った比喻が数多く用いられた。現状の負の局面は「病」に、そしてその解決策は「医」の行為に喩えられ、国の情勢のみならず様々な局面において用いられた²⁹。また、楊聯芬氏は、康有為が変法維新を「救病の方」と称していることや、梁啓超が中国の脆弱さを「患勞病」として喩えている事例を踏まえつつ、当時の啓蒙者の責任が「病状の診察」であり「処方箋を出すこと」であったことを指摘している。³⁰

こうした「病」と「医」の隠喩は、小説批評においても多分に漏れず用いられた。旧小説の「病」を新小説によって「治療」することが目指され、中国に無かった探偵小説もまた、そうした新小説の代表格として、科学小説や政治小説とともに、取り入れるべきものとされた。例えば同時期の翻訳探偵小説『母夜叉』（1905）の「間評八則」には、「この探偵にはほかにもいくつか良いところがある。わが国民の障害や疾病を治療することが出来ることである」³¹といった表現が見える。また、やや時代は下るが、成之（呂思勉）「小説叢話」（1914）には次のような記述が見える。

中国人の著述には大きな病がある。それは、「いずれも虚構を凌ぐものであるが、真実にはなり得ない」ということである。……（中略）……これはまさしく中国小説の大病である。この病を治そうとするならば、探偵小説によって進めるしかない。おもうに探偵小説は、どの記述も実際に即している必要があり、どの箇所も周到でなければならず、根拠もなく話を作りあげるとは決して許されないのである。³²

こちらの評論では、探偵小説が中国小説の病を治すためのものとして語られている。これらの評論からは、とりわけ探偵小説あるいは探偵に、中国の「病状」を「治療」する役割が期待されていたことが窺える。先に述べたように、同時代においては、「病」や「医」のレトリックが広範囲で使用されており、もちろん探偵小説だけがこのように語られたわけではない。しかし、近代中国において、探偵や探偵小説に「医」の役割が期待されたことには違いなく、そのことは、探偵小説の受容と創作にも影響を与えたものと考えられる³³。こうしたレトリックの使用は、小説創作における「探偵」と「医学」との役割上の結びつきとも呼応するものであったと思しい。

この点を踏まえつつ、あらためて『老残遊記』における「死者蘇生」の問題について考えたい。楊聯芬氏は、清末小説の中で国家の「病」と「治療」の概念をもっとも

突出させて表現したのは劉鶚『老残遊記』であったと述べている。そして、主人公の老残が医者身分であることについて、「治療」の意図を表現するために意識的に設定されたものであると指摘する³⁴。また、譚光輝氏は、医者之眼によって社会を見つめることが清末から始まったことを指摘しており、『老残遊記』における老残などを例に挙げて論じている³⁵。

楊氏は、老残の「医」の側面について、老残が「ホームズ」であることとの関連性についてはとくに言及していないが、この点については、もう少し掘り下げることが可能ではないだろうか。それにあたっては、王徳威氏が老残の探偵としての役割の意味を考察した一文が参考となるだろう。王氏は老残が探偵の機能を備えていることの意義について、次のように述べている。

老残が近代の探偵としての役割を担うのは、なにも彼が十三人の毒殺事件をみごと解決に導いた部分だけに限らない。この事件が幕を閉じる前にもすでに私立探偵としての老残は何回も姿を見せ、その結果、驚くべきことに清廉潔白な役人こそ社会を混乱に貶める張本人だと発見したのだ。……（中略）……彼は、裁判官、特に「清官」に対して審判を下すことを決意したのだ。裁判官——法と正義の象徴——こそ、究極の真犯人だと暴かれるような推理小説ほど、読みごたえのあるものはないだろう。老残とホームズを一緒に論じることの本当の原因が、まさにここにある。³⁶

王氏の説を踏まえてさらに考えを推し進めると、王氏の指摘する老残の「暴露」の役割は、病巣を露わにするという医者役割と重なるものではないだろうか。こうした見方を合わせて考えるに、医者である老残に探偵としての機能が仮託された背景には、先に挙げたような、そもそも探偵に「治療」の機能が期待される状況があったものと考えられる。西洋探偵小説中の探偵と比較した場合、老残の死者蘇生の役割は、たしかに探偵のそれを超越しているが、むしろ人を生き返らせるというこの場面こそ、「治療」の機能を持つ老残の役割を象徴的に表現したものだと言える。『老残遊記』のこの場面は、同時代の中国における「病」や「医」をめぐる語りの磁場に胚胎した、探偵と医者との象徴的な結びつきを、端的に示しているだろう。なお、探偵小説に託された「治療」のイメージについては、第7章でふたたび触れる。

おわりに

范伯群主編『中国近現代通俗文学史』（江蘇教育出版社、1999）に収録されている湯哲声「偵探推理編」の第一章第一節では、「包拯与福爾摩斯交接班（包拯がホームズに引き継ぎをする）」と題して、清末期における西洋探偵小説の流入の状況を述べるとともに、清末期における公案小説から探偵小説への引き継ぎに論及している。しかし、ここでは『老残遊記』は例示されていない。同書において、『老残遊記』はおもに譴責小説として論じられている。しかし、本章を踏まえるならば、『老残遊記』ほど、このテーマのもとに取り上げるのに相応しい小説は無いように思われる。

本章では、西洋探偵小説の伝来によって生じた公案小説と探偵小説との交差の問題について、『老残遊記』を事例として論じた。両者をいかに線引きするかという問題は、ほどなくして、吳趸人が『中国偵探案』（1906）を世に出したことによって、はっきりとした輪郭を形成してゆくようになる。第2章以降では、引き続きこの問題を取り上げる。

注

¹ 『老残遊記』には初集、二集、外編（残稿）が存在するが、本稿では初集 20 回を主として取り扱う。

² 魯迅「中国小説史略」第 28 篇「清末之譴責小説」、初出は北京大学新潮社（上下冊、1923-1924 年）。いま『魯迅全集』第 9 卷（人民文学社、2005 年）を参照。

³ 劉大紳「關於『老残遊記』」（劉徳隆・朱禧・劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』四川人民出版社、1985、所収）、390 頁。原文「初無若何計劃宗旨，也無組織結構，當時不過日寫數紙」。

⁴ 『老残遊記』は、『繡像小説』第 9 期（1903 年 9 月）に第 1 回が連載され、その後第 2 回、第 3 回が同第 10 期（1903 年 10 月）に、第 4 回と第 5 回が第 11 期（1903 年 10 月）に、第 6 回が第 12 期（1903 年 11 月）に、第 7 回が第 13 期に（刊行年の記載なし。13 期以下はいずれも刊行年の記載はない）、そして第 8 回と第 9 回が第 14 期に発表された。しかし、その後、第 15 期に発表された第 10 回の最終部分 567 字と評語が改竄される。また、第 16 期の連載時には、掲載予定の第 11 回原稿がすべて削除され、代わりに第 12 回原稿が、冒頭部を書き直したうえで第 11 回として連載された。仲介していた連夢青はこのことに怒り、原稿の売り込みをやめ、劉鶚も『老残遊記』の執筆を中止した。この段階で劉鶚がすでに渡してあった第 13 回、第 14 回原稿は、それぞれ第 12 回、第 13 回として同誌の第 17 期、第 18 期に掲載された。

なお、この削除された第 11 回の部分は、後に李伯元が自著『文明小史』に盗用し、『繡像小説』第 55 期に載せた。この「盗用問題」に関しては、樽本照雄「劉鉄雲が李伯元を盗用したのか——王家熔説を批判する」、同「李伯元と劉鉄雲の盗用関係」、同『『老残遊記』と『文明小史』

- の盗用関係を論じる」(いずれも樽本照雄『清末小説論集』、法律文化社、1992 所収)に詳しい。
- ⁵ 樽本氏によれば、『天津日日新聞』への掲載時期に関しては諸説あるが、確定が困難とされる。それは、同紙が現存しておらず、確認することができないためだという。樽本照雄「天津日日新聞版『老殘遊記』二集について」(『清末小説閑談』、大阪経済大学研究叢書XI、法律文化社、1983 所収)を参照。
- ⁶ 樽本氏は「現実性の濃い内容から幻想性の濃厚なものへと変化しているといえる」と述べている(樽本照雄『『老殘遊記』試論』、樽本照雄『清末小説閑談』、法律文化社、1983 年所収)。その他、陳平原『中国小説叙事模式的轉變』(北京大学出版社、1988)においても、叙述の形式の違いが指摘されている。
- ⁷ 陳遼「現代偵探小説的開端——談『老殘遊記』中白子寿、老殘的破案」(『東岳論叢』1993 年第 1 期)。原文「可以說是我國現代偵探小説的開端」。
- ⁸ 苗懷明「從公案小説到偵探——論晚清公案小説的終結与近代偵探小説的生成——」(『明清小説研究』総第 60 期、2001 年第 2 期)、54 頁を参照。
- ⁹ 莊司格一『中国の公案小説』(研文出版、1988)第一節「公案小説」を参照。
- ¹⁰ 「謝小娥伝」は、父と夫を殺された謝小娥の復讐譚である。謝小娥は夢の中で父と夫から犯人の名前に関する情報を謎かけで聞く。意味を解読できずにいたところ、李公佐がそれを解読し、犯人の名を突き止める。謝小娥は下働きとして犯人に近づき、最後には復讐を果たす。
- ¹¹ 公案小説については、[前掲]『中国の公案小説』、黄岩柏『中国公案小説史』(遼寧人民出版社、1991)、曹亦冰『俠義公案小説史』(浙江古籍出版社、1998)などを参照。
- ¹² 早い例としては麻生磯次『江戸文学と中国文学』(三省堂、1940)「第四章 裁判物の展開と支那文学の影響」が挙げられる。また、金海南『水戸黄門「漫遊」考』(人物往来社、1999。新版は講談社学術文庫、2012)などにも指摘がある。
- ¹³ 公案小説は後の中華民国期に入ると下火となるが、侠客の話を描く「武俠小説」がジャンルとして台頭してくる。武俠小説もまた、探偵小説との関連性が指摘されている。湯哲声「偵探推理篇」(范伯群主編『中国近現代通俗文学史』上冊、江蘇教育出版社、1999)を参照。また、中国におけるルパン物の展開と武俠小説との関連性については、池田智恵『近代中国における探偵小説の誕生と変遷』(早稲田大学出版部、2014)第 5 章「怪盗から武俠へ——近代中国におけるアルセーヌ・ルパンの軌跡」において論じられている。
- ¹⁴ 王徳威『被压抑的現代性：晚清小説新論』(国立編訳館、2003)第三章「虚張的正義——俠義公案小説」。原著は David Der-wei Wang, *Fin-de-Siecle Splendor: Repressed Modernities of Late Qing Fiction, 1849-1911*, Stanford U. 1997, 邦訳は上原かおり、神谷まり子訳『抑圧されるモダニティ』、東方書店 2017)。
- ¹⁵ 『老殘遊記』(人民文学出版社、1957)、159 頁。原文「老殘聽到這裏，怒氣上沖，也不管公堂重地，把站堂的差人用手分開，大叫一聲：「站開！讓我過去！」差人一閃。老殘走到中間，只見一個差人一手提著賈魏氏頭髮，將頭提起，兩個差人正抓他手在上拶子。老殘走上，將差人一扯，說道：「住手！」便大搖大擺走上暖閣，見公案上坐著兩人，下首是王子謹，上首心知就是這剛弼了，先向剛弼打了一躬。」
- ¹⁶ 老殘の形象の変化については、[前掲]樽本照雄『『老殘遊記』試論』、徐鵬緒「論『老殘遊記』的芸術形式革新」(『東方論壇』1995 年第 2 期)を参照。また、老殘の形象にみられる「俠」については、王徳威氏の前掲書第 3 章に指摘がある。
- ¹⁷ 『老殘遊記』(人民文学出版社、1957)、175 頁。原文「白公在堂上把那半個破碎月餅，仔細看了，對剛弼道：「聖慕兄，請仔細看看。這月餅餡子是冰糖芝麻核桃仁做的，都是含油性的物件。若

是砒霜做在餡子裏的，自然同別物黏合一氣。你看這砒顯係後加入的，與別物絕不黏合。況四美齋供明，只有一種餡子，今日將此兩種餡子細看，除加砒外，確係表裏皆同。既是一樣餡子，別人吃了不死，則魏家之死，不由月餅可知。若有湯水之物，還可將毒藥後加入內；月餅之為物，麪皮乾硬，斷無加入之理。二公以為何如？」

- ¹⁸ [前掲] 陳遼「現代偵探小説の開端——談『老殘遊記』中白子壽、老殘的破案」。
- ¹⁹ [前掲] 『老殘遊記』、179 頁。原文「白公道：『是了。未死的應該救，已死的不應該昭雪嗎？你想，這種奇案，豈是尋常差人能辦的事？不得已，才請教你這個福爾摩斯呢！』」
- ²⁰ 7 月 10 日の最終回には「四十二」とあるが、実際には「二十一」が 2 日続いているため（6 月 18 日と翌 19 日）、連載回数は 43 回ということになる。
- ²¹ 日本においては、中国よりも早い時期に西洋探偵小説が受容されていながら、伝統文化と探偵小説とを融合させた「捕物帳」というジャンルの誕生は、1917 年から始まる岡本綺堂の「半七捕物帳」シリーズを待たねばならなかった（野崎六輔『捕物帖の百年 歴史の光と影』、彩流社、2010）。そのことを考えると、中国において、探偵小説創作の初期の段階から、捕物帳のような公案小説ベースの探偵小説が創作されていたことは、大変興味深い。なお、同小説については、拙稿「謎解きは裁きのあとで——清末探偵小説「繡衣盜」」（『火輪』第 39 号、2018.3）を参照。
- ²² 原文は〈理想〉。清末期の〈理想〉という語には、日本語の「想像」や「想像力」に近い用法が認められる。詳細については、大谷通順「魯迅譯『月界旅行』と『地底旅行』」（『日本中国学会報』第 35 集、1983）を参照。武田雅哉氏もまた、『中国科学幻想文学館 上』（あじあブックス、大修館書店、2001）において、清末期の「理想小説」や「哲理小説」と冠された小説にも SF 小説のようなものがあり、「理想」という語彙が「空想」や「想像」に近い使われ方をすると指摘している。以上の点から、本稿では「想像」と訳出する。
- ²³ 「中国偵探小説 繡衣盜」第一回（『申報』1910.5.29、申報第二張後幅第一版掲載）。原文「如今的那班小説家，每每著什麼中國偵探小説，那裡頭緝案的情節和那國家的法律偵探的學問，都和泰西各國的偵探小説差不多。依在下想起來，這些事情，未見得都是實事，無非是著書人心上的理想罷了」。
- ²⁴ 陳平原『千古文人俠客夢 [增訂本]』（北京大学出版社、2010。初版は人民文学出版社 1992）第 3 章「清代俠義小説」、42-46 頁を参照。陳氏によると、魯迅が『中国小説史略』などにおいてふたつのジャンルの小説を合わせて論じたことにより、やがて「俠義」と「公案」とが並べて取り上げられるようになったという。しかし、「公案小説」と「俠義小説」はそもそも独立していたわけではないため、両者は「融合」ではなく「分化」と呼ぶべきだと論じている。
- ²⁵ 同上、201 頁。原文「老殘選了廟裏小小兩間房子，命人連夜裱糊，不讓透風。次日清晨，將十三口棺柩都起到廟裏，先打開一個長工的棺木看看，果然尸身未壞，然後放心，把十三個尸首全行取出，安放在這兩間房內，焚起『返魂香』來，不到兩個時辰，俱已有點聲息。老殘調度著，先用溫湯，次用稀粥，慢慢的等他們過了七天，方各自遣送回家去。」
- ²⁶ 阿部泰記『包公伝説の形成と展開』（汲古書院、2004）、53 頁。
- ²⁷ [清] 李雨堂撰『万花桜』（中国古代禁毀小説文庫、太白文芸出版社、1998）、318 頁。原文「包公又吩咐董超、薛霸二役，小心细细起尸。两个排軍領命，即将尸骸悠悠扶起，安放僻靜所在，又命張、趙二人，將温涼帽子戴在夫人頭上，還魂枕扶置首下，返魂香放在身上，令四排軍遠離，令丫環侍女近前。」
- ²⁸ 「返魂香」に関する記載については、孫英剛「幽明之間：“見鬼人”与中古社会」（『中華文史論叢』総第 102 期、2011 年 2 月）第 6 章「瘟疫和返魂：作為見鬼人道具的返魂香」を参照。
- ²⁹ 中国人が「東亜病夫」として表象されていく過程を追った研究に、楊瑞松『病夫、黄禍与睡獅：

「西方」視野的中国形象與近代中国国族論述想像 [増訂版]』(国立政治大学出版社、2016) があり、とくにその第 2 章「想像民族恥辱：近代中国思想文化史上的「東亜病夫」」において、詳細に論じられている。また、遊佐徹氏は病-医の隠喩だけでなく、睡-醒なども含め、近代中国における自国の表象を論じている。遊佐徹「近代中国の自画像 序説——「睡獅」、「東亜病夫」、「少年中国」、「三等国」」(『岡山大学文学部紀要』第 53 号、2010.7)。

³⁰ 楊聯芬『晚清至五四：中国文学現代性的發生』(北京大学出版社、2003) 第 5 章「晚清—五四文学的“国民性”焦慮」、178 頁。

³¹ 小説林社訳『母夜叉』(小説林社、1905)。原文「這偵探還有幾樣好處。醫得我國民的殘疾。」同書の原著は Fortuné du Boisgobey “Margot La Balafrée”, 1884。同漢訳は、英訳書 “*The Sculptor’s Daughter*, 1891” をもとに黒岩涙香が翻案した『如夜叉』[扶桑堂 1891] の重訳とされるが、陳碩文「訳者現身的跨国行旅：從『疤面瑪歌』(Margot La Bakafrée) 到『毒蛇圈』」(『政大中文学報』第 27 期、2017.6) によると、涙香が底本とした英訳本はおそらくアメリカで出版されたものであり、『母夜叉』のストーリーは原著とまったく異なるものだという。

³² 『中華小説界』第 1 年第 5 期。原文「中國人之著述，有一大病焉，曰：凡是皆凌虛，而不能征實。(中略) 此真中國小説之大病也。欲藥此病，莫如進之以偵探小説。蓋偵探小説，事事須著實，處處須周密，斷不容向壁虛造也。」

³³ こうした視点から探偵小説を分析する研究に、賴奕倫「程小青偵探小説中的上海文化図景」(学位論文、国立政治大学中国文化研究所、2005) がある。「病」「医」の比喩と探偵小説との関連性については、同研究より示唆を得た。

³⁴ [前掲] 楊聯芬『晚清至五四：中国文学現代性的發生』、178 頁。

³⁵ 譚光輝『症状的症狀：疾病隱喩与中国現代小説』(中国社会科学出版社、2007)、第 3 章第 3 節「晚清小説中的疾病隱喩与中国小説的現代化進程」、98-105 頁。

³⁶ [前掲] 王德威『被压抑的現代性：晚清小説新論』、171 頁。訳文は前掲訳書 198-199 頁に拠る。

第2章 「探偵」の発見——吳趸人『中国偵探案』

はじめに

前章では、劉鶚『老残遊記』を取り上げ、清末における公案小説と探偵小説の交差について論じた。そして、従来の公案小説において裁判官(能吏)が果たしてきた役割のなかから、「謎解き」の要素が探偵へと移り変わろうとする流れが、解決役の受け渡しという形で描き込まれていることを見てきた。

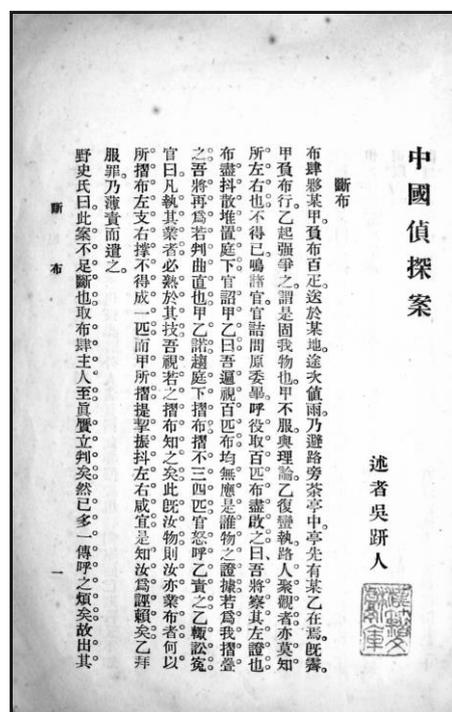
本章では、公案小説の裁判官のような能吏を探偵として捉え直した事例として、清末の小説家、吳趸人(1866-1910)が編集した『中国偵探案』を論じる。おそらく同書において、能吏を探偵とみなしうるか否かという問題が、はじめて真っ向から取り上げられることとなった。

また、この小説集は、おそらく中国人の手になる作品のなかで最初に「偵探」の二字を冠した作品であり、これ以降、陸続と現れる「偵探」を標榜した小説の先鞭をつけたと考えられる点においても意義深い。

そもそも吳趸人と探偵小説との関わりには、浅からぬものがある。早くは友人の周桂笙が翻訳したボアゴベの探偵小説の翻訳『毒蛇圈』(1903)¹に評語を書いている。また、日本の菊池幽芳「新聞売子」を翻案した「電術奇談」(1903)²には、探偵が登場する。そして『九命奇冤』(1903-1905)では、当時では珍しい「倒叙法」を用いており、西洋探偵小説からの影響と見る向きもある。

光緒三十二(1906)年に、吳は小説雑誌『月月小説』の主筆に任じられるが、同誌はこの時期の他の小説雑誌に比べて、翻訳探偵小説を数多く掲載していた。吳の同年における『中国偵探案』の編集には、そのあたりの経験も絡んでいるようだ。

同書は34篇の短編を収録しており、いずれも文言で書かれている。冒頭には「凡例」と「中国老少年」の筆名³による「弁言」が付されている。吳趸人はその弁言において、「すべてが探偵による解決というわけではないが、かならずどれも探偵の方



法から離れてはいない」⁴と述べるものの、同書を「中国能吏伝」と呼んで差し支えないとも断っている。事実、能吏の話を収録していることから、「公案小説」のようなものだと評価されてきた⁵。

しかし、吳趸人の話の取舍選択には、「公案小説」と「探偵小説」の線引きの問題が、たしかに横たわっている。本章では、『中国偵探案』を通じて、呉がいかなる仕方両者の線引きを試みたのかを論じる。

1. 『中国偵探案』の評価——公案小説は探偵小説か

まずはこの小説集に対する従来の評価を整理しておきたい。

近年、中国では探偵小説についての研究が増えつつある⁶。それらの専門的な論考においては、公案小説ひいては探偵小説をどう位置づけるのかがしばしば問題となる。吳趸人『中国偵探案』はよく引き合いに出されるのだが、それは同書が、この問題を考えるうえで、重要な論点を顕在化させているためだろう。

民国期の代表的な探偵小説作家、程小青を研究対象とした、姜維楓『近現代偵探小説作家程小青研究』は、最初の数頁を割いて公案小説と探偵小説の境目を論じており、公案小説を探偵小説としてみなす風潮を次のように述べる。

中国の探偵小説はいつ誕生したのだろうか。20世紀より前に中国には探偵小説はあったのだろうか。この問題はすでに1世紀近くにわたり議論されている。近代西洋探偵小説の翻訳流入が始まってから、議論の声もまた起こったのである。一方では、祖国の文化を崇拝するという角度から、『包公案』や『海公案』などの作品をも探偵小説とみなし、甚だしくは1906年に上海の広智書局から、吳趸人が編集した『中国偵探案』が出版されたのである。⁷

『中国偵探案』はここでは公案小説を探偵小説として見做す事例の極端なものとして挙げられている。このような批判的な評価は、程度の差こそあれ先行研究に共通するものだが⁸、出版当時からすでに見られるものだった。みずからも西洋探偵小説を翻訳していた清末期の翻訳家、周桂笙⁹は、「上海偵探案」「引」(1907)において、『中国偵探案』を、「外国の探偵小説にひけをとらない」「事実の記録」の専門書の始ま

りだ」と評価する¹⁰一方で、それらの話の能吏が職業としての探偵ではないことを指摘し、「裁判」や「判決」と名づけることができるだけで、探偵事件と名づけることはできない¹¹と批判している。ここには、この後も語られ続ける「実際の世界に即したもの」という探偵小説イメージが窺える。

また、清末期においては、これ以外にも、伝統的な小説やその登場人物を探偵小説や探偵よりも優れたものとしてみなし得るか否かが議論された。黄摩西が「小説小話」(1908)において展開している『三侠五義』論を取り上げよう。

黄はまず中国の南北における風土の違いと、それに根ざした小説の好みについて、北方では俠義小説が、南方では才子佳人小説が読まれてきたことを述べる。続けて、『三侠五義』が北方から伝わったことで南方人の好みが変わったことを指摘し、同書について、『水滸伝』とも肩を並べると絶賛する。そしてさらに探偵小説を引き合いに出して、次のように述べる。

わが国の『三侠五義伝』のような俠義小説は、西洋の探偵小説よりも劣っておらず、書物の中のいわゆる侠客も、その才智は欧米の探偵の名士が及びうるものようだがそうではない。(中略)わが国民は、新しいものを好み、古いものを嫌い、己を軽んじ、他人を重んじる。いつも欧米の探偵家を神のように崇め、自国の義侠心に富む事跡は言うに値しないものと見なす。考えの足りないこと甚だしい。ある者は、俠義小説のいわゆる侠客を、みな想像であり事実ではないと言うが、いわゆる福爾摩斯ホームズや聶格卡脱ニック・カーターといった者は、本当にその人物がいるというのか。ましてや、わが国の俠義の事跡は、その中に信頼できる事実もあり、すべてが文人の悪知恵から出ているわけではない。¹²

このように、自国の人物の逸話に見るべきものがあるとする立ち位置は、吳趸人『中国偵探案』「弁言」にも通底したものであろう。

清朝末期でもとりわけ 1900 年からの数年間においては、探偵小説論にはふたつの方向性があった。ひとつは、解決役が職業としての「探偵」かどうかという点から公案小説と探偵小説とを弁別する見方であり、もうひとつは、話の構成や人物の事績の類似性から、公案小説や俠義小説を探偵小説と並べる見方である。

吳趸人は『中国偵探案』において、中国の實在した人物や官吏のなかに「探偵」を

発見しており、後者に属する。実際に、『中国偵探案』に収録された話は、呉もまた「中国能吏伝」と呼んで差し支えないと述べているように、公案小説のようなものが中心である。しかし呉趼人は、ただ能吏を「探偵」として見出しただけではおそらくない。その点を考察するために、まずは『中国偵探案』の枠組みについて述べたい。

2. 『中国偵探案』の枠組み

『中国偵探案』「弁言」には、呉趼人の編集上の枠組みが示されている。この「弁言」に一貫しているのは、中国人の外国人崇拝に警鐘を鳴らす態度である。例えば以下の引用では、士大夫ですら外人を崇拝していると嘆き、次のように続ける。

わたしがおかしいと思うのは、今日の外国人崇拝者は、外国人の排泄物を香り高きものとし、わが国の徳の高いものを醜きものとみなすことだ。外国人の涙や唾を精華とみなし、わが国の血肉を残滓とみなすことだ。外国人の卑しい使用人を神聖なものとみなし、わが国の先賢を陳腐なものとみなすことだ。いかなる外国人であっても、尊厳を侵犯してはならぬとすることだ。わが国の人びとは、たとえ父や師であっても厄介者として扱う。わが国の数千年にわたる経書や史書、一切の国粹をみな突き倒し、外国人の文章を翻訳して、かならず金科玉条とする。¹³

呉趼人は、外国人を崇拝する者が中国の典籍や先賢を貶めることに強い不満を示す。ほどなく話の焦点は翻訳小説、そして翻訳探偵小説へと絞られていくのだが、その段に至っては、梁啓超に代表される、「社会を改良する手段としての小説」という小説観が示され、社会を改良できるゆえんは、人の感情を動かすことができるためだと述べる。そのうえで、呉は「わたしが毎度これ（翻訳探偵小説）を読んで疑問を抱くのは、それがわたしの感情を動かすことができないためだ」¹⁴として、翻訳探偵小説が社会の改良に役立つとする説に疑念を差し挟む。

呉趼人はそれに続けて、『中国偵探案』編集の経緯を以下のように説明している。

わたしは翻訳探偵小説を読み、それについて探偵事件〔小説、以下同様〕の翻訳者に尋ねたところ、かのいわゆる探偵事件は、事実の記録を徹底しておらず、想

像もたしかに多くを占めるのだとわかった。わたしはまた、近年本を書くことの苦しみを嘔みしめているが、事実の記録は易しく想像は難しい。事実の記録は浅く、想像は深い。思うに事実の記録とは、叙事にすぎない。想像とは、かならず事実を超え、人々の考えの外にあり、人を感動させるに足るものである。いま翻訳されている探偵事件もそのとおりである。そのとおりであり、みなもまたそれを崇拜する。そのためわたしは急いでこの『中国偵探案』を編むしかなかった。¹⁵

吳趸人は、翻訳探偵小説は「事実の記録」であるとは限らず空想的な部分もあり、その空想的な部分が人々の想像を超えるために愛読されているのだと述べる。一見すると翻訳探偵小説を評価しているようだが、そうではない。

この直前の部分で、吳趸人は、翻訳探偵小説の読者が、「わが国には探偵の学問はなく、探偵の職業はなく、これを翻訳するのは、つまりそれによって文明を輸入するためなのである」¹⁶と述べていることを指摘している。つまり読者は「探偵の学問」や「探偵の職業」が実在すると考えていることになり、吳は翻訳探偵小説を事実でない部分があるにもかかわらず「文明を輸入する」手段としてありがたがる風潮に危機感を抱き、同書をいわば「緊急出版」したのであった。

吳趸人の狙いは、読者に中国の話の翻訳探偵小説と比較することで、中国にも西洋の探偵より優れた人物がいることを示すことにある。そしてそのために、事実の記録は易しくかつ浅いと認めつつも、なお事実の記録を求めた。「この書を『中国偵探案』と呼ぶのも良いし、『中国能吏伝』と呼ぶこともまったく差し支えない」¹⁷として、中国の実在した能吏のなかに「探偵」を見出したのである。

3. 小説が問題か、読者が問題か

続けて、吳趸人の翻訳探偵小説論をいま少し追うこととしよう。先に挙げた箇所では、吳は小説ではなくその読み手を問題にしているように見える。関連する記述として、『月月小説』第8号「雑説」（1907）に掲載された吳の小説批評を取り上げたい。

『金瓶梅』、『肉蒲団』は、著名な淫書である。しかし、実のところはどちらも淫を戒める作品である。これはその著者だけがそのように自負しているのではなく、

善く読む者もまたその意を解するのであり、もとよりわたしひとりの私見ではない。しかし、世の人が誰も彼も淫書だと言い、官府もそれによってこれを禁止したことからは、善く読む者はみずからを困難な状態にするということも分かる。この意見を推し進め、わたしはあえて言うが、今日の翻訳探偵小説は、みな盗みを誨える書物である。探偵小説というものは、明らかに盗みを戒める書物であるが、何ゆえ盗みを誨えると言うのか。「仁者は之を見て之を仁と謂い、智者は之を見て之を智と謂う」のである。『金瓶梅』、『肉蒲団』のごときは、淫者がそれを見てそれを「淫」だと述べている。探偵小説は、盗人がそれを見てそれを「盗」だと述べているに過ぎないのである。ああ！これがどうして善く読まないというだけのことだろうか。道徳が欠けているにも程がある！社会がこのようなのだから、筆を執り小説を書く者は、慎重に慎重を重ねなくてはならないのだ。¹⁸

ここでは、翻訳探偵小説が「盗みを誨える書物」とされている。「誨淫」「誨盗」といった言葉じたいは、当時すでに小説批判の常套句だったが、ここではたんに書物を「誨淫誨盗」と断じているわけではない。『金瓶梅』や『肉蒲団』といった小説が淫書だとみなされる理由として、読者の見識や素養が問題視されている。

「仁者は之を見て之を仁と謂い、智者は之を見て之を智と謂う」とは、『周易』「繫辭上」に見られる言葉である。仁者だけがそれを見て仁であるとわかり、智者だけがそれを見て智であるとわかる、つまり、道徳的に優れた者だけが書物の素晴らしさを読み取ることができるということを述べる言葉である。同様の論法を小説批評に応用した事例は、おそらく金聖歎に遡る。金は『第六才子書西廂記』の序文につづけて、その読み方を列挙しており、そのうちの一つを次のように記している。

『西廂記』は淫書などでは決してなく、まったくもって名文である。今後、かりにある者が名文だと言い、ある者が淫書だと言ったとしても、聖歎にはいずれもそれを如何ともし難い。文者はそれを見て「文」だと言い、淫者はそれを見て「淫」と言うのである。¹⁹

この言い回し自体は、「見仁見智」という成語にもなっており、先行例がある。しかし、同時代の小説評には、「金聖歎は『西廂記』を評して言った。淫者はそれを見

て淫と言うのだ」²⁰などと、この言葉を金の名とともに引用する事例が散見される²¹。少なくとも清末期においては、金聖歎のものとして意識されていたものと思しい。

それ以前の「誨淫誨盜」といった言い回しは、書物じたいの性質に重点を置いた批判であったが、「見仁見智」式の批評は、書物の価値が読む者によって左右されるとする考え方であり、何かを教える書物と、そこから情報を受け取る読み手を想定したものである。清末当時の啓蒙主義的な小説観とも親和性の高いものだっただろう。

話を吳趸人の小説批評に戻すと、同評は、呉が翻訳探偵小説を「誨盜の書物」とみなすことの主眼は、読者の道徳、すなわち小説読者の成熟度にこそ置かれているのだと考えられる²²。

4. 『鹿洲公案』との違いからみた吳趸人の工夫

ここまで、『中国偵探案』「弁言」と吳趸人の小説批評から窺われる翻訳探偵小説観を見てきた。ここからは、『中国偵探案』に収録されている話を追う。同書には、たしかに能吏が事件の謎解きをする話が多い。たとえば、第9則「假人命」、第10則「盜屍案」の2篇は、清代康熙年間から雍正年間に実在した人物である藍鼎元がみずからの裁きを記録した『鹿洲公案』から収録されている。その2篇は『鹿洲公案』にはそれぞれ「死丐得妻子」（第8則）、「三宄盜屍」（第2則）という題で収められている²³。ここでは、それらが『中国偵探案』に収録されるにあたってどのような改編が施されているかを取り上げる。

まず、「假人命」のあらすじは以下のとおりである。

普寧県で、鄭秩侯が五人の者に殺されたと妻の陳氏が訴える。蕭邦武が四人を引き連れて夫を袋叩きにし、死体を山間の川に投げ込んだとのこと。現場に行くと、息子の鄭阿伯がその遺体を船に載せて来たが、検死すると、経過した時間のわりに口と頬がひどく腐乱していた。藍鼎元は鄭秩侯がまだ活着していると考え、三日後に発見される。検死した遺体は行き倒れの乞食だった。

この話には、吳趸人による削除や補筆が見られる。話の筋がそれによって大きく変化することはないが、両者にはいくつかの相違点が見られる。まず、『鹿洲公案』は

藍鼎元自身による一人称視点の記述だが、吳趼人は、それを三人称の視点で記述していることが挙げられる。

また、吳趼人の書き方には、話の流れを重視する傾向が見られる。たとえば『鹿洲公案』では、何の死体だったのかが描写されないが、吳趼人はそれが行き倒れの乞食の死体だったと補筆している。また、『鹿洲公案』では、検死のあとすぐに、藍公が本人の死体ではないことを疑い、鄭阿伯に問いただすという経緯が描かれるが、吳趼人は、その経緯を同じタイミングでは明かさない。鄭秩侯が見つかったのちに、藍公が解決の決め手となったのが遺体の腐敗状況であると告げるのである。『鹿洲公案』が時系列で事柄を述べているのに対し、吳はプロットに少しひねりを加え、謎がすぐには明らかにならないように工夫している。

続いて「盗屍案」を取り上げよう。あらすじは以下のとおりである。

朝陽の王士毅から、従弟の王阿英が殺されたと訴えがある。王阿雄の母は寡婦となったのち、普寧県の陳天万の妾となり、王阿雄も引き取られたが、陳天万の正妻の許氏が嫉妬から王阿雄を毒殺したという。翌朝藍公は検死に出かけるが、死体は消えていた。許氏は難病で腹がひどくふくれており、人を毒殺するような人間にも見えない。周囲の者に聞き込みをすると、死体は王士毅が盗んだと判明する。藍公は王士毅を30回打ったのち、部下を市内の宿へと向かわせ、王士毅が逗留していた部屋にいた王爵亭を捕まえる。爵亭を拷問にかけると、王士毅は、もともとは三百代言〔訴訟の助人〕陳偉度の策であったことを白状する。陳偉度は冤罪だと主張し、同じ宿に泊まっていたことも偶然だとしらを切る。しかし、ふたりが利用したほかの宿屋の主人が、王爵亭と王士毅がともに三泊したことを証言し、事の次第が明らかとなる。そもそもは、陳偉度と陳天万が先祖の遺産をめぐる争い、その腹いせとして、死体を盗んだのだった。死体を別の県に埋めることで事件の迷宮入りを狙った策だった。検死の結果、王阿雄の死因が毒ではないことがわかり、事件は解決した。

この話でも、吳趼人は語りの順序を入れ替えている。『鹿洲公案』では、藍公が尋問しても陳偉度がなかなか白状しないので、王爵亭が陳偉度に自分たちが共犯であることを話して聞かせ、それを白状するよう陳を説得する場面がある。その台詞を通し

て、事件が生じた原因やいきさつ、犯行の詳細についても描かれるのだが、吳趸人はその部分を、陳偉度が罪を認めて白状した後に書き記している。

何より目立つのは、吳趸人による削除である。たとえば、『鹿洲公案』では、この事件の起きた日が、藍公が普寧県の県知事として赴任してから1ヶ月余りのことだという記述や、そのため藍公が気持ちを落ち着けようとするくだりなどが、すべて削られている。また、さきに挙げた藍公が陳偉度を尋問する際の両者の掛け合いの場面、王爵亭が陳偉度を説得する場面などは、それぞれの会話の応酬が、この話の面白さのひとつなのだが、吳趸人はそれを削除している。

以上のふたつの事例について述べるならば、吳趸人は『鹿洲公案』から『中国偵探案』へと話を収録する過程において、筋立てを重視するために補筆し、筋に大きく関係しない部分を削除したということがわかる。吳趸人は、事件のなりゆきとそれを損なわない最低限の会話のみを記したのである。語りの順序は変えられたものの、結果的に、「事実の記録」により近いものになったと言えるだろう。

そもそも注目すべきは、吳趸人が『鹿洲公案』という実在した知事の実際の記録から話を収録している点である。そして吳趸人は、『鹿洲公案』を選択したのみならず、話の収録の段階で、それをより記録に近いものへと修正することによって、逸話の「事実の記録」としての性格をより強めようとしたものと考えられる²⁴。

『中国偵探案』には、藍鼎元のような官吏の話ばかりではなく、それ以外の人物が事件を解決する話も見られる。たとえば「鐘轟」（第5則）は、ある郡守の従僕、鐘轟が事件を解決する話である。そのあらすじは以下のとおりである。

寧波の某県で、溪流の中に女性の遺体が発見された。検死の結果、みずから溺れたのではないと判明する。しかし手掛かりは得られず、郡守の袁公が呼ばれることになった。袁公の従僕には鐘轟という豪傑がいた。鐘轟はみずから偵察に赴き、村のとある富豪が庭園に池を作っており、それが溪流と下でつながっていることをつきとめる。鐘轟は富豪の従者に金を渡して取り入り、変装して家に潜入するなどして、事の顛末を明らかにした。遺体の女性はその家の召使であった。召使は器量良しで、富豪とひそかに通じていたのだが、それを妬んだ妻が、富豪のいない間に殺害し、溪流に棄てたのであった。

この話には呉趼人による評語が附されており、「鐘嘉の行ないは、欧米の探偵と似通っている」²⁵とある。このように、西洋の探偵と比較するような評語は他にもいくつか見られる。特徴的な事例として、「守貞」（第32則）を挙げておこう。

この話は、男が性器をかじられて変死した事件の顛末を描く。男の妻に嫌疑がかけられるが、70過ぎの「申韓家」（法家）が、守貞という名の鼠のような怪物の仕業であることを見抜き、その疑いを晴らす。呉趼人は話を採録するにあたり、迷信的なものを避けようと配慮したというが（後述）、中にはこうした事件も含まれているのである。また、「能吏伝」を標榜する同書に、「申韓家」のような人物が探偵役として登場することも興味深い。その評語には、「科学が発達している国では、その専門的な探偵の名士が、もしこのような奇妙な事件に遭遇したら、彼らが実行する探偵術もまた、この秘密に及ぶのだろうか？ 一笑」²⁶とある。科学が発達していない中国の奇妙な事件に科学的な捜査が通用するのかといった、半ば自虐的なユーモアによって、呉はこの話を締め括っている。

ここまで見てきたように、呉趼人は、話の収録にあたっての補筆や削除、あるいは評語などを通して、『中国偵探案』を「事実の記録」へと近づけていった。また、話を編集するだけでなく、評語において、中国にも「探偵」がいること、その探偵が西洋の探偵に劣らないということを繰り返し述べて強調しているのである。

5. 「探偵」の発見——包公のいない中国能吏伝

ここまで、収録されている話の多くが実在した能吏のものであることを述べてきた。その点についてひとつ気になるのは、能吏の話を探偵小説として見出したもの、ということであれば、収録されてもおかしくなさそうな話、つまり包拯（包公）の物語が、この小説集には見えないことである。

包公を探偵になぞらえるという発想は、たとえば胡適『三侠五義』序（1925）の冒頭部において、包公を「中国のシャーロック・ホームズ」と称揚したものがあ

胡適は、諸葛孔明が赤壁の戦いに際して、十万本の矢を集める時に用いた乾草の標的を比喻に用いて、「もともとただの乾草で、身体にはハリネズミもかくやとばかりに多くの矢が刺さっているが、肉体は傷ついておらず、むしろ大功を成し遂げて名を得た」²⁷人物のことを「標的式の人物」とし、その例として黄帝と周公、そして包龍

図（包公）の三人を挙げる。「矢」はここでは、誰のものとも定まらぬ逸話のことを指している。包公については、以下のように記述されている。

包龍図——包拯——もまた標的式の人物である。古来、多くの出来の良い裁判物語があり、史書に掲載されたものもあれば、民間に流布したものもあるが、一般人は彼らの来歴を知らない。これらの物語は、ひとりふたりの人間の体の上すぐに容易く堆積する。これらの探偵式の清官のなかでも、民間の伝説は、どういうわけかは知らないが、宋代の包拯を選んで標的とし、非常に多くの裁判事件を彼の身の上に射込んでいる。包龍図はそのようにして中国のシャーロック・ホームズとなったのである。²⁸

また、胡適は包公を「中国のシャーロック・ホームズ」と称するにとどまらず、この序文において、繰り返し、包公と探偵を結びつけるような書き方をしている。たとえば、『宋史』にも記載されている、牛の舌を盗んだ犯人を包拯が明察によって割り出す話²⁹を引用した後は、「彼（包拯）は事件を解決する探偵の方法をおそらくたくさん持っている」³⁰と続け、『三侠五義』における「狸猫換太子」³¹を描いた芝居の一節を指して、「このときこの物語はまだ非常に簡単であり、郭槐を用いるには及ばず、包龍図の探偵術もまた用いるまでもなかった」³²と評価し、同じ主題を扱った『包公案』の一話を引き合いに出した際には、「包公はこの事件の審問官と探偵家になっている〔包公成了此案の承審官與偵探家〕」と解説する。これらの記述からは、包公が探偵であるというイメージを、胡適は自然なものとして受け容れているように感じられる。

このような胡適の書き方をうかがうに、「ホームズ」から「包公」は、比較的連想しやすかったものと考えられる。そもそも呉趼人と同時代の人物にも、やはり探偵小説について語る文脈において、包公を想起した人々がいたらしい。たとえば、周桂笙は前掲「上海偵探案」の「引」に次のように記している。

かつてある人が外国の探偵小説を読んで、こう言った。「この件は彼ら〔外国人〕に独歩させざるを得ない」と。のちにある人は納得せずに、こう言った。「中国にどうして探偵小説がなかったと言えるのか。あの包龍図の、迷宮入りしそうだった多種多様な裁判事件は探偵小説ではないのか」と。このような話をどうして

笑わずにいられようか。³³

先述のとおり、周桂笙は、探偵小説は外国において初めて成立しうる小説で、中国には存在しない、と明快に主張する論者であり、『包公案』は彼にしてみれば到底探偵小説と呼べるものではないだろう。それは措くとして、ここで注目したいのは、『包公案』は探偵小説ではないのか、と主張する者が実際にいたということである。

さらに例を挙げよう。定一は、『新小説』第十三号の「小説叢話」(1905)において、自身が探偵小説を好んで読むこと、そして西洋人が探偵を重視しているということを目指したのち、次のように続ける。

ロシアの探偵は世界でもっとも有名である³⁴。しかし、わたしは中国にこのような人物〔探偵〕や、このような書物〔探偵小説〕がきわめて少ないということが、たいへん残念でならない。やむを得ず、『包公案』を中国で唯一の探偵小説だとするよりほかはないのである。³⁵

「やむを得ず」という言い方からは、積極的に包公の物語を推したいわけではないように感じられる。その点については、安易に『包公案』を探偵小説とするような態度ともまた異なっている。それでも「唯一の探偵小説」とみなしうるものとして頭に浮かんだのは、やはり包公の物語『包公案』であった。呉趼人が包公を連想する可能性は十分にあったと考えられる。とすると、呉趼人の編集には、むしろ包公説話を避けようとする積極的な意図が働いていたと見るべきではないか。その傍証となるのは、「凡例」に見られる次の記述である。

わが国における迷信のならわしはすでに根深く、「鬼神の説」に拠って事件を解決するものがおそらくあり、〔話を〕集めるにあたっては、これに及ぶのを免れなかったかもしれない。しかし、あまりに出鱈目なものについては、まったく採用してはいない³⁶。

「鬼神の説」というのは、殺された人間の霊魂による訴えである。そしてこれこそ、包公が事件の真相を突き止めるときに、しばしば手掛かりとするものであった。たと

えば、よく知られる話のひとつに「烏盆子」がある。ある人物が殺害され、粉々にされて黒いおまるにされた後、そのおまるに入った靈魂が包公に訴える、という内容で、古くは元曲や説唱詞話に見える話である³⁷。

包公の物語は、すべてがこのように超自然的なものというわけではない。さきに挙げた、牛の舌を盗んだ犯人を明らかにするような話もある。しかし、包公は、明代から清代にかけて小説や語り物、芝居のなかに描かれるうちに、道具を用いて人を生き返らせる、鏡で妖怪を暴きだすなど、超人的な能力を付与され、その形象は一般的な官吏から徐々に乖離していった³⁸。鉄面無私の裁判官、というよりも、その超自然的なイメージがおそらく強いのではないだろうか。

そもそも清末期においては、迷信を排斥するような風潮があった。たとえば、阿英は『晚清小説史』の第十章「反迷信運動」において、科学提唱運動にともなって迷信反対運動が起こったことを述べ、それを実践した小説を例示している³⁹。そこでは取り上げられていないが、迷信批判ということならば、さきに挙げた吳趸人『九命奇冤』もまた、風水という「迷信」が原因で起きた殺人事件とその顛末を記している⁴⁰。このような迷信反対の態度は、『中国偵探案』にも引き継がれているものと考えられる。包公もまた迷信的なものとして斥けられたのではないだろうか。

このような傾向は、吳趸人の小説に限ったことではなく、さきに紹介した定一による文章においても、反映されているものと考えられる。定一の文章は、『包公案』を「中国で唯一の探偵小説だとするよりほかはない」としたあとで、北宋時代の儒学者、程顥（程明道）の話を取り上げて、次のように続ける。

包公以外に、わたしはかつて聞いた話をまだ覚えている。むかし程明道先生が某県の職務を代行しようとしたとき、某県にはすでに罪人が数名いたが、事の次第を明らかにする手がなかった。明道はそこで、宴を設けて多くの囚人に酒を飲ませた。飲み終わり、みなを帰らせたが、ただひとりの囚人だけを帰らせなかった。明道は言った。「おまえが真犯人に違いない。」囚人は言った。「なぜそれがお分かりで？」明道は言った。「人を殺した者はみな左手で刀を持っていた。いまお前も箸を左手で持っている。ここから、お前がいつも人を殺め、慣れて自然なものとなったのだとわかるというだけだ。」囚人はそれをようやく認め、事件はそこで落着いた。つまりこの一点から、探偵の思考力が奥深く量りがたいもので、どんな

小さな物事をも見逃さないものなのであるとわかるのである。程明道先生のような人を、中国のいわゆる探偵だと言ったところで、誰も異議を唱えはしまい。⁴¹

定一は、『包公案』について言及したときには「やむを得ず、『包公案』を中国で唯一の探偵小説だとするよりほかはない」とやや譲歩しているのに対して、程顥については、「中国のいわゆる探偵であると言ったところで、誰も意義を唱えはしまい」と積極的に評価している。このことから、程明道のエピソードをより肯定的に捉えているということがうかがえる。

どちらも正史にその名を残す包拯と程顥であるが、この両者のエピソードを分かつ要素とは何であろうか。それは、おそらく超自然的な領域へと足を踏み入れたか否かであろう。だろうか。特に、北宋の儒学者、程顥が同じく北宋時代の包拯と対置させられているというのは興味深い。包公は実在した裁判官でありながら、前章においても述べたように、その活躍の場を史書から物語世界へと徐々に移し、「日判陽、夜判陰（昼に現世を裁き、夜に冥界を裁く）」と称され、この世とあの世を自由に往来するようになるなど、その性質は少しずつ超自然的なものへと傾いていった。定一がここで試みたのは、そういった事跡が語られるようになった北宋の地点へと遡り、包拯と並べてもおかしくない人物による、より探偵として相応しいエピソードを、いま一度発掘し、探偵の話として位置づけ直すということではなかったか。程顥の話は、包公のように現実的な描写から乖離することなく、「事実の記録」としての性質を損なわなかったために、このような形で取り上げられたものと考えられる。

程顥の明察ぶりを伝える記録としては、宋代の事件記録『折獄龜鑑』⁴²に、「程顥校年」、「程顥弁錢」という逸話が見えるが、定一に引用されている程顥のこの話とは別のものである。しかし、おなじく『折獄龜鑑』には、欧陽曄という人物がまったくおなじように相手の左利きを見抜くという逸話「欧陽曄視食」が、収録されている〔巻六〕。また、相手に食事をさせて左利きであることを見抜く、という話は、おなじく『折獄龜鑑』巻三所収の「錢惟濟給食」にも見える。そしてこのふたつの話は、のちの〔南宋〕桂万榮『棠陰比事』にも収録されている。

定一の記述した程顥の逸話が、かりに宋代から流布していたものだとするならば、『折獄龜鑑』に「相手に食事をさせて左利きであることを見抜く」という話が収録されている以上、この話が程顥の話として収録されていても不思議ではない。そもそも、

このようにある人物の逸話が別の人物の逸話として記録されることは珍しくない⁴³。したがって、胡適の言を借りるならば、程顥もまた包拯のように「矢を射込まれた」という可能性も考えられよう。

注目すべきは、これとおなじモチーフの話が、『中国偵探案』にも「左手殺人」（第19則）という題で収録されていることである⁴⁴。いま全文を引いておこう。

鄂州〔湖北省〕の住民に、船に乗るのを争って殴り殺された者がいた。多くの者に影響が及び、拘禁された囚人は幾人もいたが、事件は久しく片付かぬままだった。郡守の某公は、みずからその監獄へと赴き、すべての囚人を連れてきて、その枷をとり外し、庭の中に列座させ、酒や食べ物を持ってこさせて振舞った。食べ終わると、みなを監獄へ帰らせたが、ひとりだけが残された。残されたものは恐れおののき、どうしてよいかわからなかった。某公はその者に諭して述べた。

「人を殺したのはお前だ。」囚人は認めなかった。「わたしはみなが食べるのを見ていたが、みなは右手で箸を持っていたのに、おまえだけが左手だった。わたしはもともと事前にこの事件の調書を調べていたが、死者の致命傷は右肋骨にあった。これがお前が殺人したということの動かぬ証拠だ。まだ言い逃れしようというのか！」囚人はそこで罪を認めた。⁴⁵

ふたつの話は、話の舞台と犯人の発見者は異なるものの、左利きの下手人を箸の持ち方から暴くという話柄において共通していることは、一目瞭然である。

定一と吳趸人がひとしくこの話を探偵の逸話とみなしている点は興味深い。包公を引き合いに出すかどうかの違いこそあれ、包公を探偵と認めることに消極的であるという方向性において、両者は共通している。つまり、超自然的なものを排斥しようとする力が、ここにも働いているのである。

おわりに

本章では、吳趸人の『中国偵探案』の「弁言」とその数編を手掛かりとして、吳趸人の探偵小説観について検討し、『中国偵探案』が刊行された当時から、公案小説を探偵小説としてみなし得るのか否か、という問題がすでに議論の対象となっていたこと

を確認した。また、吳趸人が、中国に歴史上実在した人物の事実性のある話を探偵小説として発見した結果として、包公の物語が意識的に斥けられた可能性を指摘した。

なお、『中国偵探案』においてなされている「事実の記録」の追求は、この後、思わぬ形で探偵小説創作を縛り付けることになる。それについては、次章以降で取り上げることとなるだろう。

注

- ¹ アメリカの中国文学研究者パトリック・ハナン氏によれば、『毒蛇圈』はボアゴベの“*Margot la balagfrée*” (1884) の英訳版“*In The Serpent's Coils*”をもとに周桂笙が訳出したものだという (韓南『韓南中国小説論集』「白話翻訳小説的第二个階段」、北京大学出版社、2008) [原著は“*The Second Stage of Vernacular Translation*” (Chinese Fiction of the Nineteenth and Early Twentieth Centuries, 2004)]。原著の漢訳の状況については、前章注 31 もあわせて参照されたい。
- ² 「電術奇談」の原作については、樽本照雄「吳趸人「電術奇談」の原作」(『清末小説論集』、法律文化社、1992 所収、初出は『中国文芸研究会会報』第 54 号、1985.7) を参照。
- ³ 夏曉虹「吳趸人与梁啓超關係鉤沈」(『安徽師範大學學報』[人文社科版] 第 30 卷第 6 期、2002 年 11 月) は、吳趸人が『新石頭記』や『中国偵探案』「弁言」において、「老少年」や「中国老少年」という筆名を用いている点について、梁啓超の著作『少年中国説』や、梁啓超の筆名「少年中国之中国」との関係を指摘し、吳趸人が梁啓超の思想に呼応していることを指摘している。
- ⁴ 吳趸人『中国偵探案』(広智書局、1906)「凡例」。原文「不尽為偵探所破、而要皆不離乎偵探之手段」。
- ⁵ 澤田瑞穂『宋明清小説叢考』「清末の小説」(研文出版、1982)、范伯群主編『中国近現代通俗文学史』上・下巻(江蘇教育出版社、1999)、「偵探推理篇」(湯哲声執筆)、姜維楓『近現代偵探小説作家程小青研究』(中国社会科学出版社、2007)、楊緒容「從公案到偵探：對近代小説過渡形態的考察」(『華中師範大學學報』第 47 卷第 2 期、2008.3) などが挙げられる。
- ⁶ 探偵小説を専門に扱ったものに、黄澤新、宋安娜『偵探小説学』(百花文芸出版社、1996)、任翔『文学的另一道風景——偵探小説試論——』(中国青年出版社、2001)、姜維楓『近現代偵探小説作家程小青研究』(中国社会科学出版社、2007) などがある。また、探偵小説に一節を割いて論ずるものには、郭延礼『中国近代翻譯文学概論』(湖北教育出版社、1998)、范伯群主編『中国近現代通俗文学史』(上・下巻、江蘇教育出版社、1999)、范伯群・孔慶東 主編『通俗文学十五講』(北京大学出版社、2003)、袁進『中国文学与近代变革』(広西師範大学出版社、2006) などがある。
- ⁷ 姜維楓『近現代偵探小説作家程小青研究』(中国社会科学出版社、2007)。原文「中国的偵探小説究竟诞生于何时? 20 世纪之前中国有无偵探小説? 这个问题已经争论了将近一个世纪。从近代西方偵探小説译入之始, 争论之声便随之鹊起。一方面是有从崇拜祖国文化的角度将《包公案》、《海公案》等作品也视为偵探小説, 甚至在 1906 年由上海广智书局出版了吳趸人编辑的《中国偵探案》。」
- ⁸ 孟犁野『中国公案小説芸術發展史』(警官教育出版社、1996)、苗懷明『中国古代公案小説史論』(南京大学出版社、2005)、范伯群主編『中国近現代通俗文学史 上巻』湯哲声「偵探推理篇」

(江蘇教育出版社、1999) など。

- 9 周桂笙 (1873-1936)、名は樹奎、字は桂笙。新庵、知新室主人など、多くの筆名を持つ。外国文学に親しみ、中国最初のアラビアン・ナイトの漢訳など、多くの翻訳を手がけた。アラビアン・ナイトの翻訳については、樽本照雄『漢訳アラビアン・ナイト論集』(清末小説研究会、2006) に詳しい。また、周桂笙は吳趸人とも親交があり、ともに『月月小説』を創刊している。
- 10 『中国偵探案』に収録された話については、事実取材しただけの、架空のものだと見る向きもあった。俞明震「觚荅漫筆」(『小説林』第5期、1907.7) には、次のように記されている。「探偵小説は、翻訳書が世に出た後に、中国の事実には託して『中国偵探案』を書いた者がいた。しかし、書籍は架空のものだが、これを著すのはまったく容易ではない(偵探小説、自譯籍風行後、於是有擬中國事實、為中國偵探案者。然書雖架空、著之殊非易事)。」
- 11 周桂笙『上海偵探案』引。『月月小説』第7号(1907.4)。原文「只可名之為判案斷案、不能名之為偵探案」。
- 12 『小説林』第九期(1908)。原文「我國俠義小説、如三俠五義傳等書、未遽出泰西偵探小説下、而書中所謂俠義者、其才智亦似非歐美偵探名家所能及。(中略)吾國民喜新厭故、輕己重人、輒崇拜歐美偵探家如神明、而置己國俠義事蹟為不屑道。何不思之甚也。或謂俠義小説之所謂俠義者、皆理想而非事實、抑知所謂福爾摩斯、聶格卡脫者、亦何嘗真有其人。況吾國之俠義事蹟、亦間有事實可據、而不盡出於文人狡獪也。」〈理想〉という語句の解釈については、前章注22を参照されたい。
- 13 [前掲]『中国偵探案』「弁言」。原文「吾怪夫今之崇拜外人者、外人之矢楛為馨香、我國之芝蘭為臭惡、外人之涕唾為精華、我國之血肉為糟粕; 外人之賤役為神聖、我國之前哲為迂腐; 任舉一外人、皆尊嚴不可侵犯; 我國之人、雖父師亦為贅疣。准是而并我國數千年之經史冊籍、一切國粹、皆推倒之、必以翻譯外人之文字為金科玉律。」なお、標点符号は北方文芸出版社版に拠った。以下、同書からの引用については同様。
- 14 同上。原文「吾每讀之而每致疑焉、以其不能動吾之感情也。」
- 15 [前掲]『中国偵探案』「弁言」。原文「吾讀譯本偵探小説、吾叩之譯偵探案者、知彼之所謂偵探案、非盡紀實也、理想實居多數焉。吾又間嘗尋味著書者之苦境、則紀實易而理想難、紀實淺而理想深。蓋紀實、敘事耳; 理想、則必有超軼于實事之上、出于人人意想之外者、乃足以動人。今所譯之偵探案、乃如是、乃如是、公等且崇拜之、此吾不得不急輯此《中國偵探案》也。」
- 16 同上。原文「吾國無偵探之學、無偵探之役、譯此者正以輸入文明。」
- 17 同上。原文「然則謂此書為《中國偵探案》也可、謂此書為《中國能吏傳》也亦無不可。」
- 18 原文「《金瓶梅》、《肉蒲團》、此著名之淫書也。然其實皆懲淫之作。此非獨著者之自負如此、即善讀者亦能知此意、固非余一人之私言也。顧世人每每指為淫書、官府且從而禁之、亦可見善讀者之難其人矣。推是意也、吾敢謂今之譯本偵探小説、皆誨盜之書。夫偵探小説、明明為懲盜之書也、顧何以謂之誨盜? 夫仁者見之謂之仁、智者見之謂之智。若《金瓶梅》、《肉蒲團》、淫者見之謂之淫; 偵探小説、則盜者見之謂之盜耳。嗚呼、是豈獨不善讀書而已耶、毋亦道德缺乏之過耶! 社會如是、捉筆為小説者、當如何其慎之又慎也。」標点符号は陳平原、夏曉虹編『二十世紀中国小説理論資料』第一卷(北京大学出版社、1997) 所収版に拠る。
- 19 金聖歎「讀第六才子書西廂記法 二」(『金聖歎全集』第2卷、鳳凰出版社、2008)、854頁。原文「《西廂記》断断不是淫書、断断是妙文。今後若有人說是妙文、有人說是淫書、聖歎都不與做理會。文者見之謂之文、淫者見之謂之淫。」
- 20 (黃)伯耀「小説之支配於世界上純以情理之真趣為觀感」(黃世仲、黃伯耀編著『中外小説林』丁未(1907)年第十五期、いま夏菲爾國際出版社版693頁に拠る)。

- 21 似たような小説評は、「淫詞惑世与艶情感人之界線」(『中外小説林』第一年第十七期、1908)にも見える。なお、この背景には清末における金聖歎の再評価の動向もあるものと考えられるが、ここでは掘り下げない。
- 22 吳趸人と小説の読者に関しては、佐藤賢「清末中国における「読者」の位置：吳趸人の対読者意識をめぐって」(『一橋論叢』134 卷第3号、2005.12)が射程の長い議論を展開している。
- 23 藍鼎元著『鹿洲公案』(近代中国史料叢刊続集 407、文海出版社、1977)。
- 24 そのまま収録されたと思しい話もある。例えば「左手殺人」(第19則)がそうである(後述)。
- 25 [前掲]『中国偵探案』、7頁。原文「鐘鼎之所為、乃與歐美之偵探相仿佛矣。」
- 26 同上、50頁。原文「吾不知科學倡明之國、其專門之偵探名家、設遇此等奇案、其偵探術之所施、亦及此方寸否也？一笑。」
- 27 『胡適文存三集』第三卷(上海亜東図書館、1930)。原文「本來只是一紮乾草、身上刺蝟也似的插着許多箭、不但不傷皮肉、反可以立功、得大名。」
- 28 [前掲]胡適『三俠五義』序。原文「包龍圖——包拯——也是一個箭垛式的人物。古來有許多精巧的折獄故事、或載在史書、或流傳民間、一般人不知道他們的來歷、這些故事遂容易堆在一兩個人的身上。在這些偵探式的清官之中、民間的傳說不知怎樣選出了宋朝的包拯來做一個箭垛、把許多折獄的奇案都射在他身上。包龍圖遂成了中國的歇洛克福爾摩斯了。」
- 29 『宋史』卷三百十六「列伝第七十五」、「包拯」にその記事が見える。
- 30 [前掲]『三俠五義』序。原文「他大概頗有斷獄的偵探手段。」
- 31 「狸猫換太子」の筋立ては以下のとおり。宋の時代、真宗は李妃と劉妃のふたりの妃に、世継ぎを生んだ者を皇后に取りたてると約束する。劉妃は官内長官の郭槐と共謀し、郭槐は産婆とぐるになって、李妃の子をとりあげる際、太子と猫の死体をすり替えさせる。劉妃は太子の殺害を侍女の寇珠に命じるが、寇珠は侍従長陳林の助けを得て太子を逃がす。やがて劉妃に男子が生まれるも、6年後に病死。落胆した真宗だったが、目の前に自分とよく似た男子が現れ、太子に立てる。彼こそは当時の赤子であり、のちの仁宗皇帝であった。それを快く思わない劉妃は李妃を誣告、李妃は殺されかけるも、李妃と相貌が瓜二つの余忠が身代わりとなり、李妃は落ち延びる。時が経ち、包公はとある場所で年老いた仁宋の実母、李妃に出会う。包公は仁宗の養母、狄妃を通じて仁宗に事の次第を伝え、親子は20年ぶりの再会を果たす。包公は郭槐をお白州へ引き出し、裁きを下す。
- 32 [前掲]『三俠五義』序。原文「這時期裏、這個故事還很簡單；用不着郭槐、也用不着包龍圖的偵探術。」
- 33 [前掲]『上海偵探案』引。原文「從前有人見了外國偵探小説、就說：“這件事祇得讓他們獨步得了”。後來有人不服、說：“中國何嘗沒有偵探小説？那包龍圖的七十二件無頭公案、不是偵探小説麼？”這種說話、豈不可笑。」
- 34 ロシアの探偵というと、探偵小説の漢訳については、『繡像小説』第21、22期に「俄国偵探案」が掲載されているのが挙げられるが、ここではロシアの虚無党を描いた小説に登場するスパイや探偵が念頭にあるのではないか。中村忠行氏は「晚清に於ける虚無党小説」(『天理大学学報』第85輯、1973)において、清末期における虚無党小説の流行について論じ、虚無党小説が清末における探偵小説流行の母胎となったことを指摘している。

あるいは、日露戦争期のロシアの軍事探偵やその手先の日本人を指す「露探」の可能性もあるが、「露探」が当時の中国のメディアの中でどのように扱われていたのかは不詳。関連がありそうなものに、翻訳小説「俄探」(1904)がある。岡崎由美「武侠の黎明——押川春浪と近代中国武侠小説」(蘆田孝昭教授退休記念論文集編集委員会『二三十年代中国と東西文芸』、東方書

店、1998 所収) は、その原作を押川春浪『露探の妻』とする。

- ³⁵ もとは『新小説』第 13 号 (1905) に掲載。句読点は、阿英『晚清小説叢鈔 小説戯曲研究巻』(中華書局、1960) 所収版に拠る。原文「俄國偵探最著名于世界。然吾甚惜中國罕有此種人，此種書。無已，則莫若以『包公案』為中國之唯一偵探小説也。」
- ³⁶ [前掲]『中国偵探案』「凡例」。原文「我國迷信之習既深，借鬼神之說以破案者，蓋有之矣，採輯或不免及此。然過於怪誕者，概不採録。」
- ³⁷ たとえば、元雜劇『玳瑁盆兒鬼』、明説唱詞話『説唱包龍圖公案断歪烏盆伝』などがそうである。阿部泰記『包公伝説の形成と展開』(汲古書院、2004) 参照。同書第三章「説話の創作と伝承——北宋から現代まで」において、地方劇の中の同演目が整理されている。
- ³⁸ [前掲] 阿部泰記『包公伝説の形成と展開』に詳しい。
- ³⁹ 阿英はこの一節において、「吳趸人『瞎騙奇聞』」という項目を設けているが、『瞎騙奇聞』の作者である「繭叟」は吳趸人ではないとする指摘もあるため(郭長海「吳趸人写過哪些長編小説」、『清末小説』第 17 号、1994)、本稿では吳趸人の作として取り上げることはしない。
- ⁴⁰ この点については、中島利郎「吳趸人の『九命奇冤』について」(『晚清小説研叢』、汲古書院、1997 所収) に詳しい。氏はこの論文において、「吳趸人が迷信についてこのような考えを抱くに至った理由はよくわからない(中略) おそらく夙に少年時代より混迷する清末社会を自力で生き抜いてきた経験に由来するのではないかと考えられる」(131 頁) と指摘するが、このような迷信排除の姿勢は、『中国偵探案』にも通底したものだと考えられる。
- ⁴¹ [前掲] 定一「小説叢話」。原文「除包公外，吾尚憶曾聞言，昔程明道先生將攝某縣篆，時某縣已有罪犯數人，是非莫辨。明道遂設宴飲眾囚，飲畢，眾皆去，唯一囚不去。明道曰：“汝必真犯也。”囚曰：“何故知之？”明道曰：“殺人者皆以左手持刀，今汝執筆亦以左手，可見汝常殺人，習慣而成自然耳。”囚始認之，案遂破。即此一端，可見作偵探心思之深微莫測，無孔不入矣。若程明道先生者，即謂為中國之一偵探也，誰曰不宜？」
- ⁴² 『折獄龜鑑』のテキストについては、王雲五主編『四庫全書珍本』別輯 167、168 (台湾商務印書館、1977?) に拠った。
- ⁴³ 例えば『折獄龜鑑』巻七「鉤愚」所収の「包拯附錢齋」では、本文で挙げた『宋史』に見える包公の話を採用しており、おなじ話を錢齋が解決したものとするバージョンがあることを付記している。包公説話がその他の話を吸収して形成されてきた過程については、大塚秀高「包公説話と周新説話——公案小説生成史の一側面——」(『東方学』第 66 号、1983)、大塚秀高『中国小説史への視点』(放送大学教育振興会、1987) 第九章「包龍図の登場」に詳しい。また、金海南『水戸黄門「漫遊」考』(新人物往来社、1999) 第一章「中国の名裁判官——物語と現実」にも、この問題に関する論述がある。
- ⁴⁴ 吳趸人の収録したこの話については、「阮刻『洗冤録』」からの転載であることが付記されている。『洗冤録』の版本については、清代に阮其新が補註したものがあり、「阮刻『洗冤録』」とはおそらくその版本を指しているものと考えられるが、未見。
- ⁴⁵ 前掲『中国偵探案』26 頁。原文「鄂州民有爭舟而相毆致死者，牽涉多人，而繫囚纍纍，獄久不決。郡守某公，親臨其獄，提諸囚至，去其桎梏，使列坐庭中，呼酒食勞之。食已，命俱還獄，而獨留一人。被留者惶恐，不知所爲，公顧諭之曰：“殺人者汝也。”囚不服。曰：“吾觀諸人之食，皆以右手執筋〔箸〕，而汝獨以左。吾固先查檢驗案卷，死者致命傷在右肋，此汝殺人之明徵也。尚欲抵賴耶！”囚乃服。」

第3章 「探偵」のいない「探偵小説」

——周桂笙「上海偵探案」

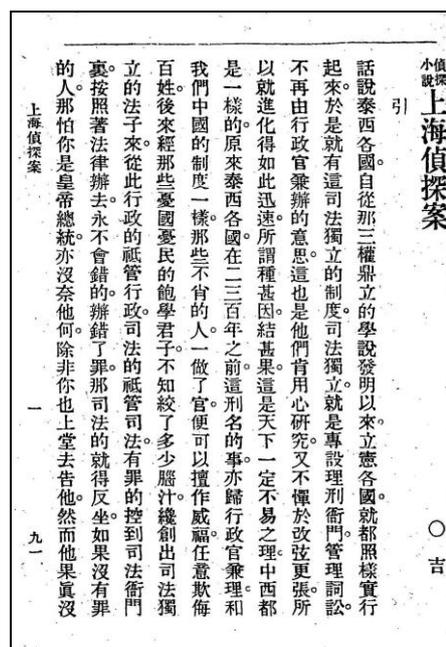
はじめに

周桂笙「上海偵探案」（筆名「吉」）¹は、清末の小説雑誌『月月小説』第7号（1907.4）に掲載された、白話で書かれた短編探偵小説である（右図）。全28頁のうち、およそ12頁が「引（前言）」に割かれており、その比重は大きい。その後、「金戒指案」と題する小説が始まるという体裁である。小説には、租界における事件とその裁判が描かれ、小説の最後は「これが中国探偵事件の出発点である」²と締められている。

このように、探偵小説だと銘打って小説を世に送り出した例としては、前章で取り上げた吳趸人『中国偵探案』が挙げられる。同書において、吳は「中国能吏伝」ともいえるような話を収集し、場合によっては加筆して、それらを探偵小説として位置づけた。その編集には、迷信的な要素を排除する傾向が見られるものの、公案小説に類する話を中心となった。

この点について、周桂笙が「上海偵探案」の「引」において、『中国偵探案』の事実の記録としての価値を認めつつも、「探偵事件（偵探案）」と呼べるものではない、と評していることは、前章ですでに述べた。これは要するに、公案小説の類いは探偵小説とはみなし得ない、とする主張であり、周は探偵小説を吳趸人とは異なる形で構想したということになる。

このように、両者によって探偵小説は何かという議論が起こった。しかしながら、その詳細が後世の研究において取り上げられることは、あまりなかったと言えるだろう³。本章では、周桂笙の探偵小説観に注目しつつ、周がどのような考えのもとに探偵小説を創作したのかを論じる。その際、同時代の探偵小説にまつわる言説や、周の小説創作の背景にあった、上海の租界の事情なども合わせて取り上げる。



1. 周桂笙と探偵小説

周桂笙（1873-1936）、字は樹奎、号に新、新新子、知新室主人などがある。上海の出身で、上海中法学堂で英語とフランス語を学んだ。清末の翻訳家の中でも最初期に西洋探偵小説の翻訳を手がけた翻訳家のひとりである⁴。

それらの翻訳のなかでも中国小説への影響の大きさが指摘されているのは、『毒蛇圈』である。『毒蛇圈』は、フランスの小説家ボアゴベ〔漢名は鮑福〕（1824-1891）の作品の翻訳で、『新小説』第1巻第8期（1903年10月）より連載を開始した⁵。その本文には、吳趸人による眉批が付されている。周桂笙は『毒蛇圈』を白話で翻訳しているが、これは中国で白話を用いて翻訳された小説の中でももっとも早い事例である。このほかにも、コナン・ドイルのホームズ物語の一篇“The Adventure of the Six Napoleons（邦題「六つのナポレオン」）”の翻訳、「歇洛克復生偵探案」（1904）があるほか⁶、『福爾摩斯再生案』（1904～1906）の一部も手がけている⁷。

周桂笙は、このように、西洋探偵小説の翻訳をいくつも手がけているのだが、興味深いのは、ホームズを実在する人物だと考えていたことである。たとえば、「歇洛克復生偵探案」「弁言」には、次のような記述が見える。

イギリスのホームズ・シャーロック呵爾唔斯歇洛克は、近代の探偵の名士である。解決した事件は、往々にして人をびっくり仰天させ、目を眩ませ心をどきどきさせる。その友人のワトソン滑震が、たまたまひとつふたつ事件を記録したところ、朝方に脱稿したばかりなのに、夕方には欧米に遍く行きわたり、大いに洛陽の紙価を高からしめるといった状況となった。そのため、その国の小説の大家、ドイル・コナン陶高能氏は、さらにその説を踏まえて、次々に探偵小説を著し、滑震の筆記であると仮託し、ひろく世の中に知られるようになった。おそらくそうでなければ、実際にその場面を間近に経験するかのようすばらしさは得られなかつたらう。⁸

つまり、ホームズを実在する探偵であるとしたうえで、そのエピソードをワトソンが記録し、それをコナン・ドイルが小説化したと周桂笙はみなしているのである。そのことを裏付ける記述は、このほかにも散見される⁹。

もっとも、翻訳探偵小説中の探偵が実在するという見方は、何も周桂笙に限ったものではなかった。前章でも述べたが、たとえば吳趸人は当時の探偵小説の読者が「わ

が国には探偵の学問はなく、探偵の職業はなく、これを翻訳するのは、つまり文明を輸入するためなのである」と述べていたことを指摘している¹⁰。

探偵小説が流入して間もない頃、探偵小説は実在する探偵や事件をもとに創作された小説であるという認識は、珍しいものではなかったらしい¹¹。吳趼人も周桂笙も、こうした認識から出発し、それぞれ中国版の探偵小説を打ち出したのである。吳趼人『中国偵探案』は、過去に実在した官吏の話を編集するものであった。それに対し、周桂笙「上海偵探案」は、近年の上海租界警察「包探」の扱った事件を、実在のものとして「記録」した。

それでは、まずは「上海偵探案」「引」を中心に、周桂笙の探偵小説観について見てゆくこととしよう。

2. 西洋への憧憬と中国への批判

周桂笙が小説中の探偵を実在するものと考えていたことはすでに述べた。これは周桂笙が「上海偵探案」で展開する議論の前提となっている。周桂笙は、「引」および「金戒指案」の冒頭の部分を割いて、「探偵」についての自説を開陳する。これは、当時のほかの小説の前言などと比べてみても、かなりの紙幅を割いているといえるだろう。おそらくこのような熱意の根底には、探偵小説も探偵も「自国にはなかったもの」だったことがある。

小説ジャンルのなかでも、中国になかった新しいものとして扱われたジャンルのひとつが探偵小説であった。たとえば、俠人「小説叢話」には、「探偵のジャンルだけは、西洋の小説家の特技である」¹²という記述が見える。また、定一は「小説叢話」(1905)において、中国の小説が発達していないことを嘆いたうえで、「手当てをする方法は、政治小説、探偵小説、科学小説を取り入れることから始めなくてはならない。思うに、中国の小説の中には、この三者の性質は皆無であり、この三者は、とりわけ小説全体の要である」と述べている¹³。

このように、清末翻訳探偵小説に付された序文では、探偵や探偵小説については、中国には見当たらないもの、導入して手本とするべき理想的なものとして語られることが少なくない。そして、ときにそれは自国の現状への批判を伴った。例えば、林紘は『神枢鬼蔵録』¹⁴「序」(1907)において、次のように述べている。

ましてやいわゆる包探は、物の道理を明らかにし、人の心情を読み解き、情報をすばやく入手し、行動は補えられないほど迅速である。たとえ隠し事であろうとも、すでに包探の網からは逃れられなくなっている。裁判官もまた審議すること詳らかであり、そのため冤罪に陥る人間は非常に少ない。中国には弁護士がおらず訴訟代理人がいるだけであり、包探がおらず下級役人がいるだけである。訴訟代理人は蠅のごときであり、下級役人は狼のごときである。蠅の過ぎるところ、良質の肉でも腐り、狼の通るところ、家畜はみな免れない。¹⁵

林紓は中国の刑罰が西洋に及ばない理由として、被告を弁護する弁護士がいないこと、実情を調査する「包探」がいないことを挙げている。

そもそも「包探」とは欧米の警察制度における警察官を指した語であり、清末の上海においては、とくに租界の警察組織に属する調査員を指した¹⁶。上海の風俗に広く言及している葛元煦「滬遊雜記」(1876)には、「包打聽は巡捕(警察官)の耳目であり、工部局が雇用する者である。もっぱら諸事を調査し、たとえば窃盗や盗難などの事件もまた、捜査を担当する」¹⁷という記述が見える。上海研究者の薛理勇氏によれば、「探索(〈探〉)を請け負う(〈包〉)」という意味であり¹⁸、俗に「包打聽(〈打聽〉は「聞き込み」)」とも呼ばれた¹⁹。

引用中の「包探」は、租界警察のことではなく、探偵を意味しており、ここで林紓はとくに刑法や裁判制度の違いを批判的に浮き彫りにしようとしている。周桂笙もまた、類似の主張を「歇洛克復生偵探案」「弁言」(1904)において開陳している。

わが国から西洋を見るに、風俗が異なるうえに、嗜好もまた違う。ゆえに小説家の傾向も、まるで異なっている。とりわけ探偵小説は、わが国にはきわめて乏しく、西洋に独歩させざるを得ない。思うにわが国の刑法や裁判は、西洋各国とはおおいに異なっており、探偵の話は、たしかに夢にも見たことがない。海外と取引を行うようになって以来、外国人は租界に治外法権を広げ、警察を設立した。また包探という名目がありながら、学問には専門がなく、ただ心の曲がった人間の組織となっている。合同審議する事件もまた、私情にとらわれ、さらには時間に限りがあるのに捜査のうえで何も考えがない。²⁰

周桂笙はここで租界警察「包探」を批判的に紹介している。刑法や裁判が西洋と異なるという指摘は、林紓とも共通している。「合同審議」というのは「会審制度」のことで、この制度に基づいて審議を行う機関は「会審公堂」と呼ばれた。会審公堂は、清朝の上海道署の代表と外国の駐上海領事によって組織されたもので、租界内における中国人あるいは中国人と西洋人の間に起こった民事訴訟を審議し裁判する機関であった²¹。この会審公堂での審議もまた、公正ではないとして批判されている。「上海偵探案」にも会審公堂での裁判の様子が描かれるが、それについては後述する。

周桂笙は中国と西洋の制度の違いを浮き彫りにすることから始め、中国側の制度を「改良」し、探偵を育成すべきだという議論を展開する。

3. 新式教育制度と探偵養成論

さきの例は、上海の包探や裁判に対する批判が中心であったが、「上海偵探案」の「引」では、周桂笙は、西洋の探偵と司法独立の制度の関係について、次のように整理している。西洋の法律では、人権を尊重しており、判決を出す前に犯人に刑罰を加えることが出来ない。判決よりさきに刑罰を与えた相手がもし無罪だったら、告訴されてしまう。そのため、彼らの裁判はたいへん難しい。被告が法廷で嘘を言わないと宣誓しても、その証言を確かめる根拠がなければ被告を説き伏せることはできない。そこで、裁判官は事件の内容を探求する際に、探偵を利用するのである、と。

周桂笙は、探偵が司法独立の制度によって生じたものであると指摘する。そして、この司法独立制度の良い点として、法律学堂を卒業した者でなければ刑罰を命じる役人になることはできないことを挙げている。この記述は、学堂を普及させて中国でも探偵を養成すべきだ、と議論を展開するうえでの布石となっている。それは、中国の包探の実態が次のようなものであるためだという。

しかし、巡捕房の包探は、大部分が巡捕から抜擢されたものである。これまで探偵の学堂といったものはなく、探偵の学生というのもまた受け入れてはこなかった。そのため、外国の探偵を除くと、あの中国の包探というのは、ただ下流社会のなかの人間であるに過ぎず、でたらめをやっているのである。²²

周桂笙は、探偵の養成機関としての学堂がこれまでになく、中国の包探が下流社会の人間であると指摘している。これは、周桂笙の思い描く西洋の探偵像とはまったく異なっている。その探偵像とは、以下のようなものである。

探偵もまた〔司法官と同様に〕専門の職業である。もともとは誰もが学ぶことの出来るものである。たとえば医学と同じであり、師に従って修めさえすれば、看板を掲げて開業し行うことができるものである。しかし、有名な探偵家になろうとするのは、名医になることより数百倍も難しい。もっとも求めがたいことは、人格が優れていること、才知や学問のあることであり、家柄、度胸と見識、度量のどれかひとつでも欠けてはならない。しかし、これらのすべてが備わっているものは、往々にして探偵を学ばない。探偵を学ぼうとする者は、必ずしもこれらのすべてが備わってはいない。ただし、一般的には、大部分が結局は大学堂の卒業生であり、自然科学にも、必ずいくつかの専門をもつ。労苦を厭わないことは、もとより言うまでもない。ほかにも、功を欲しがらず、利を求めないことが求められ、すすんで公益に意を注ぎ、社会に身を投じる者こそが、探偵になることができるのである。²³

この直後には、探偵のような人材が中国の政界にはいないということが感想として書き添えられており、探偵は、中国に求められる理想的な人材として目されていたことが窺える。また、翻訳探偵小説「毒薬案」(1903)²⁴の冒頭にも、小説の本文とは別に、西洋の探偵の能力について語っている部分がある。

わたしの古き友人蕭君は、あの晩わたしの家に来て世間話をした。西洋の探偵について話し始めると、確かに神出鬼没、臨機応変で、ひとを慄然とさせる。そもそも外国の探偵は、数カ国の言語を理解することができ、人情と世故に精通している。鋭い見識を形成しており、さらに各種の技能に通暁している。²⁵

「数ヶ国の言語を理解することができる」、「各種の技能に通暁している」といった書き方からは、周桂笙と同様に、探偵の能力を高く評価していることがうかがえる。そして、このような見解は、定一「小説叢話」(1905)にも見られる。定一は、探偵

小説が人の想像を超えるものであると述べたうえで、「探偵」の条件について次のように述べている。

さらに、探偵の資格もまた、非常に形成するのが難しい。探偵をする学問があり、探偵をする素質があり、探偵をする能力があり、三者が揃ってはじめて完全なものとなるのであり、ひとつでも欠けてはならない。それゆえ、西洋人でこれを重視しない者はいない。²⁶

このように、清末期においては、探偵は学問的な素養と確かな素質を備えた人物であると考えられていた。話を周桂笙に戻すと、ここで注目したいのは、周桂笙が、探偵を職業だと捉えており、探偵になるのは大学堂を卒業し、学識を備えた人物だと述べている点である。ここには、清末における近代教育制度導入の動向が看取される。

中国では、アヘン戦争以後の西欧列強の大陸侵略などの影響から、西欧近代の科学技術を導入し国力の増強を図るという「洋務運動」が、1860年代より推進された。近代科学を導入するために、江南製造局、福州造船局などが設立され、国を担う人材を養成するために、新式学堂も設立されはじめた。しかし、当時は依然として科举制度を頂点とする旧来の教育体制が支配的だった。

しかし、日清戦争以後、それまでの洋務化政策の成果は芳しくないものとされ、中国では、国家制度の抜本的改革を目的とする「変法自強運動」が康有為（1858-1927）により推進される。この運動は、「変法」と並行して「興学」の必要性を強調する、熱烈な教育改革運動でもあった。外国の書物の翻訳、西洋の学問（西学）の研究の必要性や、日本への留学生の派遣などもさかんに強調された²⁷。

1898年には、嚴復（1853-1921）がトマス・ハクスリー（1825-1895）の『進化と倫理』を翻訳し（『天演論』）、進化論が紹介される。この書物が当時の文人に与えた影響は大きかった。「変法自強」の考えとも結びつき、西洋近代の制度を学ばなければ優勝劣敗の原則により淘汰される、という図式を生み出した。

このような流れのなか、「欽定学堂章程」（1902）の発布により近代教育制度導入の動きが始まり、「奏定学堂章程」（1904）の発布以降、それはいよいよ本格的なものとなる。ついには、学堂教育の普及と発展のため、科举制度が廃止（1905）されるに至り、中国の教育制度は大きな転機を迎えることとなった。

「上海偵探案」が執筆された 1907 年という時期が、上述のとおり、教育制度改革が大きな転機を迎えて間もない頃であったことには留意すべきだろう。周桂笙の探偵小説論は、同時期の教育論の影響を強く受けている。

しかし、中国は現在各省で警察を設立しようとしており、さらに探偵学堂を設立するという情報もある。これらのことからすると、上海の探偵は、まだ幼稚な時代にあるが、各省内地の探偵は、ようやく芽が出てきただけである。将来中国の探偵が全国に行き渡ったとき、この中国の探偵小説というものはどのような段階へと発展を遂げていることだろうか。しかし、天下の物事は、大きいなり小さいなりにせよ、結局は近くから遠くへ、小さいものから大きいものへ、粗製のものから洗練されたものへ、一步ずつ徐々に拡充される。一朝一夕に成るものではない。わたしは考えを決め、浅薄なのをはばからず、上海のいまの探偵家の挙措動作を、いくつかざっと書き記し、皆さんにお見せしよう。こうした状況は、どれも実在のものである。わたしが虚構として作ったわけではけっしてない。²⁸

「探偵学堂を設立する」、「中国の探偵が全国に設置され」る、といった書き方には、清末中国における教育制度改革の胎動が読み取れるだろう。以上の点を、周桂笙の探偵小説に関わる記述と絡めて考えるとき、周もまた小説によって社会を改良しようという小説界革命の主張の影響下にあることを踏まえるならば、周は探偵小説が社会に影響を与える仕方を、次のような順序で捉えているものと考えられる。

探偵小説の流行〔小説の改良〕→探偵学堂の設立→探偵の増加〔社会の改良〕

さらに、この一段からうかがえるのは、小説による社会改革の成果が、ふたたび探偵小説の発展へとフィードバックされてゆくという考え方である。これは、現実世界の変化により、それを映し出す小説も変化する、とする捉え方であり、ここにもまた、探偵小説は現実を記したものだとする前提が窺われる。この点については、後節で別の角度から検討を加える。

本節の最後に、もうひとつ、探偵を養成すべきだと提案している事例を紹介しよう。先に挙げた林紘『神枢鬼藏録』「序」には、次のような記述が見られる。

近ごろ上海の君子たちが訳した包探の事件を読んで、大いに喜び、その考え方に思いやりのあることに賛嘆した。もっとこの書物が流行して、朝廷の刑を司る者が、方針を変えて弁護士や包探を用いることを理解し、さらにひろく学堂を設立して弁護士や包探といった人材を育てたならば、誰もがその名誉を求めようとし、名誉を享受するだけでなく、金銭をたくさん稼ぐようになるだろう。そうなればだれが不肖の者に甘んじてなるだろうか！ 下々の民はみな訴訟代理人や下級役人という災難を免れ、公明正大な日の光をふたたび見るのである。そうだとしたら、どうして小説の功績がすぐれていないことがあるのか！²⁹

ここでも「包探」はやはり西洋の探偵のことである。林紓による構想では、弁護士や包探になる人びとの動機は、金銭や名誉といったいさか現金なものではあるが、小説が社会にどのような良い変化をもたらすか、という説明については、周桂笙よりも具体的なものとなっている。

このように、翻訳にせよ創作にせよ、清末期の探偵小説に付された前言においては、近代教育制度の導入を背景として、しばしば探偵養成論が展開されたのである。

5. 「探偵」のいない「探偵小説」

ここまでは、おもに翻訳探偵小説に付された序文など、探偵小説にまつわる言説、いわば小説の外側から焦点を当ててきた。本節では、「上海偵探案」の外部と内部との関係性について論じる。

周桂笙が「引」において提示した、外国と中国の探偵の違いについての議論はすでに紹介した。周桂笙は、「引」ではならず、物語の本編に入った後も、上海の包探についての記述を繰り返す。その記述は、数年前までの包探の一般的なイメージを素描することから始められる。そこには、包探が公務以外の時間を茶館で過ごし、その茶館の一室に鼠賊の類いを連れ込んで私刑に処すことが書かれている。私刑で用いる刑具として、親指にドリルを少しずつねじ込んでいく刑具が紹介されており、そうした刑具を用いる弊害が次のように記されている。

俗語でいう「十指連心（十の指は心と連なる）」³⁰というのは、この指が痛くなってくると、心まで痛みが伝わってくるということなのだわかる。しかし、本当に賊だったならば、身から出た錆、まあ良いだろう。ただし、ときどき行動の疑わしい人間を連れてきて、型どおりに制裁を加えることもあるため、拷問に耐え切れずに出まかせの白状をするという弊害は免れない。³¹

周桂笙は、続けて、こうした風潮は嚴禁とされ、ここ六七年の間に絶えたと述べるが、悪弊が途絶える数年前に、包探が私刑をしていたらしいことは、たしかに当時の報道からもうかがえる³²。

その背景には、さきほど例示した一段でも述べられていたが、中国の包探が「下流社会のなかの人間」であることが示されている。「引」によれば、「巡捕房の包探は、みな巡捕から抜擢される」ものであり、その包探にもさらに手下がいる。ひとりの包探には十数名の手下がおり、包探は手下から「老正」と呼ばれる。その下に四五人の「副手」がおり、「正身夥計」と呼ばれる。その下に「小夥計」がおり、さらに「夥計」の「夥計」がいるという。「夥計」とはそもそも仲間を指す言葉だが、ここでは手下を指すと言えらるだろう。この「包打聴の手下（包打聴的夥計）」についても、「上海のひどいごろつき（上海的大流氓）」であると、批判的に書かれている。

それでは、包探についてのこのような悪いイメージは、「金戒指案」においてはどのように反映されているのだろうか。

小説は、ある日ひとりの包探が、何もすることがないのでぶらぶらしていたところ、小さい質屋にたどりつく、というところから始まる。こうした質屋は、盗人が盗んだ物を売るところがなく、換金のため訪れる場所であった。そこへ、ぼろぼろの衣服を纏った 15、16 歳くらいのこどもがひとり現れ、店のガラス棚から高価な西洋式時計を値切って購入した。貧しいこどもに、急ぎでもない物を買うような金がどこにあるのか、と怪しんだ包探は、こどもがお金をぼろのポケットから出すのを見ると、「この洋銭はどこから来たものなのか」と話しかけた。それと同時に、その金が質屋で品物と換金したものであることを、包探は看破する。しかし、この包探は「万一間違ってもいけない」と思い、こどもを試したのであった。しかし、ポケットの中から質札だけでなく金の指輪まで出てくると、事態が一変する。

このときその包探が振り返ると、もうさきほどのように微笑んだ様子ではなくなった。質札を取り上げ、銀円を受け取ると、顔色を厳しくしてそのこどもに尋ねた。「正直に言え、この金の指輪はどこから持って来た？」そのこどもは少しの間口ごもり、ようやく口を開いた。「ぼくが拾ったものだよ」。その包探はそれを聞くと、怒りを堪えきれず、手を伸ばすやひっぱたき、訊ねた。「どこから拾ってきた？」答えて言った。「通りで拾ったんだ。」包探は「そうか、いままた行っていくつか拾って来るんだな！」と言うと、ついでにまたひっぱたいた。打たれると、子どもはしばし意識が混乱し、わあーと泣き出した。³³

包探は、子どもが質札を持っていたことから、他人の指輪を盗んで換金しようとしたのだと考える。その思考は短絡的であり、事実を確かめる慎重さは感じられない。

その後、包探が何度訊ねても、子どもは拾ったとしか言わない。やむを得ず、子どもの父親とともに茶館へ行き、こまかくあれこれと聞き出し、その後に巡捕房へと連行することになった。裁判の日になり、役所へと護送すると、中国と西洋の双方の裁判官が処理することになる。裁判官は堂木をたたくと次のように言う。

ふん、不敵な小童だ。なぜ他のことをせずに、泥棒をしようとしたのだ。おまえはいまのわずかな年齢で、このように身勝手をしているのだ、年を重ねればきっとさらにひどいことになろう。この金の指輪を結局おまえはどこから盗んできたのだ？ ありのままに、ひとつひとつ答えよ。すこしでも嘘を言えば、わしはお前を許しはせんぞ。³⁴

裁判官もまた、さきほどの包探がそうしたように、こどもが指輪を盗んだという前提のもとに審議を始める。結局こどもの主張はいっさい認められず、ついには拘禁2年という罪状が言い渡される。裁判が終わった後、裁判官に尋ねた者がいた。先ほどの「金の指輪事件」は、原告もいないし、紛失届も出ていない。やはり盗まれたものではなく、拾ったものなのではないか、と。すると、計ったように指輪の持主を名乗る人物が現れる。指輪の持主が名乗り出ると、裁判官は彼に、なぜ指輪がこどもの手に渡ったのかを尋ねる。持主は、指輪をなくした当日、人から訴えられ、包探と巡捕に従って巡捕房へと向かったことから始め、その理由を続けて述べる。

裁判はもともと毎日行われます。しかし、あの領事大人の手中にある訴訟は、あの領事どの手中で審議されるまで待たねばなりません。この一週間で間に合わなければ、さらに次の週も待たねばなりません。しかもこの牢屋にいる犯人は多く、年数が長い経験のある者が数名おり、老犯人〔ベテランの犯人〕と呼ばれ、その凶悪さたるや尋常のものではありません。およそ新犯人〔新しい犯人〕が入って行くと、老犯人はひとに金品を要求します。多くてもだめだし、少なくともだめです。わたくしは平素より聞いておりすでに耳にタコができております。このとき少し考えました。手にしているあの指輪は、今後は保証されないに違いないと。そのため、道の途中で取り外し、なじみの者に託そうと思いました。ただ、わたくしが捕まってから、家の者が後をつけて来たのですが、通例ではこっそりと話をする事は禁じられています。そのため、近づくことが出来ずじまいでした。あとでわたくしは隙に乗じて、手の中の指輪をその後をつけて来た者にむかって軽く放りました。わたくしは、その者がわたしについて来ているのだから、きっと気に留めてわたしに気を回してくれるだろうと思ったのです。先ほど彼に会ってこの件について尋ねたときに、彼が意外にも何のことかさっぱりだとは思いませんでした。わたしは無駄に捨てたのだとようやくわかったのです。後になって、審議を待っていたところ、折よく金の指輪の案件があったのです。わたしは思いました。おそらくわたくしが無くしたのであり、あのこどもに何の気なしに拾われたということなのだろう、と。³⁵

ここには、審議する案件が多いために自分の関わる事件がなかなか審議されないという不満と、審議の間に待たされる巡捕房の牢屋には凶悪な犯人がおり、指輪を取られるかもしれないという不安の、ふたつの要素が語られている。事件の詳細を明らかにすることに時間をかけない包探と裁判官への批判的な態度は、この小説のなかでもとりわけ比重の大きな部分であるといえるだろう。指輪事件の審議をきちんとせずに終えた後の場面では、次から次へと事件を審議する役所が、中身をしっかりと吟味しないということが、批判的に述べられている。

さて、新しい役所での一日の事件は、いつも数十件にのぼる。ひとつ審議してはまた審議する。役人をやるものは、超人的な能力を持っているわけではあるまい

し、吟味や検討がどうして間に合うだろうか。事理をわきまえず、相手を訊問するよりほかない。今日もこのよう、明日もこのようであり、どのみち犯人を虐待するだけである。したがって、この司法独立の制度は決して怠慢なものであってはならないということになる。³⁶

ここで述べられているのは、たとえ裁判制度が整ったとしても、尋問や審議は、その内容が時間をかけて十分に吟味されなければ、結局は無意味なのだ、ということである。先の例は登場人物の台詞、こちらの例は地の文という違いはあるが、裁判制度に対して不満を述べるという趣旨において、両者には共通性が認められるだろう。

話を小説の筋立てに戻すと、作品中で唯一の謎とも言うべき「金の指輪」の来歴は、持主の登場であっけなく明らかとなる。裁判官は、危うくこどもを罪に陥れるところだった、と感想を漏らし、領事に詫言を入れ、こどもの罪状を取り消してもらおう。

実は、この話はここで唐突に終わる。公案小説や探偵小説が基本的に備えている、事件とその解決といった話の流れが、この小説には見えない。当事者である指輪の持主が事態に気づき、自白することによって真相は明らかとなる。そして、探偵役と目されていた包探も、指輪の持ち主が出てきて以降は、いつの間にか姿を消しており、最後まで姿を表すことはない。内容的には、裁判が主題であること、指輪の持ち主が登場したことで、こどもの冤罪が雪がれた恰好になったことなど、むしろ公案小説に見られるような、古典的な話のようである。

以上のように、この小説は、おもに裁判に関する議論に焦点が当てられており、探偵による謎解き、といった探偵小説らしい話は、まったく描かれていない。そうであるにも関わらず、周桂笙は小説の最後で、やや自信あり気に次のように述べている。

はっはっ、これこそが中国探偵事件の出発点であり、上海探偵事件の現状であります。読者諸氏で外国の探偵事件をお読みになったことがある方は、どうぞ比べてみていただきたい。³⁷

探偵小説を標榜していることと、いわゆる「探偵」の「探偵」らしい逸話を書かなかったこと、このふたつの要素はいかなる形で共存し得たのだろうか。

6. 「ワトソン」のごとく——現実を小説に

ここまで、周桂笙が、「金戒指案」を「事実」を記録したものという体裁で記述したと標榜していること、小説の本編では謎らしきものは指輪に関する一件のみであり、しかもそれは指輪の持主の自白によって明らかとなること、そして、探偵と目される包探が謎の解決に関わることもないということを述べた。このような小説になった背景には、周桂笙が「事実を記す」ことを強く意識していたことがあるだろう。

樽本氏によれば「ホームズとワトソンが実在人物だと考えられていたのはせいぜいが1906年あたりまで」³⁸とのことである。周桂笙もまたそのように考えていたひとりであったが、「上海偵探案」(1907)の「引」を読むと、周桂笙は少なくとも当該の小説を執筆した時点でも、変わらず両者が実在するものと考えていることがうかがえる。

惜しいことに、上海の探偵は、これまでみな下流社会の人間が担当してきたため、文章に多少なりとも通じており、みずから手記を書くことができるという人物はいない。事理に通じた人がその人物と友人となり、彼のために代わって記述するといった、^{ワトソン}滑震(または^{ワトソン}華生に作る:原注)氏が^{ホームズ}福爾摩斯にしたようなこともなければ、^{コナン・ドイル}高能陶耳のように、彼らの名を借りて探偵小説を書くような人物もまたいない。そのため、これまで記述は現れなかったのである。³⁹

繰り返しになるが、周桂笙は、実在するホームズの逸話がまずあり、それをワトソンが記録し、さらにコナン・ドイルがそれを小説化したのだと捉えている。そして、「上海偵探案」においても、その捉え方を崩してはいない。

そして、前述のとおり、「上海偵探案」は、「引」の比重がかなり大きい。さらに、「引」だけに止まらず、周桂笙は小説の題を提示し、「引」との区別を図った後も、物語ではない、小説の外側の話を続けてゆく。それはおよそ4頁にわたり続けられ、そこでようやく「話を本筋に戻そう(言歸正傳)」などと物語に入るのである。

物語に入ることを一度断っておきながらも同じような記述を重ねるこの箇所は、結果として、「引」と「物語」とを接合する「のりしろ」のような役割を果たしているとは言えまいか。このとき、物語の内側と外側とは、よりなだらかなものとなり、現実世界と物語世界とは地続きのものとして読者の前に現出するのである。

また、形式の問題もさることながら、周桂笙はみずからの記述がホームズ物語と「同

様に」、事実に基づくものであることを繰り返し主張する。たとえば、「引」に見られる、「こうした状況は、どれも実在のものである。けっしてわたしが想像で作り上げたわけではない」という記述のほかに、以下のような箇所がある。

しかし、仔細に考えてみれば、わが上海の探偵もまた、実のところ外国と並べて論じることはできない。外国の探偵は、多くの年代を経ており、探偵小説もできてから日が長い。したがって、それについて述べれば皆が知っている。さらに、外国の探偵小説は、十分の九は想像から来ている。そのため、構造もしっかり整っている。いまわれわれの上海の探偵はまだ書籍になったことはない。したがって、知っている人間は多いけれども、その実情を知らない人間がまだ少なくないのである。どうしてあらゆる道理をおおまかに叙述せずにいられようか。ただ一点、外国の現在の社会は、すでに高度に発達している。そのため、想像の探偵はとても面白く書かれており、読者を怖がらせ、不思議がらせるに足る。われわれ上海社会の程度にとっては、まだまだ遠く及ばないだろう。したがって、この探偵小説もまた、いくつかの本当の事柄を記して、みなさんにお見せするにすぎない。あるいは、社会の腐敗したところを、ひとつひとつ改良しはじめることができれば、のちの進化のうえでも大いに益することであるに違いない。これこそわたしがこの小説を記すうえで苦勞するところなのである。⁴⁰

周桂笙はここで、社会と小説とが、その発展の度合いにおいて相関するものであるということを前提としており、これまで述べてきた周桂笙の探偵小説観をそのままなぞったものと言えるだろう。

周桂笙は、上海の探偵について「実情を知らない人間がまだ少なくない」状況であることを踏まえつつ、多くの人間に知らしめるために探偵について記すことを決意している。しかも、「想像の探偵」を描くのではなく、「事実を記」そうと試みた。つまり、周桂笙は、明言こそしてはいないが、自身の想像する「ワトソンの立ち位置」にみずからを据えたのではないだろうか。「コナン・ドイル」のように「想像」によって話を膨らませるのではなく、事件を「記録」することから「中国探偵事件の出发点」としての探偵小説を執筆することを構想したのだと考えられる。そして、事実を「記録」することを選択した背景には、おそらくもう一つの力が働いている。

7. 「現状」を描くことの意味

ここまで、周桂笙が「上海偵探案」を執筆するにあたり、事実を「記録」して「実情」を知らせることを強く意識しているということ述べた。ならば、このように、事件を「記録」した背景には、いったいどのような力が働いているのだろうか。

ここで、周桂笙が小説の最後に「上海探偵事件の現状」と述べている点に、あらためて注目したい。無論、これは書かれたものである以上、事実をそのまま記録しているとは考えにくい。周桂笙が小説の本編を終えた段階で、あらためて「現状」を記したものであると断っている点には、注意すべきであろう。この「現状」という言葉は、清末期における「譴責小説」の創作方法を想起させる。

「譴責小説」は、魯迅が『中国小説史略』において提示した名称で⁴¹、社会の隠れた弊害を暴きだし、現状を糾弾する小説を指す。第1章で取り上げた劉鶚『老残遊記』（1903-1906?）のほか、吳趸人『二十年目睹之怪現状』（1906-1911）、曾樸『孽海花』（1905）、李伯元『官場現形記』（1903-1905）などが代表例とされる。これらの小説には、『官場現形記』のように、「現状」や「現形」といった語を名称に含む小説が多い。その例としては、冷眼傍觀人『新旧社会之怪現状』（1908）、瘦腰生『最新学堂現形記』（1909）、吳趸人の『二十年目睹之怪現状』の続編『近十年目睹之怪現状（別名「最近社会齷齪史」）』（1909）などが挙げられる。

このように、「現実」を反映した小説の隆盛は、清末当時の文学のひとつの動向であった。そして、その「現実」は、譴責小説においては、正されるべきものとして批判的に描かれたのである。つまり、中国の現状を描くことは、往々にして中国の現状を「批判的」に描くことであった。それが「怪現状」ならば言うまでもない。

中国の裁判制度の「現状」については、吳趸人もまた、『二十年目睹之怪現状』の中で、租界の会審公堂での審議を次のように批判的に描いている。

わたしは言った。「外国人が話を理解せず、彼らのあのでたらめな訴えを受けたことは、いまは述べなくともよい。あの公堂の調査官は中国人であっても、（外国人に）尋ねてはつきりさせるべきなのに、どうしてこのようにひとつも聴取しないで、判断したのだろうか。」述農は言った。「ここにはふたつ面の道理がある。ひとつは、上海租界の役所は、まともな大きい事件でなければ原告被告双方の審問はしないということだ。その他の喧嘩といった瑣事は、被告に質問しないばかり

りか、原告にさえ質問せず、包探や巡捕の話のみに任せて、事を済ませてしまう。彼はつまり、あの包探や巡捕は執務をする人間であり、かならず公正だなどといまだに思っているのだ。この把総（下級武官）が巡捕に昇格したのには経緯があったのだとどうしてわかろうか。もうひとつは、この会審公堂の中国人官吏は、「会審（合同審査）」の名目を掲げてはいるが、実際には傀儡のようなもので、外国人を見るなり非常に恐れをなす。外国人の機嫌を損ねて、外国人が上司に話せば、解雇されて飯も食えなくなる、と恐れているのだ。だから、日頃の審議では、外国人の言うことを鵜呑みにする。この巡捕は外国人が用いるもので、普段会ったとしてもある程度は怖いというのに、ましてや今回は巡捕が原告なのだから、当然白黒を審議せずに被告を懲罰しようとするだろう。」（第10回）⁴²

ここでは、会審公堂での合同審査について、大きな事件でなければまともに扱ってもらえないこと、合同審査と言いつつも、中国人が外国人の顔色をうかがい、きちんと審査しないことの二つの側面が、批判的に指摘されている。つまり、会審公堂での合同審査における「怪現状」が、この小説には描かれているのである。

この点を踏まえるならば、「上海偵探案」において、周桂笙が「探偵」の活躍する話を描かず、包探の捜査や裁判の審議の問題点を描いたことについても、周が上海における探偵事件の「現状」を批判するためだったものと考えられる。つまり言うなれば、「上海偵探案」に描かれているのは、周桂笙が「目睹」した上海の「怪現状」だったのである。そして、「探偵」がないという「現状」への批判は、「上海偵探案」 「引」で述べられているように、探偵学校を建設し、探偵を増やすことで社会を改良するという考えとも繋がっていたらう

「上海偵探案」という探偵小説には、探偵による謎解きといった探偵小説らしい要素が見あたらない。この点について、周桂笙は、上海には幾多の事件があり、記録されるに足る話もあったことを、次のように述べている。

そうでなければ、この50、60年の間の、幾千とはいわずとも、少なくとも数百件の探偵事件は、きっとまだ書き記すことができたはずである。以前は嵐のような事件もまた少なくなかった。たとえば、任順福殺人放火事件や、馬永貞殺人事件の類は、絶好の資料ではないか。惜しいことに、誰も記すことができなかった。⁴³

あるいは別の事件では活躍した包探もいたかもしれない。だが、周桂笙は包探が事件解決に絡まないこの話を、あえて上海の「現状」として批判的に描き出した。「上海探偵事件の現状」を「記録」した結果として、「上海偵探案」は、物語としての面白味を幾分欠いたかもしれない。しかし、それもまた清末探偵小説のひとつの「現状」だったのである。

おわりに

本章では、周桂笙が事実を「記録」することを重視した結果、「上海偵探案」に、探偵の探偵らしい逸話が描かれなかったこと、その理由は、周が当時流行した「譴責小説」のように上海の租界警察「包探」の「現状」を批判的に描くことによって、読者を啓発し、社会の改良を試みようとしたためだったことを論じた。

周は「上海偵探案」を書くことによって、吳趸人『中国偵探案』における能吏を探偵と見做す編集方針に異を唱えた。これをきっかけとして、公案小説は探偵小説と見なし得るのかという問題が顕在化することとなった。次の章では、その流れを踏まえつつ、吳趸人『中国偵探案』のような中国式の「能吏伝」から西洋式の探偵小説への「跳躍」を志向した作品として、呂侠『中国女偵探』を取り上げ、引き続き、公案小説と探偵小説の線引きと関わる問題について考えたい。

注

- ¹ 書影には「○吉」と記されているが、著者名がこのように記されている事例は『月月小説』中には見当たらず、「○」の意味するところは不明である。
- ² 周桂笙「上海偵探案」「金戒指案」（『月月小説』第7号、1907.4）。原文「這就是中國偵探案的起點」。
- ³ 范伯群主編『中国近現代通俗文学史 上卷』（江蘇教育出版社、1999）所収の湯哲声「偵探推理篇」では、公案小説として紹介されている。湯氏によれば、「上海偵探案」には3つの特徴がある。1. 初めて小説の題目に「偵探」という字を用いた公案小説であること、2. 小説中に包探の形象が出現しており、過去の公案小説の能吏や俠士ではないこと、3. 当時の中国司法部門の裁判の状況が表現されていること、である。このほか、周桂笙「上海偵探案」を中心的に論じた研究に、楊緒容「周桂笙与清末偵探小説的本土化」（『文学評論』2009年第5期）がある。
- ⁴ 周桂笙については、袁荻涌「清末訳界前鋒周桂笙」（『中国翻訳』1996年第2期）、郭延礼『中

- 国近代翻訳文学概論』(湖北教育出版社、1998) 下篇 第五章「周桂笙、奚若及其他」、魏望東「清末民初時代背景下的周桂笙翻譯研究」(『語文学刊』2008年第3期)などを参照。
- 5 『毒蛇圈』については第2章注1を参照されたい。
 - 6 周桂笙訳述「歇洛克復生偵探案」。『新民叢報』第3年第7号(原第55号)〔光緒三十年九月十五日〕(1904年10月23日)に掲載。
 - 7 周桂笙によるホームズ物語の翻訳については、樽本照雄「中国におけるホームズ物語」(『漢訳ホームズ論集』、汲古書院、2006所収)を参照。
 - 8 周桂笙訳述「歇洛克復生偵探案」「弁言」。原文「英國呵爾唔斯歇洛克者、近世之偵探名家也。所破各案、往往令人驚駭錯愕、目眩心悸。其友滑震、偶記一二事、晨甫脫稿、夕遍歐美、大有洛陽紙貴之概。故其國小説大家、陶高能氏、益附會其說、迭著偵探小説、托為滑震筆記、盛於世。蓋非爾、則不能親歷其境之妙也。」
 - 9 清末当時におけるホームズ実在論およびホームズ物語の捉え方については、[前掲]樽本照雄「中国におけるホームズ物語」を参照。
 - 10 吳趸人『中国偵探案』「弁言」(広智書局、1906)。原文「吾國無偵探之學、無偵探之役、譯此者正以輸入文明。」
 - 11 西洋の古典的な探偵小説にも、実在の事件をもとに書かれたものがある。たとえば E.A.ポーの作品、「マリー・ロジェの謎」(1842)は、ニューヨークで実際に起こった事件に取材し、その舞台をパリに置き換えたものとされる。鷺塚浩子「「マリー・ロジェの謎」の謎」(『成城文藝』149号、1995.2)を参照。
 - 12 俠人「小説叢話」、『新小説』第13号(1905)。原文「唯偵探一門、為西洋小説家專長」。
 - 13 定一「小説叢話」、『新小説』第15号(1905)。原文「補救之方、必自輸入政治小説、偵探小説、科學小説始。蓋中國小説中、全無此三者性質、而此三者、尤為小説全體之關鍵也。」
 - 14 林紓と魏易による合訳で、1907年に商務印書館から出版された。原作は、Arthur Morrison “*Chronicles of Martin Hewitt*” (1895)。同シリーズは、1894年に『ストランド』誌でホームズが連載を終了した後、アーサー・モリスンが同誌の依頼を受けて、探偵マーチン・ヒューイットの登場する作品を執筆したもの。連載は1903年まで続いた。アーサー・モリスンの作品の漢訳については、中村忠行「清末探偵小説史稿(二)——翻訳を中心として——」(『清末小説』第3号、1979.12)を参照。
 - 15 林紓『神枢鬼蔵録』「序」。阿英『晚清小説叢鈔 小説戯曲研究卷』(中華書局、1960)所収版に拠る。原文「矧所謂包探者、明物理、析人情、巧謀捷取、飛迅不可摸捉、即有遁情、已莫脫包探之網、而讞員又端審詳慎、故民之墜於冤抑者恆寡。中國無律師、但有訟師；無包探、但有隸役。訟師如蠅、隸役如狼。蠅之所經、良哉亦敗；狼之所過、家畜無免。」
 - 16 租界に警察機構が配備された背景には、小刀会の武装蜂起や、太平天国の戦乱の影響による難民の増加があった。1845年の第一次土地章程において、租界地区は中国人の居住禁止〔華洋分居〕が決められていたが、難民が租界に押し寄せた結果、「華洋雜居」の状態が生じる。そうした中で、1854年7月、第二次土地章程(上海英仏米租界租地章程)が発表された。「華洋分居」の規定は廃止され、翌年の中国人居住租界条例の公布によって、租界における中国人居住が承認された。同時に、行政の執行機関として、英、米、仏の三国合同で工部局が組織され、その管轄下に、租界を自警するための警察組織も整備された。それが「上海公共租界巡捕房(Shanghai Police Station)」である。「巡捕」とは警察官のこと。「包探」はこの巡捕房に属していた。『上海研究資料』(1934)〔いま『旧上海資料匯編』(北京図書館出版社、1998)〕、高橋孝助 古厩忠夫編『上海史』(東方書店、1995)を参照。

- 17 葛元煦「滬遊雜記」(『滬遊雜記・淞南夢影錄・滬遊夢影』、上海灘与上海人叢書、上海古籍出版社、1989 所収)。原文「包打听为巡捕耳目，系工部局雇用者。专探各事，如失窃剪绺等案，亦任查緝」。
- 18 薛理勇『上海閑話』(上海社会科学院出版社、2000)「包打听」の項目を参照。また、前掲「中国におけるホームズ物語」にも、「包」は動詞ではないか、とする指摘が見える。
- 19 吳趸人の代表作『二十年目睹之怪現狀』の続編である「最近社会齷齪史」(1909)第8回にも、「包打听」について、「上海で俗に偵探を指す名詞(滬俗稱偵探之名詞)」といった割注が施されている。引用は『吳趸人全集』第3卷(北方文藝出版社、1998)所収版に拠る。
- 20 [前掲]周桂笙訳述「歇洛克復生偵探案」(弁言)。原文「吾國視泰西，風俗既殊，嗜好亦別。故小説家之趨向，迥不相侔。尤以偵探小説，為吾國所絕乏。不能不讓彼獨步。蓋吾國刑律訟獄大異泰西各國。偵探之說，實未嘗夢見。互市以來，外人伸張外治法權於租界，設立警察。亦有包探名目，然學無專門，徒為狐鼠城社。會審之案，又復瞻徇顧忌，加以時間有限，研究無心。」
- 21 会審制度が制定される以前の租界では、南京条約での取り決めから、外国人が領事裁判権を掌握していたが、同治三(1864)年にイギリス駐上海領事パークスが、上海領事団会議の場で中国と西洋の合同審査機関の設立を提案。同年3月、上海道とイギリス租界が「洋涇浜北首理事衙門章程」を定め、上海道から理事をイギリス領事館に派遣し、租界で発生した中国人に関わる事件の合同審査を取り決めた。1868年には、イギリス、アメリカの領事とともに「洋涇浜設官会審章程」に調印、のちに洋涇浜北首理事衙門は「会審公堂」と名を改めた。上海道と領事がそれぞれ代表を出して会審団(合同審議団)を形成し、領事の裁判が最終判決とされた。薛理勇主編『上海掌故辞典』(上海辞書出版社、1999)、「会審公堂」「会審制度」の両項を参照。
- 22 [前掲]「上海偵探案」(引)。原文「但是巡捕房的包探，大都由巡捕拔升起來。從來沒有一個偵探學堂，亦不收一個偵探學生。所以除了外國偵探之外，那些中國包探，無非是一班下流社會中人，在那裏胡鬧。」
- 23 同上。原文「偵探亦是專門的職業。本是人人可學的。譬如醫學一樣，祇要從師畢業以後，便可懸壺行道的。但是要求做有名的偵探家，比做名醫還難幾百倍。第一難求的是人格聰明，才智學問，身家、膽識、氣量，皆缺一不可。然有此全才者，往往不學偵探。要學偵探者，未必皆是全才。但以普通而論，則大都總是大學堂的畢業生，於格致科學，必有幾項專門。不怕煩勞，固不必言。還要不貪功、不利圖，肯熱心公益，捨身社會者，方可以為偵探。」
- 24 「毒菓案」は無歎羨齋主訳述。『新小説』第5号(1903.7)に掲載。原作は不明。
- 25 原文「余老友蕭君，那一晚到我家裡閒談，談起西洋的偵探來，實在神出鬼沒，變幻機警，令人毛骨悚然。原來外國的偵探，能通幾國的語言，精通人情世故，練成一種銳利的見識，加以通曉各種技藝。」
- 26 定一「小説叢話」(『新小説』第13号、1905 掲載。陳平原 夏曉虹編『二十世紀中国小説史料』[第一卷]、北京大学出版社、1997 にも収める)。原文「且偵探之資格，亦頗難造成。有作偵探之學問，有作偵探之性質，有作偵探之能力，三者具始完全，缺一不可也。」
- 27 清末期の近代教育制度に関わる議論については、阿部洋『中国の近代教育と明治日本』(福村出版、1990)、陳科美主編、金林祥副主編『上海近代教育史 1843-1949』(上海教育出版社、2003)を参照。
- 28 [前掲]「上海偵探案」(引)。原文「但是中國現在各省，都要開辦警察，并有開辦偵探學堂的消息。如此看來，可見上海的偵探，雖還在幼稚時代，而各省內地的偵探，不過方有萌芽。將來中國偵探，布滿了全國時，這中國偵探小説，不知要發達到怎樣一個地步。然而天下的事，無論大小，總是有近而遠，由小而大，由粗而精，一步一步的漸漸擴充起來。不能一蹴即幾的。在下就

拿了個主意，不揣譎陋，要想把上海現時偵探家的舉動行為，略略描寫幾件出來，給大家瞧瞧。這種情形，都是實實在在的。並不是在下虛構的。」

- ²⁹ [前掲]『神枢鬼藏録』「序」。原文「近年讀海上諸君子所譯包探諸案，則大喜，驚贊其用心之仁。果使此書風行，俾朝之司刑讞者，知變計而用律師包探，且廣立學堂以毓律師包探之材，則人人將求致其名譽，既享名譽，又多得錢，孰則甘為不肖者！下民既免訟師及隸役之患，或重覩清明之天日，則小說之功寧不偉哉！」
- ³⁰ 「十指連心」は本来「10本の指は分かれていても芯は連なっている」ということ、転じて「父母が何人もの子をみな一様に可愛がること」を指す。ここでは、周桂笙が「文字通り」の「十の指は心と連なる」といった意味で用いているものと解釈した。
- ³¹ [前掲]「上海偵探案」「金戒指案」。原文「俗語說的十指連心，可知這指頭上痛楚起來，直要痛到心裡呢。然而果真是個賊呢。自貽伊戚，倒也罷了。不過有時拿到了形跡可疑的人，如法泡製，就不免屈打成招的弊端。」
- ³² たとえば、当時の絵入り新聞『点石斎画報』には、「包探私刑」「私刑定讞」「枷示劣探」という、三号にわたる連続報道が見える（『点石斎画報』「利8」、光緒二十四年二月〔1898年2-3月〕）。これは、ある包探が私刑を行ったために処罰を受けたという事件を報道したものである。
- 例えば、最初の記事「包探私刑」は、複数の包探が茶館の一室でとある人物を拷問にかけたことを報じる。記事中、包探は「銅鉗」という指を挟んで締めあげる道具を用いており、周桂笙の記す包探のイメージとも重なる。こうした報道は、「私刑をする悪い包探」というイメージの形成に少なからず与ったものと思しい。
- ³³ [前掲]「上海偵探案」「金戒指案」。原文「此時那包探就回過了臉，不再似方才那樣笑嘻嘻的了。拿了當票，收了銀圓，正顏厲色的，問那孩子道。你老實告訴我。這金戒指是那裏來的。那孩子啞啞了半晌，才說道。是我拾得來的。那包探聽了，不禁大怒，伸手就是一掌，問道。你從那裏拾來的。答道。馬路上拾來的。包探道。好，你且再去拾幾個來。隨手又是一掌。打得那孩子霎時間昏天黑地，呱的一聲哭出來了。」
- ³⁴ 同上。原文「哼，好大膽的孩子，為什麼別的不做，要去做賊。你現在這點點年紀，就這般放肆，大起來還當了得。這金戒指你到底從那裏竊來的。從實一一供來。要有半句虛言，本分府就不能饒你。」
- ³⁵ 同上。原文「堂期本是天天有的。然而那位領事大人手裡的告，還得候到那位領事手裏審。這一禮拜來不及，還得等下禮拜。而且，這捕牢裏邊所有的犯人很多，有幾年多資深的，叫老犯人。兇惡得異乎尋常。凡是新犯人進去，他先要向你要好處。多了又不是，少了又不是。小人平時耳鼓裡已經聽得慣了。此時一想，手上那只戒指，此去是一定不保的。因此半途上就取了下來。想交託一個熟人，但是小人捉了之後，本有一個家裏人尾著來的。不過照例不許交頭接耳，所以不得近身罷了。後來小人乘著一個閒，把手裏的戒指，向着那尾我的人，輕輕一拋。我以為他既然隨我來，總會留著心照料我的。豈知我方才見了他，問起這件事，他竟茫然不解。小人纔知道是白白的丟掉了，後來候審的時候，剛巧有金戒指的案子。小人諒起來，恐怕就是我丟了，被那小孩子無意中拾得的。」
- ³⁶ 同上。原文「且說新衙門裏，一天的案件，總有幾十起，審了一件，再是一件，做官的沒有三頭六臂，那裡來得及推敲研究。只得糊裡糊塗，審他一堂。今日如此，明日亦如此，橫豎苦著犯人罷了。所以這司法獨立制度，是萬萬不可緩的了。」
- ³⁷ 同上。原文「呵呵，這就是中國偵探案的起點、上海偵探案的現狀了。請諸公讀過外國偵探案的，比較比較罷。」
- ³⁸ 前掲樽本照雄「中国におけるホームズ物語」。
- ³⁹ 前掲「上海偵探案」「引」。原文「可惜上海偵探，向來都是下流社會中人充當，沒有一個能稍通

文墨，會得自作筆記的。又沒有個通品的人，和他們做朋友，為之代庖，像滑震先生(一作華生)之於福爾摩斯，又沒有個高能陶耳，借了他們的名，做偵探小說。所以一向沒有記載發現出來。」⁴⁰前揭「上海偵探案」引。原文「而仔細想想，我上海的偵探，實在也不能和外國相提並論。因為外國的偵探，已經有了幾多年代，偵探小說也有了好久了。所以說起來大家都知道。況且外國的偵探小說，差不多十分之九，是從理想上來的。所以佈置得整整齊齊。如今我們上海偵探還沒有成過書，所以知道的雖然很多，不知其情的也還不少，怎麼能不把一切道理，略略的敘述一番呢。但是一件，外國現在的社會，已很高尚了。所以這理想的偵探，作得很有意味。足令讀者驚心怵目、稱奇道怪。至於我上海社會的程度，恐怕差得還遠。所以這偵探小說，也不過是描寫幾件實事，給大眾們看了。或者可以把社會中腐敗的地方，一樣一樣的改良起來，豈不是與後來進化上大有益處的事。這就是在下作這篇小說的一番苦心。」

⁴¹「譴責小説」という用語について、今村与志雄氏は中国語の〈譴責〉という語の意味が日本語と異なることから、「糾弾と摘発の小説」と訳出しているが(魯迅著 今村与志雄訳『中国小説史略 下』、ちくま学芸文庫、筑摩書房、1997)、ここでは譴責小説という呼称をそのまま用いる。

⁴²吳趸人『二十年目睹之怪現狀』第10回。原文「我說道：“外國人不懂話，受了他那『膚受之朔』，且不必說。那公堂上的問官，他是個中國人，也應該問個明白，何以也這樣一問也不問，就判斷了呢？”述農道：“這裡面有兩層道理：一層是上海租界的官司，除非認真的一件大事，方才有兩面審問的；其餘打架細故，非但不問被告，並且連原告也不問，只憑著包探、巡捕的話就算了。他的意思，還以為那包探、巡捕是辦公的人，一定公正的呢，那裏知道就有這把總升巡捕的那一樁前情後節呢。第二層，這會審公堂的華官，雖然擔著個會審的名目，其實猶如木偶一般，見了外國人就害怕的了不得，生怕得罪了外國人，外國人告訴了上司，撤了差，磕碎了飯碗，所以平日問案，外國人說甚麼就是甚麼。這巡捕是外國人用的，他平日見了，也要帶三分懼怕，何況這回巡捕做了原告，自然不問青紅皂白，要懲辦被告了。”」標点符号は北方文芸出版社版(第一卷)に拠った。

⁴³前掲「上海偵探案」引。原文「不然，這五六十年當中，不必說幾千，至少幾百件偵探案，總還可以寫得出來。以前轟轟烈烈的事，却也不少。如任順福殺人放火案，馬永貞被戕記之類，豈不是絕好的資料麼。可惜沒有人做得。」「任順福殺人放火事件」は不詳。馬永貞(??-1879)は、山東省出身の回族で、1851年に馬を売りに上海に来た。1879年、イギリス租界の一洞天茶館で、外国人に教唆された馬売りの顧忠溪が、斧頭党を率いて馬永貞を襲撃した。馬永貞は傷が深く、その夜に息絶えた。「馬永貞被戕記」とは、おそらくこの事件のことだろう。ちなみに、探偵小説にはならなかったかもしれないが、のちに芝居に改編され(題目『馬永貞』)、1943年に初演されている(王榮華主編『上海大辞典』、上海辞書出版社、2007を参照)。

第4章 能吏から探偵へ——呂侠『中国女偵探』

はじめに

第2章と第3章では、吳趸人『中国偵探案』と周桂笙「上海偵探案」によって、公案小説は探偵小説か、といった問題が顕在化したことを述べた。

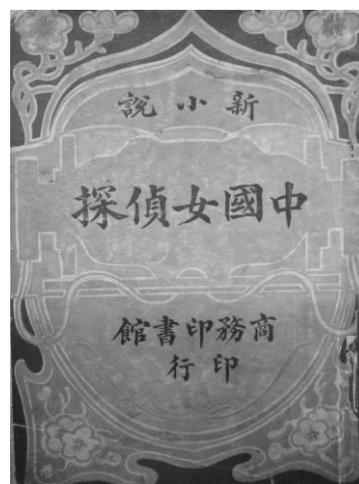
吳趸人は「かならず事実の記録を求め、想像はけっして入れない」という方針のもとに、実在の能吏を「探偵」として捉えて『中国偵探案』を編集した。その際、包公のような、人を蘇生させる、亡霊の訴えを聞くといった、迷信的なものと関わりを持つ人物の話は採録しなかった（第2章）。それに対して、周桂笙は、同書について「事実の記録」としては価値を持つが、「探偵事件」とは呼べないと評している。周桂笙は、吳趸人の試みに呼応しつつも探偵小説を異なる形で構想し、「上海偵探案」を書き上げ、上海の包探（租界警察）の現状を批判的に描出した（第3章）。

これらの動きは、中国に探偵や探偵小説は存在するのか、という問いを浮上させ、それをめぐる議論と創作の動きをもたらした。本章では、その流れに位置づけられるべき探偵小説として、呂侠『中国女偵探』（1907）を取り上げる。

『中国女偵探』は、1907年に商務印書館から単行本として出版された¹。「血帕」「白玉環」「枯井石」の三篇から成り、いずれも文言で書かれている。作者の陽湖呂侠は、歴史家の呂思勉であることが指摘されている²。

呂思勉（1884-1957）、字は誠之、江蘇武進（今の常州）の人である。『白話本国史』や『先秦學術概論』など、歴史学に関する研究で知られるが、『宋代文学』など文学に関する著作も残している。また、成之の筆名で記した長大な小説論は、清末民初期におけるまとまった小説理論として、その重要性が注目されている³。

『中国女偵探』は、出版当時、雑誌や新聞に出版広告が掲載されている。「又出新小説九種」と題されたその広告には、「その場面の奥深さと奇妙さ、調査の精微さと確実さ、そしてさまざまな手段の巧みさは、変化が尽きることなく、まったく探偵[小説]界において精彩を放っている」⁴という謳い文句が見える。



それでは、読み手の側はどのように『中国女偵探』を読んだのか。『中華小説界』第3期（1914）に掲載された、劉半農「匕首」の序文に、次のような記述が見える。

探偵小説は、西洋から伝来し、おおむねどれも精緻に作られており、巧妙で人を驚かせる。ただ、中国と西洋の社会の状態が異なるため、読み手はいつも隔たりを感じる。……（中略）……のちに陽湖呂侠が著した『中国女偵探』も読んだ。中身の3つの事件はいずれも奇怪で風変わりであり、かつては無かったものだ。しかし、呂はもともと書生であり、社会の真相をそもそも十分には理解していない。そのため、彼の本は本当に奇妙で、まったく社会の実情と食い違っている。文人学士の観賞用にはまあよいが、探偵〔小説〕かと言うと、まだそうではない。よって、中国に探偵小説は無いと言っても、言い過ぎとは言えないのだ。⁵

劉半農は、『中国女偵探』について、内容が「奇怪で風変わり」であることを評価しつつも、描かれた内容が社会の実情と食い違うという点を取り上げ、探偵小説とは呼べないと批判している。劉による低評価は、「探偵小説は社会の実情を反映したものだ」とする見方を前提としたものようだが、このような探偵小説観は、ここまでの章で述べてきたとおり、この時期にはよく見られるものだった。もっとも、この一文が劉の自作の自序である点に留意するならば、劉は先行する探偵小説を批判することで、自分の作品こそが探偵小説なのだと宣言しているとも考えられる。

このほかに『中国女偵探』に言及した文章としては、少し時代は下るが、阿英『晚清小説史』（1937）がある。阿英は同書の第九章「婦女解放問題」において、新しい女性を題材とした清末小説について整理し、評価できる作品として『中国女偵探』を挙げる。もっとも、阿英は同書の探偵小説としての側面には触れていない⁶。

『中国女偵探』は、本章の注1でも示したように、後に第1篇のみがいくつかのアンソロジーに収録されたこともあり、近年の清末小説研究においてもしばしば言及される。しかし、全書が取り上げられることは稀であり、内容に踏み込んだ議論も見られない。そこで、本章では、同書に収録されている三篇について、順を追って個別に特徴を論じるとともに、それら三篇が階層をなしていることと、そこから見て取れる同時期の探偵小説創作の志向性について述べたい。

2. 新小説を読む女性——人物の造型と語り手のスタンスについて

『中国女偵探』の第1篇「血帕」は、黎采芙という女性の一人称語りから始まる。まず冒頭部に注目してみると、彼女の性格は次のように記されている。

わたしにはいささか悪い癖がありまして、およそ針仕事や飲み食いのたぐいは、いずれもわたしの好むものではなく、好きなものは、ただ読書だけなのです。⁷

針仕事をしない、読書をする、といった習慣は、旧社会における典型的な女性像とは真逆であり、黎は「新女性」⁸だといえる。冒頭部では、黎のほかに、黎の伯父の三女であり幼馴染の鋤芑についても記されている。

その性格はわたしとはかなり異なっています。彼女もまた読書をするのですが、あまり好まず、ただ武芸を習うのを好むのです。馬を走らせても剣を振るっても、出来ないことはありません。⁹

鋤芑は、この小説のなかで、探偵としての能力を発揮する人物である。その彼女の性格として、読書をするに加えて、さらに武芸にも通じていることが示されている。このことは、何を意味するのだろうか。

「馬を走らせても剣を振るっても」に該当する〈馳馬試剣〉という語句は、早くは『孟子』「滕文公上」の「吾他日未だ嘗て学問せず。好んで馬を馳せ剣を試む」という一文に見える。滕の定公が亡くなった際、後嗣の文公は、孟子の教えに基づいて三年の喪に服そうとする。それを老臣たちから咎められ、守役の然友に対して、わたしはこれまで学問せず、好んで馬を走らせ剣を振っていた、そのため周囲が自分の行ない〔三年間の服喪〕に満足しない、と相談を持ちかける¹⁰。〈馳馬試剣〉は〈学問〉と対照をなしており、のちに「武芸」を象徴する語として用いられるようになる。

鋤芑の「読書をする」という情報は、彼女が「文」の要素をも備えていることを表しており、「文武両全」とも見えなくない¹¹。しかし、ここでは「武」のほうが際立たされていることに注目したい。しかし、その後続く話の中では、「文」の能力の知識と洞察力は3篇を通じて遺憾なく発揮されるが、秀でているとされる「武」の能力は、小説中には発揮される場面は見当たらない。かりに「文」のほうが彼女の探偵

としての頭脳を裏付けるものだとする、「武」の能力は、たんに身体的な能力というだけでなく、彼女の持つ「侠」の要素を示すものではないだろうか。中国の小説には、身体能力にすぐれた女侠の系譜があり、清末民初期の小説には、〈女雌〉あるいは〈女豪傑〉といった言葉で括られるような女性英雄もまた数多く登場する¹²。

この小説には、このふたりのほかに、黎の友人の李薇園、凌絳英、秦捷真、慧真という女性たちが登場する。彼女らは、黎の邸宅の庭に一堂に会し、事件の話肴に酒宴に興じる。ひとつ目の話の語り手は李薇園である。その語り始めの場面には、この小説の書き手の立場がそのまま示されていると言えるだろう。

客間では、それぞれが気ままにいろいろな種類の新小説について語り、楽しんでいました。わたくしは申し上げました。「中国の小説の美は、西洋人に劣らず、それに勝るものもありますわ。ただ探偵小説の類いだけは、ほぼ西洋人に独歩させておきます。これはどうしてかしら？ どうして中国の探偵の能力は、そもそも西洋人に及ばないのかしら？」薇園は言った。「いいえ、いいえ。わたくしの見聞によりますと、中国人は探偵の能力において、もともと西洋人と拮抗するに足るものがありますわ。わたくしがお話しするのをどうぞお聞きになって。」そこでみなは肅然となり、静かに耳を傾けました。¹³

新小説について語っている彼女らの様子からは、黎や鋤芟に限らず、ほかの女性たちもまた読書の習慣を持つことがうかがえる。そして、その小説が伝統的な小説ではなく「新小説」であることは、彼女らが西洋文化の影響下にある、いわゆる「新女性」であることを示しているだろう。

黎の台詞は、探偵小説を西洋人特有のものとする当時の見方を反映している。記述が類似するものに、周桂笙訳述「歇洛克復生偵探案」の「弁言」（1904）が挙げられる。前章でも引いたが、ここに再録しておこう。

わが国から西洋を見るに、風俗は異なっており、嗜好もまた違う。ゆえに小説家の傾向も、おおいに異なっている。とりわけ探偵小説は、わが国にはきわめて乏しく、西洋に独歩させざるを得ない。思うにわが国の刑法や裁判は、西洋各国とはおおいに異なっており、探偵の話は、たしかに夢にも見たことがない。¹⁴

俠人「小説叢話」(1905)もまた、「探偵のジャンルだけは、西洋の小説家の特技である」¹⁵と述べる。吳趸人もまた、『中国偵探案』「弁言」において、このような説に異論を唱え、中国にも優れた探偵がいる、探偵小説があると主張した。つまり、薇園の語りは、吳趸人のスタンスと共通しているのである。

それだけではない。薇園は、自分の父が祥符県の県尹のときに解決した事件のことを語るのだが、話の最初で、「わたしの父が能吏と称せられたのもまた、実はこのこと(事件)が理由だったのです」¹⁶と述べている。つまり、薇園が語る話は、「能吏が事件を解決する話」であり、「中国能吏伝」と言っても構わない」とする『中国偵探案』と、この点においても通底していることになる。

以上を踏まえつつ、第1篇の分析を進めてゆこう。

3. 能吏伝とふたりの女探偵——第1篇「血帕」について

李薇園が語る話(「血帕」)の筋立は、以下のとおりである。

開封のとある煙館の主人、吳飛保には妻とふたりの娘がいたが、九年前、その娘ふたりが、同時に自殺した。遺体はいずれもなぜか青い布の合わせの袴を着ており、自殺の背景とともに謎であった。娘たちは生前、米有才なる人物の母親と親交があったが、米の母親は先ごろ亡くなっていた。

薇園の父は、娘たちが米有才とも深い仲であったと推測し、米が自分の母の死後に田舎へ帰ったことが自殺の原因だと考え、米有才に嫌疑をかける。薇園の父の命によって、部下の金富は米を拘束して尋問にかけるが、薇園の父は、薇園の母の助言によって、米が犯人でないことに気が付く。

薇園の父が事件の手掛かりを掴んだ矢先、城外で范為生なる者が殺害され、薇園の父は翌日、容疑者として周隱深を取り調べる。両者はそれぞれ本名を牛老三、ト老狼といった。事件前、吳飛保は、娘たちが美しく成長したことから売り払おうと考え、知り合いの牛老三に話を持ち掛けるも値段交渉で決裂、さらにト老狼と交渉をした。しかし、売られることを望まぬ娘たちは自殺したのだった。

また、米有才の証言では、米の母は娘たちを我が子のように可愛がったが、金

欲しさから娘たちを騙し、同郷の女性を母親役として引き合わせ、その女を通じてふたりから金品をせしめようとした。米の母は、その女が偽りの母親だと露呈しないよう、女の手から、「これを母だと思っておくれ」と手織りの青い布二匹をふたりに渡させた。しかし、その女は米の母が死ぬ数日前に亡くなっていた。ふたりの娘が自殺したのは、「母」の死に殉じたためでもあったのである。ふたりの衣服には、血で書かれた「母」宛の遺書が縫い付けてあった。

この事件の解決に大きく関わる人物は、薇園の父と金富である。金富は、薇園の父の助手役として登場し、米有才に嫌疑がかかった際には、米の家に忍び込んで証拠を探し出そうとまでする。証拠が見つからずとも「この敏腕で鋭い金富はそのせいで失望することは決してな」く、手掛かりとして米の母の髪どめが入った布袋を発見したときも、「眼光の鋭い金富は見たものを間違えはしない」、といった形容がなされ、その能力の高さが描写されるものの、その行いは「ときにはそそっかしさから出てくるものもある」と評価されており、結局は、薇園の父の明察ぶりを引き立てる役割を演じることとなる¹⁷。

薇園の父がこの事件を解決したことで能吏と称されるようになったことはすでに述べた。薇園もまた、この点について、「この事件の真相が明らかにされた理由は、ほぼわたしの父一人の力なのです」¹⁸と、父親の探偵役としての能力を強調する。しかし、そこにはひとりの助言者がいた。薇園の母である。

薇園の父は、ふたりの娘が残した遺書が米有才の手に渡った可能性が出てきた際に、それを証明する手がかりが得られず、薇園の母に相談する。すると薇園の母は次のように助言する。

間違っています。あなたのその説は間違っています。ふたりの女子が刺傷の血で有才に書いたというのなら、渡したのは何時なのですか。有才が町を離れる前だとしたら、その傷跡が新しいはずはありません。もし有才が町を離れた後だとしたら、だれが有才のために手渡したのですか。これは、もともと人に頼めるものではありません。とすれば、この事件は有才とはほぼ無関係、無関係なのです。¹⁹

薇園の母は探偵さながらの推理を披露し、薇園の父に事件の解決に関わる重要な助言をする。注目すべきは、薇園がこのことを話す直前に、鋤芑もまた、薇園の話をもとに、まったく同じ推理を披露しており、周囲が鋤芑を探偵として称賛していることである。その様子は次のように描かれる。

みなは驚き、敬服して述べた。「素晴らしい才能だわ、素晴らしい才能だわ、探偵の素晴らしい才能だわ、探偵の素晴らしい才能だわ。」薇園はまた酒杯を挙げ、互いに酒を勧め合っ
てこう言った。「あなたは本当に探偵の才能があるわ。もうすぐ東方の女歇洛克シャーロックになるかもわからないわよ。」²⁰

全編を通じて探偵としての能力を発揮する鋤芑は、ここで早くも「東方の女歇洛克」と称されつつある。鋤芑に向けられたこの賛辞は、結果として、同じ推理を披露した薇園の母にも向けられていることになるだろう。つまり、この話で称揚されるべき探偵は、薇園の父のほかに、もう一人いるのである。薇園の母は、助言という形ではあるが、探偵さながらに事件を分析し、さらに夫の推理の誤りを正している。

それだけではない。米有才の証言から、娘たちの自殺が、「母」の死に殉じるためでもあったことがはじめて明らかとなった場面で、薇園の父は次のように述べる。

探偵は、十のうち七八割あるいは五六割がわかっても、事件を解決する手掛かりが得られるに過ぎない。きっと、事件の全体を取り上げて明らかにするというのは、こうした道理は無いのである。²¹

そして、この台詞の引用をもって薇園が事件の全容について語り終えると、周囲は口々に快哉を叫ぶ。

この事件は不思議だわ、この事件は不思議だわ、この役人は有能だわ、この役人は有能だわ。これは堂々と立派に探偵をしている人物です。どうして西洋の歇洛克シャーロックと比べられるのでしょうか。²²

このように、西洋の探偵（シャーロック・ホームズ）と比較して自国の能吏を称揚する態度が『中国偵探案』と共通していることは、先述のとおりである。しかし、薇園の父の台詞は、ふたりの娘のもうひとつの死因に思い至らなかったことを反映しており、この点は、薇園の父の探偵としての能力を損なうものであるとも言えよう。薇園の母の推理によって誤りを指摘されていることもあわせて考えると、薇園の父は、一見すると探偵としての能力を認められているかのようだが、実のところは、不完全な探偵として描かれているということになる。

4. 「能吏伝」を肴に呑む女たち——あるいは語り手と物語の距離について

ここまで、『中国女偵探』、とくに第1篇「血帕」について、吳趸人『中国偵探案』との類似点を指摘しつつ論じてきた。しかし、ふたつの小説を比較した際に、必ずしも両者の共通点だけが目立つわけではない。『中国女偵探』のほうが、『中国偵探案』の各篇よりも話がかなり長く、構成が複雑になっており、より論理を重視した展開となっている。

しかし、何よりも大きい『中国偵探案』との差異は、「能吏伝」としての事件をさらに外側から眺める視点、つまり事件を語ることに興じる女性たちの視点が物語中に描き込まれていることだろう。その視点は、話の途中で彼女らが推理を披露する場面や、話が切り替わる場面に、より顕著に表れる。たとえば、薇園が語り終えた後、慧真が次の話を語り始めようとする場面は、次のようなものである。

捷真はそこで讚嘆して述べた。「この事件は奇妙です。わたしはこの話から、西洋の大探偵の言葉を思い出しました。「およそ奇妙な事件はかならず女性と関係がある」²³というものです。

慧真が言った。「それは勿論そうですわね。この事件はそもそも婦人を構成の材料としてはいるようですけれど、婦人を主力にはしていないようですわ。わたしに、さらに婦人を主力にした事件のことをお話しさせてください。そうすれば、中国の女歇洛克シャーロックの名を与えることができますわ。」²⁴

「構成の材料」といった言い方にしてもそうだが、こうしたやりとりからは、自分たちの世界で起こった事件を、ひとつの「小説」としてみなす彼女らの態度がうかがえる。そして、その結末を知るや、彼女らは驚いて「事件の内容が奇異であることこれほどまでとは」「この事件の変わっていることと云ったら」と感嘆の声をあげる²⁵。

実際の事件の話を楽しむ彼女らの様子は、見方によっては「不謹慎」と感じられなくもないが、これは探偵小説を楽しんだ当時の読み手の態度にほかならない。たとえば、定一「小説叢話」（1905）には、次のような記述が見える。

わたしは西洋の小説を読むのを好み、とくに西洋の探偵小説を読むのを好む。千変万化し、聴いた人を驚かせ、どれも人の想像の域を超えるものである。²⁶

また、女性たちの似たような感想は、『中国女偵探』第2篇の途中にも見える。

みなはこの奇怪なことを聞くと、驚きを禁じ得ず言った。「奇妙だわ。天下にこのような怪しむべきことがあるとは。探偵事件にすることができるだけでなく、『続齊諧』、『新聊齋』にもすることができるわ。」慧真は言った。「こうした奇妙な事柄は、結局人事の範囲を超えるものではありません。さらには、天下には怪異な出来事などないのだとわかります。そして、さきほど不思議なことだと一緒になって驚いたことは、ただ真理がまだ発見されていないだけなのです。」²⁷

台詞中の『続齊諧』、『新聊齋』は、『齊諧』や『聊齋志異』といった怪異譚の同系譜上にある書物を意味しているものと考えられる²⁸。そして、『続齊諧』、『新聊齋』にもすることができる」という言い方からは、探偵の活躍だけでなく、事件の怪異さや奇妙さもまた評価すべき点だと見做されていることが窺える。つまり、語り手たちは、探偵小説をある種の怪異譚としても楽しんでいるのである²⁹。こうした事件の話の読み方は、おそらく、伝統的な怪異ものの小説だけでなく、奇妙な事件を扱うような公案小説の読み方とも地続きのものだろう。

指摘しておくべきは、こうした事件の風変りな点を驚き楽しむような彼女らの視線が、当時の探偵小説の読み手の視線と重なるものだという点である。彼女らは事件の話を楽しみつつも、第1篇のような、女性が能吏の推理の誤りを指摘するような話

だけでは満足しない。彼女らは、「女性が事件に関わる話」という共通項をつなぎとして、女性が探偵役として本格的に活躍する話へと会話を移してゆく。言うなれば、彼女ら複数の語り手によって複数の話が語られることで、この「能吏伝」は、女探偵の話——「正話」を語りだすための大掛かりな「入話」と化すのである。

5. ふたりの女探偵——第2篇「白玉環」について

それでは、その「正話」においてはいかなる事件が語られるのか。第2篇「白玉環」の語り手は、慧真へと入れ替わる。話の筋立ては次のようなものである。

無錫の商人黄幼侯の息子、長夫は、舅の斉隠夫の計らいで汪遙保と結婚する。その三日後、長夫のもとに匿名の手紙が届く。そこには、長夫の家が危険であり、すぐに立ち退くべきだと書かれていた。その後、黒服の女など不審者をたびたび見かけたり、一糸纏わぬ父の姿を描いた掛け軸が庭で見つかったり、さらにはそれが盗まれたりするなど、長夫の回りでは、奇妙な出来事が続けて起こる。

姉の盧姨娘は長夫に避難を勧めるが、遙保はそれに反対する。事件のあと手伝いを始めた錢肆の旦那の息子で幼馴染の子彦もまた、しばらく家に移らぬようにと長夫に勧める。やがて子彦は、汪遙保やその母の何氏、隠夫が長夫を殺害しようとしていると指摘し、長夫の逃亡のための計画を立てる。しかし、その計画どおりに動いた長夫は、子彦の使用人によって、井戸に突き落とされてしまう。長夫は気づくとどこかの家におり、そこには、下女、姉の盧姨娘、長夫の知らない男がひとり、そして汪遙保、斉隠夫、烏子彦がいた。

隠夫は呉中の勝利党なる盗賊団の一員であった。党の規則では、党員はその証として白玉環を所持し、五年に一度それを確認する決まりであった。隠夫は入党した頃、黄幼侯と結婚する前の路氏と関係があり、路氏に白玉環を持ち去られたままになっていた。後に隠夫は遙保の母の何氏と関係を持つようになるが、まだ白玉環は黄家にあった。しかし、隠夫より先に遙保がそれを見つけてしまう。隠夫はそれを取り返すべく、何氏に対して、娘の遙保の入党と引き換えに白玉環を返却するよう要求したが、奪還できなかった。隠夫は遙保を手紙で脅迫したが、遙保はその時、すでに白玉環を失っていた。

隠夫がそこまで自白すると、盧嬢がおもむろに白玉環を取り出す。盧嬢は、兄に偵察を依頼し、妹は下女に扮装させ、みずからもまた年老いた下女に変装して調査を進めていた。子彦と遙保による長夫殺害の企てに気づき、兄や妹とともに長夫の身辺を見守っていたのである。長夫が井戸に落ちたとき、兄は子彦を追いかけ、隠夫ともども捕まえた。白玉環については、遙保が家に置いて外出せざるを得ない状況を作り出し、彼女の居ぬ間に入手したのだった。

この話では、長夫の姉である盧嬢が、使用人に変装して調査にあたり、事件を解決する。長夫が井戸に落とされた場面まで話が進むと、周囲は「どうしていわゆる東方の女福而摩斯がまだ登場しないのかしら」³⁰と女探偵の登場を望む声をあげており、後に登場する盧嬢は、ホームズに比せられていると言えよう。また、盧嬢が白玉環を入手した経緯を説明した後、黎采芙は盧嬢のことを次のように称賛する。

「こうした奥が深く、入り組んだ事件は、たとえ福而摩斯に直面させても、きっと打つ手が無いでしょう。しかし、異郷に住んでいて一時的に帰郷していた一介の女子がこれを解決したということについて、誰が中国人の知力が西洋人に及ばないなどと言うのでしょうか。」³¹

ここでも、第1篇の能吏のときと同様に、ホームズでも解決できないという言い方によって、中国の探偵が称揚されている。そのうえ、普段は暮らしていない場所で起こった事件だったことや、女子であることなど、ある種の困難な状況下にあったことを示すことで、探偵としての能力の高さが示されている。

1話目と2話目の探偵像を比べてみると、全能ではない男の能吏に対して全能な女の探偵、という仕方で対を成していることがわかる。他方、その探偵の話を外側から眺める鋤芟は、2話目においても、語りの合間にみずからの推理を差し挟む。たとえば、黄幼侯を描いた絵が発見されたあとには、次のような台詞を言う。

「このことを試しに考察してみましよう。この絵がなぜ地中に埋められていたのか、そして地中から出て来て、なぜまた盗まれたのか。この問題がもし解決すれば、この事件も大半は分かったも同然ですわね。」³²

極めつけは第2篇の最後である。鋤芑は語り手の慧真を差し置いて事件を総括する。

鋤芑は言った。「こうした事件の実情は、見かけは難しそうですが、実は辿ってゆくことのできる端緒が差し挟まれているのです。たとえば裸の(絵が描かれた)掛け軸を思い出してみましょ。地中に埋めたり、箱を開けられて盗み去られたりします。こうしたことは、もし家の賊と外の賊とが結託していなければ、誰がそれをやるというのでしょうか。また、下女がお茶を持ってきて長夫に渡すと、遙保はすぐに簾を開けて入っていきました。その時間は多少足りないところがありました。その隠れた事情をうかがうのは難しいことではないのです。³³

鋤芑は盧嬢娘に対抗するような形で、自分も事件の全貌がわかっていたということ強調するのである。こうして、鋤芑の存在は、女性たちの中で唯一事件の真相を見通すことのできる探偵として、小説の中で前景化してくる。

6. 『西廂記』を読む男——女探偵との対比から

ここまで、語り手たちの性格、そして彼女たちの探偵小説の読み方について論じてきたが、第2篇「白玉環」には、小説の読者がもうひとり登場する。それは長夫である。長夫は、父の姿が描かれた絵が盗まれた翌日、気持ちが一ひどく塞いで、勤め先の銭肆に3日間の暇乞いをする。そして書斎に籠り、『西廂記』を読み始める。

午後、書斎にひとり座り、『西廂記』を読むと、思わず心がどきどきして、その身が憂患の中にあつたことを忘れてしまった。折よく女中が茶を運んで来て、机のわきに立ち、引き下がらなかつた。その姿態は優美で美しかった。長夫はすぐに彼女を手招きして言った。「来なさい。わたしはおまえに話がある」。女中は理由もわからず前に出ると、長夫はいきなり彼女を懐へと抱き寄せた。女中は驚いて声をあげようとしたが、長夫は手でその口を塞いだ。³⁴

『西廂記』を読んだ長夫は、興奮のあまり女中を襲ってしまう。一見すると事件とはまったく関連性の無いこの場面は、いったい何を意味するのだろうか。

『西廂記』物語は、唐代伝奇『鶯鶯伝』を下敷きに、董解元が『西廂記諸宮調』を作り上げ、のちに雑劇など多くの改編作を生んだことで知られる。最も影響力があったのは、明末清初の文人金聖嘆が改編して批評を加えた『第六才子書西廂記』であったとされる³⁵。

『西廂記』は評価が高かった一方で、「誨淫（淫を誨^{おし}える）の書」と目され、禁書のリストにもたびたび挙げられた³⁶。そうした禁書としての評価は、清末期にも依然としてあったようである。たとえば、『中外小説林』に掲載された、伯耀「小説之支配於世界上純以情理之真趣為觀感」という一文には、世の人は『水滸伝』を「誨盜の書」だと見做し、『西廂記』を「誨淫の書」だと見做すということが記されている³⁷。こうした評価を踏まえると、引用した場面において、長夫は誨淫の書を読み、その書に唆されて淫を犯したとも考えられるだろう。つまり、長夫の振る舞いは、淫書を読むこととその効果とが、具現化したものだと言える。

しかし、この時期に用いられる「誨淫」「誨盜」という言葉は、また異なる文脈の中に置きなおして考える必要があるだろう。清末期の小説批評によく見られるこれらの用語は、たとえば、梁啓超「訳印政治小説序」（1898）においては、『水滸伝』も『紅樓夢』も「誨淫や誨盜の両端からはみ出るものではない」といった形で用いられている³⁸。また、『新民叢報』第20号に掲載された、『新小説』第1号の広告にも、次のような記述が見える。

思うに、今日において小説を奨励する目的は、つとめて国民の精神を奮い立たせ、国民の知識を広げんがためであり、旧来の誨淫誨盜の諸作品と比べられるものではない。³⁹

とくにこの事例は、「新小説」と「旧小説」という、小説を語る新たな枠組みの中で、「旧小説」を批判的に論じる際に、「誨淫」や「誨盜」といった用語が用いられるようになったことを示すものである⁴⁰。梁啓超による「小説界革命」の影響下において、小説が国を変える手段、卑近な言葉で言い換えるならば、ある種の「教科書」として語られていたことを踏まえると、先に引用した場面における長夫は、旧小説を読んだために墮落した、という見方も可能だろう。

以上の点を踏まえると、この場面においては、悪しき小説を読むこととその悪しき

効能とが、象徴的に示されているということになる。つまり、この場面が挿入されることで、女性と男性、新小説の読者と旧小説の読者といった、優劣を示す対立項が、より明確なものとして際立ってくるのである。

ここまで、第1篇と第2篇について、両者がいわば入話と正話という関係にあること、そしてその探偵像において、全能ではない男の能吏と全能な女の探偵という形で対立していることを述べてきた。他方、「女性たちによって語られる」という点において両者は共通しているのだが、第3篇は、これらの物語の外側の世界の話となっている。語り手たちは、みずから探偵となって事件の解決に乗り出す。

7. 語り手から探偵へ——第3篇「枯井石」について

第3篇「枯井石」は以下のような話である。

黎の従兄の妻の実家、郭家に強盗が入ったという知らせを受け、女たちは調査に乗り出す。従兄の岳父悠文には3人の子がおり、長女は従嫂、次女は荷官、息子は梅官といった。また、家には庖人という使用人の男のほかに、殷氏、鏡花という女中がいた。

事件は、悠文の枕元にあった銀2百両、荷官の部屋に隠してあった銀2千両と手紙が盗まれたというものであった。事情聴取の結果、容疑者として、曹三が浮かび上がり、曹三の部屋から失われた手紙が見つかる。

次の日、ふたたび郭家を訪れた一行は、奇妙な事態に遭遇する。城隍廟の神像が家の中に出現したのである。神像の作り手、米福泉に目をつけた黎と李薇園は、米の家を訪れる。米福泉と曹三を見つけ、郭家に連行して事件のあらましを吐かせると、手紙は曹三が郭家の門前で拾ったものであった。

翌日、郭家の装飾品がすべて盗まれ、さらに翌々日には、悠文の姪の郭一才が殺される。鋤芑は一才と親交のあった来氏の娘に事情を尋ねるが、手掛かりは得られなかった。そのとき、烏衣橋の尤という老婦人が殺されたという一報が入り、鋤芑らはふたたび捜査に向かう。

郭家に戻ると、殷氏が樹に首を吊ろうとしているのを鏡花が見つかる。鋤芑は遺失物が樹の下の枯井戸の中だと喝破し、遺体とともに盗難品が見つかる。

殷氏によると、郭家には昔、馬勝財という使用人がおり、殷氏は馬と通じていた。烏衣橋の尤家の僧坊を利用してよく密会した。ある日、郭一才が、勝財に、主人の手紙を盗むことを提案し、悠文らに睡眠薬を飲ませ、彼らが寝ている隙に盗む。銀2千両も手に入り、それは井戸に隠した。また、疑いの目を逸らすため、神像を部屋に持ってきた。さらに、主人を酔わせて装飾品の在り処を聞きだし、それも盗んでまた井戸に隠した。しかし、逃亡計画を老婦人に聞かれ、勝財が婦人を殺す。殷氏は打つ手なく、勝財を殺して井戸に放り投げたのであった。

第3篇では、それまで話を語るだけだった女性たちが、みずから事件の調査をする。郭家に強盗が入ったという知らせを受けて、彼女らは次のように反応する。

わたしと慧真、絳英らは、小躍りして言った。「これは探偵の格好の素材じゃありませんこと？一緒にそれを観に行きましょうよ。」⁴¹

探偵の話を語り合っていたところに実際の事件の話が舞い込んでくるためか、彼女らは小説で読んだ探偵の真似事を、面白半分にやろうとしているかのようである。しかし、彼女らの読書体験は、目の前の事件について考察する一助となっている。そのことは、郭家に神像が出現した際の、黎采芙と鋤芑の会話からうかがうことができる。

わたしは鋤芑に言った。「まったく^{ナポレオン}拿破崙像事件を想起させますわね。」鋤芑は「どうして思い出さないことがありますでしょうか？」と言った。わたしは言った。「この事件は類似しているのかしら？」鋤芑は言った。「そうだとしたら、どうしてそれを郭家に置いたのでしょうか？」わたしは言った。「もしかすると、郭家におかしな出来事が起こると聞いたのは、ただそれによって形跡を隠すために過ぎないんじゃないかしら。」鋤芑は笑って言った。「遠ざかりましたわね。」⁴²

「拿破崙像事件」とは、ホームズ物語の翻訳「竊毀拿破崙遺像案」（邦題「六つのナポレオン」）のことだろう。早くは周桂笙が1904年に「歇洛克復生偵探案」の題で翻訳している。「竊毀拿破崙遺像案」とこの話の共通点は、「像が盗まれる」というモチーフくらいなのだが、ここで重要なのは、清末期に実際に翻訳されていた探偵小説

を彼女たち登場人物が読んでいること、そして、彼女らが自分たちの世界で生じた事件について考察する際に、その小説を想起していることである。

さきほど、第2篇を論じる際に、旧小説（『西廂記』）を読み、それに悪影響を受けた男の話を取り上げた。それに対し、ここでは、彼女らが新小説（探偵小説）を読み、その影響のもとに探偵として行動していることが示されている。言わば、当時の理想的な新小説の読み手の姿が、探偵という役柄を借りて描かれているのである。

井戸の中から盗まれた金と装飾品を持ち帰って悠文に返す場面で、女性たちは「中国女探偵の凱旋を報告する」⁴³。この一文は、彼女らこそがこの小説の題名どおりの、本当の意味での「中国の女探偵」であることを物語っている。

8. 西洋医学と探偵——鋤芟の探偵像について

鋤芟は、当初は他の女性たちとともに事件の解明に乗り出すものの、途中から単独での捜査を展開し、ただひとり、ホームズさながらに事件の真相にたどり着く人物である。そして、捜査や検視にあたっては、その知識と洞察力が遺憾なく発揮される。

その一例を紹介すると、郭一才の検視の場面で、鋤芟は、死体の刀傷の状況から、犯行が突発的なものではなかったことを喝破する。

鋤芟は言った。「犯人の用いた刀は、よくある芝刈りや調理で用いられる刀ではありません。その刀はきつととても長く、かつ極めて鋭いものですが、刃の形はそれほど尖ってはいません。」次克は言った。「どうしてそれがお分かりなのです。」鋤芟は言った。「死者の傷跡を見ればわかります。よくある芝刈りや調理に用いられる刀ならば、その刀はとても短く、傷跡が一寸余りにも至るということはありません。刃の形がかなり尖っていたとしたら、傷跡は深くなり、決して広がりはしません。ですから、犯人が用いた刀は、その形が最近の人が腰に帯びている刀と多少似ているのだとわかります。もし人を殺そうという気持ちが無ければ、それを携えてどうしようというのです？」⁴⁴

こうした鋤芟の洞察や捜査の在り方は、呉次克の言葉を借りれば「本当に精密で細かい」ものだが⁴⁵、注目すべきは、事件の捜査とは全く関わりのない場面においてこ

そ、彼女の探偵としての能力の高さが示される点である。それは、悠文が卒中で倒れた際に、鋤芑が症状の診断と薬の処方をめぐって、繆という医者と口論する場面である。鋤芑は悠文の脈診を終えると、繆医師の見立てに異論を唱える。

鋤芑は言った。「西洋人はこの種の病にかかると、巴豆油を用いて解熱します。いまはあえてそれを使わずとも、大黄五錢を用いれば、解熱することができますよ。」繆医師は大笑いして言った。「これぞまさしく『人を殺すに刀を用いず』というやつだ。大黄や巴豆は普通の人でさえ使うのを避けるのだから、病人は言うまでもない。少年でさえ体力が削られるのだから、老人は言うまでもない。」鋤芑は言った。「これはそうではありません。およそ解熱の薬には、清補の効能があります。西洋人が中風を治すときは、だいたいそうするのです。百にひとつも誤りはありません。」(中略)「ひとまず議論はやめましょう、しかし、いまの病は大熱の症状です。しかし、先生は参蓍でこれを補い、桂附でこれを温めました。それはどういうご意向なのですか。」繆医師は述べた。「それは五行の精微な理です。」鋤芑は失笑を禁じ得ず言った。「病理は五行とどういう関係があるというのですか。」(中略)「五行の説は、もともと根拠とするに足りません。それを医の理に加えると、さらに根拠は無くなります。……」⁴⁶

この後の場面では、顧というもう一人の医者が現れ、再度脈診を行う。その結果、鋤芑の処方した「大黄」について、五錢は多いものの、三錢ならば良いとし、鋤芑の説を支持する。そして、顧医師と鋤芑が見立て通りに悠文に薬を飲ませると、悠文はやがて意識を取り戻す。この一連の場面では、鋤芑の見識と治療の正しさが結果として示されている。繆医師と鋤芑の見立てが、それぞれどの程度当時の学問的成果を反映しているのかについては、いまは措くとして、ここでは、繆医師と鋤芑が、同じく脈診という方法で診断し、漢方を処方していながらも、その立脚している医学知識において、中国医学と西洋医学という形で対立していることに注目したい。

いわゆる「西洋の衝撃」以後、西学東漸の流れは、中国と西洋の対立をさまざまな学問分野にもたらした。それは医学についても例外ではない⁴⁷。中国医学では、古来より、人体の仕組みや病理の理解、診断や治療の在り方を、陰陽五行に基づいて説明してきた。それに対して、西洋医学ではそれらを科学によって説明する。

両者の違いが西洋医学書の翻訳によって顕在化したことについて、自然科学書の翻訳家として知られる徐雪村（徐寿）は、科学雑誌『格致彙編』に寄稿した「医学論」（1876）と題する一文の冒頭で、次のように記している。

以前、西洋人の合信氏が管茂才とともに西洋医学の書物数種を翻訳し⁴⁸、病気の根源と変化、および治療法が明確なものとなった。西洋医学の病気の治療は、たしかに自信があり、中国医学の徒が陰陽や五行の生克を論じるのが、空虚な話のようであるのとは違うということを、世の読者はみな知ったのである。⁴⁹

科学的根拠に基づく西洋医学と対置させられたとき、中国医学はその陰陽五行を基本とした側面が批判の対象とされた。当時の論者の中には、兪樾のように、中国医学を排除すべきであるとする「廢医論」（1879）⁵⁰を唱えた者もいたが、必ずしもそうした極端な論者ばかりだったわけではない。中国医学と西洋医学それぞれの良し悪しを認めたいうで両者を折衷しようとする、「中西医匯通（交流）派」もいた⁵¹。

以上の点を踏まえると、先に引用した場面における鋤芟は、西洋医学の知識を活用しながらも、診断の際には脈診や漢方といった中国医学の方法を用いており、匯通派のような態度に見えないこともない。しかし、五行思想を批判している点からは、鋤芟の伝統的な中国医学に対する批判的な態度が窺える。

各篇に登場した3人の探偵役は、いずれも推理の展開は確かに論理的だが、鋤芟については、西洋的・科学的な知識を持つという点において、それを持たない前二篇の探偵役とは性質的に異なる。つまり、第1篇と第2篇の探偵が、男の能吏と女の探偵という形で対立しているとするならば、第3篇とそれ以前の二篇における探偵は、西洋に関する知識を持つ探偵とそれを持たない探偵という形で対立しているのである。

8. 能吏から探偵へ——『中国女偵探』の構成について

ここまで、『中国女偵探』に収録された三篇の話を、順を追って分析してきた。それを踏まえつつ、この作品の構造について考察したい。

上述のとおり第1篇「血帕」は、薇園の父親が探偵役であり、「能吏伝」ともいえるべき話である。薇園の母も探偵役に助言するなど活躍を見せており、女探偵の話に移

行するための「入話」として位置づけられる。第2篇「白玉環」は、女の盧嬢嬢が「中国の女歇洛克^{シャーロック}」として事件を解決する話であり、いわば「正話」にあたる。このふたつの話は、男と女、能吏と探偵、旧と新といった複数の対立項によって、対置させられている。第3篇「枯井石」は、女探偵の話こそ描いてはいるが、前のふたつの話とはまったく異質なものである。

作中の語り手たちが、みずからの語る話を小説のように見なしているという点はすでに述べた。語り手により語られる第1篇と第2篇は、言うなれば、物語世界の中の物語世界ということになる。それに対して、第3篇はこれらの世界の外側の世界、語り手の世界である。このような仕方、この作品は入れ子構造になっている。

我々『中国女偵探』の読者からすれば、これらの世界はいずれも物語世界に他ならないのだが、小説内の語り手の視点に立った場合、ふたつの話と第3篇とは、「物語世界」と「現実世界」という関係にあると言える。つまり、小説という「虚構」の中に、語り手の住む「現実」の世界と、語り手によって語られる「虚構」の世界とが、さらに同居しているのである。

このような、小説内の「現実」と「虚構」の関係は、小説の読み手たるわれわれの現実世界と物語世界の関係に照応させられていると考えられる。つまり、この小説は、現実世界にいる新小説の読み手が物語世界を眺める視線を描き込んだ、いわばメタフィクション的新小説とでも言うべき作品なのである。

このとき第3篇は、第2篇とは異なる仕方、第1篇と対立関係にあるとすることができよう。語り手の女たちのいる現実世界と、彼女らが外側から眺める「能吏伝」という物語世界との「距離」は、探偵と能吏、新小説と旧小説の「高低差」を表すものにほかならない。そして、その「高低差」は、男と女の序列を顛倒させることによって、より明確なものとして形成されている。

女性優位の世界を構築すること自体は、別段この小説に特有のものではない。そうした事例としては、『紅樓夢』や『鏡花縁』といった小説を想起しても良いだろうし、清末期には、女性解放運動を背景として、伝統的な女性像とは異なる、いわゆる「新女性」が、数多の小説に様々なかたちで描かれている。

ここで注目すべきは、「能吏伝」と探偵小説とを対置させるという小説全体の構造が、全能ではない男の能吏と全能な女の探偵という対立項によって、効果的に支えられていることである。さきほど、第2篇の探偵役の盧嬢嬢を称揚する仕方が、「異郷

に住んでいて一時的に帰郷していた一介の女子がこれを解決した」というように、困難な条件のもとで能力を発揮することでその人物の能力の高さを示す方法であることを述べた。この点については、新小説を読んだり、推理をしたり、事件を解決するといった、その他の女性たちについても同様である。

本章の前半で鋤芟の人物設定について論じた際に、「文武両全」であるかのように見えるが読書を好まないということを取り上げた。しかし、この小説を最後まで読んでわかることは、鋤芟が読書を好まないにも関わらず、豊富な知識を持ち、誰よりも優れた洞察力と思考力を発揮するということである。これもまた、困難な条件のもとで能力を発揮することで能力の高さを示すという手法であり、女性を探偵にするというこの小説の設定と、その目指すところにおいて共通していると見るべきであろう。

おわりに

本稿では、『中国女偵探』という小説の仕掛けを解き明かし、その仕掛けと同時代の文脈が、いかなる仕方で関わっているのかについて論じた。

同小説は、吳趸人『中国偵探案』のような、能吏が事件の謎を解くという、「能吏伝」とも言うべき探偵小説を、より緻密に描くことから始める。そのうえで、女性の謎解きへの参与という共通項をもとに、女探偵が登場する、より探偵小説らしい話へと移行させ、最終的には、それら物語世界を俯瞰する語り手たちが探偵となる話を配置することで、「能吏伝」から探偵小説への跳躍を試みているのである。

第Ⅱ部では、こうした探偵小説への跳躍がいかなる仕方で着地を見るのかについて、複数の事例をもとに考察する。

注

¹ 『中国女偵探』のうち、1 篇目のみが、以下の書物に収録されている。『中国近代文学大系』2 集 9 卷「小説集七」（上海書店、1992）、『中国近代小説大系 78』短篇小説卷（上）（百花洲文藝出版社、1996）、于潤琦主編『清末民初小説書系・偵探卷』（中国文聯出版公司、1997）、黄霖等編『古代小説鑑賞辞典』下冊「明清」（世紀出版集團、上海辞書出版社、2004）。

また、日本の雑誌『新青年』上に、同書の 1 話目と 2 話目の翻訳が掲載されている。武進呂俠著「白玉環」（『新青年』1930 年夏季増刊号〔11 卷 11 号〕）、呂俠著、阿羅本洋訳「絶命血書」

- (『新青年』1935年夏季増刊号〔16巻10号〕)。同翻訳の存在は、ウェブサイト「アジアミステリリーグ」第2章第3節「同時代の日本から見た当時の中国探偵小説界」より知った。同サイトのURLは以下のとおり。http://www36.atwiki.jp/asianmystery/pages/108.html#id_29eee40b (最終確認日2018年11月29日) なお、同翻訳は、原文に忠実な翻訳というよりも抄訳に近い。
- 2 『中国女偵探』の作者については、張耕華、李永圻「『中国女偵探』的作者呂俠就是呂思勉」(『博覽群書』2009年第11期)、鄔国義「青年呂思勉与『中国女偵探』的創作」(『華東師範大学学報〔社会哲学版〕』2009年第5期)などが論じている。
 - 3 1914年に『中華小説界』第1年第3期から第8期にかけて掲載された「小説叢話」のこと。陳平原、夏曉虹編『二十世紀中国小説理論資料(第一卷)』(北京大学出版社、1997)、呂思勉『呂思勉論学叢稿』(上海古籍出版社、2006)などに収める。呂思勉の文学理論に関しては、李磊明「呂思勉小説理論探微」(『華東師範大学学報〔社哲版〕』1999年第3期)、関詩珮「呂思勉「小説叢話」対太田義男『文学概論』的吸入——兼論西方小説芸術論在晚清的移植」(『復旦学報』、2008年第2期)などに詳しい。
 - 4 ここでは、『申報』光緒三十三年八月初七日(1907年9月14日)の広告を参照した。原文「其情事之奧奇、鉤距之精深、及種種手段之靈妙、變化百出、誠為偵探界中生色也。」なお、前掲「青年呂思勉与『中国女偵探』的創作」は、同時期の『神州日報』や『新聞報』にも同様の広告が掲載されていたことを指摘している。
 - 5 半「『七首』弁言」(『中華小説界』第1年第3期、1914)。原文「偵探小説、來自西洋、類皆勾心斗角、奇巧驚人。唯中西社會之狀態不同、故閱者每多隔閡。……(中略)……後又見陽湖呂俠所著之《中國女偵探》、內容三案均怪誕離奇、得未曾有。顧呂本書生、於社會之真相、初不甚了了、故其書奇誠奇矣、而實與社會之實況左。用供文人學士之賞玩、未嘗不可、若言偵探、則猶未也。故謂中國無偵探小説、不可謂過當語。」
 - 6 阿英『晚清小説史』(上海商務印書館、1937)。いま、阿英『晚清小説史』(作家出版社、1955)115頁を参照。
 - 7 『中国女偵探』(商務印書館、1907)、1頁。原文「予少有僻性、凡女工酒食之屬、皆予所不好、所好者、惟讀書耳。」以下、『中国女偵探』からの引用は同版本に依拠する。
 - 8 「新女性」という語は、新式教育を受けている、学問をする、自由結婚をする、女性の権利を主張するといった、解放的で伝統的な女性とは異なる女性を指して用いられる語句である。黄錦珠『晚清小説中的新女性研究』(文津出版、2005)第一章第三節「新女性」釈義を参照。なお、彼女らが新女性であることは、第1篇が終わった後、話を続けるかどうかを投票によって決めるところなどにも表れている。(投票)という語句や制度は、中国では19世紀の末になってようやく見られるようになるもので、海外由来の決議の方法であった。黄河清編著『近現代辞源』(上海辞書出版社、2010)、747頁を参照。
 - 9 同上、2頁。原文「其性質與予頗異。雖亦讀書、而不甚好、惟好習武事。馳馬試劍無弗能。」
 - 10 内野熊一郎『孟子』(新釈漢文大系、明治書院、1962)を参照。
 - 11 清末当時、探偵は見識と人格とを兼ね備えた、全能な人物だと考えられていた。たとえば、定一「小説叢話」(『新小説』第13号、1905)では、次のように述べられている。「探偵の資格もまた、非常に形成するのが難しい。探偵をする学問があり、探偵をする素質があり、探偵をする能力があり、三者が揃ってはじめて完全なものとなるのであり、ひとつでも欠けてはならない。」原文「偵探之資格、亦頗難造成。有作偵探之學問、有作偵探之性質、有作偵探之能力、三者具始完全、缺一不可也。」
 - 12 周樂詩「論清末民初女豪傑小説的產生」(『中国現代文学研究叢刊』2011年第11期)を参照。

- 13 同上、2 頁。原文「座間各縱談諸種新小説以為快。予曰：“中國小説之美，不讓西人，且有過之者。獨偵探小説一種，殆讓西人以獨步。此何耶？豈中國偵探之能力，固不西人若歟？”薇園曰：“否，否。以吾所聞睹，則中國人于偵探之能力，固有足與西人頡頏者。盍請為子述之。”於是衆乃肅然靜聽。」
- 14 『新民叢報』第 3 年第 7 号。原文「吾國視泰西，風俗既殊，嗜好亦別。故小説家之趨向，迥不相侔。尤以偵探小説，為吾國所絕乏。不能不讓彼獨步。蓋吾國刑律訟獄大異泰西各國。偵探之說，實未嘗夢見。」
- 15 俠人、『新小説』第 13 号（1905）。原文「唯偵探一門，為西洋小説家專長。」
- 16 『中国女偵探』3 頁。原文「吾父之所以得能吏名者，實亦以此。」
- 17 原文「此敏腕銳心之金富，決不因此而失望」（同上 13 頁）／「眼光銳敏之金富，其所見必不失誤」（同上、14 頁）／「時有出於魯莽者」（同上、17 頁）。
- 18 同上、13 頁。原文「此案之所以獲水落石出者，殆吾父一人之力也。」
- 19 同上、21 頁。原文「誤矣。君其誤矣。夫謂此二女子之刺血為胎有才書者，其胎之當在於何時歟。若謂在有才未下鄉以前則其創痕不應猶新，若謂在有才既下鄉以後，則又誰為之傳遞者。夫此固非可託人之物也。然則此案與有才殆將無涉＝無涉＝。」引用中の「＝」と「＝」の記号は同じ台詞が繰り返される際に、本文中のように用いられている。
- 20 同上、21 頁。原文「衆皆驚服曰：“妙才＝妙才＝偵探之妙才＝偵探之妙才＝。薇園亦舉酒相屬曰：“妹真偵探才也。其將為東方之女歌洛克歟，未可知也。”」
- 21 同上、31 頁。原文「偵探者能十得七八、或五六，得其辦案之端緒而已。必謂舉全案而燭照數計之，無是理也。」
- 22 同上、31 頁。原文「神奇哉此案，神奇哉此案。賢能哉是官，賢能哉是官。是直居堂皇而為偵探者也。又豈西方之歌洛克所可方哉。」
- 23 この言い回しは、アレクサンドル・デュマが新聞連載した『パリのモヒカン族』（1854-57）のジャッカル警部の台詞「女を探せ！」が始まりとされる。甲賀三郎『犯罪・探偵・人生』（新小説社、1934）引用の同作品の英訳者による解説を参照。同書の漢訳の存在は確認できていないが、これと同様のフレーズは、黒岩涙香「無慘」（1889）に「兎に角仏国の探偵秘伝に分り難き犯罪の底には必ず女ありと云って有るから女に關係した事柄かとも思う」とあるのが見え、同作品には翻訳がある。1893 年に『三筋の髪』の題で上田屋から再出版されたものを底本とした翻訳であり、涙香女史著、冷血訳『偵探譚』第 3 冊「三縷髪」（開明書店、1904）である。同翻訳は未確認だが、作品中の同フレーズの翻訳を踏まえている可能性が考えられる。
- 24 『中国女偵探』、32 頁。原文「捷真乃太息曰：“異哉是案。吾因此而彌憶西方大偵探家之言也。曰：‘凡奇案必與女人有關係。’”慧真曰：“斯固然也。雖然此案固猶婦人為構成之材料，而未嘗以婦人為主動力也。吾請更述一案之以婦人為主動力者。則真可以當中国之女歌洛克之名矣。”」
- 25 原文「案情之奇幻至此哉」（同上、27 頁）、「異哉是案」（同上、32 頁）。
- 26 定一「小説叢話」（『新小説』第 13 号、1905）。原文「吾喜讀泰西小説，吾尤喜泰西之偵探小説。千變萬化，駭人聽聞，皆出人意外者。」
- 27 『中国女偵探』38 頁。原文「衆聽此怪異之事，不禁駭然曰：“異哉。天下之竟有若此其可怪者，是不特可以作偵探案，并可以作續齊諧，新聊齋矣。”慧真曰：“以如是奇異之事而卒不越於人事之範圍，亦可見天下無怪異之事，而向之所共驚為神怪者，特由真理之尚未發現耳。”」
- 28 「続齊諧」といえば、袁枚『子不語』の別称としても知られているが、ここでは具体的な作品を指しているとは考えにくい。ちなみに、「新聊齋」についても、『新小説』第 7 号（1903）に

掲載された、狄葆賢による同名小説がある。

- ²⁹ 日本の明治期においても、探偵小説が怪奇ものの一種として受容されていた事例がある。吉田司雄「エドガー・アラン・ポー「モルグ街の殺人ノート」——探偵小説翻訳史稿（1）」（『工学院大学共通課程研究論叢』第37巻1号、1999）を参照。
- ³⁰ 『中国女偵探』59頁。原文「何所云之東方女福而摩斯，尚未出見耶。」「ホームズ」の表記としては、“福爾摩斯”がよく見られるものであり、“福而摩斯”は珍しい。
- ³¹ 同上、70頁。原文「“此等深奥曲折之案，雖使福而摩斯遇之，亦當束手。顧乃以一僑居異地，暫歸故郷之女子探得之，誰謂華人之智力，不西人若歟。”」
- ³² 同上、43頁。原文「鋤芑曰：“試一研究之。此畫何以埋之地中，而既自地中出，何以又竊之去也。此問題若解決，則於此案思過半矣。”」
- ³³ 同上、70頁。原文「鋤芑曰：“此等案情，貌似艱深，實夾有可尋之端緒。試思一裸形畫像也，既埋之地中，又啓箱竊之以去。此等事非家賊與外賊勾結，其誰為之。迨小婢送茶給長夫，而遙保遽攀廉而入。則其中有所不足久矣。又何難窺其隱情哉。”」
- ³⁴ 『中国女偵探』44-45頁。原文「午後獨坐書室中，閱西廂記。不覺心蕩，忘其身在憂患中矣。適一婢送茶至，立書案旁，不去。風致嫣然。長夫遽以手招之曰來。予與汝言。婢不知其故，遽前，長夫遽摟之入懷。婢大駭，將呼，長夫以手掩其口。」
- ³⁵ 『西廂記』の変遷については、黄冬柏『『西廂記』変遷史の研究』（白帝社、2010）の序論「『西廂記』変遷史概説」を参照。
- ³⁶ たとえば、[清]汪棣香「勸毀淫書信録」や、[清]余治「得一録」卷十一「計毀淫書目単」などの掲げる禁書のリストには、いずれも“西廂（即六才子）”という記載が見える。また、[清]梁恭辰『勸戒録』卷四「西廂記」が引く汪棣香の言葉の中にも、「思うに『水滸伝』は誨盜で、『西廂記』は誨淫であり、どちらも邪悪な書物のなかでもっとも恨むべきものである（蓋水滸傳誨盜，西廂記誨淫，皆邪書之最可恨者）」という一文が見える。いずれも原文は王利器輯録『元明清三大禁毀小説戯曲史料（増訂本）』（上海古籍出版社、1981）所収版に拠った。なお、前掲『『西廂記』変遷史の研究』第7章「『西廂記』の批評——清・金聖嘆『第六才子書』を中心として——」は、『西廂記』の淫書としての評価に対する金聖嘆の批評の在り方を論じている。
- ³⁷ 『中外小説林』第1年第15期（1907）。いま、黄世仲、黄伯耀『中外小説林 上冊』（夏菲爾国際出版公司、2000）695頁を参照。
- ³⁸ 『清議報』第1冊（1898）。原文「不出誨淫誨盜兩端。」
- ³⁹ 『新民叢報』第20号（1902）。原文「蓋今日提倡小説之目的，務以振國民精神，開國民智識，非前此誨盜誨淫諸作可比。」
- ⁴⁰ その後、『新小説』には第7号より小説批評欄「小説叢話」が設けられ、そこでは、単純に旧小説の再評価が行われるようになった。この時期は、単に旧小説批判ばかりが行われていたというわけでもない。「小説叢話」における小説批評の性格については、齋藤希史『漢文脈の近代 清末＝明治の文学圏』（名古屋大学出版会、2005）第4章「小説叢話」の伝統と近代」に詳しい。
- ⁴¹ 同上、70頁。原文「予與慧真絳英等雀躍曰：“此豈非一偵探之好資料耶。予輩盍同往視之。”」
- ⁴² 同上、81頁。原文「予謂鋤芑曰：“頗憶拿破崙案乎。”鋤芑曰：“如何勿憶。”予曰：“此案得毋類是。”鋤芑曰：“然則，何為置之郭宅。”予曰：“或聞郭宅有怪異事，特以此掩其形跡耳。”鋤芑笑曰：“遠矣。”」
- ⁴³ 同上、113頁。原文「奏中國女偵探之凱旋」。
- ⁴⁴ 同上、103-104頁。原文「鋤芑曰：“兇手所用之刀，非尋常樵採烹調所用之刀也。其刀必甚長，且極鋒銳，但刃形亦不甚尖。”次克曰：“何以知之。”鋤芑曰：“觀死者傷痕可知也。如係尋

常樵採烹調所用之刀，其刀必甚短，傷痕安能深至一寸有餘。如刃形甚尖，則傷痕深而必不能闊。故知兇手所用之刀，其形式與近人所佩之腰刀畧相似，非預存殺人之心，攜之何為。」

- ⁴⁵ 吳次克は鋤芟に対して、「あなたの事件捜査は本当に精密で細かいですね（君探案真精細哉）」と述べている（同上、104頁）。
- ⁴⁶ 同上、100-101頁。原文「鋤芟曰：“西人遇此等病，率用巴豆油瀉之，今即不敢用，亦宜用大黃五錢，以瀉其熱。”繆醫大笑曰：“此真殺人不用刀矣，大黃巴豆，平人尚且忌之，何況病伏，少年且虞刻削，何況垂暮。”鋤芟曰：“此則不然，凡瀉潤之藥，必有清補之力，西人治中風，大率如此。百不一誤。”（中略）“此姑勿論，但現在病者系大熱之證，而先生以參耆補之，桂附溫之，系屬何意。繆醫曰：”此五行之精理也。“鋤芟不禁失笑曰：“病理與五行有何干涉。”（中略）五行之理，本不足憑，以入醫理，更爲無據。……」。
- ⁴⁷ アヘン戦争以後の中国医学と西洋医学との関係に関しては、以下の論考を参照した。傅維康著、川合正久編訳『中国医学の歴史』（東洋学術出版社、1997）、趙洪鈞『近代中西医論争史』（安徽科学技術出版社、1989）、熊月之『西学東漸与晚清社会』「第十九章 社会反応剖析」（上海人民出版社、1994）、『中国医学通史 近代卷』（人民衛生出版社、2000）、艾智科「晚清の中西医匯通思想及其走向」（『歴史档案』2010年第2期）。
- ⁴⁸ 合信は、イギリス人ベンジャミン・ホブソン（1816-1873）のこと。ホブソンは、ロンドン協会の宣教医師となったのち、1839年にはマカオに渡り、医療に従事する。後に香港や上海へと移り住み、医院の設立や運営に携わった。その著作の翻訳に、『全体新論』（1851）、『西医略論』（1857）、『内科新論』（1857）、『婦嬰新説』（1858）、『博物新編』（1859）などがあり、これらのはのちに『合信氏五種』としてまとめられている。管茂才（?-1860）は、本名は管嗣復、字は小異、江蘇上元（今の南京）の人。桐城派の文人として知られた管同の息子。管が翻訳に携わったのは、上記のうち、『西医略論』『内科新論』『婦嬰新説』の3冊であり、いずれもホブソンが上海にいた時期に翻訳されている。中国における西洋医学書の受容に関しては、本章注51掲載の各参考文献を参照。また、『合信氏五種』に関しては、趙璞珊「合信『西医五種』及在華影響」（『近代史研究』1991年第2期）に詳しい。
- ⁴⁹ 『格致彙編』（1876年第3期）掲載。原文「昔西士合信氏與管茂才繙譯西醫書數種，病之根原、傳變以及治法朗若列眉，世之讀者皆知西醫之治病確有把握，非如中醫之徒講陰陽五行生尅，爲空虛之談也。」
- ⁵⁰ 「廢医論」は、俞樾『春在堂全書』「俞楼雜纂」に卷四十五として収められている。
- ⁵¹ 「中西医匯通」派と一口に言っても、在り方はそれぞれ異なる。折衷案を唱えた代表的な人物に唐宗海がおり、著作に『中西匯通医書五種』がある。唐は中国医学の理論を西洋医学の知識で解釈しようとしたが、その説は牽強付会であったとされる。それに対し、朱沛文は、中国医学と西洋医学のそれぞれに長短を認めたいうで、両者には相通するものと疎通しがたい部分があると主張し、慎重な態度をとった。前掲『中国医学の歴史』第10章「中西医交流派」617-618頁、および前掲『中国医学通史 近代卷』第4章「中西医匯通之探索」を参照。

第Ⅱ部

「ホームズ」を生み出したかった中国人

第5章 「茶花女」と恋に落ちた「ホームズ」

——天民「失珠」

はじめに

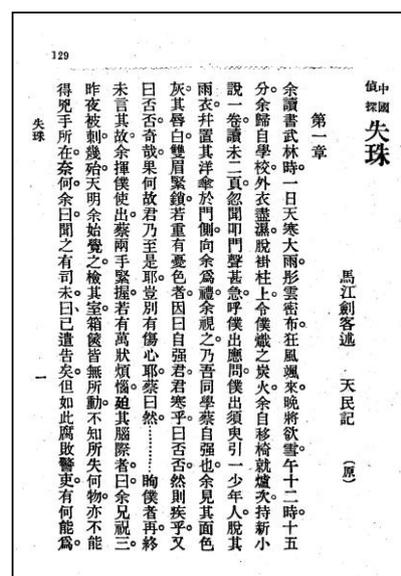
第I部では公案小説の基礎のもとに探偵小説が生み出される際の、ふたつのジャンルの交差の状況について論じてきた。第II部では、中国探偵小説創作におけるひとつの方法として、ホームズ物語を目指そうとする動きがあったことを見てゆく。公案小説から離れて探偵小説を目指そうとした結果、どのようなものが生み出されたのだろうか。

本章では、馬江劍客述、天民記「失珠」（1908）を取り上げる。この探偵小説は、『月月小説』の第15号から第17号まで3号にわたり2章ずつ連載された。文言で書かれており、全6章から成る。序文の類いは付されていない。

天民という筆名の文人による作品には、ほかに『月月小説』第9号から第24号（1907.10-1909.1）にかけて、間を置いて数回にわたり掲載された、「侠情小説 岳群」がある。掲載誌はともに『月月小説』雑誌であり、同一の作者である可能性が高い。しかし、天民という字、あるいは号を持つ当時の文人は数名おり¹、「失珠」の作者については、現段階では特定できない。

この作品の注目すべき点のひとつは、タイトルに付された角書きが「中国偵探」となっていることである。『月月小説』は、1906年に創刊されて以来、翻訳探偵小説を数多く掲載してきた。「海底真珠」²、「盗偵探」³などが例として挙げられる。そこへ来て、第15号になり、ようやく翻訳ではない中国の探偵小説であることを示す角書きを持つ小説が登場した。このような角書きを持つ小説は、『月月小説』中には「失珠」を除いて他にはない⁴。

「失珠」以前に『月月小説』に掲載された探偵小説としては、本論第3章で取り上げた周桂笙「上海偵探案」があるが、「中国で最初の探偵小説」を謳ってはいたものの、その肩書きは、他の翻訳探偵小説と同様に探偵小説のままであった。この点を踏



「失珠」第1頁

まえるならば、周桂笙「上海偵探案」が掲載された段階では、海外の探偵小説と中国の探偵小説を分けることを、編集部〔あるいは探偵小説の書き手〕は考えていなかったものと推察される。その点、「中国偵探」という肩書きの小説が掲載されたことは、周桂笙「上海偵探案」以降に見られる、探偵小説におけるひとつの「変化」だとも考えうるだろう。

この小説は、おおきくふたつの部分に分ける事ができる。すなわち、前半4章の「探偵小説」の部分と後半2章の「言情小説」⁵の部分である。この点について、王燕氏は「ホームズ物語」と「巴黎茶花女遺事」を意識的に模倣しているのだと指摘する。王氏は前半3章と後半3章をそれぞれ趣向の異なる小説として捉えたうえで〔章の分け方が異なる点については後述する〕、両者の語調の差が大きいことを指摘し、この小説を「勝手気ままに機械的に模倣した結果、風格のまったく異なる二種の作品が無理やり組み合わせられており、どっちつかずで、いいかげんである」⁶と評している。

たしかに、前半と後半は趣向が異なっているのだが、それぞれの部分は「機械的に模倣」されただけなのだろうか。そして、「無理やり組み合わせられて」いるだけだとするのは適当なのだろうか。以下、創作上の特徴について考察を試みたい。

1. 「失珠」の体裁について

まずは、この小説がどのような体裁のものなのかを整理しておこう。ここには、ひとつ注目すべき点がある。それは、作者のクレジットに〈馬江劍客述、天民記〉と記されていることである（図1）。〈馬江劍客〉という人物がみずからの体験談を述べ、それを天民がしたためた、という体裁をとっており、「余」という一人称^{わたし}によって語り進められる。この人物が馬江劍客その人であるという設定は、第3章で、ヒロインの陳君亜が「余」のことを〈馬江劍客、……〉と呼びかけることではじめて明らかとなる。しかし、名前が登場するのはその一回きりである。

ある人物による語りを「記録する」という形式について考えると、時期的に先行する周桂笙「上海偵探案」（1907）のことが想起される。周桂笙は「上海偵探案」を執筆するにあたり、実在した租界警察の「現状」を「記録する」という体裁をとった。そして、その考えは、中国の探偵小説は「記録」から始まるべきであり、想像は排除すべきだ、との判断に基づくものだった（本論第3章を参照）。

中国では小説を事実の記録と捉えること自体は珍しいものではなかったが、清末期の翻訳探偵小説については、先に述べたように、吳趸人による「事実の記録を徹底してはおらず、想像もたしかに多くを占める」⁷、あるいは周桂笙による「外国の探偵小説は、十分の九は想像から来ている」⁸といった記述が見られ、想像の部分が多いということが指摘されていた。そして、吳趸人も周桂笙も、それを知ったうえで、みずから探偵小説を書くにあたっては、「事実の記録」という体裁を採ることによって翻訳探偵小説との間に一線を引いたのである。

「失珠」が「探偵」による語りを「記録した」という体裁をとっていることは、当時の探偵小説の執筆者たちが「事実の記録」であることを標榜していたこととも関わりがあるものと思しい。「想像」を挟まないという、周桂笙の提唱する探偵小説の理想形を、部分的にではあれ継承している可能性もあるだろう。

2. 観察、推理、尾行——小説を探偵小説たらしめるもの

前半部の創作の在り方を論じるにあたって、まずは探偵小説部分の筋立てを述べたい。全6章のうち、前4章が探偵小説の部分にあたる。

ある寒い雨の日、「余」が学校から帰宅すると、級友の蔡自強が訪ねてくる。聞けば、蔡の兄の祝三が、昨夜何者かに刺され、その犯人を捜すのに協力を仰ぎに来たのだという。二人が蔡の家へと向かうと、同じ建物に住む王が犯人だという証言が出てくる。王は蔡自強の弟によって拷問にかけられていた。しかし「余」は、王は犯人ではないと考え、調査に乗り出す。調査の過程で、犯人が真珠を盗んでいたことも発覚した。「余」は手掛かりをもとに推理を展開し、王が犯人ではないということを論証する（第1章）。

真珠を盗んだ犯人の服装の手掛かりを得た「余」は、蔡家への聞き込みから、服装の主が蔡の親戚の朱であったということ突き止め、急いで後を追う。「余」は、蘇州行きの船に乗り込む乗客の中に、変装した朱と思しい人物を見つける。「余」は船のチケットを購入して乗り込み、尾行を続け、蘇州のとある茶館へと潜入する。（第2章）。

茶館の一室には、3年前の級友、陳君亜がいた。そこへ朱が訪ねて来たのだが、朱の言動に対して君亜は怒りを露わにする。朱は盗んだ真珠を君亜に渡して機嫌をとろうとするが、それもかなわなかった。両者のやりとりの後、君亜と「余」は再会を果たすが、それも束の間、「余」はふたたび朱を尾行しに行く。しかし、服装がぼろぼろだったため、盗人と間違われ、牢獄に入れられてしまう(第3章)。

君亜は「余」に差し入れをし、看守にも賄賂を渡す。君亜の取り計らいによって早く出所できた「余」は、県知事に朱が真犯人であることを訴え、朱はようやく裁かれる。事件は終わったかに見えたが、「余」は蔡の家を出て君亜の家に向かう途中、後頭部に一撃を食らわされ、気を失ってしまう(第4章)。

以上が前半のあらすじである。この小説の探偵役である「余」は、観察眼と推理によって王の冤罪を証明する。具体的には、蔡の兄が刺された現場で、「余」は現場検証をして証拠を見つけ、推理を展開する。王の無罪を証明する大きな証拠を、この数十分で手に入れたのか、と訊く蔡に対して、「余」は次のように答える。

わたしは言った。「そうです。さきほど王君と兄さんの部屋の窓には、どちらにも線香で焼かれてできた丸い穴がひとつありました。これは確かに、盗人が催眠香で人を惑わせた動かぬ証拠です。王君の(部屋の)窓に近い内側のところは、紙の色が比較的新しく、水に濡れていた以上、昨晚唾液であらたに補われたものであることは確かです。これは明らかに、盗人がこの格子の紙を破って鍵を外して窓を開け、ナイフをあの中に入れて後で、人に気づかれるのを恐れたため、紙を補い、人の耳目に触れないようにしたのです。もし兄さんを刺したのが王君だとしたら、犯人は(部屋の)内側から外側へと出るのですから、どうしてこの紙を破らなければ窓を開けられないということがあるでしょう？ これは犯人が外から来た盗人だという証拠です。盗賊は証拠を隠すのが周到である以上、ただそれが見つかるのを恐れるというのは、当然のことです。しかし、いまナイフと真珠を包む袋は、どちらも鍵のない箱の中に置かれていました。もし王君が結局のところ兄さんを刺したのだとしたら、なぜかくも人の目に留まりやすい場所に、自分が一番隠しておきたいものをしまっ、人が見つけるのを待とうとするでしょうか。これはきっと、恨みを持った人間が王君を罪に陥れようとした証拠です。

この三つの証拠がある以上、わたしはたとえ死んだとしても、かならずや王君を擁護しますよ。」⁹（第1章）

このような観察眼と推理は、シャーロック・ホームズのそれを髣髴とさせる。話自体も、吳趸人『中国偵探案』「左手殺人」（第2章）のように、左利きであることだけで犯人だと断定するような、単純な作りではない。

この後「余」は、同じく庭にあった糸くずをもとに、犯人が〈棗紫色（濃い赤紫色）〉の緞子でできた膝当てをしていると推理し、蔡の親戚の朱がそれを着ていたことを突き止める。そして、朱らしき人物をついに発見する。

午後5時になり、小さな汽船の火が消えると、汽笛が力強く鳴り響いた。汽船「彩霞」が蘇州へ向けて出発するのだ。乗客は棧橋から船へぞろぞろと乗り込む。その中のひとりの客は、雨具を羽織っており、風が前から吹きつけると、濃い赤紫色の膝当てと藍袍（青い長着）がともに露わになった。その顔を見ると、大きな眼鏡をかけ、眉はそれによって隠されており、さらにヒゲを八の字にたくわえていた。その鼻をよく見ると、朱にとてもよく似ていたため、わたしはそのヒゲは扮装で、その者こそ朱であると睨んだ。そこで跡をつけることにし、すぐに船の切符を買って乗り込み、そいつ船室の後ろの席を選んだ。¹⁰（第2章）

「余」は、蘇州に降り立った後も、朱の後を追いつけて、茶館までついてゆく。この「尾行」という行為も、探偵小説的なものであると言えるだろう。逃げる犯人が「変装」しているという点についても同様である。このような要素については、ホームズ物語の中にも、次のようなエピソードがある。「緋色の研究」（1887）¹¹の中で、事件の被害者の死体の下にあった指輪の持主を探し出すときに、ホームズは新聞で「落し物」として広告を出す。すると、ホームズが推理した犯人像とはまったく異なる老婆がやってくる。ホームズはその老婆に指輪を渡したあと、彼女を尾行するが、巻かれてしまう。その老婆は若い男の変装だった。「尾行」や「変装」といった、西洋探偵小説によく見られる要素が、「失珠」には随所に配置されている。

もう一点注目しておきたいのは、周桂笙「上海偵探案」と同様に、本来事件を解決すべきである中国の警察や官吏を批判する文面があることである。たとえば、蔡が最

初に「余」のもとを訪れて相談する場面では、次のようなやりとりが交わされる。

わたしは言った。「役人にそれ〔事件のあらまし〕を聞かせなかったのですか？」すると蔡は「すでに人を遣わせて報告させました。でも、こんなに腐敗した警吏に、何ができるというのです？ 自分で何とかしなければ、きっと真相をつかむことはできません。あなたはそもそも見聞が広い方です。どうか、わたしを助けてはもらえませんか？ あなたにご助力いただければ、その中の大事な部分がきっとお分かりになるはずです。かならず厚くお礼いたします。」¹²（第1章）

ここまでの章でも見てきたように、探偵小説では、往々にして探偵が調査の過程において中国の後進性を顕在化させるのである。

また、「余」が、拷問にかけられていた王の無実を論理的に証明し、王を救ったという一連の流れには、暗愚な人物と明察な探偵という、西洋探偵小説によく見られる対立構造が描かれているが、その裏側にも、中国式の捜査の愚かさと西洋式の新しい捜査の素晴らしさを対置させる構図が見えてくる。

3. 西洋式の人物・記号・文物——探偵小説を装飾するもの

この小説においては、さまざまな装飾物が、探偵小説的な物語世界を演出しようとしている¹³。その傾向は、主人公である「余」とヒロイン陳君亜の造型においても、明確に現れている。まず、主人公の「余」が、新たな学問を学ぶ者であることが、小説の冒頭部において示される。

わたしが杭州で勉強していた時のこと、ある日、気候は寒く大雨が降り、どんよりとした雲がたちこめ、暴風が吹いてきて、夜には雪になろうかというところであった。昼の12時15分、わたしは学校から帰った。コートはびしょり濡れており、脱いで柱に掛けると、召使に命じて火を強くさせた。わたしは自分で椅子を移動させて炉に近づき、『新小説』1巻を手にとった。2頁も読まぬうちに、ふとドアを慌てて叩く音が聞こえ、召使を呼んで応対させた。召使はほどなく若者をひとり引き入れた。（その若者は）雨具を脱ぎ、そして洋傘をドアの脇に置く

と、わたしに向かって礼をした。わたしがその若者を見ると、なんとわが級友の蔡自強であった。¹⁴

この冒頭部には、いくつか興味深い点が見える。まず、時間が「昼の 12 時 15 分〔午十二時、十五分〕」と表記されていることである。日没から日の出までを五分割し、一更から五更によって時刻を表す不定時法による表記や、「巳の刻」、「午の刻」といった定時法による表記でもなく、西洋式の時刻表記が用いられている。西洋式時計が浸透するのは、アヘン戦争以後、西洋に向けて開港されてからのことであり、しかも開港場を除いた大半の場所では、旧来の時刻制度が用いられていた¹⁵。

また、何といても、主人公の「余」が読んでいる書物が『新小説』であることは、象徴的である。『新小説』は、戊戌政変に失敗して日本に亡命した梁啓超が、横浜で 1902 年に創刊した雑誌である。発刊当時、「中国唯一の文学報」を謳った小説専門誌であり、「新小説」の掲載、小説評論による古典小説の再評価などを先駆的行なった。また、同誌の第 1 号には、梁啓超「論小説与群治之関係」が掲載され、そこから「小説界革命」が展開した。主人公の「余」は雑誌の読者であることによって、新しい学問を学ぶ者として性格づけられている。

ヒロインの陳君亜はどうだろうか。第 3 章で朱と会話をする場面で、勝手に本を読み出すのだが、その本は日本語で書かれていた。

朱はそばに来てそれを見て言った。「君が読んでいるのは何の本だい？ なぜ書かれたものがみな横書きなのかな？ 僕に教えてもらえないか。」君亜はやはり答えず、変わらず本を読んでいる。朱は言った。「僕はそれを知っている。外国の書き方だ。僕がまったくわかっていないなどと言わないでくれよ。もともと日本に 3 ヶ月間留学したことがあるんだ。ためしに読んでみよう。正しいかどうか判断してくれ。日本の字母、最初の字はア、二文字目はイ、その下にほかにもスシなどの字が、数十字ほどあるね。僕の言ったことは正しいかな？ (略)」¹⁶

「ア」、「イ」という続いた並びは、五十音図であろうか。「スシ」というのも、いかにも日本的な単語である。この記述からは、はっきりとしたことは読み取れないが、君亜の読んでいた本は日本語の教科書のようなものである。そして朱もまた、日本への留

学経験があり、日本語が読めることから、新しい学問を学んだ者であることが窺える。それだけではない。第4章では、牢屋に入れられた「余」のために、フランスの著名人が書いたという、『獄中英雄』なる書物を差し入れしてもいる¹⁷。君亜が差し入れに添えた手紙には、次のような一文がある。

天気はとても寒いのに、あなたは服も取らずに牢獄に入りました。獄中は陰鬱としていて、とても寒いことでしょう。わたしの掛け布団は薄いですが、綿入れしたばかりのものです。あなたにお贈りします。少しは寒さもしのげましょう。そのほかに、『獄中英雄』という本もお贈りします。これは、フランスの名士が書いたもので、これを読めば、心を奮い立たせるには十分です。ふたつともお受け取りください。¹⁸

そして、「余」もまた、獄中で、君亜が贈ってくれた『獄中英雄』を読み、とても面白かったことを感想として述べている。このように、外国の書物や翻訳小説に親しんでいるということは、彼らが新しい学問を学んでいる人物であることを、十分に匂わせている。

また、君亜については、もうひとつ興味深い事例がある。それは、彼女の台詞にエクスクラメーションマーク（以下「！」）が使用されている点である。先ほど君亜と朱とのやりとりで挙げた場面の直前の箇所、朱に対し怒りを露にする君亜の台詞に現れる。原文は以下のようなものである。

君亜更怒曰。咄！勿多言。出！我欲眠矣。

君亜はさらに怒って言った。「ふん！ おしゃべりが過ぎるわ。出て行って！ わたしは眠りたいの。」

もう一箇所はこの直後の場面で、同じく朱に対して怒りを表している場面である。

乃曰：“吾倦矣。”遂臥君亞榻。君亞大怒曰：“貧賤奴，出！否吾復大呼矣”。

すると、（朱は）「僕は疲れたよ」と言うと、君亜のベッドに横になった。君亜は激怒して言った。「貧乏人、出て行って！ じゃないとまた大声で叫ぶわよ。」

「！」が用いられているのは、「失珠」においてはこの二箇所だけである。こうした西洋式の記号は、清末の一時期、文人にとっては西洋を象徴する「記号」でもあった。吳趸人も『中国偵探案』「弁言」において、西洋翻訳小説を批判する際に、これらの記号を槍玉に挙げている¹⁹。

異国を象徴するという点については、先の例文中に見られたような、横書きの文字で書かれた書物や、そこに記されていた「ア」や「イ」、「スシ」といった日本のカタカナについても同様である。なお、日本語の本を君亜が読んでいることは、君亜の人物像を示す重要な要素だが、この点については後節でふたたび取り上げる。

また、これら文字記号以外にも、舶来の文物が小説中には随所にちりばめられている。たとえば、先ほど蔡が捜査を依頼しに訪れる場面で使用していたのは、〈洋傘〉であった。また、朱が上海から蘇州まで行く際に乗ったのは、〈輪船（蒸気船）〉だが、西洋の蒸気船は、アヘン戦争の前後から中国の港に入港するようになり、後に中国でも製造されるようになったものである²⁰。さらに、第4章で「余」が獄中から蔡と連絡を取り合う際には、「余」は〈電書（電報）〉²¹を一通したためている。

そのとき獄吏はすでに外出しており、わたしは急いで電報を一通したため、蔡にすぐに応対しに来てもらうことにした。ほどなくして、獄吏が蠟燭と酒の肴を持って入ってきた。わたしは自分のかわりに蔡君に電報を打つよう獄吏に頼んだ。²²

数日後、事情聴取のため法廷に出ると、蔡がすでに来ていた。「余」が蔡に、なぜ速かったのかを訊ねると、蔡は「わたしは電報を受け取ってから、すぐにひとりで蒸気船²³を走らせてやって来た。だから速かったのだ。」²⁴と答えている。ここには、物や人間の空間移動の速さが描かれている。この速さを実現したものは、やはり舶来の科学技術であった。

これらの道具立てが西洋探偵小説を象徴するものであることについては、例えば黄摩西「小説小話」（1907）に見える、当時の欧米における事件の処理に関する記述を見ればよく分かる。

思うに、同じく事件を処理するといっても、欧米においては、たとえ解決が極めて困難だとしても、服の色、日記、名刺、足跡、煙草や酒、日用品などから推測

することができ、戸籍や守兵、商売上の帳簿などを調査することができ、そして、さまざまな科学や薬物、機械があり、それらを研究に用いることができる。警察制度は整っており、一声かければ集められる。電車は速く、百里の道も遠くない。電信、電話、鉄道、蒸気船はどこにでも通じている。国境を越えても罪人を受け渡す条約があり、金品を奪っても自由を拘束する逮捕状がある。法律の力に頼ると、君主はその権利を侵犯することはできないため、自在に操り、隠れた悪人を摘発することができる。しかし、わが国はというと、以上のものはまったく備わっていないため、ただ頭脳と腕力に頼って、形のないものを追い求めるよりほかはなく、邪悪な人間の正体を暴き、極悪人を捕らえようとするならば、その難易度や気楽さの隔たりは、どうやって計り知ることができようか。²⁵

黄摩西は中国と欧米の事件の捜査方法について、西洋のほうが制度や道具が整っており、中国の捜査のほうがより多くの困難を伴うことが述べてられている。「失珠」の探偵小説の箇所をあらためて振り返ると、「服の色」、「足跡」などを手掛かりとした調査、「電報」による通信や、「蒸気船」を用いた移動など、黄が西洋式の捜査に用いられるものとして挙げた文物や手段が惜しみなく用いられていることが分かる。

以上を踏まえると、「失珠」の探偵小説の部分には、異国を象徴する文物が装飾としてふんだんに描きこまれており、そうすることで海外小説の趣が添えられ、ひいては探偵小説としての性格づけがなされているのである。もっとも、中国には「備わっていない」とされるものを、探偵は捜査において積極的に用いていることになり、これは、探偵の不在を中国（上海）の現状として描いた周桂笙「上海偵探案」とは真逆の方向に物語を設定していると言えるだろう。つまり、現状を描くのではなく、西洋探偵小説のような物語世界を作ることに主眼が置かれているということになる。

4. 『茶花女』の影響

ここまで、「失珠」の「探偵小説」の部分が、いかにして翻訳探偵小説のような趣向を実現しているのかを論じた。続いて、後半2章の「言情小説」の部分を取り上げる。まずは、あらすじの続きを整理しておこう。

事件解決の後、君亜のところに向かった「余」は、何者かによって後頭部を殴打され、気がつくやうに病院のベッドに横たわっていた。そして、負傷した君亜と病院で再会する。ふたりに傷を負わせたのは朱の弟であり、朱が罪に問われたことを怨んで殴ったのだった。君亜によれば、朱はすでに警察によって牢獄に入れられていた。数日後、回復した二人は、ともに杭州へ行くことを約束する(第5章)。

「余」は杭州に帰り、翌年の三月に君亜と結婚した。ある日、君亜はいつものように出先から帰ると、様子がおかしかった。朱の弟を見かけたためであった。朱の弟は復讐の機会を窺っていたのである。はたしてその翌日、ふたりが釣りに出かけた帰り道で、君亜は朱の弟に刺されてしまう。「余」への愛を伝えながら、君亜は事切れる。悲しみのあまり我を忘れた「余」は、気づくと精神病棟に入れられていた。すでに君亜との別れから1年半が経過していた。「余」は君亜の墓参りを済ませると、旅支度をし、杭州を後にするのだった(第6章)。

この部分で最も特徴的なところは、陳君亜によって『巴黎茶花女遺事』の一場面が想起される点であろう²⁶。第6章で、君亜は外出時に朱を見かけて言葉を交わし、「余」が朱に命を狙われていることに気づく。君亜は「余」にそのことを伝え、しばし眠りにつくが、「余」が朱に刀で襲われる夢を見て、ふたたび驚いて目を覚ます。

(君亜は) わたしがまだ彼女のそばにいることを確認すると、手でわたしの腕を握って言った。「あなたは『巴黎茶花女遺事』の中の、^{マルグリット} ^{アルマン}馬克が亜猛のところへ行こうとする一夜の出来事を覚えている？ わたしは今夜また気になりだしたの。もし明日あなたと永別したら、もし不幸にもわたしがやっぱり明日死んでしまったら、このさき何年も、あなたは陳君亜がかつてあなたとともに過ごし、思いあい、数ヶ月間を過ごしたことを、変わらず覚えていてくれるかしら？ (略)」²⁷

この場面における『巴黎茶花女遺事』の引用が、どのような象徴的な意味を持つのかを論じるために、まずは『巴黎茶花女遺事』について整理しておこう。

『巴黎茶花女遺事』は、アレクサンドル・デュマ・フィス(小デュマ)の20歳のときの処女作、『椿姫』(1848)の翻訳である。王寿昌(筆名暁斎主人)が口述し、林紓(筆名冷紅生)(1852-1924)が筆記するという形で翻訳された。『椿姫』は、19世

紀中ごろのパリを舞台に展開する小説で、高級娼婦マルグリット・ゴージェと、青年アルマン・デュバルの恋愛模様、およびその悲劇的結末が描かれた作品である。

林紵らによる訳本は、1899年に福州で最初に刊行され（福州畏廬刊本）、同年にホームズ物語の翻訳とセットになった本が素隱書屋から出版されている²⁸。素隱書屋本の刊行以降、中国では、「茶花女」ブームが起こった。この刊本は、「ホームズ」と「茶花女」が同時に流行する契機となった。そして、のちに両者は清末翻訳小説の代名詞的となる。「失珠」はこのふたつの流行り物を取り入れているのである。

清末当時の『巴黎茶花女遺事』の反響について、包天笑は『釧影樓回憶録』「訳小説的開始」の中で、当時を振り返り、次のように述べる。

林琴南の『茶花女遺事』が世に出た後、一時ブームとなり、ある人が「外国人にも情を用いるのがかくも一途な者がいるのか、外国人はみな薄情だと思っていた」と言うと、ある人はこの本を「外国版紅樓夢」だと賞賛した。また、この本について、茶花女はひとりの妓女に過ぎないのに、このように情を用いるに値するのというのは、つまるところ小説家の言葉が、大雅の堂に登らないということなのだ、と評する者もいた。²⁹

ここでは、『巴黎茶花女遺事』にふたつの評価があったことが示されている。前半の評者は、「外国人はみな薄情だ」というイメージを覆した事例として『巴黎茶花女遺事』を高く評価している。『紅樓夢』は、ここでは優れた作品を喩えるものとして引き合いに出されている。他方、後半の評者は、茶花女は妓女であるにも関わらず、情を用いるのに値する存在として描かれていることを、小説自体の程度の低さを示す要素として述べている。いずれにしても、反響の大きさを物語っているだろう。

また、「ホームズ」という名が劉鶚『老殘遊記』など清末小説に出現するようになったように、「茶花女」もまた同時期の小説に登場するようになり、そのことも影響力をうかがわせる。たとえば、『孽海花』第12回には、女性の着飾った様子を〈茶花女的化身（茶花女の化身）〉と形容する場面がある³⁰。また、『文明小史』第23回では、登場人物の議論の中に小説の『茶花女』が登場する。

ひとりが言った。「われわれは何も本当に廓遊びをしているわけでもありません。ただ妓女を数人宴席にはべらせ、机上を飾り酒を手にして集まるというだけで、数名の同志でこうした些細なことをするのは、もともと気にしなくてよいことです。それに、英雄と児女は、そもそも情感を解き明かすことのできないものであり、文明国にはこのようなことがないなどということがあるでしょうか。そうでなければ、あの『茶花女』という小説は、どうして書かれたのです？ 老同学は古臭すぎる！」³¹

また、同書がもとになって生み出されたとされる作品も少なくない³²。代表的なものに、中国版『巴黎茶花女遺事』のような趣向の鍾心青『新茶花』(1907)³³がある。項慶如と杭州の名妓武林林との悲恋を描く作品である。このほかにも、何誼『碎琴楼』(1910)³⁴、徐枕亜『玉梨魂』(1912)³⁵、周瘦鵑「花落花開」(1914)³⁶、林紓「柳亭亭」(1916)³⁷、蘇曼殊「碎簪記」(1916)³⁸などがあることが、つとに指摘されている³⁹。これらの作品のなかでも、とくに『新茶花』(1907)は、「失珠」(1908)に先行する作品であり、「失珠」の当該の箇所について考察するうえでも、重要な意味を持っている。対照を試みるために、ここで梗概を紹介しておきたい。

杭州の名妓武林林は、『巴黎茶花女遺事』を読むのが好きで、いつも胸に茶花^{つばき}を挿していた。自分を馬^{マルグリット}克だと自任しており、妓院も「第二茶花楼」と名付けていた。主人公の項慶如は、もとは新党の有志の人物だったが、戊戌政変が失敗に終わって意気消沈し、日本に渡って法政速成科で学んだ。学び終えて中国へ戻ったのはいいが、何事も成し得ず、世相に対する怒りや憎しみから、青楼で酒色にふけていた。項慶如も「東方の^{アルマン}亜猛」を自任しており、ふたりは意気投合する。

京中の王尚書は、武林林の美しさに惚れ込み、項慶如を「革命党」だと誣告する。項と武はふたりで部屋を借りて住み、ひそかに結婚して夫婦となる。ふたりはつつましく暮らしていたが、ほどなくして項慶如は南京へと連行され、「匪賊の頭目」だと誣告され、死罪に処せられそうになる。武林林は項慶如を助けるべく、みずから犠牲にし、王の妾になることを受け入れ、項慶如は無事釈放される。項慶如は再び「茶花第二楼」を訪れるが、かつての思い人はもういなかった。

以上が『新茶花』のあらすじである。『巴黎茶花女遺事』との大きな共通項として、妓女の恋愛が描かれていることと、その恋愛が悲劇に終ることが挙げられるだろう。以上を踏まえたうえで、あらためて「失珠」の記述を取り上げたい。

5. 『巴黎茶花女遺事』が想起される意味

話を先ほどの引用へと戻そう。君亜が想起した、『巴黎茶花女遺事』の「^{マルグリット アルマン}馬 克が亜猛のところへ行こうとする一夜」は、同書のいかなる場面なのだろうか。いま、漢訳本の内容をもとに、場面を整理しておこう。

馬克と亜猛は2年の月日を経てようやく相思相愛になるが、亜猛の父は息子が娼婦と付き合っていることを快く思わず、息子と別れるよう馬克に頼む（これは小説の最後に馬克の手紙によって明らかとなる）。それを聞き入れた馬克は、亜猛の元を去ろうとする。亜猛は馬克が自分に愛想を尽かしたのだと勘違いし、腹いせに他の女性と交際し、馬克に対して、その様子を見せ付けるなど、あてつけや嫌がらせをするようになっていた。すっかり憔悴して病に伏してしまった馬克が亜猛に会いに行くというのが、当該の一夜である。馬克は亜猛のもとを訪れた理由について、亜猛に次のように語っている。

「わたしがここに来たら、あなたはうんざりするかしら？ わたしは二つのことを言わせてもらいたい。ひとつは、昨日の^{オランブ}倭蘭のことを、わたしは^{あなた}亜猛に謝りに来たの。もうひとつ、^{あなた}亜猛には今後、人前で二度とわたしに辛くあたらないで欲しいの。あなたが（パリに）戻ってから、わたしは極限まで苦しめられたわ。わたしはこれからも^{あなた}亜猛の怒りに耐えるだけの余力も残っていないし、この上なく薄幸だと自分では思うわ。^{あなた}亜猛はそれでもわたしがかわいそうだとは思わないの？ しかもわたしは病人で、何をしても生きる面白味がないの。^{あなた}亜猛は気概のある人なのに、何をそんなに焦っているの？ あなた、わたしの手を引いてみて、わたしはまだ熱が下がっていないの。わたしが無理にベッドを抜けてここに来たのは、あなたに未練があるのではなくて、わたしのことは放っておいてとあなたにお願いするためなのよ。」⁴⁰

マルグリット アルマン アルマン
馬 克 が亜猛に会いに来たのは、亜猛の仕打ちにこれ以上耐えられないのでやめて欲しいと頼むためであった。亜猛は亜猛で、馬克が他の男性と一緒にになったことを快くは思っていなかった。しかし、さらに会話を続ける中で、亜猛は馬克への愛情を再確認し、帰ろうとする馬克を強く引き止める。亜猛は馬克とよりを戻そうとするが、馬克は亜猛のためを想って、敢えて二人の愛が終わったことを言明する。それはみずからを納得させるためでもあったろう。そして、愛の終わりを象徴するかのようになり、この後ふたりは二度と顔を合わせることはなく、亜猛は馬克の最期を看取りもしない。亜猛は、馬克の死後に、彼女の手紙によってようやく事のあらましを理解する。

いささか説明が長くなったが、要するに、「馬克が亜猛のところへ行こうとする一夜」は、ふたりが最後に言葉を交わす場面であり、後に馬克が息絶え、亜猛と永遠に別れることを象徴する場面なのである。

なお、先に挙げた『新茶花』に登場する名妓武林林もまた、項慶如を助けるために望まない縁談を受け、嫁ぎに行く場面で、同じくこの場面を想起している。

武林林はその場でまたひとしきり泣くと、こう思った。巴黎茶花女が亜猛の名誉を守るために、ふたたび娼婦に戻ったように、わたしもいま慶如の命のために、他のひとに嫁ぐ、状況はかなり似ている。わたしがこの妓院の名をつけた時に、すでに兆しがあったのだ、と。さらにこう思った。馬克は亜猛と永別したときに、もう自分をすでに死んだものとみなしていた、わたしはいま死にそうな人間というわけではない、そうだとすると、今日こそがわたしの最期なのだ。⁴¹

武林林は、好きな男性のために自分の気持ちを犠牲にして違う相手と結ばれた馬克を思い出し、その姿を自分と重ね合わせている。そして、亜猛と別れた夜の馬克の覚悟を自分の心境と照らし合わせ、他人に嫁ぐことを「死」と象徴的に表現している。

このように、いずれの小説においても、ヒロインが恋人の男性と死別(あるいは「死」別)する場面において、馬克が亜猛と別れた一夜のことがヒロインによって想起されているのである。「失珠」の当該の場面は、その後のふたりの別れ、ひいては陳君亜の死をも象徴していると言えるだろう。すなわち、陳君亜には、死別するヒロインとしての馬克像が投影されているということになる。

以上を踏まえ、君亜の人物像についてさらに考察を進めてゆこう。

6. 新式教育、自由恋愛、自由結婚——新女性としての陳君亜

先ほど、「失珠」の第3章に見える、君亜が日本語で書かれた書籍を手にする場面を取り上げた。日本語を読むことができるという点からは、彼女が女子教育を受けた人物であることが窺われる。以下、日本語と女子教育の接点を中心に、清末当時の教育制度を概観しつつ、君亜の人物像について考えたい⁴²。

日清戦争以降、変法自強運動とともに近代教育の導入が主張されるようになり、日本への留学が勧められるようになる。日本に関する主要な情報源は、黄遵憲『日本国志』（1890）であり、同書においては日本の政治や教育が分析されていた。当時、日本留学を推進していたもっとも有力な人物は、湖広総督張之洞（1837-1909）であった。その『勸学篇』（1898）には、日本留学を勧める理由として、日本が西洋より近いこと、日本語が中国語に近いため理解しやすいことのほか、次のような記述がある。

西洋の書物はたいへん複雑であり、およそ西洋の学問で、差し迫って必要ではないものは、日本人がすでにその文章を削除し、意を汲み書き改めている。中国と日本は情勢や風俗が似通っており、模倣するのは簡単である。労力は半分で効果は倍であり、これに勝るものは無い。詳しいものや整ったものを求めるようになってから西洋に留学することが、なぜいけないというのだろうか。⁴³

この項目では、日本に行くことで西洋の学問をより効果的に学ぶことができることが理由として挙げられている。日本は欧米の学問に通じる窓口として捉えられていた。つまり、日本語の書籍を読んだり日本語を勉強したりすることは、日本語を通して西洋の学問を学ぶことにも通じていた。

また、19世紀の終わり頃から、梁啓超「論女学」（1897）など、女子教育の必要性が主張され始めるようになる。1898年には、中国人による最初の女学堂、経正女学堂が、上海電報局局長の経元善（1840-1903）によって上海に設立された。清朝政府が女子教育を公認するのは、さらにその後、1907年に「学部奏定女子小学堂章程」「学部奏定女子師範学堂章程」が制定されて以降のことである⁴⁴。

このような状況下においては、日本への留学が、女性が新しい教育や学問を求めるうえでの主な手段であった。増加する中国人留学生の中には、女子留学生の姿もあり、下田歌子（1854-1936）は、そうした女子留学生を積極的に引き受けた人物として知

られる。下田が教鞭をとった実践女学校では、1901年に最初に中国人留学生を受け入れた。男女平等をしきりに訴えた秋瑾（1875-1907）もまた、実践女学校で下田の教えを受けたひとりであった⁴⁵。

以上の点を踏まえて整理すると、「失珠」が掲載された1908年という年は、女子教育が制度上認められて間もない時期であり、ごく一部の事例を除き、女性が新しい教育や学問を求めるには、日本への留学がおもな手段であった。つまり、女性が日本語を勉強することは、それによって新しい学問を学ぶことをも意味した。つまり、「失珠」の陳君亜は、新しい学問を学ぶ、解放的な女性として造型されているのである。

教育制度と関連して、もうひとつ注意すべきことは、馬江劍客と陳君亜が3年前に級友だったという設定である。同じく1908年という年を基準に考えると、女子教育こそ制度上認められていたが、男女共学は実現してはおらず、男子と女子の学堂は別々に設立されていた。初等小学校において男女共学がようやく認められるようになったのは、中華民国成立後の1912年1月に、初代教育部総長の蔡元培（1868-1940）が「普通教育暫行弁法」、「普通教育暫行課程標準」を制定してからのことである⁴⁶。つまり、馬江劍客と陳君亜のふたりが級友であったという設定は、当時まで実現されていなかった男女共学の制度を、先取りして描いていたということになる⁴⁷。

そしてさらに注目すべきは、馬江劍客と陳君亜が結婚する際に、両親や媒酌人が登場しないことである。ふたりの結婚については、「翌年3月、わたしはようやく君亜と街の西側で結婚した（翌年三月，余方與君亜結婚於城西）」としか記されていない。短編小説のため細部が描きこまれていないという可能性も考えられるが、儒教的価値観において、結婚する際に必ず従うべきとされた、「父母の命、媒酌の言」といったものが、ここには見られない。つまり、馬江劍客と陳君亜は、自由恋愛の末に自由結婚したということになる。このような結婚は、当時「文明結婚」と呼ばれた。

『清稗類鈔』「婚姻類」には「文明結婚」の項があり、それによると、清末の光緒年間から宣統年間に変わるあたりの時期（1909年頃）に、都会や商港で「文明結婚」という新しい婚姻制度が流行したという⁴⁸。そこには、次のように記されている。

父母の命、媒酌の言に基づき、男女の同意を取り付け、それによって自由を取り締まる。その手続きの順序は、まず男子が両親に願望を述べ、両親の許可を得ると、すぐに媒酌人を招いて女性の両親に請願し、その両親の許可を得ると、再び

媒酌人が男女の面会する期日を取り決め、男女が同意したところで、ようやく婚約が定まる。⁴⁹

文明結婚の「文明」とは、西洋文明を意味する。ここでは、男女の意向が尊重されている点が、「父母の命、媒酌の言」に従って決定される旧来の婚姻制度とは異なるのだが、両親や媒酌人が仲介するという点は変わらない。制度が変化してもなおこの程度の違いだったことを考えると、馬江劍客と陳君亜による自由恋愛と自由結婚は、1908年当時においてはかなり「進んだ」ものだったと言えよう。もっとも、文明結婚が行われるようになった当初、その半数以上が学堂の学生同士の結婚だったという⁵⁰。馬江劍客と君亜が「男女共学」を経験し、同級生同士で結婚している点については、当時の「文明結婚」の状況と重なる部分もあるようである。

以上のように、男女共学を経験している点、日本語を通じて新しい学問を学ぼうとしている点、自由恋愛や自由結婚をしている点からは、陳君亜はそれ以前の社会には見られなかった解放的な女性として造型されていることがうかがえるだろう。

7. 「茶花女」と恋に落ちた「ホームズ」

最後に「探偵小説」と「言情小説」の接合の問題について考察したい。冒頭で提示した論点に戻ろう。「探偵小説」と「言情小説」のそれぞれの部分は「機械的に模倣」されているのか、そして両者は「無理やり組み合わせられて」いるのか。

ここまで見てきたように、「探偵小説」の部分では、推理や尾行、変装といったモチーフが採用されており、翻訳探偵小説を模倣していることが窺える。しかし、小説創作における工夫は、それだけに止まらない。異国を象徴する文物が数多く描きこまれることで、「探偵小説」としての性格づけがなされている。このことを、たんなる「機械的な模倣」とみなすことは出来ないだろう。ここから窺えるのは、翻訳探偵小説よりもさらに「探偵小説」的であることを目指そうとする傾向である。

「言情小説」の部分についても、同様である。ヒロインの陳君亜は、男女共学を経験している点、日本語を通じて新しい学問を学ぼうとしている点、自由恋愛や自由結婚をしている点など、清末期においてはかなり進んだ、あるいは存在し得なかった、解放的な女性として造型されている。西洋小説的な要素は過剰に描き込まれており、

やはり「模倣」の域を超えているだろう。

続いて、ふたつの趣向の小説がどのように組み合わせられているのか、考えてみたい。まず、ふたつの小説がどこで大きく分かれるのか、あらためて指摘しておこう。王燕氏が本小説を前半3章と後半3章に分けていることについては先述のとおりである⁵¹。たしかに、第4章で君亜が「余」に差し入れをし、さらに彼を救出する展開は、その後のふたりが恋愛関係に発展する布石としても捉えうるが、第4章は、あくまでも犯人の朱が裁かれ、事件が解決することが主題である。ふたりが恋人になり、ともに杭州へ行くという急展開を見せるのが第5章であることを踏まえると、前半4章を「偵探小説」の部分、後半2章を言情小説の部分として捉えるのが妥当ではなかろうか⁵²。注目すべきは、第6章冒頭で語り手が読者に語りかける箇所である。

読者のみなさん、わたしがこの本に書いたのは、初めからここまでは、すべて生き活きとしたことであり、心を痛める話はまだひとつも記しておりません。みなさんにはつらい思いをさせますが、いまわたしは自分の方針を変えて、もっぱら暗澹で悲惨な事柄を記します。みなさんはこれをお読みになれば、きっと心が不愉快になることでしょう。⁵³

ここでは、語り手が物語を悲劇的な方向へと進めようとする動きが見られる。そのことは、第5章で君亜が『巴黎茶花女遺事』を想起する場面にも現れており、さらに同章の最後にも、次のように記されている。

しかし、この後わが最愛のひとが、果たしてその夢のなかの状況を再現させ、世界でもっとも悲惨な悲劇を演じ、いまに至るまでわが人生から生きる喜びを奪うことになろうとは、思いもよらなかった。⁵⁴

次章における悲劇的な展開を思わせる書き方である。第5章、第6章の2章が同じく第17号に掲載されていることもあわせて考えると、「茶花女」式の悲劇的恋愛は、同掲載号において、つまり第5章以降になってようやく描かれているといえるだろう。この点からしても、「言情小説」の箇所は第5章以降と捉えるのが適切と考えられる。

以上のように、この小説が内容的にどこで分けられるのかについては、わたしは王

氏と見解が異なる。しかし、小説「失珠」が探偵小説と言情小説との組み合わせによって成立していること、両者の趣向が大きく異なることについては同意見であり、そのことを前提にここまで論を進めてもきた。ただし、両者は「無理やり組み合わせられて」いる、という言い方に止まるだけでは、いささか不十分だろう。

ここまで見てきたように、「失珠」のふたつの部分は、それぞれ「ホームズ」と「茶花女」に倣った箇所が見受けられ、小説全体としては、両者の中国版をひとつの小説にまとめあげたような体裁となっている。このことは、清末に二種の小説が流行し、「新小説」の代名詞として並び称されるに至ったことではじめて実現したことだろう。「ホームズ」と「茶花女」という「新小説」の申し子同士の恋愛は、安直といえれば安直で、あまりに象徴的である。とはいえ、探偵小説に恋愛の要素が付加される際に「茶花女」が要請されたことは、世界中の探偵小説の事例の中でも清末中国に特有の出来事であり、やはり特筆に値するだろう。

おわりに

本章では、天民「失珠」が、同時代に流行した「ホームズ」と「茶花女」を合わせたような作りになっていること、そして、それに相応しい物語世界を構築しようとした結果、現実社会では実現しがたい状況が描きこまれることとなったことを見てきた。

「失珠」は、中国探偵小説の最初期の創作のなかでも、論理的な謎解きの過程が描かれた小説として注目される。そればかりでなく、『巴黎茶花女遺事』の影響のもとに成ったとされる小説群の系譜上にも位置づけ得る作品である。しかし、『巴黎茶花女遺事』の中国への影響を論じる論考においては、とくに言及されていない。「茶花女」受容史への位置づけについては、今後の課題である。

また、清末期の探偵小説と言情小説との関係性についても、あまり注目されてこなかったといえるだろう。両者の関係を考察することは、ひいては、清末中国における探偵小説の特質を考察することにもつながるように思われる。

注

- ¹ 呂志伊（1880-1940 あるいは 1882-1942）の字、張光厚（1881-1932）の字、林語堂の父親である林至誠（1855-1922）の号などがそうである。
- ² 「海底真珠」は周桂笙訳。原作は Robert Barr “*The Triumphs of Eugene Valmont*”。『月月小説』第 10 号から第 18 号にかけて掲載された。筆名は掲載された回によって異なる。「上海新菴主人」（10 号）、「上海知新室主人」（11 号・15 号・17 号）、「上海知新主人譯」（12 号・18 号）、「知新室主周桂生」（13 号）。同書の原作については、渡辺浩司「『月月小説』掲載の翻訳小説の原作」（『清末小説』第 30 号、2007）を参照。
- ³ 「盗偵探」は解朋著、迪齋訳述。原作不明。『月月小説』第 2 号から第 24 号にかけて掲載された。
- ⁴ 翻訳探偵小説の中に、〈実事偵探（実際の探偵）〉を謳ったものならある。それは、[法] 紀善原著 上海新菴主人周桂笙訳述「紅痣案」（高龍偵探案之一案 実事偵探）である。原作は不明。同翻訳は、『月月小説』第 1 年第 11 号（1907.12）に掲載されている。
- ⁵ 〈言情〉は「愛情を語る」の意。「言情小説」は、男女の恋愛を主題とした小説、つまり「恋愛小説」を指す。清末期に登場した小説ジャンルの呼称のひとつ。吳趸人『恨海』（1906）、符霖『禽海石』（1906）などがその代表作とされる。当時、同様の小説ジャンルを表す言葉として、この他にも「写情小説」、「哀情小説」などが用いられていた。その用語の用いられ方や同ジャンルの展開については、張競『近代中国と「恋愛」の発見』（岩波書店、1995）第三章「伝統小説の残照——言情小説から鴛鴦蝴蝶派へ」に詳しい。
- ⁶ 王燕「近代中国原創偵探小説」（『齊魯學刊』2003 年第 2 期）。原文「随心所欲的机械模仿致使两种风格迥异的作品硬扭在一起，非牛非马，不伦不类。」
- ⁷ 吳趸人『中国偵探案』「弁言」（広智書局、1906）。原文「非盡紀實也，理想實居多數焉」。
- ⁸ 周桂笙「上海偵探案」「引」（『月月小説』第 7 号、1907.4）。原文「外國的偵探小説，差不多十分之九，是從理想上來的」。
- ⁹ 原文「余曰：“然。今王君與令兄之窗，皆有香線所灼圓孔一。此明為盜以悶香迷人之實証。一旦，王君之窗近內處，紙色較新并有水漬，確係昨夜用唾津新補者。此明為外盜破此格紙啓門開窗，置刀於該箱中後，恐人察出，故補之以掩人耳目者。若刺令兄者為王，則彼自內外出，何必破此紙後方能啓窗乎？此其為外盜之証。一旦，盜賊藏脏嚴密，惟恐被人尋出此，必然之理也。而今刀及珠囊，皆置之一無鍵之箱中。使王果刺令兄者，豈肯於此人人易見之地，藏其最秘密之物，以待人之搜得乎？此其必為怨家欲陷王君於罪之証明矣。有此三証我今即死，亦必力保王君。」
- ¹⁰ 原文「至午後五時，小輪舟爐火盡燃，汽笛競鳴，乃輪舟『彩霞』開往蘇州。乘客逐群從棧橋登舟。中有一客，被雨衣，風吹其襟，裹紫色護膝及藍袍皆現。視其面上眼架大鏡，眉為之掩，且有鬚作八字形。注視其鼻，則甚類朱，余於是猜其鬚為扮飾者，而其人或即朱也。遂決計隨之行，乃即買船票上輪，選位於此人艙之後面。」
- ¹¹ 「緋色の研究」の漢訳は、比較的早期のものに、柯南道爾著 陳彦訳『恩仇血』（小説林社、1904）、英柯南道爾著 奚若黃人合訳『大復仇』（小説林社、1904）、柯南道爾著 佚名訳『福爾摩斯偵探第一案』（小説林社、1906）、柯南道爾著 林紓魏易同訳『歇洛克奇案開場』（商務印書館、1908）がある。樽本照雄「漢訳ホームズ「緋色の研究」」（『漢訳ホームズ論集』、汲古書院、2006 所収）を参照。
- ¹² 原文「余曰：“聞之有司未？ 曰：“已遣告矣。但如此腐敗警吏，有何能為？ 吾輩不自出力，必不能得其實情。足下素多聞見。其能為我助一臂否？ 設邀君助，必能得其中要領。當厚報之。”」
- ¹³ 西洋の文物や制度を描きこむこと自体は、清末期のいわゆる「新小説」全般に言えるひとつの特徴であるため、探偵小説に限った特徴では必ずしもない。
- ¹⁴ 原文「余讀書武林時，一日天寒大雨，彤雲蜜布，狂風颯來，晚將欲雪。午十二時，十五分，余

歸自學校。外衣盡濕，脫褂（掛）柱上，令僕熾之炭火。余自移椅就爐次，持『新小説』一卷。讀未二頁，忽聞叩門聲甚急，呼僕出應問。僕須臾引一少年人。脫其雨衣，并置其洋傘於門側，向余為禮。余視之，乃吾同學蔡自強也。」

- 15 近代中国における西洋式時間システムの受容については、阿川修三「中国近代における時間意識形成についての一考察」（『文教大学文学部紀要』第16巻第1号、2002）を参照。そのほか、西洋式時計の中国における受容については、劉善齡『西洋風——中国發明在中国』「沙漏・鐘表」（上海古籍出版社、1999）もあわせて参照した。
- 16 原文「朱至旁觀之曰：“卿之所讀何書？何為所書者皆作橫行？卿姑以告我。”君亞仍不答，觀書如故。朱曰：“吾知之矣。是外國書法也。卿之勿謂吾盡不之知。吾固曾留學日本三個月者。我試言之。卿以為然否。日本字母第一字為ア，第二字為イ。其下尚有スシ各字，凡數十字。卿以吾言為然否？（略）”」なお、原文中に見られるカタカナの「ア」は、アルファベットの「T」に近い形状となっている。
- 17 実際にこのような名称の書物があつたかどうかは定かではない。作者がフランス人とされていることと、その題目から察するに、ヴィクトル・ユーゴー『レ・ミゼラブル』（1862）を踏まえているのであろうか。同書の最初の漢訳——厳密には翻訳部分と創作部分がある——は、蘇曼殊（1884-1918）によって行われており、「惨社会」という題目で『国民日日報』第63号（1903.10.8）から連載を開始、第11回前半まで掲載された。後の1904年に、「惨世界」と名が改められ、鏡今書局から出版されている。同翻訳については、日野杉匡大「蘇曼殊『惨世界』論——創作部分の主人公「明白男徳」を中心に——」（『饕餮』第12号、2004）を参照。もともと、『惨世界』で翻訳されたのは作品のごく一部で、ジャン・ヴァルジャンが牢を出た後、前科者として街の人から冷遇されるくだりであるため、「獄中の英雄」と呼びうるかは疑わしい。あるいは、アレクサンドル・デュマ・ペール（大デュマ）『モンテ・クリスト伯』（1844-1846）の可能性もあるかもしれない。清末期における同書の漢訳には、抱器室主人訳『幾道山恩讐記』（香港中国日報社、1907）があるようだが未見。
- 18 原文「天氣酷寒，君衣未取入獄。獄中陰鬱，得勿太冷。妾衾雖薄，乃新装棉者，檢以贈君，聊可禦寒。更贈『獄中英雄』一書，為法名人所著，讀之頗足以壯雄心。均祈晒存。」
- 19 [前掲] 吳趸人『中国偵探案』「弁言」を参照。
- 20 [前掲] 劉善齡『西洋風——中国發明在中国』「西洋帆船・輪船」によれば、1867年に惇信洋行が創立した公正輪船公司是、中国の商人が外国から購入した蒸気船を使って起業したものであるという。また、同書によれば、1898年〔日付は明記せず〕の『申報』に、蘇州や杭州などを小さい蒸気船が毎日往来していたことを伝える記事が見えるという。
- 21 [前掲] 劉善齡『西洋風——中国發明在中国』「電報」によると、清末当時、電報局で用いられる電気は、「死者の魂」によって練成されるものと考えられていたという。また、1870年代には電線が敷設され始めたが、1876年の段階では、上海は租界でしか電報が打てず、香港、広州、そして海外にしか電報を打つことができなかった。清末期の電報の専門的な研究については、孫藜『晚清電報及其傳播觀念（1860-1911）』（上海世紀出版集團、2007）がある。また、清末期の人々の電気の觀念、およびその図像的表現については、武田雅哉『翔べ！ 大清帝国』（リポート、1988）に詳しい。
- 22 原文「時獄卒已出，余疾草電書一通，令蔡速來待之。有頃，獄卒特〔持〕燭并酒肴進。余令其代發蔡君電。」
- 23 原文は〈汽船〉となっているが、ここでは〈輪船〉と同様に、蒸気機関によって水上を移動する船を指す。『清稗類鈔』「舟車類」の「汽船」には、「汽船、俗に火船といい、火輪船ともいう。蒸

汽を原動力とし、推進螺旋機を用いて、水面を走行する。(汽船、俗稱火船、一稱火輪船、以蒸氣為原動力、用推進螺旋機、以行於水面。)」と記されている。また、同じく「舟車類」の「小汽船拖帶船舶」には、次のような記述が見える。「滿江紅や無錫快(ともに船の名前)といった船が江蘇や浙江を往来するのは、蒸気船や蒸気機関車がたくさん通行したことで、利潤が失われたためである。幸いにもわずかに残ったのは、富貴な家に家族が多かったため、浙江の西側の杭州、嘉興、湖州と、蘇五属の蘇州、松江、常州、鎮江、太倉を往来する人は、もっぱら船を一隻借りてそれに乗り、その快適さを求めた。(滿江紅、無錫快諸舟之往來江、浙間也、固以汽船、汽車之大通而失其利市矣。其幸而僅存者、則富貴之家以眷屬眾多、來往浙西之杭、嘉、湖、與蘇五屬之蘇、松、常、鎮、太者、特賃一舟而乘之、取其安適。)」浙江や江蘇の一带を往来していた蒸気船の様子がうかがえる(徐珂編撰『清稗類鈔』、上海商務印書館、1917)。いま、中華書局版第13冊(1986年)に拠る。以下、同書からの引用はすべて中華書局版に拠る。

²⁴ 原文「余得電後、即單放汽船來、故速也」。

²⁵ 黄摩西「小説小話」(『小説林』第9期、1908.2)。原文「蓋同一辦案、其在歐美、雖極疑難、而有服色、日記、名片、足印、煙、酒、用品等可推測、有戶籍、守兵、行業冊等可稽查、又有種種格致、藥物、器械、供其研究; 警政完全、一呼可集; 電車神速、百里非遙; 電信電話、鐵軌汽船、處處交通、越國則有交納罪人之條約、搜牢則有羈束自由之捕符; 挾法律之力、君主不能侵其權、故能操縱自如、摘姦發伏。而吾國則以上者、一切不具、僅恃腦力腕力捕風索影、而欲使鬼域呈形、豺狼就捕、其難易勞逸之相去、何可以道里計。」標点符号は、陳平原、夏曉虹編『二十世紀中国小説理論資料(第一卷)』(北京大学出版社、1997)所収版に拠った。

なお、原文に登場する〈電車〉は路面電車のことである。世界で最初の路面電車は、ドイツのシーメンス社によって1882年に造られた。中国では、1905年に上海で英商上海会社が設立されたのち、外灘から静安寺までのレールが敷設され、1908年に初めて運行された。そのため、黄摩西がこの一文を書いた時点では、まだ〈電車〉は中国では動いていなかったことになる。

²⁶ 陳君亜が想起するのは、『椿姫』ではなく『巴黎茶花女遺事』である。『巴黎茶花女遺事』は『椿姫』の原文を忠実には訳しておらず、削除や加筆がなされており、完全には同じではない。

²⁷ 原文「視余尚在其側、以手握余臂、曰：“郎憶《巴黎茶花女遺事》中、言馬克將到亞猛前一夜之事否？吾以今夜亦懸懸然。若明日將與郎永訣者、若不幸吾果以明白〔日〕死者、後此數年、郎尚能憶陳君亞曾與君相處至相得、經數月否？(略)”」。

²⁸ 翻訳作業自体は、1895年頃から始められたものと考えられているが、正確な年代特定には至っていないようである。阿英「關於『巴黎茶花女遺事』」(薛綏之、張俊才編『林紓研究資料』、福建人民出版社、1983)、郭延礼『中国近代翻譯文学概論』(湖北教育出版社、1998)を参照。また、『巴黎茶花女遺事』の版本の多さや、「福州畏盧刊本」発見の経緯については、前掲「關於『巴黎茶花女遺事』」に詳しい。

²⁹ 包天笑『鉤影樓回憶錄』(香港大華出版社、1971)四四「訳小説的開始」。原文「自從林琴南的「茶花女遺事」問世以後、鬨動一時、有人謂外國人亦有用情之專如此的嗎？以為外國人都是薄情的、於是乃有人稱之為「外國紅樓夢」。也有人評之為茶花女只不過一妓女耳、也值得如此用情、究竟小説家言、不登大雅之堂。」

³⁰ 『孽海花』(上海古籍出版社、1979)。

³¹ 『文明小史』(『繡像小説』第22号、1904.3)。原文「一箇道：“我們又不是真正嫖婊子、不過叫幾箇局、擺檯把酒聚聚、幾箇同志這些小節、原可以不拘的。再者英雄兒女、本是化分不開的情腸、文明國何嘗沒有這樣的事？不然那《茶花女》小説為什麼做呢？老同學太古板了！」

³² 『巴黎茶花女遺事』の中国の小説への影響については、すでに多くの先行研究がある。比較的最近

近のものでは、許海燕「論『巴黎茶花女遺事』対清末民初小説創作的影響」（『明清小説研究』、2001年第4期）、郝嵐「被道德僭越的愛情——林訳言情小説『巴黎茶花女遺事』和『迦茵小伝』的接受」（『天津師範大学学報』〔社会科学版〕2003年第6期）、劉傑輝、成昭偉「從論域視角解讀『巴黎茶花女遺事』的翻譯」（『理論界』、2009年第2期）、胡纓著 龍瑜成 胡姍姍訳『翻譯的伝説——中国新女性的形成（1898-1918）』第2章「茶花女的移植」（江蘇人民出版社、2009、原著はHu Ying, *Tales of Translation: Composing the New Woman in China, 1898-1918*, Stanford University Press, 2000）などが挙げられる。

- 33 『新茶花』の上編は光緒三十三年（1907）三月に上海申江小説社から刊行され、下編は同年の十二月に上海明明学社から刊行された。
- 34 何詠『碎琴楼』は、宣統二年（1910）年に、上海商務印書館より刊行された。
- 35 徐枕亜『玉梨魂』は、全30章から成る。1912年に『民権報』に連載され（掲載開始月日は不明）、同年には上海の民権出版部、清華書局から刊行された。
- 36 周瘦鵬「花落花開」は、『禮拜六』第8期（1914.7）に掲載された。
- 37 林紓「柳亭亭」は1916年に『平報』に掲載されたという（前掲胡纓著、龍瑜成 胡姍姍訳『翻譯的伝説——中国新女性的形成（1898-1918）』）。具体的な号数および発行年月日については不明。
- 38 蘇曼殊「碎簪記」は、『新青年』2巻3-4号（1916.11-12）に掲載された。
- 39 [前掲] 陳平原『二十世紀中国小説史』第1巻、[前掲] 張競『近代中国と「恋愛」の発見』第二章「翻譯小説のなかの恋」、[前掲] 郭延礼『中国近代翻譯文学概論』、[前掲] 許海燕「論『巴黎茶花女遺事』対清末民初小説創作的影響」、[前掲] 胡纓著、龍瑜成 胡姍姍訳『翻譯的伝説——中国新女性的形成（1898-1918）』など。
- 40 『巴黎茶花女遺事』（阿英編『晚清小説叢鈔 域外文学卷』第1冊、中華書局、1961所収）。原文「我來此，子不耐乎？我請以二事自剖：一則昨日倭蘭之事，我來為亞猛謝，一則請亞猛過此，人前更無窘我。自子來時，我被苦至矣。我此後更無餘力足以支架亞猛之怒，自問薄命已極，亞猛更不憐我耶？且我病人耳，百計已無生趣，亞猛烈丈夫，何蹙蹙至此？君試挽吾手，我熱尚在。我強離牀席至此，非續餘情，哀君不齒我於人數足矣。」
- 41 『新茶花』（『中国近代孤本小説精品大系』、内蒙古人民出版社、1998）、153頁。原文「林林當下又哭了一場，想起巴黎茶花女，因要保全亞猛名譽，仍為馮婦，我此刻為慶如的性命，也另嫁他人，情事十分相類，可見得我取這個樓名時，已經有了識了，又想馬克當訣絕亞猛時，已將自己當作已死，我此刻何嘗將死的人，然則今天便是我的死期。」
- 42 清末期の女性教育に関しては、阿部洋『中国の近代教育と明治日本』（福村出版、1990）、佐藤尚子、大林正昭編『日中比較教育史』第7章「女子教育」（春風社、2002）、尚小明『留日学生与清末新政』（鵝湖学術叢書、江西教育出版社、2003）、夏曉虹『晚清女性与近代中国』（北京大学出版社、2004）、喬素玲『教育与女性——近代中国女子教育与知識女性覺醒（1840-1921）』（天津古籍出版社、2005）、周一川『近代中国女性日本留学史（1872-1945）』（社会科学文献出版社、2007）をおもに参照した。
- 43 張之洞『勸学篇』「外篇」「遊学第二」（沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』第9輯、84-85『勸学篇／趨庭隨筆』、[台湾] 文海出版、1967所収）。原文は以下のとおり。「西書甚繁，凡西學不切要者，東人已刪節而酌改之，中東情事風俗相近，易仿行。事半功倍，無過於此。若自欲求精求備，再赴西洋。有何不可？」
- 44 それ以前には、女学堂の設立に対しては否定的な見解が多かった。「奏定蒙養院章程及家庭教育法章程」（1904）においても、「現状では、女学堂を設置には弊害があまりに多く、断じて時宜に合わぬ」とみなされていたという。夏曉虹著、清水賢一郎、星野幸代訳『纏足をほどいた女

たち』(朝日選書、朝日新聞社、1998)、51頁を参照。

⁴⁵ 実践女学校に最初に来た中国人留学生は、錢豊保である。また、最終的に、実践女学校を卒業した中国人女学生は100人程度ではなかったかと言われている。[前掲]『中国の近代教育と明治日本』Ⅱ「中国人の日本留学」100-105頁を参照。

⁴⁶ [前掲]『日中比較教育史』第7章(186-187頁)。

⁴⁷ 旧来の制度では、儒教的な道德観に基づき、「男女7歳にして席を同じうせず」が原則とされていた。裏を返せば、6歳までは男女共学ともみなし得るということになるが、かりに“余”と君亜が6歳の時点で級友だったとしても、3年前の時点で6歳、再会時は9歳ということになる。しかし、彼らが結婚している(第6章)という点からしても非現実的であろう。つまり、清末当時の教育制度に照らして考えた場合、やはり現実には有り得なかったはずの人間関係が描かれているということになる。

⁴⁸ 「文明結婚」については、夏曉虹『晚清女性与近代中国』(北京大学出版社、2004)「新教育与旧道德」(43-45頁)においても詳しく論じられている。それによると、最初に行われた「文明結婚」は、1905年に上海で行われたものであるという。

⁴⁹ [前掲]『清稗類鈔』「婚姻類」「文明結婚」。原文は以下のとおり。「以父母之命，媒妁之言，而取男女之同意，以監督自由。其辦理次序，先由男子陳志願于父母，得父母允准，即延介紹人請願于女子之父母，得其父母允准，再由介紹人約期訂邀男女會晤，男女同意，婚約始定。」

⁵⁰ [前掲]『晚清女性与近代中国』43頁。夏氏はここで、清末期に女性の読者を対象として創刊された新聞『女子世界』に掲載された「文明結婚」に関する記事を取り上げて論じている。

⁵¹ [前掲]王燕「近代中国原創偵探小説」。

⁵² 許徳「20世紀初中国原創偵探小説的美学特徴」(『江漢論壇』、2008年第5期)もまた、前半4章と後半2章という分け方を採用している。

⁵³ 原文「閱者諸君，吾作此書，自始至今，皆述活潑精神之事，未嘗作一傷心語。心苦諸君，今吾將變吾方面，一寫暗淡悲慘之事。吾知諸君閱之，必不快於心。」

⁵⁴ 原文「而不料後此吾最愛之人，果踐其狀夢〔夢狀〕，而演出世界最慘之悲劇，令吾終身至今無生趣也。」

第6章 科学技術と初期探偵小説創作のジレンマ

——傲骨『砒石案』

はじめに

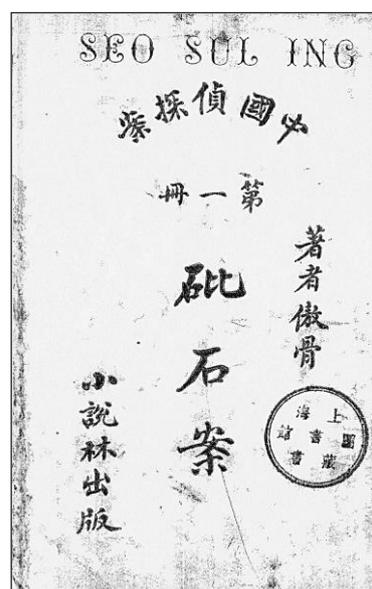
第5章では、天民「失珠」が、新小説の二大代名詞たる「ホームズ」と「茶花女」を組み合わせたような作りになっていることを指摘した。そして、それに相応しい物語世界を構築しようとした結果、現実社会では実現しがたい状況が描きこまれていることを見てきた。

本章では、似たような事例として、清末探偵小説の一篇、傲骨『中国偵探案第一案 砒石案』を取り上げる。同小説は、1908年に小説林社から出版された。傲骨という筆名の著者によって著されたものであるが、それが誰なのかは明らかではない¹。この探偵小説は同じ著者による『鴉片案』（小説林社、1908）へと続くシリーズものである。序文からは、書き手が10作目までのシリーズを構想していたことが窺えるのだが、結局2作目で終わることとなった。

この『砒石案』という小説の内容については、これまでほとんど語られてはおらず、筋立てに言及する文章が数篇あるのみであった²。よって、以下、論を進めるにあたっては、まず構成や筋立てを紹介するところから話を始めたい。

この小説は、1.案発（事件発生）、2.錯疑（誤解による疑い）、3.質異（尋問）、4.追跡、5.失敗、6.易轍（路線変更）、7.再探（再調査）、8.結束（終了）の八つの章から構成されている。その梗概は以下のとおりである。

丁未（1907）の重陽節の日、愚園から帰った探偵の精思は、友人の克友から事件の捜査依頼を受ける。克友が勤務先の学校にいた時、授業の合間に、克友の食べかけの糯米糕〔もち米を押し固めた食べ物〕に毒が混入されていたのだ。精思はこれまで読んできた西洋の探偵小説から学んだ知識や探偵術をもとに、糯米糕の成分を分析し、それが砒素であることをつきとめる。また、糯米糕の皿に附着



していた指紋を顕微鏡によって検査し、指に染料が付着していたことを発見するだけでなく、その痕跡の特徴から、指紋の持ち主の性格を推理する。

当初は陸文なる人物を犯人だと思い込んでいた精思だったが、砒素の出处を調べるうち、犯人を誤認していたことを知り、再び捜査に乗り出す。精思は克友の学校へと足を運ぶと、路上の飴売りに扮して学校近辺の様子を探る。そのうち、女性客のひとりであった瓜姉という人物が怪しいと睨むと、策を弄して彼女の指紋を入手する。精思は、それを顕微鏡で確認し、皿に付着していた指紋と比べた結果、指紋と染料の特徴が一致したことから、彼女が犯人であったことをつきとめる。謹厳実直な克友は、以前、瓜姉も含めた近隣の婦人が学校に出入りしていたことを良からぬことと思ひ、彼女らを締め出したことがあるのだが、瓜姉はそのことに腹を立てて犯行に及んだのであった。

以下、小説中に見える翻訳探偵小説の扱われ方や、科学技術の描かれ方を中心に論じたい。初期の探偵小説創作が抱えていたジレンマについて考察したい。

1. 教科書としての翻訳探偵小説、学習者としての中国人探偵

まず作中の探偵がどのように造型されているかを取り上げよう。小説の冒頭部、探偵の精思は、安楽椅子に腰かけながら、とある新聞に掲載されていた殺人事件に思いを巡らせる。事件は簡単であるにもかかわらず、捕吏は目が節穴でそそっかしい。私が手掛ければ、経験や知識を増やし、名声も高められる。そうこぼしつつ、精思は葉巻に火をつける³。

新聞を読みながら事件報道にコメントする、葉巻をくゆらせるといった振る舞いは、ホームズのそれを彷彿とさせるが、それもそのはずで、この精思という探偵は、ホームズ物語などの西洋探偵小説から探偵術を学んでいる。その少年期の読書の様子は、以下のように記されている。

精思は小説を読むのがとりわけ大好きであり、授業が終わるや本を一冊手に取った。新しく珍しい本を手に入れると、いつも一晩じゅう眠らず、とくに福爾摩斯ホームズや聶格卡脱ニック・カーターといった諸家の探偵事件に心酔していた。⁴

「ニック・カーター」は、イギリスのジョン・コーエル（1848-1924）の作品に登場する探偵である。中国においては、1907年から08年にかけて、『砒石案』の出版社と同じ小説林社から『聶格卡脱偵探案』（呉門華子才訳）がシリーズで出版されている。同シリーズは、当時の中国では、ホームズ物語とともに流行していた翻訳探偵小説であった⁵。作中では、精思がこうした小説を読むことで探偵術を身につけていたことが示されている。

後に事件を調査するにあたって、彼は「私が見るに、西洋の探偵家の事件調査は、足跡によって事件を解決するものが多い」⁶などと、何かにつけて西洋の探偵のことを引き合いに出している。

つまり精思は、これまで読んで来た探偵小説の記述を手本としながら調査や考察を行なっているのである。同時期の創作探偵小説においては、探偵がいわゆる「新小説」の読者として造型されていることが少なくない⁷。ただ、西洋の探偵小説を、ここまであからさまに「教科書」として扱っている探偵は、おそらくこれまでには登場していないだろう。

そればかりでなく、精思は、砒素の来歴がわからずに悩んでいる際には、「もし西洋の名探偵の手にかかったならば、事件の様相は、きっと掌を指すように明らかとなるに違いない」⁸と愚痴をこぼしており、西洋の探偵に及ばないことを認めるなど、技術的に未熟な探偵として造型されている。この点については、地の文で次のような説明がなされている。

読者のみなさんはお分かりだろう。精思の術が、この事件について述べるならば、大雑把であること甚だしいが、いい加減にしようとしているわけでは少しもないのだということ。この人物はもとより学を好む者である。したがって第三、第四の事件を解決するときには、人々はすでに彼の奥深さを推し測りがたくなっており、第十の事件に至れば、罪を犯して逃亡した犯人を追跡すること、摩訶不思議であって、シャーロック・ホームズ、ニック・カーター諸氏とほとんど肩を並べることができるだろう。⁹

ここには、精思が事件を解決するたびに成長を遂げるだろうという憶測が述べられている。精思は作中で「中国で探偵術を学んでいるのは、わたし一人しかいない」¹⁰

と述べており、この台詞からは、彼が「中国で最初の探偵」であることがわかる。この探偵はまだ成長段階にあり、西洋探偵小説を教科書として参照しながら探偵術を実践する学習者として造型されているのである。

2. 化学室・顕微鏡・指紋 ― 科学技術が物語ること

この小説では、重要な手掛かりとして「指紋」が登場し、それを手掛かりたらしめる道具として、〈顕微鏡〉が用いられている。そしてこの〈顕微鏡〉による観察と分析は、ホームズさながらに「化学室」で行われる。

最初は、指紋そのものではなく、糯米糕が盛られていた皿に付着していた指の痕跡が手掛かりとして浮上する。精思は、糯米糕の上に置かれていたキンモクセイに白い粉が付着しているのを認めるが、はっきりとわからなかったため、〈顕微鏡〉によってそれを確認する。すると、粉の上に小さい指の痕があり、さらにわずかに赤い物質が付着していることを発見する。

観察を終えた精思は、指の痕が薄かったことについて、気が弱かったこと、指紋が付くのを恐れたこと、小指を用いたことの3点を理由として挙げ、「顕微鏡が無ければ、おそらくその真相は得られなかったであろう」¹¹と締めくくる。克友は精思の指示のもとに同じ証拠を確認した後、〈顕微鏡〉を片付けるのだが、そこに〈接物鏡（対物レンズ）〉〈接眼鏡（接眼レンズ）〉といった部品名が記されていることからすると、どうやらこの〈顕微鏡〉は複式顕微鏡であるらしい。

そもそも〈顕微鏡〉という語は、「微細なものを顕わにする^{レンズ}鏡」、つまり虫眼鏡や拡大鏡といった単眼のレンズをも指す語である。早くは、清代順治年間（1644-1661）に成った李漁『十二楼』のうち的一篇「夏宜楼」に見える。同小説は、中国で望遠鏡を最初期に用いた小説としても知られるが、「千里鏡（望遠鏡）」「焚香鏡」「取火鏡」といったさまざまな機器とともに「顕微鏡」の名が記されている¹²。もっとも、ここでの「顕微鏡」は、おそらく拡大鏡の類だろうとされている¹³。現在の光学顕微鏡に連なる顕微鏡の原型は、17世紀に発明されたものだが¹⁴、それがいつ中国へ伝来したのかについては定かではない。ただし、光学への関心が高まり、先進的な科学技術として顕微鏡に注目が集まるようになるのは、やはり清末の時期であったと考えられる。

その事例をいくつか挙げると、『教会新報』掲載の「恵志道教師論顕微鏡」（1868

年第9号) という一文では、複式顕微鏡のことが、細やかな図とともに紹介されている。また、『万国公報』掲載の韋廉臣「顕微鏡有益於世論一章」(1890年第13号)では、顕微鏡の機能とともに、それを通して見える病原菌を図入りで紹介している。そして『砒石案』と同年代の1908年には、商務印書館発行の「万有文庫」シリーズから、『顕微鏡』(費鴻年著)という専門書が出版されており、顕微鏡の沿革から始まり、構造、使用方法などが詳細に記されている。顕微鏡は、同時期における西洋の医学知識の流入とも相まって、大いに注目されたものと考えられる。

さきほど引用した場面では、克友が顕微鏡を覗いた後、精思が「君はレンズの中を覗いて、何か得るものがあったか」と尋ねると、克友は「無かった」と答えている¹⁵。ここには、科学知識と探偵術を身につけた精思だけが細部から情報を読み取ることができるということが示されている。肉眼で見えないものを顕微鏡によって確認し、さらにそこから情報を読み取る探偵の眼は、情報を読み取ることの出来ない友人のそれと対置させられ、特権的なものとして描出されている。もっとも、この場面における一連の推理は間違っており、このあたりにも精思が成長途中である様子が窺える。

先の場面にふたたび話を戻そう。「顕微鏡」もさることながら、特筆すべきは「指紋」である。「指紋が付くのを恐れた」という精思の推論の前提には、指紋が個人を同定できるものだとする見方があるだろう。精思は飴売りに扮した際、瓜姉に飴を触らせてから理由をつけて回収し、彼女の指紋を採取する。それを分析し、犯人を特定するくだりには、次のように記されている。

顕微鏡をとってそれ(皿)の指の痕をつぶさに見てから、ふたたび飴の表面の指の痕をひとつひとつ比べると、瓜姉が残した指の痕は皿の表面に残されたものと寸分も違わなかった¹⁶。

ここでは、指紋はすでに個人を識別するための手掛かりとして使用されているのである。こうした指紋の特徴は、現代でこそ常識とされているが、当時の中国においてはそうではなかつたろう¹⁷。

指紋の存在自体は、とくに中国や日本では古くから知られていたようだが、それが個人を識別するためのものとして測定に用いられるようになるのは、十九世紀の後半になってからのことである¹⁸。指紋の「万人不同性」、「終生不変性」、「分類可能性」

という特徴¹⁹に基づく鑑定法は、それ以前に用いられていた、フランス人ベルティヨンによる「人体測定法」に代わる個体識別の技術として注目され、各国で導入されるようになった²⁰。

指紋分類法が中国に正式に導入されたのは、1909年に上海のイギリス租界工部局の巡捕房に「指印間」が設けられたのが最初だという。ほどなくして、北京警官高等学校で教えられるようになり、全土に広まったとされる²¹。イギリス本国では、1901年にヘンリー方式の指紋識別法がすでに採用されており、おそらくはそうした背景のもとにイギリス租界にも導入されたものと考えられる。いずれにしても、中国にはまだ正式に導入されていなかったはずの科学技術を、精思は先んじて用いているということになる。

ならば、精思の指紋に関する知識は、何に由来するものなのだろうか。各国における指紋分析法導入をめぐる報道が、新聞などを通じてすでに行われていた可能性も十分考えられる。ただ、精思がホームズなど西洋探偵小説を教科書として探偵術を学んだことが再三再四述べられていることは示唆的であろう。指紋に関する知識は、この小説の書き手が探偵小説を手本として取り入れた可能性も十分考えられる。

『砒石案』以前に、海外ではすでに指紋を用いた小説が書かれており、清末期におけるそれら小説の漢訳の概況については、中村忠行氏により言及されている。それによると、1908年以前のものには、以下の3作がある。

1. (日) 茂原周輔訳、陶懋立重訳『血手印』(文明書局、1904)
2. (英) 培福台蘭拿著「双指印」(『東方雑誌』第2年第1-5期、1905.2-6、単行本は商務印書館、1905)
3. (英) 布拉克著、笑我生訳『血手痕』(『江西』、1906)²²

いま筆者が確認できているのは「双指印」のみだが、同篇では、指紋科学に関する言及が見られ、調査において指紋の採取が提案されている²³。いま、これらの翻訳小説のほかに、もう一つ重要な作品を挙げておきたい。それは、ホームズ物語のうち的一篇である。

ホームズ物語においては、指紋が作品中において重要な役割を果たす作品は実はあまり多くないのだが²⁴、とりわけ指紋が物語に大きく関わる作品として、「ノーウッ

ドの建築業者（原題"The Adventure of the Norwood Builder"）（1903）が挙げられる。同篇は、警察が指紋によって容疑者を犯人と断定したところ、ホームズがその指紋が偽造されたものであることを指摘する、という筋立てである。

この作品は（英）柯南道爾著、奚若訳『福爾摩斯再生案』第2冊（小説林社、1904）に「亜特克之焚屍案」のタイトルで収録されており、『砒石案』に先行する翻訳がすでにあったことがわかる²⁵。同書は未見だが、同じく先行する同篇の翻訳として、光緒三十二（1906）年に刊行された『福爾摩斯再生案一至五案』収録の第二案、黄人潤辞・奚若訳意「約拿唾特克之焚屍案」を確認してみると、ホームズとレストレード警部による、指紋をめぐるやり取りが、次のように記されている。

レストレードはホームズに言った。「君、顕微鏡でこれを調べてみてください。」ホームズは言った。「私はまさにそうしようと思っていたところですよ。ただあなたにさきに私の心を言われてしまった。」レストレードは言った。「あなたは世の中に、拇印の指紋が同じ者はふたりといないということをご存知ですか？」ホームズは言った。「私もそのようにうかがっています。」²⁶

こうした事例は、翻訳小説が指紋の情報を先んじて読者に提供していた可能性を示唆するものであろう。とくに、引用した一段では、指紋を顕微鏡で確認するというくだりが描かれており、このことは注目に値する。しかしながら、傲骨が実際にこの小説を参照したかどうかを判断する術はない。ここでは、指紋に関する知識が、少なくとも翻訳小説を通じて中国へと伝わっていたこと、指紋鑑定の技術が中国にはまだ導入されていなかったこと、そして指紋の判別の際に顕微鏡を用いるというくだりがホームズ作品に登場しており、翻訳を通してそれを目にするのが可能であったこと、の三点を指摘するに止めておく。

3. まずホームズより始めよ — 『砒石案』の構造から見えること

ここまで、探偵の精思が西洋探偵小説を教科書として探偵術を身につけたということ、そしてホームズさながらに化学室に入り、顕微鏡を操作して物質を分析することを見てきた。冒頭部における精思の振る舞いだけでなく、化学室や顕微鏡といったモ

チーフもまた、ホームズ物語が参照されていることを仄めかしているが、何よりホームズ物語が意識されているのは、小説の構造においてであろう。

この話の結末には、探偵の精思と助手としての克友だけでなく、『砒石案』の書き手が登場する。事件が終わった後、精思は実際に小説の作者のところを訪れ、事件の内容を報告しているのである。

精思は家へと帰ると、服を着替えてふたたび愚園に赴き茶を飲んだ。作者もまたそこに同席しており、ちょうど中国の探偵事件を著そうと思っていたところであり、精思はそこで砒石案のことを作者に告げた。そうしてこの本が出来上がったのである。²⁷

なお、『砒石案』が書籍化されたというこの設定は、続編の『鴉片案』へと受け継がれている。そのことは、事件の関係者の台詞に「『砒石案』が出版されると、私はすぐにこれを買った」²⁸とあることからわかる。

事件を解決する探偵、事件の物語化、そしてそれを書籍化する書き手。これらは、中国人による、翻訳初期におけるホームズ物語の捉え方と重なるものであったと考えられる。これは第3章でも引いたが、たとえば、周桂笙「上海偵探索引」（1907）は、中国の探偵小説の現状について述べる際、ホームズ物語のことを引き合いに出しつつ、次のように記している。

惜しいことに、上海の探偵は、これまでみな下流社会の人間が担当してきたため、文章に多少なりとも通じており、みずから手記を書くことができるという人物はいない。事理に通じた人がその人物と友人となり、彼のために代わって記述するといった、滑震（または華生に作る：原注）氏が福爾摩斯にしたようなこともなければ、^{ワトソン} 高能陶耳のように、^{ワトソン} 彼らの名を借りて探偵小説を書くような人物もまたいない。そのため、これまで発見された記述はなかったのである。²⁹

周がここで言う「上海の探偵」とは、租界における警察のことを指している。小説家コナン・ドイルだけでなく、ホームズやその助手ワトソンなど、小説中の登場人物もまた実在するかのような書き方がなされているが、一番の主張は、ワトソンにしる、

ドイルにしる、事件を書き記す人物が中国には不在だということである。

『砒石案』における克友は、ワトソンの「記述者」という役割を踏襲しているわけではないが、作中に登場する小説家は、作中で起きた「実際の」事件を小説に仕立てて書籍化しており、先に引いた周桂笙の説におけるコナン・ドイルと立場を同じくする者であると考えられる。このように、精思が小説家のところに赴いて事件を作者に話す、「小説化」のくだりがわざわざ描かれているわけだが、そうまでして中国で最初の探偵による事件を「ホームズ式」にしようとしたことの意味とは、清末当時においてはいかなるものだったのだろうか。

そのことを考えるうえでまず注目したいのは、探偵小説と現実世界との距離感が当時の言説においてどのように表現されていたかについてである。清末期においては、探偵小説は、現実世界の制度や文物を反映するものと考えられていた。これは必ずしも探偵小説に限ったことではなかったが、とりわけ探偵小説はそのように語られ、それゆえに中国には無かったものと見做され、かつ重視された。

例えば、孫宝瑄『忘山廬日記』には、「包探小説（探偵小説：筆者注）を読むと、西洋の人々の心情や風俗、そしてその了見の陰険で偽りが多いこと、わが国の人々が敵わない者がいるということがわかる」³⁰とある。また、第3章でも引いたが、周桂笙訳述「歇洛克復生偵探案」「弁言」には、「とりわけ探偵小説は、わが国にはきわめて乏しく、西洋に独歩させざるを得ない。思うにわが国の刑法や裁判は、西洋各国とはおおいに異なっており、探偵の話は、たしかに夢にも見たことがない」³¹と記されている。そして時代はやや下るが、管達如「説小説」（1912）には「探偵小説は、配慮がもっとも行き届いており、さらにどの箇所もかならず実際に即して書かれている。中国に出現できなかつたことは、疑うに足りないのである」³²といった記述が見える。これらの事例は、いずれも翻訳探偵小説のことを海外の風習や制度を反映するものとして捉えるものであると言えよう。

冒頭でも述べたように、孔慧怡氏は、清末民初期の翻訳探偵小説が、こうした制度や科学技術について教える「教科書」としての役割を果たしていたことを指摘しているが、翻訳探偵小説はそれと同時に、西洋の科学技術や文物、制度が中国には整っていないことを露わにし、両者の差異を突きつけるものでもあったはずである。民国初期の段階で、劉半農は「探偵小説は、西洋から伝来したもので、おおむねどれも精緻に作られており、巧妙で人を驚かせる。ただ、中国と西洋の社会の状態が異なるため、

読み手はいつも隔たりを感じる。」³³と述べている。こうした「隔たり」あるいは「隙間」は、交通機関、裁判制度、科学技術など、探偵小説の物語世界を支える様々な要素において顕在化した。『砒石案』「前言」にも、次のような記述が見える。

近年西洋の探偵事件の訳本を手に入れて読んだところ、面白くて手放すことができなくなった。その出来事は珍しく、その技術は素晴らしい。それに比べると我が国でこの仕事に携わる者は、天と地ほども隔たっている。しかし西洋の探偵家が事件を解決するにあたっては、多くは交通の便を利用しており、稲妻や風のように、瞬く間に千里を行き、高々と空を超え、手を伸ばせば届く。だが中国はそうではない。(西洋では)戸籍が整っており、警察関連の行政は整っており、調査は比較的たやすく、西洋の探偵家は事件を解決する際、多くは警察の協力を得ている。だが中国はそうではない。ゆえに、今日の中国について述べるならば、ホームズがこれを処理するとしても、その探偵術を用いるのは難しいのである。³⁴

ここでは、西洋の探偵が活躍する背景としての西洋の交通機関や警察制度の充実が、中国の劣った現状を述べるうえで引き合いに出されており、両者の「隔たり」が示されている。

清末期の探偵小説創作においては、探偵小説の物語世界の背後にある科学技術や諸々の制度がしばしばそのまま翻訳探偵小説から借用され、往々にして中国ではまだ整備されていないはずのものがそこに描かれることになり、その結果として、物語世界は、中国の現状から浮遊した、実現されるべき近未来を先取りした様相を呈するのである(本章で取り上げた『砒石案』の「指紋」の例など)。この中国の現状と物語世界のあいだの「隙間」が、同時代の「彼の本は本当に優れているのだが、まったく社会の実情とは食い違っている」³⁵といった探偵小説評を生み出し、ひいては「中国には探偵小説は無い」といった評価にも結び付いたのではないか。

裏を返せば、中国にも探偵小説はある、と実感されるためには、物語世界を支える「道具」や「制度」が現実世界においても実現されていなければならなかったということになるだろう。こうした探偵小説と現実世界との関係性については、第3章でも取り上げた、周桂笙「上海偵探案」「引」(1907)における次の記述が示唆的だろう。繰り返しになるが、いま一度引いておきたい。

将来中国の探偵が全国に行き渡ったとき、この中国の探偵小説というものはどのような段階へと発展を遂げていることだろうか。しかし、天下の物事は、大きいなり小さいなりにせよ、結局は近くから遠くへ、小さいものから大きいものへ、粗製のものから洗練されたものへ、一步ずつ徐々に拡充される。一朝一夕に成るものではない。³⁶

周桂笙はこれより前の部分で、西洋において、探偵というものが専門の職業であり、新式教育に基づく学堂を卒業した学識のある人物であるということ述べたうえで、中国においても探偵を学堂で養成するべきであると訴えているのだが、この一段では、探偵小説による社会改革の成果〔学堂における探偵の養成〕が、ふたたび探偵小説の発展へとフィードバックされてゆくということが述べられている。そして、その発展は少しずつ成し遂げられるものとしてイメージされている。³⁷

このような、現実世界と物語世界が双方向的な影響関係にあるとする小説観に照らして考えるならば、中国において探偵小説が成立したとき、それを支える近代的な文物や制度が備わっていることがようやく実感されるということの意味するだろう。つまり、探偵小説の成立は、中国の近代化が成就したことのメルクマールとしてイメージされていたということにならないだろうか。

探偵小説を成り立たせている様々な道具や制度については、『砒石案』と同時期に、黄摩西「小説小話」（1908）によるまとまった記述がある。

思うに、同じく事件を処理するといっても、欧米においては、解決が極めて困難であっても、推測することが出来る服の色、日記、名刺、足跡、煙草や酒、用具などがあり、調査することができる戸籍や守兵、商売上の帳簿などがあり、そして、さまざまな科学や薬物、機械があり、研究に用いることができる。警察制度は完全であり、一声かければ招集できる。電車は速く、百里も遠くはない。電信、電話、鉄道、蒸気船はどこにも通じている。国境をまたげば罪人を受け渡す条約があり、略奪すれば自由を拘束する逮捕状がある。法律の力に頼れば、君主はその権利を侵犯することはできない。そのため、意のままに操って、潜んでいる悪人を摘発することができる。しかし、わが国はというと、以上のものは、まったく備わっていないため、(略)。³⁸

西洋で生まれた探偵小説は、近代中国において受容され、中国人の手によって生み出される過程において、上記のような、物語世界を支える制度や環境をふたたび要請することとなった。翻訳探偵小説は、近代化を成し遂げた理想の中国を幻視させる装置にほかならなかったのである。

『砒石案』においては、探偵の精思が、翻訳探偵小説を「教科書」として学習し、失敗しながらも事件を解決へと導く探偵として造型されており、さらには（同時代人がイメージする）ホームズ物語と同じように事件の小説化が行なわれている。しかし、それと同時に、探偵小説たらしめた結果として、精思の身につけている指紋の科学知識や捜査方法は、当時の中国では実現できるはずのないものとなった。「中国で最初の探偵」は、勤勉な学習者でありながら、それゆえに、皮肉にも物語世界に現実世界との齟齬を生じさせ、清末期に探偵小説が抱えることとなったジレンマを、みずからの手で招来することとなったのである。

おわりに

本章では、探偵小説『砒石案』に見られる、探偵の造型、科学技術の描かれ方、小説世界の構造における特質について考察し、同時代の小説評において繰り返されてきた、「現実と符合しない」という清末期の創作探偵小説に対する評価の来歴を論じた。

中国における最初期の探偵小説創作においては、ホームズ物語をそのまま模倣したような作品も見られるが、『砒石案』という小説には、同時代の探偵小説がホームズ物語に倣って生み出されるそのさまが、ホームズ物語を教科書とする探偵、そして小説化される事件といった要素を通して、メタフィクショナルに描き込まれている。このことは、中国の最初期の探偵小説創作において、ホームズ物語が目指すべき指標とされていたことを物語っているだろう。

『砒石案』においては、前述のような、描かれている科学知識が中国の現状を追い越すような面がある一方で、物語の舞台が上海であることや、毒物が混入されていたのが糯米糕であったこと、そして探偵の精思が飴売りに扮することなど、中国の当時の実情に見合った人物造形や背景設定を心がけている面も見受けられる。ホームズの枠組みを参照しながらも、単なるホームズ物語の模倣ではない、中国の探偵小説を生み出そうとする努力が、清末の段階から行なわれていたことがうかがえる。

後の探偵小説創作との関連という点では、池田氏が、民国期の探偵小説創作において、「東方ホームズ」といった、外部から中国を批判的に眺める探偵像が繰り返し現れてきたことを指摘しているが³⁹、そうした事態の淵源を探るにあたって、『砒石案』は、新たな材料を提供し得るのではないだろうか。

注

- ¹ 同じ傲骨という筆名による他の作品としては、翻訳に〔意〕格恩梅著 傲骨訳『身外身』（中国図書公司、1909）、創作に「三個窓」（『上海』1908.1.18）、「文明結婚」（『上海』1908.1.20）がある。樽本照雄『清末民初小説目録』（第10版、清末小説研究会、2018）を参照。
- ² 「小説管窺録」で簡単に紹介されている（阿英『晚清文学叢鈔 小説戯曲研究巻』、中華書局、1960所収）。同文は、清末期の小説雑誌『小説林』（刊行期1907-1908）に掲載されたとのことだが、1980年上海書店版には収録されておらず、未見。また、武禧「清末小説過眼録（12）偵探小説『鴉片案』（『清末小説から』第24号、1992.1）は、この小説についてこれまであまり紹介がされてこなかったことを理由に、「小説管窺録」の小説評を転載している。
- ³ 『砒石案』（小説林社、1908）、1頁。以下、『砒石案』からの引用はすべてこの版本に基づく。
- ⁴ 同上、2頁。原文「精思酷嗜小説，課罷輒手持一卷。得新奇之本，每致終夜不眠，而尤傾心於福爾摩斯聶格卡脫諸家之偵探案。」
- ⁵ 黄摩西「小説小話」（『小説林』第9期、1908）では、ホームズとニック・カーターの名を探偵の代表例として挙げている。なお、小説林社から出版されたニック・カーターのシリーズは、16冊まで刊行された。前掲『清末民初小説目録第5版』を参照。同シリーズの翻訳状況については、早くは前掲中村忠行「清末探偵小説史稿（二）——翻訳を中心として——」において紹介・整理されている。
- ⁶ 同上、6頁。原文「吾見泰西偵探家之探案，多有以足跡破案者」。
- ⁷ 第4章で述べたおとり、呂俠『中国女偵探』（1907）でも、探偵役の女性たちが新小説の話に興じており、捜査の途中でホームズ物語を想起する場面が描かれている。また、前節で取り上げた天民「失珠」（1908）などが例として挙げられる。
- ⁸ 『砒石案』、21頁。原文「使入泰西名偵探家手中，案情必瞭如指掌矣。」
- ⁹ 『砒石案』、20頁。原文「讀者識之，精思之術，以此案論之，粗疏殊甚。然不肯絲毫苟且。其人固好學者也。故破第三第四案時，人已莫測其奧，至第十案則追索捕逃之犯，千奇百怪，殆可與福聶諸子，並駕齊驅也。」
- ¹⁰ 『砒石案』、20頁。原文「中國習偵探術者，止我一人。」
- ¹¹ 『砒石案』、9頁。原文「非顯微鏡恐不能得其真相。」
- ¹² [清]李漁撰『十二楼』（『李漁全集』第4巻、浙江古籍出版社、1998所収）。『十二楼』のおもな版本には、宝寧堂本と消閑居本の二種があるが、これら光学機械を紹介している記述は後者のみに見える。なお、『十二楼』における望遠鏡の役割を分析した論考に、坪田良江「『十二楼』世界の設計——「夏宜楼」と「払雲楼」の対比を端緒として」（『饕餮』第15号、2007）がある。版本による記述の違については、同論文注6を参照した。

- 13 顕微鏡の中国への伝来の状況については、劉善齡『西洋風——中国発明在中国』「顕微鏡」（上海古籍出版社、1999）を参照した。
- 14 顕微鏡の歴史については、小林義雄『世界の顕微鏡の歴史』第Ⅲ章「顕微鏡発達史」（サンコー印刷株式会社、1980）、田中新一「顕微鏡発展史」（『レンズ ミクロ・マクロ』、INAX BOKLET、1989 所収）を参照した。
- 15 『砒石案』、9 頁。原文「精思（中略）語克友曰：“君觀鏡中，有所得乎。” 克友曰：“無之。”」
- 16 同上、45 頁。原文「取顯微鏡細視其指痕，復取唐上之指痕，一一比較，則瓜姊所抵之指痕，與糕盤上所印者絲毫無差異。」
- 17 中国では古来より指や掌の痕を契約文書に押す風習があったが、ここでの議論には含めない。その風習については、趙向欣『中華指紋学』（群衆出版社、1997）第一章「指紋学簡史」第二節「指紋在中国古代的応用」6-21 頁、羅伯特・海因徳爾著、劉持平・何海龍・王京訳『世界指紋史』（中国人民公安大学出版社、2008）13-26 頁に詳しい。
- 18 日本における指紋法導入の経緯については、渡辺公三『司法的同一性の誕生——市民社会における個体識別と登録』（言叢社、2003）第四章「近代システムへの〈インドからの道〉——あるいは「指紋」の発見」346-353 頁を参照。
- 19 これら是指紋の三原理と呼ばれる基本的な性質である。金英達『日本の指紋制度』（社会評論社、1987）第一章「指紋の性質と指紋登録の機能」中の一節「一 指紋の性質」23-27 頁を参照。
- 20 各国における指紋法の導入の経緯については、橋本一径『指紋論——心靈主義から生体認証まで』（青土社、2010）第Ⅳ章「痕跡の身元確認」、山下恒男『近代へのまなざし——写真・指紋法・知能テストの発明』（現代書館、2012）第五章「指紋の近代——個体識別法の「革命」」に詳しい。
- 21 兪叔平『指紋学』（遠東図書股份有限公司、1947）、6 頁、前掲『中華指紋学』、38 頁を参照。
- 22 前掲「清末探偵小説史稿（二）」第 4 節「その他の英・米作家と作品」。前掲『清末民初小説目録』も合わせて参照のうえ、各作品の原作を確認すると、1 は原作不明、2 は著者が H.BURFORD DELANNOY である可能性を指摘するのみ、3 は快樂亭ブラック口演、今村次郎速記『探偵小説 幻燈（一名岩出銀行血汐の手形）』（三友舎、1892.12）。
- 23 第十章「誌撥滕偵察事」（『東方雑誌』2 年第 3 期、1905）。
- 24 前掲『指紋論』第Ⅳ章「痕跡の身元確認」を参照。ホームズ作品に指紋があまり用いられていないことは、かねてからホームズ物語の欠点として指摘があったが、橋本氏は同書において、ホームズは知らなかったのではなく、「指紋は推理を必要としないため」であったとの説を提示している。
- 25 『福爾摩斯再生案』の出版状況については、樽本照雄『漢訳ホームズ論集』（汲古書院、2006）「中国におけるホームズ物語 10 『福爾摩斯再生案』の謎」189-193 頁を参照。同論考によれば、ここで筆者が参照している『福爾摩斯再生案一至五案』は 1904 年に刊行されたものの合本であろうとのことだが、「ノーウツの建築業者」の一篇に限っても、翻訳のタイトルが両者で異なっている。版本の詳細については不明である。
- 26 『福爾摩斯再生案』下冊（小説林社、1906）、52 頁。原文「雷謂福爾摩斯曰：“君試以顯微鏡察之。” 福曰：“予正欲爲此，而君竟先得吾心。” 雷曰：“君知世無兩人之拇指，紋絡相同者乎。” 福曰：“予亦聞之。”」
- 27 『砒石案』、49 頁。原文「精思返至家，易衣復至愚園啜茗。作者亦在座，方思量作中國偵探案，精思乃以砒石案告之。遂成此卷。」
- 28 傲骨『鴉片案』（小説林社、1908）、12 頁。原文「偉觀曰砒石案甫出版，吾即購之。」

- ²⁹ 前揭「上海偵探案」引。原文「可惜上海偵探，向來都是下流社會中人充當，沒有一個能稍通文墨，會得自作筆記的。又沒有個通品的人，和他們做朋友，為之代庖，像滑震先生(一作華生)之於福爾摩斯，又沒有個高能陶耳，借了他們的名，做偵探小說。所以一向沒有記載發現出來。」
- ³⁰ 『忘山廬日記』「癸卯(1903)六月一日」(上海古籍出版社、1983)上冊 710 頁。原文「觀包探小說，可以規西國人情土俗及其居心之險詐詭變，有非我國所能及者。」
- ³¹ 周桂笙記述「歇洛克復生探案·弁言」(『新民叢報』第 3 年第 7 号、1904)。原文「吾國視泰西，風俗既殊，嗜好亦別。故小說家之趨向，迥不相侔。尤以偵探小說，為吾國所絕乏。不能不讓彼獨步。蓋吾國刑律訟獄大異泰西各國。偵探之說，實未嘗夢見。」
- ³² 『小說月報』第 3 卷第 6 号(1912)。原文「偵探小說，為心思最細密，又須處處按切實際之作，其不能出現于中國，無足怪矣。」
- ³³ 『中華小說界』第 3 期(1914)。原文「偵探小說，來自西洋，類皆勾心斗角，奇巧驚人。唯中西社會之狀態不同，故閱者每多隔闕。」
- ³⁴ 原文「近年得讀泰西偵探案譯本，愛之不忍釋手。其事異，其技神，較之吾國操是役者，相去奚止霄壤。然泰西偵探家之破案，多得力交通之便，輪電風馳，瞬息千里，冥冥飛鴻，唾手可得。中國則異是。戶口清稽，警政完備，調查較易。泰西偵探家之破案，多得警察之助。中國則異是。故以今日之中國言，雖以福爾摩斯處之，亦難施其術。」
- ³⁵ 半『『匕首』弁言』(『中華小說界』第 1 年第 3 期、1914)。原文「其書奇誠奇矣，而實與社會之實況左。」
- ³⁶ 周桂笙「上海偵探案 引」(『月月小說』第 7 号、1907)。原文「將來中國偵探，布滿了全國時，這中國偵探小說，不知要發達到怎樣一個地步。然而天下的事，無論大小，總是有近而遠，由小而大，由粗而精，一步一步的漸漸擴充起來。不能一蹴即幾的。」
- ³⁷ 本論第 3 章を参照されたい。
- ³⁸ 黃摩西「小說小話」(『小說林』第 9 期、1908)。原文「蓋同一辦案，其在歐美，雖極疑難，而有服色、日記、名片、足印、煙、酒、用品等可推測，有戶籍、守兵、行業冊等可稽查，又有種種格致、藥物、器械，供其研究；警政完全，一呼可集；電車神速，百里非遙；電信電話、鐵軌汽船，處處交通；越國則有交納罪人之條約，搜牢則有羈束自由之捕符；挾法律之力，君主不能侵其權，故能操縱自如，摘發發伏。而吾國則以上者，一切不具，(略)。」
- ³⁹ 池田智恵『近代中国における探偵小説の誕生と変遷』(早稲田大学モノグラフ 110、早稲田大学出版部、2014)第二章「ホームズを想像・創造する：近代中国における探偵像の形成について」を参照。

第7章 処方箋としての探偵小説——傲骨『鴉片案』

はじめに

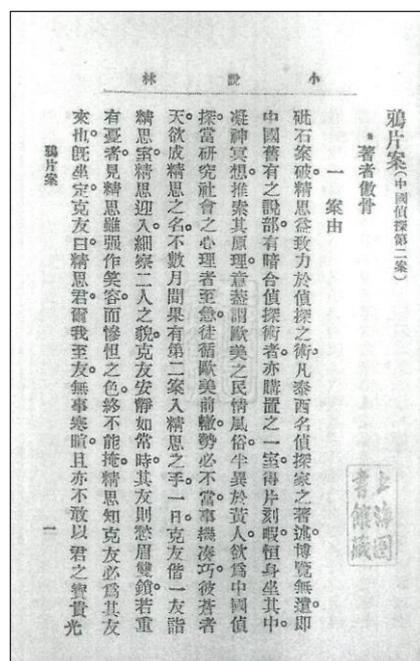
傲骨『鴉片案』は、1908年に小説林社から単行本として出版された。文言で書かれた短編小説であり、前章で取り上げた『砒石案』の続編にあたる。続編があるというのは、清末当時の探偵小説では珍しい。興味深いのは、第一作では「中国で最初の探偵」の「最初の事件」が描かれ、第二作では、その探偵の「成長」が見られることである。この成長は、当時の探偵小説イメージに根ざしたものだと考えられ、本章でこの『鴉片案』という小説を論じることの意味合いも、その一端を窺うことにある¹。

『鴉片案』は、題目のとおりアヘンの害悪がもとで生じた事件を描いており、とりわけ社会諷刺の側面が色濃く出た小説である。そこで、本章では、同時代における社会諷刺小説（譴責小説）との共通点に注目しつつ、同小説の特質について論じる。まずは、論点を具体的に浮き彫りにするために、時代背景とそれを反映した同小説の「弁言」について述べよう。

1. アヘンの害悪を描く小説と傲骨『鴉片案』

清代の小説に見えるアヘンに関する叙述は、アヘンの吸飲や販売、取り締まりといった社会問題がその背景にある²。アヘン戦争前後の時期、嘉慶年間から道光年間にかけては、「禁煙令」（禁アヘン令）が厳しく施行され、それにともない、アヘンにまつわる事件、すなわち「鴉片案」が多発したとされる³。

『鴉片案』の前後にも、アヘンの害悪を批判する作品が書かれたが、それらは1906年に始まった大規模な禁煙運動と関係が深い。代表的なものに、漱六山房『黒獄』（1906）、観我齋主人『罌粟花』（1907）、吳趸人『黒籍冤魂』（1907）、彭養鷗『黒籍冤魂』（1909）などがある⁴。『鴉片案』もまたこの系譜上に位置づけられよう。しかし、



描写の重点は小説によって異なる。

例えば、観我齋主人『罌粟花』⁵は、康熙年間におけるアヘン輸入の始まりから語り起こし、アヘン戦争の終結と南京条約による清の開港までを通時的に描く。発表年こそ禁煙運動の高まる時期と重なるものの、そのことを示す記述は無い。また、吳趸人「黒籍冤魂」⁶は、アヘンをやめる薬の費用を賄うために、土地や家のみならず娘までも売り飛ばしたものの、アヘンをやめられなかった男の顛末を描く。禁煙運動の高まりを背景として述べてはいるが、話の焦点はアヘン吸飲の害悪に当たっている。

一方、『鴉片案』は、アヘンの取り締まりが原因で生じた禁煙局員の殺害事件を描いており、アヘンの吸引そのものではなく、取り締まりの弊害を主題としている。以下、本編の内容を論じるにあたり、まずは「弁言」を見てみよう。

アヘンがわが国を死なすに足ることは、五尺の童子でもみなそれを述べることができる。近年、禁煙令が頒布され、全国の民はみな、これで妖霧を取り払い、種を強くし、民を豊かにすることができる、と満足げに嬉しそうに言い合った。しかし官吏はこれを意味の無い条文だとみなし、執行するのに力を尽くさなかった。

(中略) ああ、荒れ果てた墓の累々たる髑髏は、どこもかしこもアヘン中毒者ばかり、廢屋で泣きわめく乞食は、将来ことごとく黒籍の冤魂となるのだ。アヘンの毒に中って死ぬものは、何千万人いたかわからない。(中略) 私は自分の本を読んだ者が、これによって禁煙の弊害を知り、方法を改良し、よい効果を得てくれることを願う。もしいたずらにこれを探偵事件と見なすならば、それは著者の本心ではない。⁷

文中の「禁煙令」とは、清朝政府によって1906年9月に発布された、十年以内にアヘンを一掃するよう命じた上諭と、それを受けて政務処が提出した「禁煙章程」を指す。ここでは、その「禁煙令」による社会状況の悪化と、アヘンの毒による「黒籍の冤魂」の増加が示される。

「黒籍」とは、薬物の中毒になった人物が入るとされた戸籍であり、「冤魂」は無実の罪で死んだ者の魂のことである。先述のとおり、1907年には、「黒籍冤魂」という題名の小説が吳趸人によって書かれており、この語はアヘン中毒者の代名詞としてすでに人口に膾炙していたと考えられる。

注目すべきは、引用箇所最後の、「もしいたずらにこれを探偵事件と見なすならば、それは著者の本心ではない」という一文である。傲骨はこの小説を「探偵事件」（偵探案）としてのみ読むのではなく、社会の改良に役立てて欲しいと述べている。「偵探案」という語は、先に取り上げた吳趸人『中国偵探案』（1906）、周桂笙「上海偵探案」（1907）など、同時代の探偵小説の題名にもよく用いられており、ここでは探偵小説を指すものと考えられる。

探偵小説は中国には無かった小説ジャンル、つまり「新小説」である。いわゆる「小説界革命」の影響下にあつては、多かれ少なかれ、同時代の社会問題を描き出し、社会を改良する役割を期待されているはずのものである。「禁煙の弊害」を知らしめるという目的は、少なくとも表向きは、その期待に沿うものだと言えよう。

そうだとすると、「探偵事件」としてのみ読むな」と述べた傲骨は、おそらく探偵小説の娯楽的な側面を念頭に置いたのだと考えられる。いずれにしても、ここからは、傲骨がこの小説を探偵小説であると自覚していたことが窺えよう。

そもそも清末当時の小説の呼称については、書き手や読み手によっても異なり⁸、ジャンルとしての特徴を論じる際には注意を要するが、それでもなお、「いかなるものが探偵小説としてイメージされたのか」という問いは有効だろう。換言すると、アヘンの害悪を批判的に描く小説が多数あつた中で、探偵小説においてそれが描かれることの意味合いはどのようなものだったのか、そこには探偵小説に固有の問題が見られるのか、という問いである。以下、この点について考察を進めたい。

具体的には、まず『鴉片案』の探偵小説の側面と、譴責小説（社会批判小説）の側面について述べる。そのうえで、疾病と治療の隠喩を用いた言説を足がかりとして、『鴉片案』の探偵小説としての特徴について論じる。

2. 探偵小説としての『鴉片案』——探偵の成長から窺えること

まずは『鴉片案』の具体的な構成について述べよう。この小説は、「案由」（事件の由来）、「初探」（最初の調査）、「謁楚」（楚〔偉観〕との謁見）、「剖尸」（死体の解剖）、「再探」（再調査）、「舟談」（舟での会談）、「捕犯」（犯人逮捕）、「追述」（追記）の八節から構成されており、「事件とその解決」を骨子とする。話は上海とその近郊の街が舞台だが、地名については、「仮定県」や「伏機鎮」など架空のものも用いられている。

各節の内容は以下のとおりである。

探偵の精思のもとに、友人の克友が百解という依頼人を連れてくる。依頼内容は、百解の姉にかけられた、夫の過亢の殺害容疑を晴らして欲しいというものだった。過亢の死因がアヘンの毒であるとする西洋医の見立てが示されるも、事件を担当していた官吏の楚偉観は判断を留保していた（第一節「案由」）。

精思は事件のあった伏機鎮へと列車で向かい、田舎の人間に扮して茶館で情報を収集する。さらに静水という街を訪れ、茶館で知り合った米商人の名を騙り、依頼人百解の父親から事情を聞き出す（第二節「初探」）。

精思は楚偉観と情報を交換し、容疑者として煙館（アヘンの吸飲所）の主人莊延が浮上する。その煙館は禁煙令のあおりで営業を停止していた。精思は上海へ戻り、かつての級友である医者の方伊を訪ね、過亢の遺体の解剖を計画する（第三節「謁楚」）。

精思と方伊は過亢の墓を暴いて遺体を解剖する。ふたりは上海に戻ると遺体の胃の中の残留物を分析し、アヘンの毒が龍眼に付着しているのを確認する（第四節「剖尸」）。

精思は依頼人の百解を説得し、ともに過亢の父親を訪ねる。過亢の部屋をひとつお探分した精思は、日を改めて仮定県の莊延の煙館を訪れる（第五節「再探」）。

仮定県から船で伏機鎮へ向かった精思は、アヘン吸引者と思しき乗客との会話を通じて、禁煙令の厳格化にともない、アヘンを隠れて吸う者が増えたこと、それに対して禁煙局の役人が眼をつぶっていることを聞きつける。上海に戻った精思は友人の孔武とともに列車で伏機鎮へと向かい、車中で見かけた怪しい男を尾行する（第六節「舟談」）。

ある建物まで男を尾行した精思と孔武は、男が龍眼で包んでアヘン煙膏を呑むという話をすることを目撃し、捕まえようとするが逃げられる。馬に乗って逃げる男を、ふたりは自転車で追いかけて、伏機鎮から上海までやってくる。男は租界へと逃げ込むが、エリアから出たところを孔武が捕まえる（第七節「捕犯」）。

ふたりは百解のもとを訪れ、事件のあらましを伝える（第八節「追述」）。

第6章でも取り上げたとおり、シリーズ第一作『砒石案』における精思は、作中で「中国で唯一の探偵」であることが示されている。最初の事件であるため、探偵としては未完成であり、西洋の翻訳探偵小説を「教科書」として探偵術を学ぶ「学習者」として造形されている。詳細は後述するが、第二作『鴉片案』においては、西洋の探偵をたんに模倣するだけではなく、そこから抜け出そうとする試みが早くもなされている。物語世界に即して述べるならば、探偵は「成長」している。

この成長は、『砒石案』においてすでに仄めかされている。『砒石案』において、探偵の精思が未熟な探偵として造形されていることは先に述べたが、彼の調査が上手くいかない場面では、以下のような説明がなされる。前章でも引用したが、ここに再録しておく。

この人物はもとより学を好む者である。したがって第三、第四の事件を解決するときには、人々はすでに彼の奥深さを推し測りがたくなっており、第十の事件に至れば、罪を犯して逃亡した犯人を追跡すること、摩訶不思議であって、シャーロック・ホームズ、ニック・カーター諸氏とほとんど肩を並べることができるだろう。⁹

ここでは、「中国で最初の探偵」も、いずれは西洋の探偵に追いつくだろうという成長の可能性が示唆されている。そして、第三、第四の事件を待たずして、早くも第二の事件において、精思はその片鱗を見せている。そのことは、『鴉片案』冒頭部に示された精思の「教科書」の変化からまず窺うことができる。

砒素事件が解決され、精思はますます探偵の術に力を注いだ。およそ西洋の名探偵の著述については、遺漏なく広く目を通して、そこで中国の昔の小説のなかの、探偵術に期せずして一致するものも購入して一室に置き、少し時間ができると、いつも中に坐して、精神を集中させて瞑想し、その原理を考えた。思うに、欧米の民情風俗は、半分は黄色人種と異なっている。中国の探偵になろうとしたら、至急、社会心理を学ばねばならない。¹⁰

『砒石案』では、精思が日ごろから読む書籍については、西洋の探偵小説のみだっ

たのが、『鴉片案』になると、さらに中国の古典小説が加わっている。具体的な書名は挙げられていないが、公案小説や、吳趸人が『中国偵探案』に収録したような、能吏の話を書いた筆記の類いだろうか。いずれにしても、ここから窺えるのは、人種や風俗が中国と西洋世界とでは異なるという認識と、中国の実情と向き合おうとする決意であり、西洋世界に対する盲目的な追従ではもはやない。

いまひとつ成長の事例として興味深いのは、精思が「社会心理」を学ぶべきだと述べていることである。これは清末期における心理学の受容を背景としたものだろう。

中国における心理学の受容は、日本に倣い学堂に導入されたのが始まりだとされる。並行して、教科書として心理学の研究書が翻訳された。その主力となったのが日本留学経験者であり、ハラルド・ヘフディング著、石田新太郎訳『心理学』（1897）を底本として王国維が翻訳した、『心理学概論』（1907）のようなものもあった¹¹。「社会心理」という語については、西学書の中の新語や訳語を解説した『新爾雅』（1903）「積教育」の項に「社会心理学」とあるのが比較的早い例だと思われる¹²。

ここで精思は中国の「社会心理」を小説から学ぼうとしているが¹³、小説を論じる際に「心理」を引き合いに出す記述は、この時期の小説論にも見られた。例えば無名氏「新世界小説社報発刊辞」（1906）には、「小説与世界心理之關係」という一節がある¹⁴。また、『鴉片案』以降のものだが、管如達「説小説」（1912）には「小説は社会心理の反映である」¹⁵と記されている。このような小説観は、同時代によく見られた素朴な社会反映論の変奏と見なせよう。

重要なのは、作中において、精思が中国の「社会心理」を探究するのみならず、それを実際の捜査に活かしている点である。第二節「初探」で精思が聞き込み捜査のために田舎の人間に扮する場面に、具体的な実践例が見られる。

私の本をお読みになった方は、もしかすると、このようにお考えかもしれない。西洋の探偵はみな変装術を身に付けており、そのため見た目を変えて変装すること神業のようだが、いま精思が真犯人を探ろうとして、田舎者の服装に着替えているのは、「西施の顰に倣う」というやつであり、いたずらに醜態をさらすことになるのではないか。精思にはほかに考えがあるのか。そしてここで出かけたのは、輿論を聞こうというだけであって、服装を改めなくとも差し支え無いのではないかと。しかし、辺鄙な場所では、（人々は）見識が無く珍しいことに驚きやすく、

華美な服装や流行りの衣装は、彼らの注意を引いてしまう。以前ある学生が体操着を着て家に帰ったところ、地元の者が驚いてゴロツキだと思い、銃を撃って殺してしまった。未開の地では、そもそも思いもよらない出来事がある。これは、精思が社会心理を研究して学んだことでもあった。¹⁶

ここでは、精思の変装が西洋の探偵の単なる模倣ではないことが示されている。精思は中国の「社会心理」の研究を通じて得られた知見を活かし、中国の実情に合った探偵術を模索し実践しているのである。

ここまで、探偵の成長について述べたが、事件の解決に貢献する人物が探偵のほかにもいるということにも留意が必要である。その点については後述することとして、続いて、『鴉片案』の譴責小説としての側面について述べたい。

3. 譴責小説としての『鴉片案』——探偵が明らかにするもの

清末期には、社会の現状を諷刺する小説が流行した。それらは「譴責小説」と称されるが、これは魯迅が後に『中国小説史略』において用いたことで定着した呼称である。清末当時から小説の角書きに用いられていたわけではない。したがって、厳密な意味での小説ジャンルではなく、諷刺小説のバリエーションとする意見もある¹⁷。社会の暗部を暴き出し、世間の時弊を取り上げる社会写実小説¹⁸というのが、説明としては妥当なところだろう。

清末小説の角書きは多様であるが、どの小説も多かれ少なかれ社会諷刺の側面を持つと言えるだろう。探偵小説も例外ではなく、往々にして作中の探偵がその諷刺に一役買っている。

前章で『砒石案』を論じた際、筆者は翻訳探偵小説について、「西洋の科学技術や文物、制度が中国には整っていないことを露わにし、両者の差異を突きつけるものでもあったはずである」¹⁹と述べた。中国社会の後進性は、物語世界の内部においても、探偵が事件解決の過程で困難に出くわすことで顕在化する。中国初期探偵小説において、探偵は、往々にして、捜査における障害や葛藤を通して、中国と西洋の差異を露わにする機能を担っている²⁰。

その点は、『鴉片案』も同様である。第三節「謁楚」の末尾において、精思は事件解

決のためには遺体の解剖が不可欠であるとし、友人の医者である良伊とともに墓へと向かう。そのくだりは次のようなものである。

良伊は驚いて言った。「棺を開けて遺体を動かすというのは、わが国の規律に照らせば、罪は極めて重いというのに、さらにそれを解剖するのか？」精思は言った。「この事件は遺体を解剖しなければ、実情は明らかにはならない。実情が明らかにならないければ、真犯人を突き止められない。真犯人を突き止められなければ、死者の恨みは晴らすことができない。死者の恨みを晴らすためにその遺体を解剖するというのは、道理には悖らないのだ。それに人は死んだあと、そもそも知覚はない。わが国は文明がまだ進歩していないため、おそろおそろ遺体を保全することで幽魂を慰撫する。科学の道理によって証明するならば、遺体というのはおさら重んじるほどのものではないのだ。」²¹

ここでは、人間の遺体に対する考え方について、文明的、科学的な見方と中国における見方が対置させられている。そもそも、棺桶を開けて遺体を調べるという展開は、この時期の探偵小説に固有のものではないが、それが語られる枠組みにおいて、先行する小説と『鴉片案』とでは異なっている。

例えば、施公（施仕綸）が裁きによって事件を解決する清代後期〔乾隆年間から嘉慶年間とされる〕の公案小説『施公案』²²第二四六回では、ある日、鳥の知らせによって冤罪事件の存在を知った施公が、部下に命じてその鳥の行く先を調べさせたところ、朱家の天佑なる人物の墓へと辿り着く。しかし、関係者への事情聴取だけでは朱天佑の亡くなった経緯がはっきりせず、墓を開けることになる。

次の日の朝、ふたたび白楊崗へと向かった。亡くなった者の親だけでなく、親族や近隣の者にも伝え、山に登って墓をひらき、棺を開けて検視した。朱天佑の遺体は、天候が暑かったにもかかわらず、まだまったく腐乱していなかった。施公はさらに確信を強め、検視官に遺体をくまなく調べさせたが、頭のとっぺんから足の先にいたるまで、致命傷どころかわずかな傷さえも見当たらず、さらには毒をあおったわけでもなかった。ただ骨がやせ細っており、実際に結核によって死んだものであった。施公はどうすることもできず、ただ棺に蓋をして墓を封じるよう命令した。²³

『施公案』においては、西洋の事情に照らして中国の実情を捉えるという話の枠組みは採用されていない。それに対して、『鴉片案』において、「中国の」事例として問題が顕在化するのには、検視の際に遺体の「解剖」が行なわれていることとも関係があるだろう。

引用部において、良伊は西洋医学を修めていながら解剖に対して抵抗感を示すが、これは「身体髪膚、之を父母に受く。敢て毀傷せざるは、孝の始めなり」²⁴という伝統的な儒家の考え方を背景としたものだろう。実際に、中国では長らく解剖学的な知識は未熟なままであった²⁵。西洋の解剖学の知識は、明末清初に宣教師によって中国にもたらされたが、大きな影響力を持ち始めるのは、1851年にイギリス人宣教師のベンジャミン・ホブソンが、陳修堂の協力のもと、解剖学と生理学の概説書『全体新論』を編訳して世に出してからとされる²⁶。つまり、ここでは「解剖」という西洋由来の科学的な方法が用いられることで、中国の「文明」の遅れが露わになっているのである。

もうひとつ指摘しておくべきは、犯人が租界に逃げ込むくだけりである。第七節「捕犯」において、精思と孔武は、馬に乗って逃げる男を取り逃しそうになるが、伏機鎮の駅の近くに放置してあった自転車に乗って追い駆ける。ふたりは男を線路に沿って追跡し、やがて上海へと至る。男が大通りへと逃げ込み、馬車に乗り換えてさらに逃走すると、そこはすでに租界のエリア内であった。精思は男を捕らえられない状況に対して、地団駄を踏んで悔しがる。

もしこの場所が租界でなかったなら、わたしはすぐにやつを捕らえることができるというのに。我が国は主権を喪失しており、どこもかしこも損をしている。真犯人が眼前にいながら、私はやつが行くのをただ見ているしかない。いま採りうる方策は、ただぴたりと後をつけて、やつの住処を突き止めることだけだ。²⁷

上海の租界が清末小説に豊富な材料を提供したことはつとに指摘があるが²⁸、「租界への逃亡」という点については、興味深い記述がある。清末の文人徐珂が清代の事柄を広く集めて編んだ『清稗類鈔』の「譏諷類」に、「三多」という項があり、各地の「三つの多いもの」を挙げて諷刺している。北京（官僚、相公、家畜の糞）、江寧（道台、ロバ、アヒルの塩漬け）、蘇州（状元、妾、名妓）と続き、最後に上海の事例が、次のように記されている。

上海には三つの「多いもの」がある。曰く逃亡者が多い、曰くアヘン中毒者が多い、曰く盗人が多い（上海の租界は広く、我が国の法権が及ばない、そのため色々な犯罪者がこれにかこつけて逃げ込むのである。そして、禁煙の令もまた遮られてしまうため、アヘンを吸う者もまた、みなここに姿をくらますのだ。このふたつの理由により、僑民には裕福な者が多く、盗人に目をつけられ、それで真っ昼間に武器を手にして表通りで強盗を働く者がいるのである。そして、裁判所においても死刑の判決を下す権利を持たないため、ますます放埒で憚りがなくなるのである）。²⁹

一見するとあまり関係が無い「禁煙」の話と「租界」の話が、ともに「上海に多く見られる事例」という括りで語られている。この記述を踏まえると、『鴉片案』においては、当時の上海における社会問題が、ひとつは事件発生の原因（禁煙令）として、ひとつは犯人逮捕を妨げる障害（租界）として、小説のプロットに取り込まれていることがわかる。つまり清末中国、とくに上海の現状が、西洋世界との対比のもと、批判的に描かれているのである。

もっとも、このような総括では、同時期の他の探偵小説のみならず、譴責小説との境界もまた曖昧なものとなる。さしあたり、探偵小説の譴責小説との近接性を認めつつ、次節以降では、両者の線引きが『鴉片案』においてどのようになされているのかを考えていきたい。

4. 隠喩としての治療

いま一度、先ほど引用した『鴉片案』「弁言」に話を戻そう。同文の冒頭には、「アヘンがわが国を死なすに足ること」と記されている。このような、国を人間の身体に見立てた言い方は、清朝末期以降の中国で自国を病身に喩えた、「東方病夫」「東亜病夫」といった語句を想起させる。

第一章でも言及したが、自国の現状を病気に、現状の解決を治療行為に見立てる「疾病」と「治療」の隠喩は、国の情勢のみならず、様々な負の局面を喩えるのに用いられた³⁰。楊聯芬氏は、当時の思想家がそういった比喩を用いていることを踏まえて、当時の啓蒙者の責務が「病状の診察」であり「処方箋を出すこと」であったことを指摘している³¹。

アヘンとこれらの言説との親和性は高い。高嶋航氏によれば、1906年9月における禁煙令を背景として、アヘンを断つための禁煙薬などの医薬品の広告において、先に挙げた「東方病夫」「東亜病夫」といった語句が用いられるようになったという。³²

「疾病」と「治療」の隠喩は、小説論においても用いられた。旧小説の「病」を新小説によって「治療」することが目指され、中国に無かった探偵小説もまた、そうした新小説のひとつとして重視された。例えば、先の章でも引いたように、定一は「小説叢話」(1905)において、中国の小説が発達していない現状を指摘したうえで、次のように述べる。

手当てをするには、政治小説、探偵小説、科学小説を取り入れることから始めなくてはならない。思うに、中国の小説の中には、この三者の性質は皆無である。だが、この三者はとりわけ小説全体の要なのである。³³

また、第2章でも引いたが、同時期の翻訳探偵小説『母夜叉』『間評八則』(1905)には、「この探偵にはほかにもいくつか良いところがある。わが国民の障害や疾病を治療することが出来ることである」³⁴といった表現も見える。

時代はやや下るが、前章でも取り上げた管如達「説小説」(1912)では、旧小説の「情理に合わない」という特徴が「病」として取り上げられ、それとは対照的な事例として探偵小説が引き合いにだされている。いま、前章に引いた箇所の前部分も含めて再掲しておく。

この種の小説〔探偵小説〕もまた、中国には無かったものであり、近年翻訳が盛んに行なわれたことで、ようやく社会に出現したものである。中国人が小説を書くにあたっては、大きな病があり、「不合情理〔道理に合わない〕」という。書物の中に書かれていることは、読めば新奇で面白くないわけではないのだが、それを実際の世界に照らすと、符合し得るものは何も無い。鬼神について語っているところがそうであるばかりでなく、人間のことを記したところもまた、大半はそうである。探偵小説は、思考がもっとも行き届いており、そのうえどの箇所もかならず実際の世界に即して書かれなくてはならない。中国に出現し得なかったことは、疑うに足りないのである。³⁵

この一文においては、「(大きな) 病」に相当する「病」という語は、「疾病」ではなく、「弊害」を意味する可能性もあり、判然としない。しかし、成之（呂思勉）「小説叢話」（1914）に見える類似の表現においては、少なくとも同様の問題を「治療」すべき「疾病」として語っている。

中国人の著述には大きな病がある。それは、「いずれも虚構を凌ぐものであるが、真実になり得ない」ということである。（中略）これはまさに中国小説の大病である。この病を治そうとするならば、探偵小説をもって進めるしかない。おもうに探偵小説は、どの記述も実際に即している必要があり、どの箇所も周到でなければならず、根拠もなく話を作りあげるとは決して許されないのである。³⁶

この評論では、探偵小説が「道理に合った」ものであり、中国小説の病を治療するための手段として語られている。このことは、「(病を) 治す」ことを意味する「薬」という語が用いられていることから、はっきりと窺うことができる。

先に述べたように、同時代においては、「病状」と「治療」の隠喩が広範囲で使用されており、探偵小説のみが「治療」の役割を期待されたわけではない。しかし、ここに引用した小説論が示しているのは、少なくとも言説上は、とりわけ探偵小説に、中国の「病状」（問題）を明らかにし、それを「治療」（解決）する役割が強く期待されたということである。そしてこのことは、小説『鴉片案』の構成とも大きく関わっている。

5. 探偵は社会秩序を構築し得るか——事件の解決が物語ること

英文学者の高山宏氏は、シャーロック・ホームズ物語が生まれた時代背景として、ヴィクトリア朝期のロンドンで悪疫の流行が繰り返されていたことを踏まえ、「ホームズ作品の機能」について、「被害者の殺害という形でとりこんだ死を、因果律と目的論の「鎖」で説明しることによって馴致する悪魔祓い装置として働いたと指摘する。その上で、作者のコナン・ドイルが、職業の医者をやめてホームズ作品の創作を本格化したことについて、ホームズ作品に「彼の治療学セラピューティクスの方法を見出したに相違ない」と述べる³⁷。

疫病の流行したヴィクトリア朝期のイギリスと、アヘンの蔓延した清朝末期の中国とを単純に比較することはできない。ただし、高山氏が、「ホームズ作品」の持つ「治療」の機能を指摘していることは注目に値する。このような「治療」の役割を認めることが可能なのは、探偵小説が「事件とその解決」を骨子とするものであり、結末において物語世界に秩序が立ち上がるからにほかならない。

そこで、『鴉片案』における事件の解決、すなわち物語世界の秩序の構築に貢献する人物に目を向けたい。具体的には、事件の裁判を担当した仮定県県尹の楚偉観、正しい見識に基づいて検死と解剖を行なった医者の方良伊、そして精思とともに犯人を捕らえた孔武の三人である。

ここで指摘しておくべきは、探偵の友人である彼らには、「海外留学経験者」という共通点があるということである。まず楚偉観だが、第一節「案由」で、事件の依頼人の百解が次のように紹介している。

官は姓を楚、名を偉観といい、若い頃に日本に留学しておりました。官吏に任ぜられてからは、これまで顧みられなかった事柄を実行に移し、三尺（法律）の下にあらうとせず、事件の実情の真偽を追求しました。そのため姉はまだ刑を受けていないのです。³⁸

「三尺の下にあらうとせず」というのは、従来の規律に基づくならば刑を執行して然るべきところ、そのようにはせず、「事件の実情」の解明を優先させたことを述べているものと考えられる。「姉はまだ刑を受けていない」というのは、筋立てにも記したが、楚がこの事件について、証拠不十分のため判決を留保していることを示す。

第六節「舟談」では、官位に就いてから民情の理解のためにまとめてきたという数々の事件記録を精思に提供する。ちなみに、この小説の登場人物は、名前が人物の性質を表しているもの（名詮自性）が多い。楚の名前〈偉観〉は、文字通りには「優れた眺め」を表すが、〈weiguan〉という音は、〈為官〉（官である）とも通じる。

次に、良伊の名前は〈良醫〉（良い医者）と音通になっており、分かりやすく性格付けられている。精思は、最初に遺体を検死した百特という西洋医に話を訊くが、アヘン以外の混入物や服毒後の経過時間について答えられなかったのを未熟であると嘆き、良伊を呼ぶことになる。良伊が最初に登場する場面には次のように記されている。

良伊もまた精思の同級生であり、ドイツの医学専門学校を卒業している。医術は優れており、心も細やかである。精思がやってきたのを見て、彼にこのように語った。「君は探偵術を使い始めてから、日増しに進歩しているはずだ。もし医者の方が必要になったら、私は君のために助けになろう。」³⁹

かくして良伊は精思とともに墓を暴いて遺体を解剖するに至る。のみならず、自宅にある「化学室」で遺体の胃の内容物を分析し、アヘンのほかに龍眼が混入しているという重要な事実を突き止める。その技術と見識は、未熟な西洋医との対比によって際立たせられている。

そして最後に孔武である。この人物の名〈孔武〉は「非常に勇猛であること」を意味する語であり、やはり名前がその性質を表している。第六節「舟談」において、精思は楚偉観のもとで資料を見せてもらったあと、上海に行き、虹口にある某学校の友人、孔武を訪ねる。孔武については、次のように紹介される。

拳術に優れており、オーストリアの陸軍学校を卒業している。家にいたときのこと、隣家が火事になり、火はさらに自分の家にまで及んだ。孔武は片手で家の柱を押さえたが、家が傾いたので、さらに火中へと入り、ふたりを脇に抱えて出てきた。人々はこれによって孔武が多なる力を備えていることを知った。⁴⁰

整理すると、楚偉観は日本、良伊はドイツ、孔武はオーストリアへとそれぞれ留学していることが示されている。清朝末期、とくに日清戦争以降の中国では、新たな学問を取り入れ、自国の近代化を進めるべく、海外への留学生が増加してゆく。当初は、言語を学ぶ負担が少ない、生活費が低いといった条件から、日本への留学が推奨されたが、日本のみならず、欧米への留学生も徐々に増えていった⁴¹。帰国した留学経験者は、様々な分野で中国の近代化に尽力した。

注目すべきは、『砒石案』においては、探偵の精思が未熟ながらもみずからの手で最初の事件を解決しているのに対して、この『鴉片案』では、探偵が能力的に「成長」しているにも関わらず、他者の協力のもとに事件を解決していることである。

本節で述べたように、『鴉片案』においては、様々な立場の人物がその能力を発揮することで事件の解決に貢献しており、探偵は彼らの協力のもとに物語世界における秩

序を構築している。つまり精思は、西洋の探偵を目指して研鑽しながらも、結果として、シャーロック・ホームズのような、圧倒的な能力によってひとりで事件を解決する探偵ではなく、自分以外の、能力的に優れた人間（留学経験者）との協力によって事件を解決する探偵へと変化を遂げたということになる。

この小説においては、同時代の譴責小説のように、世の中の様々な悪弊が暴き出されているだけでなく、それらの問題を解決するために、海外の学問を修めた海外留学経験者による新たな社会秩序の構築が理想として示されている。言うなれば、『鴉片案』は、傲骨が社会の「病状」を診断して提出した「処方箋」だったのである。

おわりに

本章では、清末小説『鴉片案』について、同時代における譴責小説との共通点を述べつつ、探偵小説としての特質を論じた。探偵小説が「事件とその解決」を骨子とする小説ジャンルだとするならば、その「事件」の部分に背景としての社会問題を描き込むことができるという点において、探偵小説と譴責小説との親和性はそもそも高い。

しかし、譴責小説の機能が社会の現状の暴露、言い換えるならば「病状の指摘」だとすると、この『鴉片案』では、その先の「治療法の提示」までなされていることになるだろう。探偵小説と譴責小説が社会の変革に資することをひとしく期待されながらも、そのジャンルとしての特質が異なるとすれば、それはまさにこの点においてではなかつたらうか。『鴉片案』は、両者の境界線がとりわけはっきりと窺える点において、初期探偵小説創作の成り立ちを示す重要な成果だと言えよう。

¹ 『鴉片案』に関する先行研究は、管見の限り見当たらない。早くは「小説管窺録」に筋立ての紹介がある（阿英『晚清文学叢鈔 小説戯曲研究巻』、中華書局、1960、528頁）。また、劉徳隆『清末小説過眼録』（清末小説研究会、2004）における紹介が比較的詳しい。このほか、阿英「關於鴉片戦争の文学」（『鴉片戦争文学集』上下冊、1937。いま古籍出版社1957年版に拠る）、阿部泰記「中国近代における探偵小説の創作」（『樋口進先生古稀記念 中国現代文学論集』、中国書店、1990）にも言及がある。

² 早期の代表的な作品に、陳森『品花宝鑑』（1849）、魏秀仁『花月痕』（1858）、俞達『青楼夢』（1878）、韓邦慶『海上花列伝』（1892-1894）などがある。

また、ジャーナリスト、翻訳者のジョン・フライヤーが懸賞付きで「時新小説」の名称で募集した小説群も特筆すべきだろう。これはフライヤーが日清戦争後に、「アヘン」「時文（八股文）」「纏足」を批判するために執筆を呼びかけたものである。近年、応募された小説の手稿が発見され、162点のうち150点を影印したものが、周欣平主編『清末時新小説集』（上海古籍出版社、2011、全14冊）として刊行された。そのうち、アヘンに関するものは46篇ある。アヘンを描く小説については、施擘、鄭秉成「近代小説与鴉片叙事」（『社会科学』2014年第11期）を参照。

- ³ 清末におけるアヘンをめぐる諸問題とその取り締りに関しては、目黒克彦「清朝最末期における禁煙運動に関する覚書——印度鴉片の輸入遞減法を中心に——」（『愛知教育大学研究報告（社会科学編）』第39号、1990）、趙華『晚清鴉片社会流播問題研究：以鴉片案为中心』（浙江大学出版社、2016）を参照。本稿における「禁煙」の「煙」は、いずれも（鴉片煙）、つまりアヘンを指す。
- ⁴ [前掲] 施擘、鄭秉成「近代小説与鴉片叙事」。なお、ここに挙げた彭養鷗『黒籍冤魂』については、確かにアヘンの害悪を描く小説ではあるが、成立年については、光緒二三（1897）年かそれより少し後とする説もあり、1906年の禁煙運動とは関わりが無い可能性もある。
- ⁵ 初出は『鸚粟花』の名で東京活版所印刷より1907年に刊行されたもの。いま、『中国近代珍稀本小説』第17巻（前掲）所収版に拠る。
- ⁶ 初出は『月月小説』第1年第4期（1907）。
- ⁷ 『鴉片案』「弁言」。原文「鴉片之足以死吾國，五尺童子，盡能言之。近禁煙之令頒，四海蒼生，咸欣欣有喜色相告，謂從此可以除妖霧，強種裕民。乃官吏視爲具文，奉行不力。（中略）嗚呼，荒憤〔墳〕纍纍骷髏，到處是鴉片煙鬼，敗屋嗷嗷乞丐，將來盡黒籍冤魂，中煙毒而死者，不知幾千萬人矣。（中略）吾願讀吾書者，因是知禁煙之弊，改良辦法，得收好效果焉。若徒以偵探案視之，則非著者之本心矣。」
- ⁸ 陳平原『二十世紀中国小説史 第一卷 1897-1916』（北京大学出版社、1989）、118頁脚注1を参照。氏は具体例として、『彼得警長』と『穿中花』が同じ原作の翻訳でありながら、前者は探偵小説を、後者は言情小説を標榜していたことを挙げる。この点は、早くは寅半生「小説閑評」（1906）に指摘がある（前掲『晚清文学叢鈔 小説戯曲研究巻』、487-488頁を参照）。
- ⁹ 傲骨『砒石案』（小説林社、1908）、20頁。原文「其人固好學者也。故破第三第四案時，人已莫測其奧，至第十案則追索捕逃之犯，千奇百怪，殆可與福壽諸子，並駕齊驅矣。」
- ¹⁰ 『鴉片案』1頁。原文「“砒石案破，精益求精致力於偵探之術。凡泰西名偵探家之著述，博覽無遺，即中国舊有之說部，有暗合偵探術者，亦購置之一室，得片刻暇，恆身坐其中，凝神冥想，推索其原理。意蓋謂歐美之民情風俗，半異於黃人，欲爲中國偵探，當研究社會之心理者至急。」
- ¹¹ 清末中国における心理学の受容については、胡延峰『留学生与中国心理学』（中国学科現代転型叢書、南開大学出版社、2009）に詳しい。同書によると、中国で1902年から1912年にかけて翻訳出版された心理学に関する書籍は23種あるという。
- ¹² 「社会全体に現れた、人類の精神の状態の変化を研究するものは、その名を社会心理学という（研究現於社會全體上，人類精神之變化狀態者，名曰社會心理學）」といった簡単な説明がある。『新爾雅』については、沈国威編著『『新爾雅』とその語彙』（白帝社、1995）を参照。
- ¹³ 清末期の小説論に心理学の用語が見られる点については、李建中「晚清小説理論中的心理学思想」（『中南民族学院学报（哲学社会科学版）』1998年第3期）を参照。
- ¹⁴ 『新世界小説社報』第1期に掲載。いま黄霖・韓同文選注『中国歴代小説論著選（修訂本）』下冊（江西人民出版社、2000年）所収版を参照。

- 15 『小説月報』第3年第8号(1912)掲載。いま陳平原、夏曉虹編『二十世紀中国小説理論資料(第一卷)』(北京大学出版社、1997)所収版に拠る。原文「小説者、社會心理之反映也」。引用原文の字体は繁体字に改めた。
- 16 『鴉片案』、7-8頁。原文「讀吾書者、得毋謂泰西偵探、咸有易容之術、故改頭換面、變化神奇。今精思欲偵探真犯、乃徒易鄉人之裝、不亦東施效顰、徒增醜態乎。不知精思別有會心。且此去不過欲一聞輿論、即不改裝、亦屬無碍。惟鄉僻之地、少見多怪、華服時裝、惹人注意。前某學生衣操服歸家、鄉人驚駭以爲光蛋、開鎗斃之。未開化之地、事固有出人意外者、此亦精思研究社會心理所得者也。」
- 17 陳平原『二十世紀中国小説史 第一卷』(前掲)第9章「実録、譴責和感傷」、314頁を参照。魯迅は旧来の諷刺小説とは区別して「譴責小説」という語を用いており、その分類をめぐる議論はあるが、ここでは掘り下げない。なお、陳氏は「譴責」という語について、清末民初の諷刺小説の基本的な特徴をうまく概括できるものであり、踏襲しても差し支えないと述べる(同頁)。その日本語訳に関しては、「譴責」という語が避けられる場合もあるが、本稿では陳氏の説を踏まえつつ、「社会諷刺小説」といった意味合いで「譴責小説」という語を用いる。
- 18 この説明は、蔡之國『晚清譴責小説伝播研究』(社会科学文献出版社、2012)、3頁を参照。
- 19 本論第7章を参照。
- 20 民国期の探偵小説において、外部から中国を批判的に眺める探偵像が繰り返し現れることについては、池田智恵『近代中国における探偵小説の誕生と変遷』(早稲田大学モノグラフ110、早稲田大学出版部、2014)第二章「ホームズを想像・創造する——近代中国における探偵像の形成について」に指摘がある。
- 21 『鴉片案』、17頁。原文「良伊駭曰：“開棺翻屍、依吾國之律、罪至重、且剖之耶？”精思曰：“此案非剖尸、則案情不明。案情不明、則真犯不得。真犯不得、則死者之冤不伸。爲伸死者之冤而剖其尸、於理尚不悖。且人死之後、本已無知。吾國文明未進、故兢兢焉慾保全死尸、以慰幽魂。證以科學之理、死尸更無足輕重。”」
- 22 『施公案』は早期の版本は97回本であったが、後世の人間が書き足して、最終的に528回にまで増えた。孟犁野『中国公案小説芸術発展史』(警官教育出版社、1996)、123-127頁を参照。
- 23 [清]不題撰人著、梁宗奎等校点『施公案』(齊魯書社、1993)、462頁。原文「次日一早、復至白楊崗、傳齊屍親、並親族鄰里、登山開墓、啟棺檢視。朱天佑屍身、雖值天熱、並未腐爛。施公更堅信不疑、隨命作周身檢驗、由頭至足、不但無致命之處、且無微傷、更非服毒。唯骨瘦細柴、實係癆病而死。施公據報無奈、只得令蓋棺封墓。」引用原文の字体は繁体字に改めた。
- 24 『孝経』「開宗明義」。原文「身體髮膚、受之父母、弗敢毀傷、孝之始也」。汪受寬撰『孝経訳注』(上海古籍出版社、1998)、栗原圭介『孝経』(新釈漢文大系、明治書院、1986)を参照。
- 25 伝統的な価値観により解剖学の発展が遅れたとする観点については、陳琦「中国医学、法医学与解剖学關係之探析」(『医学与哲学』第36卷第12A期、2015)のほか、徐克偉「「解剖」「解剖学」について——近代中日解剖学術語の訳出と確立」(『東アジア文化交渉研究』第10号、2017)を参照。
- 26 熊月之『西学東漸与晚清社会(修訂版)』「第十九章 社会反応剖析」(中国人民大学、2011)を参照。なお、『全体新論』の編訳にあたり、ホブソンは複数の医学書を用いている。それについては、松本秀士・坂井建雄『全体新論』に掲載される解剖図の出典について(『日本医史学雑誌』第55巻第4号、2009)に詳しい。
- 27 『鴉片案』、37頁。原文「使此地非租界、我直可捕之耳。我國主權喪夫〔失〕、到處吃虧、真犯在前、吾乃直視其去。爲今之計、惟有緊隨其後、探得其住處耳。」

- 28 蔡之國『晚清譴責小說傳播研究』（前掲）第一章「晚清譴責小說的傳播環境研究」、36-43 頁。
- 29 徐珂『清稗類鈔』第 4 冊（中華書局、1984 年）、1673-74 頁。原文「上海有三多，曰多逃人，曰多煙鬼，曰多盜。（上海租界寬廣，為我國法權所不及，於是各罪犯皆恃此為遁逃藪。而禁煙功令亦被阻格，吸煙者亦皆匿跡於此。以是二因，僑民遂多富室，為盜所覬覦，遂有白晝持械行劫於通衢者。且會審公廨無判決死刑之權，故益縱橫無忌。）」
- 30 楊瑞松『病夫、黃禍与睡獅：「西方」視野的中国形象與近代中国国族論述想像（增訂版）』（国立政治大学出版社、2016）第二章「想像民族耻辱：近代中国思想文化史上的「東亞病夫」」を参照。
- 31 楊聯芬『晚清至五四：中国文学現代性的發生』（北京大学出版社、2003）第五章「晚清——五四文学的“国民性”焦慮」、178 頁。
- 32 高嶋航「「東亞病夫」と近代中国（1896-1949）」、村上衛編『近現代中国における社会經濟制度の再編』（京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告、京都大学人文科学研究所、2016）所収。
- 33 定一「小説叢話」。『新小説』第 15 号（1905）。原文「補救之方，必自輸入政治小説、偵探小説、科學小説始。蓋中國小説中，全無此三者性質，而此三者，尤為小説全體之關鍵也。」
- 34 小説林社訳『母夜叉』（小説林社、1905）。原文「這偵探還有幾樣好處。醫得我國民的殘疾。」原作の情報については第 2 章注 31 を参照。
- 35 管達如「説小説」。『小説月報』第 3 卷第 6 号（1912）。原文「此種小説，亦中國所無，近來翻事盛行，始出現于社會者也。中國人之作小説也，有一大病焉，曰不合情理。其書中所敘事，讀之未嘗不新奇可喜，而按之實際，則無一能合者。不獨說鬼談神處為然，即敘述人事處，亦強半如是也。偵探小説，為心思最細密，又須處處按切實際之作，其不能出現于中國，無足怪矣。」
- 36 『中華小説界』第 1 年第 5 期。原文「中國人之著述，有一大病焉，曰：凡是皆凌虛，而不能征實。（中略）此真中國小説之大病也。欲藥此病，莫如進之以偵探小説。蓋偵探小説，事事須著實，處處須周密，斷不容向壁虛造也。」
- 37 高山宏「殺す・集める・読む——シャーロック・ホームズの世紀末」（高山宏『殺す・集める・読む——推理小説特殊講義』、創元ライブラリ、2002 所収）、21-22 頁。
- 38 『鴉片案』、5 頁。原文「官楚姓，偉觀其名，少年時曾留學於日本。莅任後百廢具舉，不肯於三尺之下，求案情之真偽，姊故未嘗受刑也。」
- 39 『鴉片案』、15 頁。原文「良伊亦精思同學友。卒業于德國醫學專科，醫術至良。心尤細密。見精思至，語之曰：「君操偵探之術，日來當有進步，倘需醫生之力，吾可為君助。」
- 40 『鴉片案』、31 頁。原文「精拳術，卒業於奧國陸軍學校。居家時鄰失火，火且延及他屋。孔武一手攀其柱而屋傾，復入火中，挾二人以出。人以是知孔武之多力。」
- 41 章開沅、余子俠主編『中国人留学史（上）』（社会科学文献出版社、2013）「第二章 熱潮初起 清末十五年：一八九五—一九〇五」。

第8章 探偵の機能と透視の道具——南風亭長「羅師福」

はじめに

ここまで、第Ⅱ部では、中国初期の探偵小説創作が、ホームズ物語のような物語世界を構築しようとする方向性を持っていたことと、その実現に伴う困難について取り上げてきた。本章では、その類例として、南風亭長「中国偵探 羅師福」(1909-1910)を取り上げる¹。同小説には清末期の最先端科学たる X 線診断装置に由来する道具が登場する。そこで、同時代の中国における X 線をめぐる言説や科学小説を参照しつつ、小説中の科学技術の描写について論じるとともに、探偵がそれらの機械を用いることの意味合いについて考察したい。

1. 『図画日報』と「中国偵探 羅師福」

『図画日報』は、宣統元年七月一日(1909年8月16日)に上海環球社編集部から創刊され、宣統二年八月二十九日(1910年10月2日)に停刊した新聞である²。画報としては初の日刊紙であった。発行部は「著述部」「絵画部」「調査部」「撮影部」から構成され、著述部には孫玉声、李涵秋といった著名な文人が名を連ねた³。

「羅師福」は「中国偵探羅師福 第一案」(『図画日報』第1号～第82号)、「中国偵探羅師福 第二案」(第83号～第154号、未完)のふたつの話から成り、どちらも白話で書かれている。著者の南風亭長なる人物については、目下のところ李伯元[筆名は南亭亭長]説と、上海環球社社員説があるが、いずれも根拠に乏しく、詳細はいまなお分かっていない。⁴

注目すべきは、「第一案」と時を同じくして、劇本を紹介する「世界新劇」欄に上海環球学生会諸君編述「新茶花」(第1号～第38号)が連載されていることである。



「中国偵探 羅師福」第1章第1回

同欄は芝居の内容を絵と文字によって紹介するものであり、「新茶花」は1908年に上海の新舞台で上演された新劇の演目である⁵。この題名は「茶花女」、つまり小デュマ『椿姫』の翻訳『巴黎茶花女遺事』に倣って作られたものであることを示している。

『巴黎茶花女遺事』は王寿昌（筆名暁斎主人）が口述し、林紓が筆記する形で翻訳され、1899年に刊行された。とくにシャーロック・ホームズ物語の翻訳とセットになった本が素隠書屋から出版されると、この2種の小説は揃って流行し、清末翻訳小説の代表格となる⁶。第5章で取り上げた天民「失珠」（1908）のように、それらをひとつの小説のなかで組み合わせさせたような探偵小説まで生み出された。つまり、『図画日報』においては、当時最も流行した「ホームズ」と「茶花女」の中国版が、揃って創刊号から紙面を飾ったということになる。

では、その「ホームズ」のほうである、「中国偵探 羅師福」はいかなる小説なのか。本発表では、話が完結している第一案をおもに取り上げて論じる。以下、あらすじを踏まえたいうえで議論に入る。

舞台は1908年中秋節の蘇州。黄本立が、私娼の周小鶯と酒を飲んでいたところ、突然息絶える。蘇州で彩票たからくじの店を経営する被害者の兄、黄順利が遺体を本人のものと確認した。県府が遺体を検視したが、外傷は見当たらなかった。

ほどなくして、事件の晩に周小鶯の家を訪れていた富豪の李公子に嫌疑がかかり、李の内弟（妻の弟）費小亭はその疑いを晴らすべく、中国で唯一の探偵、羅師福を上海から招く。羅師福は調査の過程で、現場のガラス窓に空いていた小さな穴を発見。検死の結果、遺体の頭部に小さい傷跡が発見され、凶器はドイツ製の空気銃だと判明する。

長洲県府による調査が進められている頃、羅師福は偶然、黄本立が周小鶯に渡した紙幣が偽物であることに気付く。羅は変装して茶館へと調査に赴き、黄順利の彩票の店が、他所の店よりも低価格で的中率が高いという評判を耳にする。

羅師福は調査を進め、現場の向かいの築山で、犯人が残した足跡と指輪の痕を発見、それらの手掛かりから、黄順利の犯行と断定し、費小亭とともに黄家の邸宅へ赴く。羅は首尾良く凶器の空気銃を回収、その間に、費は県府に連絡して応援を要請し、黄順利は捕まる。犯行の動機は、彩票と紙幣の偽造が黄本立にばれたため口封じしようというものであった。

2. 「羅師福」における探偵像

羅師福は「中国で唯一無二の名探偵」であるとされ、プロフィールとして、〈姓氏〉〈籍貫（本籍）〉〈家庭〉〈職業〉〈学識〉〈容貌〉〈言語〉の七つの項目が挙げられている⁷。以下、重要な部分のみを取り上げる。

〈姓氏〉の項目では、探偵の「師福」という名について、「福爾摩斯^{ホームズ}に師事するの意を取る」⁸といった夾批が施されている。第二案の冒頭部にも「わが師ホームズ」という言い方が見られる⁹ことから、羅はホームズの弟子を自任しているのだとわかる。同時期の中国の探偵小説の大きな傾向のひとつとしては、西洋の探偵小説、とくにホームズ物語を手本とする動きがあった（例えば本論第6章で論じた『砒石案』がそうである）。つまり、「師福」という名には、ホームズと中国の探偵、ひいては西洋と中国の文化的な位置関係が象徴されていると考えられる。¹⁰

続いて〈職業〉の項には、「以前は上海の某中学校で理科全般の教員をしていたが、いまはすでに辞職しており、探偵を生業としている」¹¹とある。また、〈学識〉の項には「普通学はいずれも不完全。生理・理化（物理学や化学）・心理等の学問に最も精通している」¹²と記されており、理科系の学問に通じていたことが窺える。〈普通学〉とは、狭義では基礎科目、広義では一般知識を指すが、決まった範囲は無かったとされる¹³。

その普通学が不完全だという点は、ホームズの人物像に倣った可能性が考えられる。ホームズ物語のなかで、ホームズの学識が評されている記述に、『緋色の習作』（1887）第2章「推理の研究」がある。そこには、助手のワトソンの目から見たホームズの学識が列挙されており、ホームズが自分の目的に関係しない知識は身につけないということのほか、彼が天文学や哲学などの知識を持たないことが示されている。¹⁴

漢訳ではどうだろうか。同小説の漢訳は「羅師福」以前にいくつか出版されているが、先行例として『歇洛克奇案開場』（商務印書館、1908）を確認すると、当該の箇所ではホームズの学識について、「文學（句）無、哲學（句）無、天文學（句）無、政治學（句）甚淺……（略）……化學（句）注曰此道甚微妙」と記されている¹⁵。「羅師福」の書き手が同書を目にしたかは定かではないものの、おそらく先行する文献におけるこのようなホームズのイメージが羅に投影されているものと考えられる。

〈言語〉の項には、「英語とフランス語の2か国語、および中国の各地方各地区の方言を操ることができる」¹⁶とある。このあたりは、共同租界やフランス租界のある、

清末上海ならではの設定と思しい。「中国各地方各地区の方言」というのも、おそらくは方言間の隔たりの大きい中国に特有の、探偵小説創作の地域化の一例として、たいへん興味深い。こうした言語能力の高さは、同時代の探偵イメージを中国風に形にしたものだろう。¹⁷

言語能力に関連して、小説の最終段階には、黄家の邸宅内に潜入した際に、羅と費が秘密裏に手話でやり取りする場面がある。ここでは、西洋の聾啞院における事例が引き合いに出され、中国語の表記が字母やそれを綴ったものではないことから、「今のところ、この方法で話をする人物は、彼らふたり以外に、おそらく三人目は見つからないだろう」¹⁸と記されている。中国語を手話で表現する方法を確立し、それによって意思疎通を図る羅と費は、ともに優れた技能を持つ人物として造形されている。

その点と関連して、作中、推理においては羅のほうが優れていることが示されており、物語の設定上も羅は「唯一無二の探偵」であるはずなのだが、物語の後半では、羅と費が「ふたりの探偵（二位偵探）」と並び称される一幕もある。両者は、「探偵と助手」という、シャーロック・ホームズ物語における、ホームズとワトソンの関係には当てはまらない関係だと言えよう。

ホームズ物語中のワトソンには、事件の記録者としての役割もあるが、注目すべきは、小説「羅師福」においては、その役割が、費小亭ではなく作中に登場する小説の書き手に託されていることである。第一の事件が終わったあと、羅師福は、書物の書き手について、世間の病態を隠蔽してはならないとして、続けて次のように述べる。

まさにきみの机のうえのあの環球社の『図画日報』、あの小説の著者南風亭長が、われわれふたりが二日前に蘇州でニセ宝くじ屋を訪れた話を書いたように、だ。……（略）……小亭は訝しんだ。「あなたはどのように南風亭長を称揚なさいますが、その南風亭長というのはどなたなのですか？ その方はどうしてわれわれふたりの考え事や密談を知り得たのですか？」羅探偵は笑って答えなかった。¹⁹

ここでは、南風亭長が第一の事件を小説化したことが示されており、羅師福が事件のあらましを伝えた可能性が示唆されている²⁰。探偵が事件を解決し、その事件を書き手が小説化するという図式は、清末期におけるホームズ物語の捉え方と重なるものであり、第3章で取り上げた周桂笙「上海偵探案」「引」においても同様のホームズ

物語のイメージが見えるほか、第6章で論じた傲骨『砒石案』なども類例である。この点からすると、人物の基本設定としては、同時代においてイメージされていたホームズ物語の枠組みを、おおむね踏襲しているものと考えられる。

それとは別に、気になる点として、探偵の人物像に関わる点を指摘しておこう。それは、探偵の眼の描写に関することである。羅探偵が李公子に事件のことを尋ねているときの様子は、次のように描出されている。

羅探偵は頷くと、ふたつの電光のような眼を、眼窩の中で四方へぐるぐるさせた。
……（略）……ふた筋の眼光を公子の顔へとまっすぐ照射し、しばし動きを止めると、さらに述べた。……²¹

ここでは、探偵の眼が〈電光〉という光を表す語によって喩えられている。目に宿る光を表す〈眼光〉という語じたいは、『西遊記』などの古典小説にもすでに見えるものだが、ここでは〈射（照射する）〉という動詞とともに用いられることによって、光線のようなイメージが付与されていると考えられる。文中にはこれ以外に眼に関する描写は見当たらないが、対象へと照射される探偵の眼光は、暗闇の中で手掛かりを照らし出す電灯の光線にも通じるだろう。さらに、相手の事情を見透かそうとするという点では、〈X光（X線）〉のイメージとも呼応するものと考えられるが、この点については後述する。

関連して、捜査の過程では、電光が用いられる場面が少なくない。とくに、費小亭が犯行現場の調査中に用いる電灯、顕微鏡の照明（後述）などは、いずれも電光が重要な役割を果たしている。清末当時、電気学は音響学、光学、化学と並んで、西洋由来の最先端の科学知識であった。同時期に探偵小説とともに新小説として注目された科学小説においても、「電気」はもっともよく登場する中心的な主題のひとつであった²²。作中において、調査や証拠確認の場面に電気が多用されることによって、物語世界は、より「文明的」なものとなっている。

そして、探偵の眼が電光に擬えられていることは、探偵自体もまた文明性をその身に帯びる者であることを示しているだろう。この点についてさらに掘り下げるべく、見えないものを可視化する技術について、さらに話を進めたい。

3. 視覚に関する科学技術——顕微鏡とX線

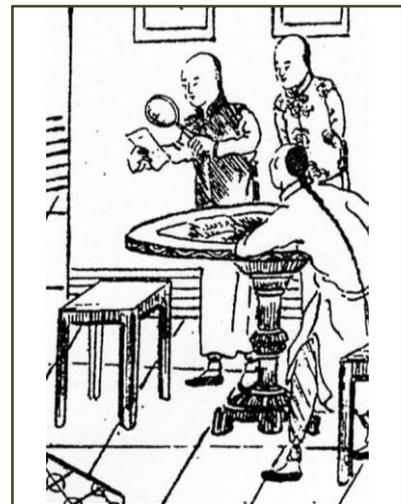
〈顕微鏡〉は、文字通りには「微細なものを顕わにする^{レンズ}鏡」を意味する。複式顕微鏡のみならず、虫眼鏡や拡大鏡といったレンズをも含意する語である。清末当時、西洋の医学知識の伝来を背景として、複式顕微鏡に対する関心は高まっていた（本論第6章を参照）。

「羅師福」において〈顕微鏡〉が用いられる場面はいくつかあるが、その一つは、羅師福が黄順利の偽造した紙幣を調べる場面である。

小亭は了解すると、寝室に行き一台の顕微鏡を持ってきて、机の上に置くと、卓上の灯りを消した。顕微鏡の脇をひと押しすると、電光が発せられ、きらきらと光輝き、見る者はまばたきするのが間に合わなかった。羅探偵は紙幣を一枚顕微鏡のステージに挟み、しばらく照らすと、さらに小亭の紙幣をしばらく照らし、さらに机の上の5枚を続けて2回見たが、電光を消して、洋灯を再びつけた。²³

原文中では、〈一架（一台の）顕微鏡〉という言い方がなされており、ステージなどの描写もあわせて考えると、これは複式顕微鏡だと思いが、絵には虫眼鏡らしきものが描かれている（右図）。また、顕微鏡の電光や卓上の照明にも描写が費やされていることが注目される。道具や技術の先進性は、電光によって、いっそう際立ったものとなっている。

このほかに〈顕微鏡〉が特徴的な用いられ方をするのは、羅師福が犯行現場周辺の泥地で足跡を調査する場面である。



足跡のそばには、四つの指の痕があり、薬指のうえには指輪の痕がはっきりと現れていた。その時「顕微鏡」でつぶさに照らすと、W.S.L.の三つのローマ字が見えた。Wの文字はまさしく「黄」字の綴りの最初のひとつであり、SとLも「順」「利」と近い。²⁴

こちらのほうは虫眼鏡のようなレンズと思しい。いずれの場合も、肉眼では見えないものを顕微鏡によって確認し、そこから探偵は情報を読み取ってゆく。

興味深いのは、文字と絵との乖離である。これは文字と絵を担当する者が別である場合には、珍しいことではない。文字を読む者がそこから機械の形状や性能を正確にイメージできるわけでは必ずしもなく、それは小説の書き手が不確かな知識に基づいて機械を描写する際にも同様に起こり得る。伝来したばかりの最新機器であれば、なおのことだろう。この点を念頭に置きつつ、もうひとつの機械についても見てゆくこととしよう。

肉眼では見えないものを可視化するもうひとつの道具は、X線のイメージを反映したものである。羅師福が「X光鏡」なる道具を所持していたところ、費小亭はそれを借りて遺体の頭の中を覗き、傷を発見する。

羅探偵はすでに確かな証拠を得ており、自信も数倍に増え、気持ちも徐々に奮い立ってきた。小亭はほとんど手をこまねいて傍観しており、羅探偵が皮のかばんからX光鏡を取り出すのを見た。小亭は慌てて遺体の頭をそっと抱き起し、鏡の中をしばらく覗くと、突然足で地面を蹴って言った。「恥ずかしい!!! 恥ずかしい!!! まさにこれだったのか!!! まさにこれだったのか!!!」小亭はこの時、気持ちがろくろのようにぐるぐると落ち着かなかったが、先ほどのガラス窓の小さな穴のところから推論を働かせ、羅探偵が推量した凶器にすでに見当がついていた。みなさん、その凶器とは何だと思われますか？ 近ごろドイツの鎗砲学者の愛特立氏が新たに発明して製造した空気銃だったのです！²⁵

遺体の外傷については、特に道具も使用せず、被害者の傷跡を発見できない県府の役人の様子が「県府の検死人が調べたが、傷は無かったと言っていた」²⁶と記されている。ここでは、探偵が道具を用いることによって、視覚において優位な立場にあることが示されていると言えるだろう。

人の体の中を覗くことができる、この「X光鏡」なる道具は、X線に由来する想像力に由来するものだと考えられるのだが、いかにして生み出されたのだろうか。

4. X線診断装置の来歴と語られ方

X線は1895年にドイツの物理学者レントゲンによって発見された。中国でX線のことを伝えた最初期の報道としては、梁啓超が「読西学書法」(『時務報』第38冊、1897.9)の「曷格司射光」という一項において、「昨年電気によって骨を照らす方法が生み出された」²⁷と記したものがあ

る。当初、X線を紹介する際には、「X光」「通物電光」「愛克斯光」など、さまざまな名称が用いられた²⁸が、その中にX線診断装置を「宝鏡」と称したものがあり、そのイメージの源泉や語られ方は「X光鏡」とも関連するだろう²⁹。『点石斎画報』「宝鏡新奇」(1897.12)がそれであり、アメリカの教会が経営する蘇州の博習医院(現在の蘇州大学附属第一病院)にX線診断装置が導入されたことが報道されている。

蘇州の博習医院の西洋医、柏楽文(William Hector Park)は、アメリカで新しく出た宝鏡が、人の臓腑を照らし出すことができる³⁰と聞くと、千金を惜しまずに購入して蘇州まで運搬した。その鏡は、長さは一尺余りで、形は楕円形、ひとたび照らし出すと、いかなる人も、心臓・腹・腎臓・腸が手に取るようにわかる。蘇州の



人々は見聞が狭く珍しがり、見に来る者が非常に多かった。この医者はその鏡を手に入れてから、人の病気を観ればその患部がどこにあるのかがわかり、薬をそこに投げれば、重い病も治らぬものは無くなった。³⁰

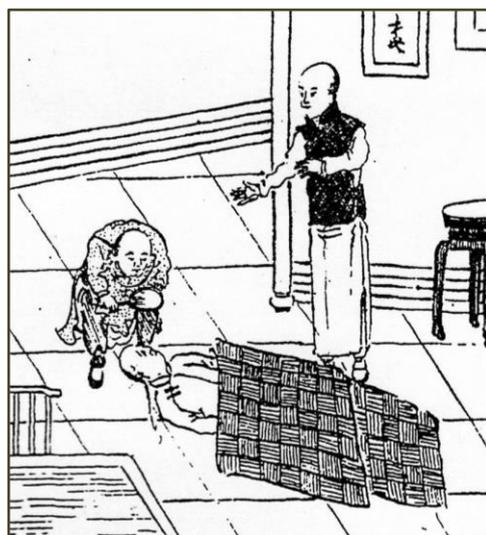
臓腑を照らすことができる「宝鏡」となると、中国古代の筆記にしばしば見える、内臓を照らし出す鏡「照胆鏡」などとの関連性が想起される。一例を挙げると、[晋]葛洪『西京雜記』卷三「咸陽宮異物」に、以下のような話がある。

四角い鏡があり、幅は四尺、高さは五尺九寸、表と裏に鏡面があり、ひとが直接それに姿を映すと、姿がさかさまに映る。手で心臓を押さえて姿を映すと、胃腸や五臓が見え、明瞭として遮るものはない。人が体内に病気を持っている場合、心臓を押さえてこれに姿を映すと、病気の在り処がわかる。さらには、女性が邪心を持っている場合、胆嚢が張り心臓が動く。秦の始皇帝は、いつもその鏡で女官を照らし、胆嚢が張って心臓が動いている者がいると、その者を殺した。³¹

清末の人々は、「人の臓腑を照らすことができる」という情報から、おそらくはこうした中国古代から連綿と伝わる、鏡にまつわる話を想起し、それと結びつけて解釈したのであろう。

「羅師福」の当該の場面もおそらく同様であり、鏡らしきものを手にとって遺体の頭の中を覗く費の様子が描かれている（右図）。この道具の形状は、X線診断装置というよりも、内蔵を映し出す鏡のそれにほかならない。

先の『点石齋画報』の報道に前後して、X線は次々と紹介されるようになる。譚嗣同は、江蘇知府候補に任命されて赴任地の南京に赴く際（1896）に、上海に住んでいたイギリス人宣教師ジョン・フライヤー（傅蘭雅）のもとを訪れており、キリスト教や自然科学の知識を学んでいる。その際にX線写真を見ており、その様子を次のように記している。



人の肝臓や胆嚢、肺や腸、筋肉や血管、骨肉などが、ガラスのように澄んで見え、それは空を通りぬけるかのようであり、さらにはその状態を紙の上に映し出すことができる。³²

さらには、先の「羅師福」の場面のように、頭の中を覗く話もある。『格致新報』第2冊「新法察脳」（1898.3.22）には次のように記されている。

名医代司道忒は、新法の透物電光でもって彼（牧人）の頭蓋を照らし、その脳内の形象を小さな写真に印刷し、それを医学界の証拠とした。その頭の右隅を調べると、弾丸がひとつあったが、その弾丸はもともと右側にあったのではなく、左側から右側へと移動したものであった。³³

このほか、『光学提要』や『通物電光』といった書物においても、X線発見の経緯や特質、X線写真の撮り方などが細かく紹介されている³⁴。『通物電光』においては、電気に関する基礎知識の講釈から始まり、X線によって物体の内部が撮影される仕組みが科学的に説明されている³⁵のだが、こうした正確な情報が紹介される一方で、「中身を透視できる」というX線のイメージは、さまざまな透視の機械として結実した。では、それらの機械は何を物語るのだろうか。

5、理想の世界と透視の道具——X線をめぐる想像力

まず、清末期の小説中に描かれる透視の機械の事例をいくつか検討しよう。こうした機械が登場する小説としては、早くは荒江釣叟『月球殖民地小説』（1904-05）³⁶などがあるが、ここでは、科学幻想小説研究においてしばしば言及される事例として、まず吳趸人『新石頭記』第24回（1908）³⁷を挙げておきたい。

同小説は、その名のとおり、『石頭記（紅樓夢）』の設定を引き継いで書かれたものである。主人公の賈宝玉は、タイムスリップによって清末中国にやってくる。小説の後半で、賈宝玉は「文明境界」なる世界へと迷い込むのだが、その世界に入る際に、「検病所」で検査を受けさせられる。

見終わると、超和はさらに玻璃鏡をひとつ取り出し、上に重ねて言った。「これは骨髄を検査するものです。」宝玉は再び覗くと、その白骨はすでに見えなくなっていたが、その白骨の部位のとおり、赤と白が入り混じった骨髄が現れてきて、その骨髄を見ると、たいへん秩序立っており、細やかにそこで連動して上下していた。³⁸

このほか、「測驗性質鏡」「驗骨鏡」「驗髓鏡」「驗血鏡」「驗筋鏡」「驗臟腑鏡」「驗氣鏡」など、さまざまな鏡が登場し、賈宝玉は体の隅々を検査された後に、「文明境界」へと足を踏み入れるのである。この「文明境界」は、文字どおり文明的な世界であり、盗賊や娼妓はいないものとして設定されている。また、空を飛ぶ機械が登場するなど、科学が高度に発達した一種のユートピアとして描かれる³⁹。その発達した文明を示すもののひとつが、ここに登場する様々な透視の機械というわけである。

もうひとつの事例は、陸士諤『新中国』（改良小説社、1910）である。「理想小説」の角書きが冠されたこの小説は、「立憲四十年後之中国」という別名を持っており、立憲を実現してから40年後の理想の中国が描かれる。作中、主人公の陸雲翔は、女友達の李友琴とともに上海郊外の定山湖に向かう。そこで、漁師が貝の中身を透視する道具を用いているのを目にする。

私は言った。「開けないで、中に珠が入っているかどうか、どうやって見ることができるんだい？」友琴は言った。「四十年前、透骨鏡というのがあって、愛克斯光と呼ばれていませんでしたか？ 私は述べた。「その通りだ。その愛克斯光は、医者がそれでもって人の肺腑を見たんだね。」友琴は述べた。「その時の愛克斯光は、作り方がかなり粗悪でした。見てももやもやとしていて、はっきりしませんでした。でもわが国の光学大家による数回の改良を経て、いまでは6、7丈の厚さのある岩壁でさえ、見通すことができ、しかもとてもはっきりしています。珠を採取する漁師たちは、みんな透骨鏡を備えています。ハマグリを捕まえて、まず透骨鏡で照らして、珠があるものは残しておいて、珠のないものは海へと戻すのです。……」⁴⁰

この小説では、科学技術が進歩した世界が、理想の「新中国」として描かれており、その進歩を示す事例として、「透骨鏡」が日常的に用いられる様子が描かれている。また、その機械は、自国の光学研究者によって、より精度の高いものへと改良されていることが述べられ、技術が開発された当時の西欧世界に比べて、小説世界中の「新中国」のほうが、より研究が進展し、文明が高度に発達していることが示されている。

つまり、これらの小説においては、いずれも物体を透視することができる道具や技術が、文明的な世界、理想の世界を象徴するものとして描かれているのである。

以上を踏まえて、「羅師福」における「X光鏡」の問題について考えたい。X光鏡の、物体を透視するという性質は、中国古来の内臓を照らし出す鏡のイメージとX線のイメージとが結びついて形成されたものであったことは先に述べた。先の顕微鏡の事例もそうだが、「X線診断装置」とはほど遠いこの道具は、あくまでも「見える」というイメージが具象化したものであり、機械の実体とは乖離したものだと言える。

清末当時、西洋探偵小説は「どの箇所も事実と符合している」⁴¹ものと見做されたが、それに反して、ここには現実世界とは符合しない要素が描かれている。他方、探偵小説の物語世界は、往々にして文明の発達した社会であることが前提とされ、文明的な文物や制度が描き込まれた。そのことは、とくに第Ⅱ章で取り上げてきた小説を通じて論じてきたとおりである。

別の角度から述べるならば、「可視化」の文明的なイメージが、この作品にとって重要な意味を持っていたということでもあるだろう。いま、この点について、もう少し考察を進めたい。

ここまで、探偵が電光のような視線を持つこと、さらには顕微鏡やX光鏡といった、肉眼では見えないものを可視化する道具を通して情報を得ることを取り上げてきたが、見えない何か、あるいは隠されている何かを明るみに出すという探偵の役割は、社会の現状・真実を暴き出すという、同時代における小説創作の傾向と同調するものではなかつたらうか。第3章で取り上げた「上海偵探案」にも類似の面があったことは、すでに述べたとおりである。

前章でも述べたとおり、社会の隠れた弊害を暴きだし、現状を糾弾する小説は、「譴責小説」と呼ばれる。この種の小説には、李伯元『官場現形記』や吳趸人『二十年目睹之怪現狀』のように、「現狀」や「現形」といった語を名称に含む小説が多い。このほか、冷眼傍觀人『新旧社会之怪現狀』(1908)、瘦腰生『最新学堂現形記』(1909)、陸士諤『官場怪現狀』(1911)などが挙げられる。

のみならず、「現狀」を描き出すこうした小説は、しばしば鏡やX線にも喩えられた。清末小説には「～鏡」というタイトルのものが見える。これは、鏡のごとく現狀や現実を映し出す小説であることを示している。例としては、杭州戊公『立憲鏡』(1906)、馬仰禹『新孽鏡』(1906)、儒林医隱『医界鏡』(1908)、治世之逸民『青楼鏡』(1909)などが挙げられる。

また、楚卿「論文学上小説之位置」(1903)では、小説の書き手が、人の内臓を透

視したという話のある中国古代の名医・扁鵲に擬えられ、続けて「小説は、社会の X 光線である」⁴²と述べられている。ここでの「X 光線」は、隠された真の姿を映し出すものという意味で用いられており、これも鏡と同種の比喩表現だと言えよう。

このような事例を踏まえると、この度の羅探偵の眼光や X 光鏡には、事件の真相のみならず、社会の現状をも暴き出す役割が暗に仮託されているのだと考えられる。事件を解決へと導いた羅師福は、「羅君はまさしく当世の英雄だ」⁴³と称揚されるに至るのだが、隠されているものを見透かす探偵は、世界の暗部を透視する救国の英雄にほかならなかったのである。

おわりに

本章では、清末探偵小説「羅師福」に登場する、肉眼では見えないものを読み取る顕微鏡や、X 線に由来する透視の機械「X 光鏡」といった道具の描写について、その来歴やイメージを考察した。また、捜査においてそれらの道具を用いる探偵には、事件の真相のみならず、社会の現状をも暴き出す役割が仮託されていることを述べた。

注

- ¹ この小説は、これまで先行研究ではほぼ言及されたことがない。習斌『晚清稀見小説鑑蔵録』（上海遼東出版社、2013）236 頁に内容紹介があるほかは、清末民初期の探偵小説創作の事例として名前が時おり登場するくらいである。
- ² 『図画日報』については、鄧淑英「晚清通俗性報刊与現代知識啓蒙：以『図画日報』为中心」（台湾師範大学歴史系碩士論文、2009）、福田忠之「清末上海のグラフ雑誌『図画日報（1909-1910）に関する一考察』（『年報非文字資料研究』第 7 号、2011）に詳しい。本稿執筆にあたっては、『図画日報』（全 8 冊。上海古籍出版社、1999）、『図画日報』（「清末民初報刊図画集成 続編」巻 6-15、全国図書館文献縮微複製中心、2003）の 2 種を参照した。なお、『図画日報』の影印本については、沢本郁馬「『図画日報』影印版のこと——附：『図画日報』所載小説目録」（『清末小説から』第 57 号、2000）、同「『図画日報』影印版のこと（2）」（『清末小説から』第 74 号、2004）に紹介がある。
- ³ 『図画日報』は通刊 404 号を数えた。石版印刷（リトグラフ）によって印刷され、縦 24.8cm、横 10.3cm、全号 12 頁という体裁であった。福田忠之氏によれば、「独自の会社と専属の経営陣を有し、大型の新聞から完全に独立した形で刊行された画報というのは、当時の中国では珍しかった」という。[前掲] 福田忠之「清末上海のグラフ雑誌『図画日報（1909-1910）に関する一考察』」を参照。

- 4 李白元説は〔前掲〕鄧淑英「晚清通俗性報刊与現代知識啓蒙：以『凶画日報』為中心」を、上海環球社社員説は〔前掲〕習斌『晚清稀見小説鑑蔵録』236頁をそれぞれ参照。
- 5 新舞台における「新茶花」の上演については、蔡祝青「舞台的隱喻：試論新舞台「二十世紀新茶女」的現身説法」（『戲劇学刊』第9期、2009年9月）に詳しい。
- 6 陳平原『中国小説叙事模式的轉變』（北京大学出版社、1988、いま2003版に拠る）第二章「中国小説叙事時間的轉變」、47頁。
- 7 「羅師福」第5章、『凶画日報』第24号。
- 8 同上。原文「取師事福爾摩斯之意。」
- 9 「羅師福 第二案」第1章、『凶画日報』第85号。
- 10 似たような命名の事例として、東方福爾摩斯「黃仰福」（周瘦鵑「燈光人影」、『新聞報』「快活林」1917.1.15）が挙げられる。池田智恵『近代中国における探偵小説の誕生と変遷』（早稲田大学モノグラフ110、早稲田大学出版部、2014）第二章「ホームズを想像・創造する：近代中国における探偵像の形成について」を参照。原書未見。
- 11 「羅師福」第5章（前掲）。原文「前在上海某中學校為理科總教，現已辭館，專業素行偵探。」
- 12 同上。原文「普通學都不完全。最精生理理化心理等學。」
- 13 張帆「晚清教科之“科学”概念的生成与演化（1901-1905）」（『轉型中的近代中国』、社会科学文献出版社、2010所収）。55頁。
- 14 あくまでもワトソンの視点からの記述であり、実際とは異なると見る向きもある。それぞれの項目に関する諸説は、コナン・ドイル著、ベアリング・グールド解説と注、小池滋監訳『詳注版 シャーロック・ホームズ全集』第2巻「緋色の研究／まだらの紐」（ちくま文庫、1997）の注釈に詳しい。
- 15 引用文注の〈句〉字は原書では夾批のごとく小さく表示されている。現代中国語の文章記号におけるコロンと同じ役割の記号と思しい。なお、「緋色の習作」の最初期の翻訳『恩仇血』（小説林社、1904）では、当該の章は省略されているという。「緋色の習作」の漢訳については、樽本照雄『漢訳ホームズ研究』（汲古書院、2006）「漢訳ホームズ「緋色の研究」」を参照。
- 16 「羅師福」第5章（前掲）。原文「能操英法二國語，及中國各處各區方言」。
- 17 こうした探偵の言語能力に関するイメージとしては、早くは翻訳探偵小説「毒藥案」（『新小説』第5号、1903）に、次のような一文がある。「原來外國的偵探，能通幾國的語言，精通人情世故，練成一種銳利的見識，加以通曉各種技藝。」
- 18 「羅師福」第11章、『凶画日報』第65号。原文「至今用此法說話的，除他二人外，恐怕找不着第三位了。」
- 19 「中国偵探羅師福 第二案」第1章、『凶画日報』第85号。原文「就如你桌上的那本環球社圖畫日報，那小説著者南風亭長，竟將吾二人日前在蘇州訪假票的故事，描畫出來。……（略）……小亭詫異道：“你如此頌揚南風亭長，那南風亭長，究竟是誰？他怎樣會知道吾二人的心事密談呢？”羅探笑而不答。」
- 20 引用箇所のみを見ると、羅が書き手である可能性も考えられなくはないが、別の箇所、羅は師のホームズがワトソンを重視したことを引き合いに出し、探偵は事件の書き手を重視するという主旨のことを語っている。ここでは探偵と書き手（南風亭長）は別の人物だと考える。
- 21 「羅師福」第5章、『凶画日報』第26号。原文「羅偵探點點頭，兩隻電光似的眼睛，在眼眶裏四面旋轉。……（略）……兩條眼光直射到公子的臉上，停了一刻，又道……」。
- 22 清末科学小説における電気のイメージについては、武田雅哉『中国科学幻想文学館（上）』（大修館書店、2001）、朱恬驊「晚清科学小説中技術想像的来源与意義探析 以“電”和“化学”為

例」(『科学文化評論』第 11 卷第 4 期、2014)、李広益「中国電王：化学、技術与晚清の世界秩序想像」(『中国比較文学』2015 年第 3 期)を参照。

- 23 「羅師福」第 7 章、『凶画日報』第 43 号。原文「小亭會意，便到臥室裏取了一架顯微鏡來，擺在桌上，把桌上的燈熄了。卻在鏡旁一撥，就發出電光來，光耀燦閃，令人轉瞬不及。羅偵探便把一張票子夾在鏡架上，照了一會，又把小亭的一張票子照了一會，又把桌上的五張一連看了兩遍，卻熄了電光，把洋燈重新點了。」
- 24 「羅師福」第 9 章、『凶画日報』第 53 号。原文「足跡旁邊，有四個手指印，無名指上顯出一只戒指痕兒。吾當時把顯微鏡細細一照，見是 W.S.L.三個羅馬字。W 字正是黃字拼音的第一個。S.L.也與順利相近。」
- 25 「羅師福」第 6 章、『凶画日報』第 36 号。原文「羅偵探已經有了確實憑據，自信力加了幾倍，精神越發振作。小亭索性袖手旁觀，看羅偵探從皮包裏取出一面 x 光鏡來，小亭忙把死人的腦袋輕輕托起，他便在鏡中張了一會，忽然踢足道：“慚愧！！慚愧！！正是此物！！正是此物！！”小亭此時心中雖是轆轤似旋轉不停，卻從方纔玻璃窗上的小洞那邊推論過去，早料到羅偵探猜度的那種兇器。看官，你道這兇器是什麼？原來就是近年來德國鎗砲學名家愛特立氏新發明新製造的一枝氣鎗！！！」
- 26 「羅師福」第 4 章、『凶画日報』第 20 号。原文「“縣裏的件作驗過，說沒有傷。”」
- 27 原文「去年新創電光照骨之法。」
- 28 X 線の名称の種類と変遷については、張鉄文「詞源研究与述語規範——X 射線詞族的詞源研究」(『術語標準化与信息技術』2005 年第 1 期)に詳しい。
- 29 中国における X 線や X 線診断機に関する基本的な記述は、王錦光、洪震寰『中国光学史』(湖南教育出版社、1986)第四章「伝統光学的終結」、劉善齡『西洋風』「X 射線診断機」(前掲)、王姍萍「西学東漸与晚清科学小説浅論」(『保定師範專科学学校学報』2006 年第 1 期)を参照。なお、この点について、日本では、早くは武田雅哉『翔べ！大清帝国』(前掲)に言及があるほか、内田慶市「X 線の中国伝来」(『文化交渉と言語接触——中国言語学における周縁からのアプローチ』、関西大学出版社、2010 所収)でも取り上げられている。
- 30 『点石齋画報』利三、光緒 23 年 12 月 16 日。原文「蘇垣天賜莊博習醫院西醫生柏樂文，聞美國新出一種寶鏡，可以照人臟腑，因不惜千金購運至蘇。其鏡長尺許，形式長圓，一經鑑照，無論何人，心腹腎腸昭然若揭。蘇人少見多怪，趨而往觀者甚眾。該醫生自得此鏡，視人疾病即知患之所在，以藥投之，無不沉痾立起。」
- 31 原文「有方鏡，廣四尺，高五尺九寸，表裡洞明。人宜來照之，影則倒見，以手捫心而來，即見腸胃五臟，歷然無礙。人有疾病在內，掩心而照之，則知病之所在。女子有邪心，則膽張心動。秦始皇常以照宮人，膽張心動者則殺之。」(『西京雜記校注』、上海古籍出版社、1991)。古代中国における、体の内臓を照らし出す鏡については、劉藝『鏡与中国伝統文化』(巴蜀書社、2004)第 4 章にまとまった記述がある。
- 32 譚嗣同「上欧陽中鵠」(『譚嗣同全集』、中華書局、1981 所収)。原文「能見人肝胆、肺腸、筋絡、骨血，朗朗如琉璃，如穿空，兼能照其狀上紙。」
- 33 『格致新報』(近代中国資料叢刊、文海出版社、1987)。原文「名醫代司道忒以新法透物電光照其頭顱，印其腦中形象於小照，以為醫林證據。察其頭之右角，有彈丸一粒，但此丸本非在右，乃由左轉至於右者。」
- 34 鄭大華「晚清思想家对民主与科学的追究」(『教学与研究』2005 年第 11 期)。
- 35 (美)莫爾登等著、(英)傅蘭雅口訳、(清)王季烈筆述『通物電光』(江南機器製造総局、1899)。
- 36 『繡像小説』第 21-62 期、1904-05、全 35 回。

- ³⁷ もともと『南方報』に第 11 回まで掲載され、後に改良小説社から全 40 回のもものが書籍として出版された。
- ³⁸ 吳趸人『新石頭記』（中州古籍出版社、1989）。原文「看罷，超和又取了一片玻璃鏡，加在上面道：「這是驗髓的。」寶玉再看時，那一付白骨不見了，卻按著那白骨部位，現出了半紅半白的骨髓來，看著那骨髓，很有條理的，如絲如發的在那裡連行上下。」
- ³⁹ 『新石頭記』について論じる先行研究は少なくないが、代表的なものとして、王德威著、宋偉傑訳『被压抑的現代性——晚清小説新論』（麦田出版、2003）第五章「淆乱的視野——科幻奇譚」（原書：*Fin-de-Siècle Splendor: Repressed Modernities of Late Qing Fiction, 1848-1911*. David Der-wei Wang. 1997、邦訳は上原かおり、神谷まり子訳『抑圧されるモダニティ』、東方書店、2017）、王偉廉「晚清社会的折光 理想世界的“藍図”——吳趸人『新石頭記』初探」（『南京經濟区域廣播電視大學學報』1997 年 Z1 期）、張雲「“老少年”的“少年中国”想像——以吳趸人『新石頭記』為中心」（『紅樓夢學刊』2010 年第 1 期）などがある。
- ⁴⁰ 陸士諤「新中国」第 10 回（『中国近代小説大系』58、百花洲文藝出版社、1996 所収）。原文「我道：“不剖開，裏頭有珠沒有珠，怎地會瞧得出？”友琴道：“四十年前，不是有一個透骨鏡，名叫愛克斯光的麼？”我道：“不錯，那愛克斯光，是醫生拿來瞧人家肺腑的。”友琴道：“那時候的愛克斯光，制法粗劣的很。瞧去糊裏糊塗，很不清楚。經我們國裡光學大家改良了三五回，現在，是隔著六七丈厚石壁，也能夠洞燭無疑〔遺〕，并且又很清楚。那採珠的漁人，都備著一個透骨鏡。捕起蚌來，先用透骨鏡照看，有珠的留著，沒珠的依舊放回海里去，珠多的留著，珠少的依舊放回海里去。……”」
- ⁴¹ 管如達「説小説」（『小説月報』第 3 卷第 6 号、1912）。原文「處處按切實際之作」。これは代表例であり、他にも類似の言説が見られる。
- ⁴² 『新小説』第 7 号。扁鵲の当該の話は『史記』「扁鵲倉公列伝」に見える。
- ⁴³ 「羅師福」第 13 章、『凶画日報』第 82 号。原文「羅君正是當世的英雄。」

終章——本論の総括と今後の課題

本論の総括

本論では、清朝末期において、西洋探偵小説が中国へと伝来した経緯を踏まえつつ、当時の中国人がいかなる背景のもとに、西洋の探偵ないしは探偵小説をめぐって何を思い巡らせ、いかにして探偵小説を作り上げようとしたのかについて、同時期の作品の分析を通して論じた。あらためて、本論の内容を総括しておきたい。

まず第Ⅰ部「公案小説から探偵小説へ」では、探偵小説が創作されるにあたり、伝統的な公案小説といかなる仕方で交差していたのかを取り上げた。

第一章では、公案小説と探偵小説の交差を示す興味深い事例として、まず劉鶚『老残遊記』（1903-1906）を論じた。同小説では、裁判官が主人公の老残を「ホームズ」と名指しして事件の解決役を引き渡すという、公案小説から探偵小説への交代劇を象徴するかのよう展開が見られる。その一方で、探偵役の老残が、最終的にはホームズではなく包公のような役割を果たすことを指摘した。この一連の流れについては、従来の包公説話において包公がひとりで担っていた役割を、裁判官と探偵とで分業した、と見えなくもない。いずれにしても、探偵小説の伝来によって、裁判官による事件の解決という伝統小説の形式は、大きく揺らぐこととなったのである。

第二章では、吳趸人『中国偵探案』（1906）における「探偵」の発見の問題を論じた。吳趸人は同書において、翻訳探偵小説を礼賛する風潮を批判し、中国の伝統社会に過去に実在した能吏を「探偵」として捉え、その明察ぶりを讃える話を探偵小説として位置付けなおした。その点について、同時期の迷信排斥の動向を背景として、超自然的な包公の物語が意識的に斥けられている可能性を示した。

第三章では、吳趸人『中国偵探案』を探偵小説とは認めないとする立場のもとに創作された、周桂笙「上海偵探案」（1907）について論じた。周桂笙は吳趸人と同様に、実在した人物や出来事を「記録」することを重視したが、その眼差しは、吳趸人とは異なり、過去ではなく現在に向けられた。周桂笙は同時代の上海の租界警察「包探」の話を、「想像」をさし挟むことなく描き出している。結果として、謎がありそれを探偵が解くといった、西洋探偵小説のような展開とはかけ離れたものとなった。その背景には、同時期の中国で流行していた現状批判小説のように、「探偵」の「現状」を批判的に描き出すことによって読者を啓発し社会を改良せんとする、周桂笙の姿勢

があった。

第四章では、『中国女偵探』（1907）に収録されている3篇の作品を並べて論じることによって、同小説が階層構造を持ち、読者のいる現実世界と物語世界の階層性をメタフィクショナルに反映させた作りになっていることを指摘した。また、その階層構造が、吳趸人『中国偵探案』のような「中国能吏伝」から、西洋式の探偵小説への「跳躍」を志向するものであることを述べた。このような志向は、同時期の探偵小説創作が、多かれ少なかれ潜在的に持つものだったと考えられる。

第Ⅱ部「ホームズを生み出したかった中国人」は、『中国女偵探』において試みられていたような探偵小説への「跳躍」がいかなる「着地」を見たのかを、具体例をもとに論じるものだったと言えよう。とくに1908年以降の動向として、ホームズ物語のような探偵小説を中国でも成立させようとする意識や、創作に伴う様々な困難が、どのようにテキスト上において表現されているのかを取り上げた。

第五章では、天民「失珠」（1908）について、清末期に最も流行した、新小説の代表格である「ホームズ」と「茶花女」を合わせた作りになっていることを述べた。同小説では、どちらの部分においても、西洋式の事物や制度が多く描き込まれている。しかし、主人公とヒロインが「自由恋愛」の末に「自由結婚」している点などは、西洋の風俗を模倣しているか、あるいは近い将来に実現されるべき世界を先取りするようなものであったことを指摘した。

第六章、第七章では、それぞれ『砒素案』（1908）、『鴉片案』（1908）という、傲骨という著者による同じシリーズのふたつの小説を取り上げた。第一作『砒素案』では、探偵は、翻訳探偵小説を「教科書」として学習し、失敗を重ねながら事件を解決する。それと同時に、西洋探偵小説に学んだ結果として、探偵が持つ指紋の知識や捜査方法は、当時の中国では実現が困難なはずのものとなった。第二作『鴉片案』になると、探偵には「成長」が見られ、中国は欧米とは異なるという認識のもと、中国の風習や「社会心理」を学び、それを調査に活かす。そして最終的に、ひとりの力ではなく、海外留学の経験をもつ友人の協力を得て事件を解決する。ここには、作者の考える中国社会の目指すべき形が示されており、ふたつの小説から探偵小説の発展の方向性が窺えることを論じた。

最後に、第八章では「羅師福」（1909-1910）において、探偵が捜査において用いる、肉眼では見えないものを読み取る顕微鏡や、X線診断装置に由来する透視の機械「X

光鏡」といった道具の描写を取り上げ、それをを用いる探偵が、事件の真相のみならず、社会の現状をも暴き出す役割を仮託された存在であったことを述べた。

本論では、事件と裁きを骨子とする伝統的な公案小説の土台のうえに探偵小説を打ち立てようとする、大きな趨勢があったことを示し、その動きが「ホームズ物語」を模倣しようとする方向性を持つものだったこと、そしてその模倣は中国社会の後進性に根差した大きな困難を伴うものであり、探偵小説あるいは探偵はその後進性を顕在化させるものだったことを見てきた。公案小説の終わり、あるいは探偵小説の始まりとして語られてきた清末期の作品群が、伝統と近代の間で揺れ動くさまを、部分的にでも描き出すことができたのではないだろうか。

また、あらためて全章を振り返ると、清末期の探偵小説のひとつの傾向が見えてくる。第一章で、「老残」に「ホームズ」の役割が仮託されていることの最大の意味合いは、清官の悪を暴くことにあったとする王徳威氏の説を引いたが、そのような「現状の暴露」こそが、清末に現れた中国人探偵たちが発揮した役割だったのかもしれない。彼らはその捜査の過程において、望むと望まざるとに関わらず、中国社会の後進性を白日の下に晒すこととなった。探偵がそうするのでなければ、探偵小説のテキスト自体が、その機能を果たしたのであった¹。

ホームズ物語のような作品を生み出そうとしても、それと同じものを再現しようとした結果として、現実的には実現し得ない何かがあるところに現れてしまう、というのは、この時期の探偵小説創作のひとつのジレンマだったと考えられる。もっとも、このような、現実世界と物語世界との「隙間」は、中国には探偵小説は無いという評価の原因でありながらも、そこに清末期の探偵小説に固有の近代性モダニティが生まれていた、とも言い得るように思われる。

その「隙間」は、時代が下るにつれてふさがってゆく。とくに、科学技術については、荒唐無稽なものがあまり描かれなくなる。その背景には、雑誌などによる科学知識の普及やそれに伴う書き手の知識の充実などがあるだろう。

本論の、とくに第Ⅱ部で取り上げた小説においては、ホームズに倣いながらも、それとは別の中国的なホームズ物語を探偵小説として作り上げようとする同時代の書き手の苦心が見られた。こうしたホームズを目指す動きは、「ホームズの呪縛」とも言い得るほどに強いものだったのではないだろうか。中国ではこの後、「東のホームズ」を銘打った創作が次々と現れる。民国期を代表する探偵小説作家・程小青が創

出したのもまた、「東のホームズ」の異名を持つ、探偵の霍桑と助手の包朗のシリーズだった。

もともと、そのような活況とも呼び得る状況がある一方で、当時の読み手がそれをもって探偵小説の成立を実感したかという点、そうとも言えなかったようである。例えば、探偵小説創作がひとつの隆盛を迎えた 1920 年代前半において、無虚生「小説雑談」(1922)では、中国の探偵小説が、ホームズのような探偵に必ずワトソンのような助手の記述者がいるものばかりだと批判的に述べている。ここには、ホームズ物語を模した探偵小説の氾濫ぶりが述べられている。

その一方で、范煙橋「偵探小説瑣話」(1923)における、「中国の探偵小説を書くことの難しさは、物質文明が低能であることによるもので、西洋の探偵小説のようにはできない。いろいろな交通手段や器具を借りることはできるが、そうやって追いつく速さをできるだけ上げたところで、そもそも出来を良くするのは容易ではないのである」²といった記述を合わせて読むと、1920 年前後において、「東のホームズ」を標榜する作品は確かに数多く創作されていたが、そのことは、必ずしも探偵小説というジャンルの成立、ひいては中国の近代化を読み手に実感させるものではなかったということもまた窺われよう。中国における探偵小説の創作にあたっては、書き手のみならず、読み手もまた、少なからず苦い思いをしたものと思しい。

こうした民国期以降の探偵小説が、清末期に出てきた様々な動向をどのように引き継ぎながら創作されたのかについては、調査と考察を引き続き進めたい。

今後の課題

ここまで振り返ってきたように、本論は、従来の研究では様相が明らかにされてこなかった清末期の探偵小説の創作状況について、部分なりとも描き出す試みであった。これらの作業がいかなる可能性へと開かれているのかについては、課題という形で示しておきたい。

まず清末民初に時代を限っても、やるべき作業は多く残されているだろう。ひとつは探偵小説と同時代のその他の小説との関連性についてである。例えば「科学小説」は、清末期に探偵小説と並んで中国にはなかった小説ジャンルとして語られ、おなじく科学技術を主要な要素としているが、個別の事例において両者を対照させるにとど

まり、本質的な議論へと展開するには至らなかった。そもそも、第七章で言及したとおり、同じ小説に別の角書きが付けられるような事例もあり、清末小説を「ジャンル」といった縦割りの小説類型論で捉えることの限界についても留意する必要があるだろう。なお、第二章でも取り上げた呉趼人は、「理想科学寓言譏諷諧小説」という角書きを持つ小説「光緒万年」を書いている。そもそも小説じたいが角書きひとつでは形容し難いものであることが、ここにはよく表れている。

関連して、探偵小説の角書きを持たない小説における探偵小説的要素についても、あらためて考えゆく必要があるだろう。そのような作業によって、探偵小説の世界をより豊かなものとして描き出すことができるのではないだろうか。

この問題は、言い換えると、翻訳小説の要素を創作小説がいかに取り込んでいったのか、という問題でもある。従来の中国探偵小説研究においては、翻訳は翻訳、創作は創作という仕方で研究が進められてきた。中国にはなかったものが、中国人の手によって生み出される際にどのように取り込まれていったのかについては、いまだ不明な点が多い。翻訳・創作双方を対照させ、探偵の造形や道具立て、モチーフなどを手掛かりとした、テキスト間の関係を考察する作業については、今後の課題である。また、その際、これまでの研究において軽視されがちであった、パロディ・パスティーシュといった作品群にも留意したい。これらの小説は、本来であれば本論の第Ⅱ部において取り上げるべきところだったが、論に組み込むことができなかった。

最後に、清末探偵小説研究がどのような研究へと開かれているかについて触れておきたい。これは長期的に取り組むべき課題ということになるだろう。

西洋小説の翻訳が、表層的な小説テキストの翻訳に止まらず、叙述の方法や意識の在り方を取り入れる行為であり、それを通じて近代的な文物や制度に対する認識が転換するような、「近代性」の翻訳と言うべきものであったことは、つとに指摘されている³。とりわけ探偵小説は、科学知識、裁判制度、論理的思考など、近代的な制度や文物を前提として成立した小説ジャンルであり、そうした翻訳小説の最たる例だったと言えよう。その翻訳の際には、道具立てやモチーフを「移植」するにあたり、それらが根を下ろすべき清末中国という「土壌」がいかに関与しているかが浮き彫りとなった。そのことは、すでにここまで述べてきたとおりである。

翻訳という点では、西学書や西洋小説の翻訳にあたり、日本語の訳書からの重訳が行なわれた事例が少なくなかったことには注意が必要だろう。序章においても述べた

ように、漢語の多く含まれる日本語の翻訳書を利用する方法は、清末当時、梁啓超などの文人によって提唱されていた⁴。関連して、小説を漢訳するにあたっては、黒岩涙香による西洋小説の翻案なども底本とされていた。日本を経由するという伝来の経路には、それに付随する様々な問題が含まれている。

また、翻訳小説の往来という点では、台湾との関係も無視できない。王品涵氏は「跨国文本脈絡下的台湾漢文犯罪小説研究」において、清朝のころから中国大陸を経由して台湾に漢籍が流入していたこと、それらの中に西洋探偵小説の漢訳本があったことを指摘する⁵。また、陳国偉氏は、「台湾推理小説の発展は、西洋や日本との相互関係が密接であるため、トランスナショナル的な文脈の中に置いて考える必要がある」⁶と説く。清末探偵小説研究は、台湾探偵小説研究に対しても、材料を提供し得るものだろう。そのような横断的な取り組みについても、今後の課題としたい。

注

- ¹ 清末期に限らず、民国期の探偵小説においても、外部から中国を批判的に眺める探偵像が繰り返し現れることについては、第七章でも述べたとおり、池田智恵氏による指摘がある。池田智恵『近代中国における探偵小説の誕生と変遷』（早稲田大学出版部、2014年）第2章「ホームズを想像・創造する——近代中国における探偵像の形成について」を参照。
- ² 范煙橋「偵探小説瑣談」（『偵探世界』1923年第3期）。原文「做中國偵探小説之難，由於物質文明之低能，不能如西方偵探小説。可以借種種交通及器具，以盡其追奔逐北之神速，故不易出色。」
- ³ 王徳威「翻訳“現代性”：論晚清小説的翻訳」（『想像中国的方法 歴史・小説・叙事』、生活・読書・新知三聯書店、1998）、趙稀方『翻譯現代性——晚清到五四的翻譯研究』（南海大学出版社、2012）などを参照。
- ⁴ 梁啓超は「論学日本文之益」（『清議報』第十期、光緒二十五年〔1899〕年二月二十一日）において、「日本語では漢字が十のうち七、八を占める」ことを挙げながら、接続詞や助詞に注意することでスムーズに本を読めるようになるとし、みずからの書いた『和文漢読法』について「学習者が読めば、あまり頭を使うことなく多くを得られる」と述べる。『和文漢読法』については、劉建雲『中国語の日本語学習史——清末の東文学堂——』（学術叢書、学術出版会、2007年）第七章「清末中国人の日本語学習の実態」第三節「時代の特徴をもつ教授法」を参照。
- ⁵ 王品涵「跨国文本脈絡下的台湾漢文犯罪小説研究（1895-1945）」（国立台湾大学文学院台湾文学研究所碩士論文、2010）。
- ⁶ 陳国偉『越境与訳 当代台湾推理小説的身体翻訳与跨国生成』（聯合文学出版社、2013）、6頁。とくに清朝と時代的に重複する日本統治期の探偵小説創作については同書の29-42頁を参照。

初出一覧

序章 本論の目的と概要

[書き下ろし]

第1章 公案小説から探偵小説へ

[初出] 「毒入りゲッペイ事件を読み解く——公案小説としての『老残遊記』」
(『火輪』第17号、2005.3)

第2章 「探偵」の発見——吳趼人『中国偵探案』

[初出] 「探偵の発見——吳趼人『中国偵探案』を手掛かりに」
(『火輪』第25号、2009.3)

第3章 「探偵」のいない探偵小説——周桂笙「上海偵探案」

[初出] 「「探偵」のいない「探偵小説」——周桂笙「上海偵探案」の試み」
(『火輪』第26号、2009.9)

第4章 能吏から探偵へ——呂俠『中国女偵探』

[初出] 「「能吏」から「探偵」へ——清末探偵小説『中国女偵探』の仕掛け」
(『饕餮』第19号、2011.9)

第5章 「茶花女」と恋に落ちた「ホームズ」——天民「失珠」

[初出] 「「茶花女」と恋に落ちた「探偵」——天民「失珠」の特徴について」
(『火輪』第27号、2010.9)

第6章 科学技術と初期探偵小説創作のジレンマ——傲骨『砒石案』

[初出] 「知りすぎた男——傲骨『砒石案』と中国初期探偵小説創作のジレンマ」
(『野草』第92号、2013.8)

第7章 処方箋としての探偵小説——傲骨『鴉片案』

[初出] 「「文明」の名のもとに——清末探偵小説「羅師福」と可視化の技術」
(『野草』第94号、2014.8)

第8章 探偵の機能と透視の道具——南風亭長「羅師福」

[初出] 「清末小説『鴉片案』論——探偵小説と譴責小説との接点を手掛かりに」
(『野草』第100号、2018.11)

終章 本論の総括と今後の課題

[書き下ろし]

※なお、初出のあるものについては、いずれも大幅に加筆・修正を施している。

使用テキストおよび参考文献

全体を通しての参考文献

〔使用または参照したテキスト〕（筆者ピンイン順）

- 傲骨『砒石案』（小説林社、1908）
傲骨『鴉片案』（小説林社、1908）
黄人潤辞・奚若訳意『福爾摩斯再生案一至五案』（小説林社、1906）
藍鼎元『鹿洲公案』（近代中国史料叢刊続集 407、文海出版社、1977）
李雨堂撰『万花楼』（中国古代禁毀小説文庫、太白文芸出版社、1998）
劉鷗『老殘遊記』（人民文学出版社、1957）
呂俠『中国女偵探』（商務印書館、1907）
吳趸人『中国偵探案』（広智書局、1906）
吳趸人『吳趸人全集』（北方文藝出版社、1997）
吳趸人『我仏山人短編小説集』（花城出版社、1984）
張春帆『九尾亀』（『晚清小説体系』、広雅出版、1984）
鄭克『折獄龜鑑』（王雲五主編『四庫全書珍本』別輯 167、168、台湾商務印書館、1977？）
鍾心青『新茶花』（『中国近代孤本小説精品大系』、内蒙古人民出版社、1998）
佚名『施公案』（『中国公案小説体系』、黒竜江人民出版社、1995）
小仲馬著 林紓訳『巴黎茶花女遺事』（阿英編『晚清小説叢鈔 域外文学卷』第一冊、1961）

〔新聞・雑誌〕（創刊年代順）

- 『申報』〔影印〕（上海書店、1983）
『格致彙編』〔影印〕（南京古旧書店、1992）
『時務報』〔影印〕（中華書局、1991）
『清議報』〔影印〕（中華書局、1991）
『新民叢報』〔影印〕（台湾藝文印書館、1966）
『新小説』〔影印〕（上海書店、1980）
『月月小説』〔影印〕（上海書店、1980）
『小説林』〔影印〕（上海書店、1980）
『新新小説』〔影印〕（上海書店、1980）

『中外小説林』（夏菲爾國際出版社、2000）

『図画日報』（上海古籍出版社、1999）

『図画日報』（「清末民初報刊図画集成 続編」巻 6-15、全国図書館文献縮微複製中心、2003）

『礼拝六』（江蘇広陵古籍刻印社、1987）

研究資料・目録など

樽本照雄『清末民初小説年表』（清末小説研究会、1999）

樽本照雄『清末民初小説目録』（第 10 版、清末小説研究会、2018）

阿英『晚清文学叢鈔 小説戯曲研究巻』（中華書局、1960）

陳大康『清末民初小説年表』

陳平原、夏曉虹編『二十世紀中国小説理論資料 第一巻 1897-1916』（北京大学出版社、1997）

黄霖・韓同文選注『中国歴代小説論著選（修訂本）』（上下冊、江西人民出版社、2000 年）

王利器輯録『元明清三大禁毀小説戯曲史料（増訂本）』（上海古籍出版社、1981）

王国偉『吳趸人小説研究』（済南大学古典文学研究叢書、齊魯書社、2007）

魏紹昌『鴛鴦蝴蝶派研究資料』（上海文藝出版社、1962）

魏紹昌『吳趸人研究資料』（上海古籍出版社、1980）

文学史など

阿英『晚清小説史』（商務印書館、1937）

阿英『晚清小説史』（作家出版社、1955）

曹亦冰『俠義公案小説史』（浙江古籍出版社、1998）

曹正文『世界偵探小説史略』（上海訳文出版社、1998 年）

陳平原『二十世紀中国小説史』第一巻（1897-1916）（北京大学出版社、1989）

范伯群主編『中国近現代通俗文学史』（上下巻、江蘇教育出版社、1999）

范伯群・孔慶東 主編『通俗文学十五講』（北京大学出版社、2003）

范伯群・湯哲声・孔慶東『20 世紀中国通俗文学史』（高等教育出版社、2006）

范伯群『中国現代通俗文学史』（北京大学出版社、2007）

復旦大学中文系 1956 級中国近代文学史編写小組編著『中国近代文学史稿』（達文社出版、1978）

郭延礼『中国近代文学發展史』第二巻（山東教育出版社、1991）

郭延礼『中国近代翻譯文学概論』（湖北教育出版社、1998）

- 黃岩柏『中国公案小説史』（遼寧人民出版社、1991）
- 孟犁野『中国公案小説芸術發展史』（警官教育出版社、1996）
- 苗懷明『中国古代公案小説史論』（南京大学博士文叢、南京大学出版社、2005）
- 歐陽健『晚清小説史』（浙江古籍出版社、1997）
- 謝天振、查明建『中国現代翻譯文学史』（上海外語教育出版社、2004）

〔論文〕 中国語（筆者ピンイン順）

- 陳方競「新興都市上海文化、報刊出版、新小説流變——清末民初上海小説論（上）」
（『福建論壇』〔人文社科版〕、2008年第9期）
- 陳方競「新興都市上海文化、報刊出版、新小説流變——清末民初上海小説論（下）」
（『福建論壇』〔人文社科版〕、2008年第10期）
- 陳建華「“虛無党小説”：清末特殊的詛介現象」（『華東師範大學學報』（哲社版）1996年第4期）
- 陳今「『老殘遊記』對西方偵探小説創作手法的借鑑」（『經濟与社会發展』2008年第1期）
- 陳俊啓「晚清小説的現代性追及：以公案／偵探／推理小説為探討中心」
（王瓊玲、胡曉真主編『經典轉化与明清叙事文学』、2009）
- 陳遼「現代偵探小説的開端：談『老殘遊記』中白子壽、老殘的破案」
（『東岳論叢』1993年第1期）
- 陳碩文「詠者現身的跨国行旅：從『疤面瑪歌』（Margot La Bakafree）到『毒蛇圈』」
（『政大中文學報』第27期、2017.6）
- 陳平原「論清末民初小説類型理論」（『清末小説』第13号、1990.12）
- 郭延礼「西方文化与近代小说的变革」（『陽山學刊』1999年第4期）
- 郝嵐「通俗与經典之錯位——中国近代讀者視域中的柯南·道爾、哈葛德、凡爾納与大仲馬」
（『清末小説』第31号、2008.12）
- 賀根民「晚清民初小説期刊發刊詞与小説觀念的新變」（『華中科技大学學報』〔社科版〕2007年第5期）
- 胡和平「偵探小説、百年中国文学中的特殊現象」（『湖南公安高等專科學校學報』2001年第2期）
- 胡和平「試談中国偵探小説」（『理論与創作』2001年第6期）
- 胡全章「1909：晚清翻新小説的狂歡年」（『新鄉師範高等專科學校學報』2007年第5期）
- 胡全章「1899：革命与流行——中国近代文学史上不可忽視的年份」
（『寧夏社会科学』2008年第3期）
- 胡全章「1898：喧囂与躁動——中国近代文学史上不可忽視的年份」
（『文学研究』第18卷2008年第12期）
- 胡全章「1903：一枝独秀与衆声喧嘩——中国近代文学史上的關鍵性年份」
（『近代文学』2009年第7期）

- 黃永林「中国“公案小說”与西方“偵探小說”的比較研究」（『外国文学研究』1994年第3期）
- 孔慧怡「以通俗小說為教化工具：福爾摩斯在中国（1896-1916）」（『清末小說』第19号、1996.12）
- 孔慧怡「還以背景，還以公道——論清末民初英語偵探小說中訳」
（王宏志編『翻譯与創作——中国近代翻譯小說論』、北京大学出版社、2000）
- 樂雲「外国偵探小說与科幻小說在晚清的傳播与影響」（『廣東工業大學學報』2008年第6期）
- 李広栄「論晚清時期西学漢訳發展的歷史邏輯与文化功能」（『山西師大學報』2008年第2期）
- 李世新、高建青「中国近代偵探小說發生的意義及其現代性思考」
（『湖北省社会主义学院學報』2002年第2期）
- 李欧梵「福爾摩斯在中国」（『当代作家評論』2004年第2期）
- 梁艷「徘徊于新旧之間：論晚清職業小說家的小說理論——以李伯元和吳趸人為例」
（『杭州師範學院學報』〔社会科学版〕2003年第1期）
- 孟麗「晚清上海禁毀小說初探」（『明清小說研究』2008年第1期）
- 孟麗「翻譯小說对西方叙事模式的接受与応变化——以『時務報』刊登的偵探小說為例」
（『理論導刊』2007年第11期）
- 苗懷明「從公案小說到偵探——論晚清公案小說的終結与近代偵探小說的生成——」
（『明清小說研究』2001年第2期）
- 王燕「近代中国原創偵探小說」（『齊魯學刊』2003年第2期）
- 王永霞「偵探小說在近代中国的傳播和影響」（『天水師範學院學報』2006年第7期）
- 魏望東「清末民初時代背景下的周桂笙翻譯研究」（『語文學刊』、2008年第3期）
- 吳正毅「從福爾摩斯到霍桑——中国現代偵探小說的本土化過程及其特徵」
（『蘇州教育學院學報』2008年第1期）
- 許德「20世紀初中国原創偵探小說的美学特徵」（『江漢論壇』2008年第5期）
- 許磊「文本讀解与翻譯策略——談近代偵探小說的訳介」（『樂山師範學院學報』2002年第12期）
- 楊緒容「從公案到偵探：对近代小說過渡形態的考察」（『華中師範大學學報』2008年第3期）
- 楊緒容「周桂笙与清末偵探小說的本土化」（『文学評論』2009年第5期）
- 葉凱蒂「關於晚新時代的小說類別及『新小說』雜誌廣告二則」（『清末小說』第12卷、1989.12）
- 余傑「不徹底的“虛無”——從晚清小說『女偵探』談起」（『社会科学論壇』2006年第4期）
- 袁荻涌「劉鷗与外国文学」（『社会科学』1995年第1期）
- 袁荻涌「清末訳界前鋒周桂笙」（『中国翻譯』1996年第2期）
- 袁進「近代偵探小說的高潮從何而來」（『清末小說』第28号、2005.12）
- 張全之「文学中的“未来”：論晚清小說中的烏托邦叙事」（『東岳論叢』2005年第1期）

[論文] 日本語 (筆者五十音順)

- 阿川修三「維新変法期における新聞の読み方：孫宝瑄の場合」
(『文教大学文学部紀要』第13-2号、2000)
- 阿川修三「孫宝瑄の変革論——「西学」の受容と「中学」の変容を中心に——」
(『文教大学文学部紀要』第15-1号、2001)
- 阿部泰記「中国近代における探偵小説の創作」
(『樋口進先生古稀記念 中国現代文学論集』、中国書店、1990)
- 江戸川乱歩「探偵小説の定義と類別」(『江戸川乱歩全集』第15巻「幻影城」、講談社、1970)
- 大谷通順「魯迅譯『月界旅行』と『地底旅行』」(『日本中国学会報』第35集、1983)
- 大塚秀高「清末民初探偵小説管窺」(『清末小説から』第64号、2002.1)
- 齋藤希史「『申報』の文学圏——『瀛寰瑣記』創刊前後」
(『吉田富夫先生退休記念中国学論集』汲古書院、2008)
- 坂出祥伸「清末における科学教育——上海・格致書院の場合」
(『関西大学文学論集』第32号、1983.2)
- 武田雅哉「東海覚我徐念慈『新法螺先生譚』をめぐって——中国SF雑記」
(『清末小説研究』第6号、1982)
- 鶴ヶ谷真一「唐代のミステリー」
(鶴ヶ谷真一『書を読んで羊を失う』、平凡社ライブラリー、平凡社、2008)
- 中野美代子「虚構と遊戯」(中野美代子『カニバリズム論』、福武文庫、1987)
- 中村忠行「晚清に於ける虚無党小説」(『天理大学学报』第85輯、1973)
- 中村忠行「清末探偵小説史稿(一)——翻訳を中心として——」
(『清末小説』第2号、清末小説研究会、1978.10)
- 中村忠行「清末探偵小説史稿(二)——翻訳を中心として——」
(『清末小説』第3号、清末小説研究会、1979.12)
- 中村忠行「清末探偵小説史稿(三)——翻訳を中心として——」
(『清末小説』第4号、清末小説研究会、1980.12)
- 西里喜行「王韜と循環日報について」(『東洋史研究』第43巻第3号、1984.12)
- 平山雄一「ホームズパステイッシュ史における中国作品」(『清末小説から』第61号、2001.4)
- 藤井得弘「毒入りグッペイ事件を読み解く——公案小説としての『老残遊記』」
(『火輪』第17号、2005.3)
- 藤井得弘「探偵の発見——吳趸人『中国偵探案』を手掛かりに」(『火輪』第25号、2009.3)
- 藤井得弘「「探偵」のいない「探偵小説」——周桂笙「上海偵探案」の試み」
(『火輪』第26号、2009.9)

- 藤井得弘「「能吏」から「探偵」へ——清末探偵小説『中国女偵探』の仕掛け」
 (『饕餮』第19号、2011.9)
- 藤井得弘「「茶花女」と恋に落ちた「探偵」——天民「失珠」の特徴について」
 (『火輪』第27号、2010.9)
- 藤井得弘「知りすぎた男——傲骨『砒石案』と中国初期探偵小説創作のジレンマ」
 (『野草』第92号、2013.8)
- 藤井得弘「「文明」の名のもとに——清末探偵小説「羅師福」と可視化の技術」
 (『野草』第94号、2014.8)
- 藤井得弘「ポーの影を求めて——清末探偵小説「猴刺客」」(『火輪』第38号、2017.9)
- 藤井得弘「清末小説『鴉片案』論——探偵小説と譴責小説との接点を手掛かりに」
 (『野草』第100号、2018.11)
- 藤井得弘「謎解きは裁きのあとで——清末探偵小説「繡衣盜」」(『火輪』第39号、2018.3)
- 鷲塚浩子「「マリー・ロジェの謎」の謎」(『成城文藝』149号、1995.2)

〔書籍〕中国語（筆者ピンイン順）

- 包天笑『鉤影樓回憶錄』（香港大華出版社、1971）
- 〔韓〕曹世鉉『清末民初無政府派的文化思想』（社会科学文献出版社、2001）
- 陳平原『中国小説叙事模式的轉變』（北京大学出版社、1988）
- 陳平原『千古文人俠客夢 [増訂本]』（北京大学出版社、2010）
- 陳平原『中国現代小説の起点——清末民初小説研究』（北京大学出版社、2005）
- 鄧偉『分裂与建構：清末民初文学語言新變研究』（1898-1917）』（中国社会科学出版社、2009）
- 范祥涛『科学翻譯影響下的文化變遷』（訳学新論叢書、上海訳文出版社、2006）
- 龔敏『黄人及其小説小話之研究』（齊魯書社、2006）
- 郭延礼『近代西学与中国文学』（百花洲文芸出版社、2000）
- 郭延礼『中国文学精神（近代卷）』（山東教育出版社、2003）
- 郭延礼『中国文学的變革——由古典走向現代』（齊魯書社、2007）
- 〔美〕韓南著 徐俠訳『中国近代小説的興起』（上海教育出版社、2004）
- 韓一字『清末民初漢訳法国文学研究（1897-1916）』（中国社会科学出版社、2008）
- 胡翠娥『文化翻譯与文化参与——晚清小説翻譯的文化研究』（上海外語教育出版社、2007）
- 胡全章『伝統与現實之間的探詢——吳趸人小説研究』（河南大学出版社、2006）
- 黄錦珠『晚清時期小説觀念之轉變』（文史哲出版社、1995）
- 黄霖『近代文学批評史』（上海古籍出版社、1993）

黃澤新、宋安娜『偵探小説学』（百家文藝出版社、1996）
姜維楓『近現代偵探小説作家程小青研究』（中国社会科学出版社、2007）
劉善齡『西洋風——西洋發明在中国』（上海古籍出版社、1999）
劉揚休『流變中的流派——「鴛鴦蝴蝶派」新論』（中国文聯出版公司、1997）
錢振綱『清末民国小説史論』（河北人民出版社、2008）
任翔『文学的另一道風景——偵探小説史論』（中国青年出版社、2001）
湯哲声『中国現代通俗小説思弁録』（北京大学出版社、2008）
王德威『想像中国の方法 歴史・小説・叙事』（三聯書店、1998）
王德威『被压抑的現代性：晚清小説新論』（国立編訳館、2003）
王宏志 編『翻譯与創作』（北京大学出版社、2000）
衛茂平『德語文学漢訳史考辨——晚清和民国時期』（上海外語教育出版社、2004）
夏曉虹『晚清社会与文化』（湖北教育出版社、2001）
夏曉虹『晚清上海片影』（上海古籍出版社、2009）
楊聯芬『晚清至五四：中国文学現代性的發生』（北京大学出版社、2003）
袁進『近代文学的突圍』（上海人民出版社、2001）
袁進『中国文学的近代變革』（広西師範大学出版社、2006）
張全之『突圍与變革——二十世紀初期文化交流与中国文学變遷』（西北大学出版社、1997）
鄭匡民『西学的中介：清末民初的中日文化交流』（四川人民出版社、2008）
鄒振環『20世紀上海翻譯出版与文化變遷』（広西教育出版社、2000）

〔書籍〕 日本語（筆者五十音順）

阿部洋『中国の近代教育と明治日本』（福村出版、1990）
伊藤秀雄『明治の探偵小説』（晶文社、1986）
伊藤秀雄『黒岩涙香』（三一書房、1988）
伊藤秀雄『近代の探偵小説』（三一書房、1994）
池田智恵『近代中国における探偵小説の誕生と變遷』（早稲田大学出版部、2014）
井波律子『中国ミステリー探訪 千年の事件簿から』（NHK出版、2003）
齋藤稀史『漢文脈の近代 清末＝明治の文学圏』（名古屋大学出版会、2005）
高山宏『殺す・集める・読む——推理小説特殊講義』（創元ライブラリ、創元社、2002）
武田雅哉『翔べ！大清帝国』（リプロポート、1988）

武田雅哉『中国科学幻想文学館（上）』（あじあブックス、大修館書店、2001）
樽本照雄『清末小説閑談』（大阪経済大学研究叢書XI、法律文化社、1983）
樽本照雄『清末小説論集』（大阪経済大学研究叢書第20冊、法律文化社、1992）
樽本照雄『清末小説探索』（大阪経済大学研究叢書第34冊、法律文化社、1998）
樽本照雄編『清末民初小説年表』（清末小説研究会、1999）
樽本照雄編『新編増補 清末民初小説目録』（齊魯書社、2003）
樽本照雄『清末小説叢考』（汲古書院、2003）
樽本照雄『漢訳ホームズ論集』（汲古書院、2006）
樽本照雄『清末翻訳小説論集』（清末小説研究会、2007）
中島利郎『晚清小説研叢』（汲古書院、1997）
中島河太郎『日本推理小説史（第一巻）』（東京創元社、1993）
中野美代子『悪魔のいない文学史』（朝日選書82、朝日新聞社、1977）
横山宏章『清末中国の青年群像』（三省堂、1986）
渡辺浩司『清末翻訳ミステリ論集』（清末小説研究会、2010）
ジョナサン・スペンス著、三石善吉訳『中国を変えた西洋人顧問』（講談社、1975）
W.サイファー著、野島秀勝訳『文学とテクノロジー』（研究社出版、1972）

[書籍] 英語（筆者アルファベット順）

Jeffrey C. Kinkley. *Chinese Justice, the Fiction: Law and Literature in Modern China*
Stanford University Press, 2000

Yan Wei. *The Rise and Development of Chinese Detective Fiction: 1900-1949*
In partial fulfillment of requirements for the degree of Doctor of Philosophy in the subject of East Asian Languages and Civilizations, Harvard University Cambridge Massachusetts

各章参考文献

第1章

麻生磯次『江戸文学と中国文学』（三省堂、1940）
岡崎由美『漂白のヒーロー』（あじあブックス、大修館書店）
金海南『水戸黄門「漫遊」考』（人物往来者、1999）
荘司格一『中国の公案小説』（研文出版、1988）
陳遼「現代偵探小説的開端——談『老残遊記』中白子寿、老残的破案」

(『東岳論叢』1993年第1期)

賴奕倫「程小青偵探小說中的上海文化圖景」(學位論文、國立政治大學中國文化研究所、2005)

劉大紳「關於『老殘遊記』」

(劉德隆·朱禧·劉德平編『劉鶚及老殘遊記資料』、四川人民出版社、1985)

苗懷明「從公案小說到偵探——論晚清公案小說的終結與近代偵探小說的生成——」

(『明清小說研究』2001年第2期)

孫英剛「幽明之間：“見鬼人”與中古社會」(『中華文史論叢』總第102期、2011年2月)

徐鵬緒「論『老殘遊記』的藝術形式革新」(『東方論壇』1995年第2期)

第2章

阿部泰記『包公伝説の形成と展開』(汲古書院、2004)

大塚秀高「包公説話と周新説話——公案小説生成史の一側面——」(『東方學』第66号、1983)

岡崎由美「武俠の黎明——押川春浪と近代中國武俠小説」

(『二三十年代中國と東西文芸』、蘆田孝昭教授退休紀念論文集編集委員會、東方書店、1998)

金海南『水戸黃門「漫遊」考』(新人物往來社、1999)

莊司格一『中國の名裁判——公案小説——』(人間活性化雙書、高文堂出版社、1988)

莊司格一『中國の公案小説』(研文出版、1988)

陳文新、王同舟「『新石頭記』的文化解讀」(『紅樓夢學刊』2001年第3期)

笠洪波「公案小説與法制意識：對公案小説的文化思考」(『明清小說研究』1996年第3期)

苗懷明「晚清公案俠義戲述略」(『藝術百科』2000年第3期)

王國偉「論吳趸人批判現實表達理想的傑作『新石頭記』——兼論吳趸人的“文明專制”思想」

(『岱宗學刊』2001年第1期)

文際平「吳趸人與晚清短篇小說的重新崛起」

(『湖北師範學院學報』[哲學社會科學版]2007年第3期)

夏曉虹「吳趸人與梁啟超關係鉤沈」(『安徽師範大學學報』[人文社科版]、2002)

第3章

榎本泰子『上海』(中公新書、中央公論社、2009)

高橋孝介 古厩忠夫編『上海史 巨大都市の形成と人々の営み』(東方書店、1995)

熊月之「上海租界與文化融合」(『學術月刊』2002年第5期)

張鴻聲「晚清文學中的上海敘述」(『學術論壇』2009年第1期)

陳科美主編『上海近代教育史』(上海教育出版社、2003)

- 董純朴「中国近代偵查歴史特点研究」(『江西公安專科学学校学报』2009年第1期)
- 葛元煦「滬遊雜記」
(『滬遊雜記・淞南夢影錄・滬遊夢影』、上海灘与上海人叢書、上海古籍出版社、1989)
- 郭成偉等『清末民初刑訴法典化研究』(中国人民公安大学出版社、2006)
- 梁偉峰「論上海租界与租界文化」(『江西社会科学』2005年第3期)
- 陸其国『畸形的繁荣：租界時期的上海』(百家出版社、2001)
- 羅蘇文『上海伝奇——文明變的側影(1553-1949)』(上海人民出版社、2004)
- 羅蘇文『近代上海——都市社会与生活』(中華書局、2005)
- 馬長林主編『租界里的上海』(上海社会科学院出版社、2003)
- 宋玲『清末民初行政訴訟制度研究』(中国政法大学出版社、2009)
- 任惠華『中国偵查史〔古近代部分〕』(中国檢察出版社、2004)
- 夏菲「論清末我国对西方警察制度的移植」(『新疆警官高等專科学学校学报』2008年第4期)
- 熊月之 周武主編『上海：一座現代化都市的編年史』(上海書店出版社、2007)
- 熊月之等編『上海通史』(上海人民出版社、1999)
- 薛理勇『上海閑話』(上海社会科学院出版社、2000)
- 薛理勇『旧上海租界史話』(上海社会科学院出版社、2002)
- 張德美『從公堂走向法廷——清末民初訴訟制度改革研究』(中国政法大学出版社、2009)

第4章

- 吉田司雄「エドガー・アラン・ポー「モルグ街の殺人ノート」——探偵小説翻譯史稿(1)」
(『工学院大学共通課程研究論叢』第37卷1号、1999)
- 艾智科「晚清的中西医匯通思想及其走向」(『歷史档案』2010年第2期)
- 傅維康著、川合正久編訳『中国医学の歴史』(東洋學術出版社、1997)
- 関詩珮「呂思勉「小説叢話」对太田義男『文学概論』的吸入——兼論西方小説芸術論在晚清的移植」
(『復旦学报』2008年第2期)
- 黄冬柏『『西廂記』變遷史の研究』(白帝社、2010)
- 李磊明「呂思勉小説理論探微」(『華東師範大学学报』[社会哲学版]1999年第3期)
- 鄔国義「青年呂思勉与『中国女偵探』的創作」
(『華東師範大学学报』[社会哲学版]2009年第5期)
- 鉄涛『中国医学通史 近代卷』(人民衛生出版社、2000)
- 趙洪鈞『近代中西医論争史』(安徽科学技術出版社、1989)

趙璞珊「合信『西醫五種』及在華影響」(『近代史研究』1991年第2期)

張耕華、李永圻「『中國女偵探』的作者呂俠就是呂思勉」(『博覽群書』2009年第11期)

Joachim Kurtz「The First Chinese Adaptation of Mill's *Logic*: John Fryer and his *Lixue xuzhi* 理學須知(1898)」(『或問』第8号、2004)

第5章

阿川修三「中國近代における時間意識形成についての一考察」

(『文教大學文學部紀要』第16-1号、2002)

夏曉虹著、清水賢一郎、星野幸代訳『纏足をほどいた女たち』(朝日選書、朝日新聞社、1998)

齊藤國治『日本・中國・朝鮮古代の時刻制度』(雄山閣出版、1995)

佐藤尚子、大林正昭編『日中比較教育史』(春風社、2002)

佐藤尚子「東方女子教育協進社による中國女子教育の開発」(『教育科学』第26号、2005)

須藤瑞代『中國「女權」概念の変容』(研文出版、2007)

武田雅哉『蒼頡たちの宴——漢字の神話とユートピア』(ちくま学芸文庫、ちくま書房、1998)

張競『近代中國と「恋愛」の発見』(岩波書店、1995)

阿英「關於『巴黎茶花女遺事』」(薛綏之、張俊才編『林紓研究資料』、福建人民出版社、1983)

畢新偉「中國經驗与西方經驗的相遇——林紓『巴黎茶花女遺事』研究」

(『外國文學研究』2004年第3期)

曹素璋「林紓的翻譯小説与近代社会思潮」(『貴州師範大學學報』[社会科学版]2002年第2期)

高曉芳『晚清洋務學堂的外語教育研究』(商務印書館、2007)

胡纓著、龍瑜成、胡姍姍訳『翻譯的傳統——中國新女性的形成(1898-1918)』

(江蘇人民出版社、2009)

黃錦珠『晚新小説中的新女性研究』(文津出版、2005)

孔慧怡「還以背景，還以公道——論清末民初英語偵探小説中譯」

(王宏志編『翻譯与創作——中國近代翻譯小説論』、北京大學出版社、2000)

李奇志『清末民初思想和文學中的「英雌」話語』(湖北教育出版社、2006)

李喜所『近代留學生与中外文化』(天津教育出版社、2006)

劉傑輝、成昭偉「從論域視角解讀『巴黎茶花女遺事』的翻譯」(『理論界』2009年第2期)

林薇編『百年沉浮——林紓研究總述』(天津教育出版社、1990)

倪海曙『清末漢語拼音運動編年史』(上海人民出版社、1959)

喬素玲『教育与女性——近代中國女子教育与知識女性覺醒(1840-1921)』(天津古籍出版社、2005)

桑兵『晚清學堂學生与社会變遷』(廣西師範大學出版社、2007)

- 尚小明『留日学生与清末新政』（鵝湖學術叢書、江西教育出版社、2003）
- 孫藜『晚清電報及其傳播觀念（1860-1911）』（上海世紀出版集團、2007）
- 王秉欽『20世紀中国翻譯思想史』（南開大学出版社、2004）
- 夏曉虹『晚清女性与近代中国』（北京大学出版社、2004）
- 許海燕「論『巴黎茶花女遺事』对清末民初小説創作的影響」（『明清小説研究』2001年第4期）
- 岳方遂「新式標点符号史論（上）」（『蘭州大学学报』[社会科学版]1994年第2期）
- 張祝祥、劉傑輝「從『巴黎茶花女遺事』看林紓的訳筆」（『戲劇文学』、2007年第3期）
- 鄭翔貴『晚清伝媒視野中的日本』（上海古籍出版社、2003）
- 周一川『近代中国女性日本留学史（1872-1945）』（社会科学文献出版社、2007）
- 『西海紀遊草・乗槎筆記・詩二種・初使泰西記・航海述奇・欧美環遊記』
（鍾叔河主編『走向世界叢書』第一輯、岳麓書社、1985）

第6章

- 小林義雄『世界の顕微鏡の歴史』第Ⅲ章「顕微鏡発達史」（サンコー印刷株式会社、1980）
- 田中新一「顕微鏡発展史」（『レンズ ミクロ・マクロ』、INAX BOKLET、1989）
- 坪田良江『『十二楼』世界の設計——「夏宜楼」と「払雲楼」の対比を端緒として』
（『饕餮』第15号、2007.9）
- 橋本一徑『指紋論——心霊主義から生体認証まで』（青土社、2010年）
- 武禧「清末小説過眼録（12）偵探小説『鴉片案』（『清末小説から』第24号、1992.1）
- 山下恒男『近代へのまなざし——写真・指紋法・知能テストの発明』（現代書館、2012年）
- 渡辺公三『司法的同一性の誕生——市民社会における個体識別と登録』（言叢社、2003）
- 羅伯特・海因德爾著、劉持平・何海龍・王京訳『世界指紋史』（中国人民公安大学出版社、2008）
- 趙向欣『中華指紋学』（群衆出版社、1997）

第7章

- 徐克偉「「解剖」「解剖学」について——近代中日解剖学術語の訳出と確立」
（『東アジア文化交渉研究』第10号、2017）
- 高嶋航「「東亜病夫」と近代中国（1896-1949）」
（村上衛編『近現代中国における社会経済制度の再編』、京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告、京都大学人文科学研究所、2016）
- 目黒克彦「清朝最末期における禁煙運動に関する覚書——印度鴉片の輸入逋減法を中心に——」
（『愛知教育大学研究報告』[社会科学編]第39号、1990年）

- 阿英「關於鴉片戰爭的文学」（『鴉片戰爭文学集』上下冊 1937、上海古籍出版社版 1957）
- 蔡之國『晚清譴責小說傳播研究』（社会科学文献出版社、2012 年）
- 陳琦「中国医学、法医学与解剖学關係之探析」（『医学与哲学』第 36 卷第 12A 期、2015）
- 胡延峰『留学生与中国心理学』（中国学科現代轉型叢書、南開大学出版社、2009）
- 李建中「晚清小說理論中的心理学思想」（『中南民族学院学报（哲学社会科学版）』1998 年第 3 期）
- 沈国威編著『『新爾雅』とその語彙』（白帝社、1995 年）
- 施曄、鄭秉咸「近代小說与鴉片叙事」（『社会科学』2014 年第 11 期）
- 趙華『晚清鴉片社会流播問題研究：以鴉片案為中心』（浙江大学出版社、2016 年）

第 8 章

内田慶市「X 線の中国伝来」

（『文化交渉と言語接触——中国言語学における周縁からのアプローチ』、関西大学出版社、2010）

沢本郁馬『『図画日報』影印版のこと——附：『図画日報』所載小説目録』

（『清末小説から』第 57 号、2000.4）

沢本郁馬『『図画日報』影印版のこと（2）』（『清末小説から』第 74 号、2004.7）

福田忠之「清末上海のグラフ雑誌『図画日報（1909-1910）に関する一考察』」

（『年報非文字資料研究』第 7 号、2011.3）

鄧淑英「晚清通俗性報刊与現代知識啓蒙：以『図画日報』為中心」

（台湾師範大学歴史系碩士論文、2009）

李広益「中国電王：化学、技術与晚清的世界秩序想像」（『中国比較文学』2015 年第 3 期）

劉藝『鏡与中国伝統文化』（巴蜀書社、2004）

王錦光、洪震寰『中国光学史』（湖南教育出版社、1986）

王珊珊「西学東漸与晚清科学小説淺論」（『保定師範專科学学校学报』2006 年第 1 期）

王偉廉「晚清社会的折光 理想世界的“藍図”——吳趸人『新石頭記』初探」

（『南京經濟区域廣播電視大学学报』1997 年 Z1 期）

張鉄文「詞源研究与述語規範——X 射線詞族的詞源研究」

（『術語標準化与信息技術』2005 年第 1 期）

張雲「“老少年”的“少年中国”想像——以吳趸人『新石頭記』為中心」

（『紅樓夢學刊』2010 年第 1 期）

鄭大華「晚清思想家对民主与科学的追究」（『教学与研究』2005 年第 11 期）

朱恬驊「晚清科学小説中技術想像的来源与意義探析——以“電”和“化学”為例」

（『科学文化評論』第 11 卷第 4 期、2014）